

平成 23 年度 認知症介護研究・研修東京センター研究事業

# 東日本大震災時の認知症高齢者の行動と 介護スタッフの対応に関する実態調査研究

## 報告書

社会福祉法人 浴風会

認知症介護研究・研修東京センター

平成 24 年 3 月

## 目 次

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| はじめに .....                          | 1   |
| 第1章 研究の概要 .....                     | 3   |
| I 研究の目的 .....                       | 4   |
| II 研究体制 .....                       | 4   |
| III 研究計画 .....                      | 4   |
| 第2章 被災地の認知症介護指導者に対するヒアリング調査 .....   | 7   |
| I 調査の目的 .....                       | 8   |
| II 調査の方法 .....                      | 8   |
| III 結果 .....                        | 9   |
| IV 考察 .....                         | 31  |
| 第3章 認知症介護指導者の被災地支援の実態に関する調査 .....   | 33  |
| I 調査目的 .....                        | 34  |
| II 調査方法 .....                       | 34  |
| III 調査結果 .....                      | 34  |
| IV 考察 .....                         | 75  |
| 第4章 認知症介護指導者の被災地支援に関するヒアリング調査 ..... | 81  |
| I 調査の目的 .....                       | 82  |
| II 調査の方法 .....                      | 82  |
| III 結果1 第1次調査結果 .....               | 84  |
| IV 結果2 第2次調査結果 .....                | 99  |
| V 考察 .....                          | 121 |
| 第5章 被災地の行政担当者に対するヒアリング調査 .....      | 125 |
| I 調査の目的 .....                       | 126 |
| II 調査の方法 .....                      | 126 |
| III 結果 .....                        | 127 |
| IV 考察 .....                         | 133 |
| 第6章 総合考察 .....                      | 137 |
| 資料 .....                            | 143 |

## はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、岩手、宮城、福島の前北3県を中心に各地に大きな被害をもたらした。この地震によってライフラインや物流が寸断されるとともに、太平洋沿岸部では巨大な津波が発生し、さらには東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生した他、液化現象、地盤沈下など東北と関東の広大な範囲に被害が拡大した。

警視庁の2012年3月28日の発表では、死者15,854人、行方不明者3,089人、負傷者6,025人、建物被害は全壊、半壊含めて38万件以上の被害があったことが報告されている<sup>1)</sup>。介護施設においては、2011年6月13日現在において、岩手、宮城、福島の3県で52か所が全半壊し、入所者と職員の計658人が行方不明になったことが報告されている<sup>2)</sup>。正確な数字はわからないものの、多くの認知症者も被害にあったことが予想される。

そうしたなか、日本国内はもとより、世界各国から様々な形で被災地への支援が行われた。医療関係ではDMAT(Disaster Medical Assistance Team)をはじめとした様々な支援チームが活躍をした。介護関係においても、厚生労働省が中心となり、介護職員等の派遣を行った。その他にも、日本介護士専門員協会、日本介護福祉士会などの専門職団体が、避難所や社会福祉施設等への介護職員等の派遣を行った。NPO法人を通じた支援や、個人的なボランティアなど様々な形で支援活動が展開された。また、津波や原発等により被災した要介護者等の被災者の受け入れや、物資、義捐金の支援等が行われている。

一方、この予想をはるかに超えた状況の中、支援者は被災地支援活動上の様々な課題に、介護施設はこれまでの防災の取り組みの限界性に直面した。

本研究は、被災地における介護施設や支援活動の実態と課題をふまえ、今後の激甚災害に備えてどのような準備や支援のための仕組みが必要なのかについて検討し、今後の介護施設の防災のあり方、被災地支援のあり方を考える際の一助となることを目的としている。

## 文献

### 1) 警視庁 東北地方太平洋沖地震の被害状況

<http://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf#search> (2011.3.28)

### 2) 厚生労働省 老健局 東日本大震災への対応

<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001q8my-att/2r9852000001q8of.pdf#search>  
(2011.3.28)

## 第1章 研究の概要

## I 研究の目的

本研究の目的は、2011年3月11に発生した、東日本大震災及びその後の各地での震災において被災した、認知症の人とその家族、施設、ケアスタッフの状況及び、被災地に対する支援を行ったものの状況についてのヒアリング調査等を通し、その実態と課題を明らかにし、大規模災害時における被災地・被災者支援に必要な仕組みや支援者に求められるスキル等について検討することを目的とする。

## II 研究体制

阿部哲也 認知症介護研究・研修仙台センター 研究・研修部長  
大島憲子 認知症介護研究・研修東京センター 主任研修主幹  
加藤伸司 認知症介護研究・研修仙台センター センター長  
小長谷陽子 認知症介護研究・研修大府センター 研究部部長  
児玉桂子 認知症介護研究・研修東京センター 副センター長兼研修部長  
須貝佑一 認知症介護研究・研修東京センター 副センター長兼研究部部長  
中村考一 認知症介護研究・研修東京センター 研修主幹  
中村裕子 認知症介護研究・研修大府センター 主任研修指導主幹  
永田久美子 認知症介護研究・研修東京センター 研究部副部長  
○本間 昭 認知症介護研究・研修東京センター センター長  
森重賢治 認知症介護研究・研修東京センター 運営部長  
柳 務 認知症介護研究・研修大府センター センター長  
矢吹知之 認知症介護研究・研修仙台センター 主任研修研究員  
吉川悠貴 認知症介護研究・研修仙台センター 主任研究員  
渡邊浩文 認知症介護研究・研修東京センター 研究主幹

## III 研究計画

### 研究1. 認知症介護指導者の被災地支援の実態に関するアンケート調査

全国の認知症介護指導者を対象に、東日本大震災においてどのような被災地支援を行ったかを明らかにするための実態調査を実施する。

### 研究2. 被災地の認知症介護指導者に対するヒアリング調査

東日本大震災で被害にあった、認知症介護研究・研修東京センターで実施した認知症介護指導者養成研修修了者から、地震発生当時の状況についてヒアリングを行う。

### 研究3. 認知症介護指導者の被災地支援の実態に関するヒアリング調査

東日本大震災において、被災地支援を行った認知症介護指導者から、被災地支援の活動の報告と、被災地支援の課題に関するヒアリングを行う。

### 研究4. 被災地の行政担当者に対するヒアリング調査

東日本大震災の被災県である宮城県の職員のうち、県外からの介護職員の受け入れを担当した職員から当時の状況についてのヒアリングを行う。

## 第2章 被災地の認知症介護指導者に対するヒアリング調査

## I 調査の目的

本調査は、東日本大震災が発生した当初及びその後の経過の中で、認知症の利用者やスタッフの状況はどうであったのか、組織としてどのような対応を行ってきたのか等について、認知症介護指導者へヒアリングを行い当時の状況を明らかにすることを通して、大規模災害に対しどのように備えればよいかについて検討することを目的とする。

## II 調査の方法

### 1) 調査対象

認知症介護研究・研修東京センターにおいて認知症介護指導者養成研修を修了した認知症介護指導者のうち、東日本大震災で所属事業所が被災したものを対象とした。対象者の抽出は、認知症介護指導者へのヒアリングを通して、被災状況等の状況を勘案しながら任意に抽出した。

### 2) 調査時期

平成23年12月26日から27日

### 3) 調査方法・内容

以下のポイントに留意しながら、構造化されていないインタビュー形式でヒアリングを行った。

#### ① 認知症高齢者の状況

●被災直後の状況 ●その後の経過と現在の状態

#### ② 過去の反省と教訓

●今考えてみてこうしておいてよかったと思うこと ●今考えるとこうしておけばよかったと思うこと

#### ③ 現状

●現時点で困っていること ●現時点で必要な物

#### ④ これまでに受けてきた支援

●物的支援(直後から現在まで) ●人的支援(直後から現在まで。それがどのくらい続いたか)

#### ⑤ 指導者の抱える問題

●自分自身が今ストレスに感じていること ●スタッフがストレスに感じていると思われること

#### ⑥ 今後必要な支援

### 4) 倫理的配慮

調査の主旨、目的、方法、倫理的配慮について説明し、了解を得たうえで調査を行った。また、インタビュー結果の公表にあたっては、事前に調査対象者に内容を確認してもらい、了解を取った上で公表することを説明した。



### Ⅲ 結果

#### 1)調査対象

| 都道府県 | 施設種別                 | 職位         |
|------|----------------------|------------|
| 栃木県  | グループホーム              | ホーム長       |
| 栃木県  | ケアハウス                | 施設長        |
| 茨城県  | 在宅サービス事業所<br>グループホーム | 管理者<br>管理者 |
| 茨城県  | 特別養護老人ホーム            | 副施設長       |
| 茨城県  | 特別養護老人ホーム            | 生活相談員      |

#### 2)データの処理と分析方法

##### ①データの整理

得られたデータは、逐語録をもとに、対象が特定に結びつく固有名詞を削除した。さらに、まとまった意味・内容ごとに再整理するとともに、時間経過にそった形で整理した。

##### ②データの確認

再整理したデータの正確さ、記載内容の適切さについてはインフォーマントに確認・修正を依頼した。

##### ③小見出しの作成

時系列的な状況とそれに対する対応の変遷を整理するために、まとまった意味内容ごとに小見出しを作成した。

##### ④時系列的なニーズの変遷と対応の分析

小見出しを状況と対応にわけ、時系列ごとにマトリクスに整理した。(Table1)

##### ⑤震災後に行った対応の整理

各施設で行っている、震災後の対応を整理するため、別項目でデータを抽出し、さらに、それらをまとめた。(Table2)

### 3)地震発生直後から復旧までの間の状況

#### ①栃木県 グループホーム(ホーム長)

##### 【地震発生時】

###### ◆地震の発生が理解できず、避難後に混乱する認知症の利用者

その日は所用でホームにはいなかったのが当日のことは後で聞いた話になる。スタッフは当時には6人いた。地震発生時はちょうど入浴の時間帯でそれ以外の入居者はホールに集まっている状況だった。職員はおやつの準備をしていた。地震発生後、建物の外にスロープを使って避難した。逃げていた途中にスプリンクラーが作動して、水に濡れながら避難した。ベッドや毛布が水浸しになった。当時の利用者の介護度は1が4人、2が5人、3が3人、4が5人で、地震発生直後の入居者の様子は、地震がおこったことが理解できない人も2から3人いた。それ以外の人でも地震が起きていることはわかるが、自分から避難しようという行動を起こせる人は一人もいなかった。地震がわからない人は、外に避難したあと寒かったので「なんで外にいかないといけないのか」とパニックになった。普段から一人で動かれてしまう人は、自分の部屋に戻れないということで、みんなで固まって同じところにじっとしてられず濡れたままで歩きまわっていた。

###### ◆火災の避難訓練が役立った

避難訓練を毎月やっていたが火災の訓練だった。しかし、避難する順番や、手伝ってもらふ要員などの手配などで火災の避難訓練が役に立った。職員の中にリーダーシップをとれる職員がおり再配していた。余震が収まるのをまって、職員が施設内を確認すると、居室やロッカーのドアは全て外れており、施設内はものが落ちてきていて足の踏み場もないような状況だった。居室の壁には亀裂が入っていた。

###### ◆自主的に集まる職員

その後、隣のリハビリテーションセンターに移動した。センターの栄養課に食事を作ってもらって、おにぎりを少し食べた。出勤していなかった職員も自主的に集まってきた。濡れていなかった布団をもってきて床に寝ることになった。夜勤者は3人で対応したが、入居者はほとんどの人は寝ていなかった。

##### 【翌日以降】

###### ◆施設内の片づけ作業へのマンパワーの振り分け

施設内の片づけと、入居者への対応に職員を割り振り、職員総出で対応した。その日の午後には、入居者は同法人の特養に移動した。結局、施設の設備会社が東北だったために修理がすすまず、2か月くらい戻って来られなかった。施設の片づけに3人くらい職員がボランティアできてくれていた。それが1か月くらい続いた。入居者の家族の人は私物の片づけなどに2~3人来てくれていた。移動先にベッドが足りず、ベッドを運ぶのが大変だった。施設内は水害がひどく、すぐにカビがはえてきていた。余震でもスプリンクラーが作

動している状況だった。

◆排せつケアの物資の不足

リハビリパンツ、パットが1週間を過ぎて足りなくなってきた。家族も持ってこられないし、買おうにも物が無い状況だった。移動のためのガソリンも不足していた。

◆職員のシフト管理・夜勤者の確保

電話は使えなかったがメールは使えたので、メールがつながった人だけ、夜勤できますかと聞くことができた。夜勤が確保できないのが困るので、日中の業務は優先順位を決めてなんとかいる人数で対応し、夜勤が正常にまわるようにした。通常は一人夜勤で入っていたところ、地震の翌日は3人、それ以後は2人体制で行った。職員は言葉には出さないが、体調を崩したり、疲れが表情に出ている状況が見受けられた。そこで、体調が悪そうならすぐに返すなどした。先がみえない状況で職員を休ませる判断も大変だった。

計画停電が実施されていた時期に、毎日その時間帯が変わるので、4時半に停電がくる場合、5時くらいに食事して、寝ましようというような、生活のサイクルを決める判断をもとめられた。毎日状況が変化し、細かいことでも聴かれたことが大変だった。職員はそれまでは自分で判断できていたが混乱しておりできなくなっていた。

◆避難先での混乱

入居者は普段一人部屋なのに二人部屋にさせられた不満など「なんでなんで」と説明を求めた。不安を与えないようにどう状況を理解してもらうかに気を遣った。説明の仕方として、地震があって、施設が壊れているという旨を正直に伝えと、「地震なんてあったの？」とわからなくなったが、説明していくとなんとなくわかってくれる人もいた。入居者は阪神大震災のことは覚えている人がいるので、そのことを交えて話すと理解してもらえる状況があった。利用者のほうから、戦争体験をしていて「こんなじゃなかったよ、今のほうが幸せ」と言ってくれたので救われていた。家族からは同じ料金を払っているのに、今二人部屋になっている理由を尋ねられたりした。間借りしているので、ゴミの捨て方、食器の片づけ方など、その施設のルールを守らなければならなかった。風呂の入り方、トイレの場所などもわからないなど、ドアが全部一緒に自分の部屋がわからなくなるなどの環境の変化による混乱があった。

◆避難先での生活の再構築に向けた取り組みの開始

これまでできていたことができなくなったりしていた。生活をできるだけ早く安定させるために、普段10時にラジオ体操していたのをすぐに再開したりして普通に戻していこうと行動した。1週間くらいして比較的生活が落ち着いてきた。しかし、日中やることがなくなってしまった。以前はしていた買い物、食事作り、食器洗いなどもやらなくなってしまう、作業としては洗濯物たたみくらいになってしまった。散歩も余震が続いていたので行けない状況だった。電気も止まっており寒くて動けないという状況だった。ホームにいれば、自分の時間の過ごし方ができたが、やることがない。職員は、入居者を動かさなければならぬが、動かすと危ないとの葛藤があった。物資が手に入らずに困るというのは

なかった。大きな法人なので事務方ががんばってくれた。普段から一人で散歩にいかれる人がいたが、環境が変わったことで外に様子をみていきたいとだんだん範囲が広がっていった。また、家が心配になって、朝でも夜でも関係なく毎日家財道具を背負って歩かされていた人がいた。あるとき、シルバーカーを押して非常階段を下りているところを発見した。洗濯物をたたむなどの作業をしたり歌をうたったりして落ち着いてもらった。1ヶ月後にはホームでお花見などの行事ができるようになった。二人の新人職員が入ったが、新人教育もままならなかった。

#### ◆医療ニーズへの対応

ガソリンがなかったため、薬の残量がある人は定期受診をひかえてもらったりという対応をした。脳梗塞で急変した人がいたが、救急車呼んだが近くの病院も機材がつかえないということで、搬送先がみあたらないなどの状況が町にあった。入居者間で急性胃腸炎が発生した際も、入居者を動かさず、職員が報告して薬を出してもらっていた。

#### ◆ボランティアへの対応

片づけはなかなかやりたくても手が回らなかった。学生からボランティアで片づけをもらったときは、職員の人が一人数についていて采配できた。重要な部分は職員が行い、床を磨いたり、大きな荷物を運んだりしてもらった。入居者の私物の扱いは職員が行った。他の部署の人に片づけに手伝いにきてもらっても、「どこに片づけるのか」などの質問をたくさん受けるので対応しきれず、結局最後は職員が片づけるような状況もあった。入居者への対応するのもあうんの呼吸があるので、職員以外の人をお願いするのは難しいと感じた。

#### ◆施設復旧後の生活の再構築

最低限の設備が復旧し、急性胃腸炎が落ち着いた5月2日にホームに戻る。入居者は戻ってきた安心感を口に出していた。しかし、自分の部屋を忘れていたり、「勝手に私物をさわられていた」「ものがなくなっている」などの訴えがあった。これまで二人部屋で安心していった人は逆に不安になる状況が見受けられた。してもらう生活に慣れてしまい、入居、職員とも、もとの生活を思い出して買い物に行く、食事の準備をするなどのスケジュールを戻すのが大変だった。しばらく動けなかったのも、筋力低下のため移動距離が短くなり、トイレまでの移動がおぼつかない方がいた。認知症も進む、身体状況も進んでしまう、何かしなくちゃという意識がスタッフになった。早くもとの生活に戻したくて6月くらいから、ガソリン不足などがある中、無理やり外食などの行事をはじめだした。

#### 【震災後に行った準備】

#### ◆力仕事ができる職員

火災のときは助けがよべるが、地震は他も揺れているので助けにこれない。その時の対応を考える必要がある。力仕事ができる男性職員がいなかったが、そうした場合の対応も考えておく必要がある。

#### ◆備蓄・マニュアルの見直し

備蓄は法人で半年分くらいあったが、防災セット、人数分の毛布とか使えるもののセット。グループホームなのでホーム自体のストックがなかった。懐中電灯の単 1 電池はいっぱい買っておいたほうがよい。マニュアル、避難経路などを整備しておく必要がある。夜間の場合どうしようと考えていた。一緒になっていたのですぐに外にいったが、部屋にいたら逃げられなかったのではないかな。

## ②栃木県 ケアハウス(施設長)

### 【地震発生時】

#### ◆出張先での地震発生

地震が発生した時、認知症介護指導者の連絡会議に出席するため車で走っている途中だった。周囲の屋根の瓦が落ちてきて、これは大変だと思った。施設に電話をしてみると電話がつかない。帰りは高速が使えず、信号機も全部止まっているなか通常 1 時間の道を 3 時間かけて帰る。

#### ◆エレベーターが停止した中での避難◆同一法人内の施設からの支援

地震発生によりエレベーターが使えないため階段を使って各部屋をまわって利用者を全員 1 階に移動する。エアコンのガスが抜けて白い煙がでたり、室外機がはずれたりした。同じ法人内の施設がすぐかけつけてくれて避難誘導など手を貸してくれた。また、マットレス、毛布などをもってきてくれた。奇跡的に、誰も怪我をした人はいなかった。

### 【その後の経過】

#### ◆1 階食堂・デイサービスでの避難生活

その晩から日中は 1 階の食堂、寝るときはデイサービスという生活が 2 ヶ月くらい続いた。5, 6, 7 階の被害は大きかったが、2 階から 4 階くらいまではそれほど被害はなかった。しかし余震があるので最低 1 カ月は 1 階で生活するよう協力をお願いした。

#### ◆避難先での入居者の不満・不安の発生

自立している方が多いが、中には認知症が軽度の人を含めて数人おり、ものが盗られたなどの苦情があった。ご家族にそのことを説明してもご本人に認知症があることを理解してもらえない状況もあった。もの盗られ妄想の人は、寝る場所を分けるなどで対応した。普段話をする機会の少ない自立の人ともいつもより会話をするが多かったのも、スタッフが入居者の不平・不満、要望などを聴くことができた。余震がいつおさまるかもわからず先がみえない、いつ部屋に戻れるかわからない中で、「いついつ戻れる」という説明ができない。入所者の代表が相談に来て戻れるのではないかとどうか訪ねてきたが、余震が続いていたので説明して納得してもらった。1 か月半くらいして 2, 3, 4 階だけ先にもどってもらうことができた。食事は 1 階玄関フロアの長机でとった。

#### ◆部屋の片づけへの対応

1フロア10名の入居者が生活されていた。施設自体はちょっとしたひび割れ程度であったが、居室の中が大変な状況になっていた。5, 6, 7階の部屋は足の踏み場がない。ベッドの位置も全然違う。タンスが倒れていたり、タンスや冷蔵庫、押入れのものが全部でしまっていたりしてどっから片づけたらよいのだろうという感じだった。部屋にいた人に聞くと、揺れでテレビが飛んで行ったという。部屋のづけを行う際には、ご本人の判断や、家族の立会などで行っていったため、結構時間がかかってしまった。片づけは職員、他の施設の職員の二人で本人の許可をとって部屋から行った。認知症の人の部屋は、依然と同じ形のものになるように、家族にも、「お部屋の模様替えなどは極力配慮してください」とお願いした。自立の人は初めて部屋に入るので、どこがどういうレイアウトなのだろうかわからなかった。余震があると、部屋からすぐにでようということに対応していた。5, 6, 7階の人は2ヶ月くらいかった。

◆精神的に不安を訴える入居者

7階のタンスの下敷きになりそうになった人がいたが、その人は、地震が落ち着いてもすぐには戻りたくないということで、1階のゲストルームで2か月くらい生活されていた。家族の人にお部屋に戻れることを伝え、何度か話していく中で、本人もそろそろ戻りますということになった。当時は、3時にはリハビリ体操を実施。夜眠れない人は、昼間寝るなど、寝ている時間が多くなった。入居者で精神的に不安を訴える方は、頻繁に家族が面会にきたり、一時帰宅するなどの対応がされていた。外出は家族と一緒にすることに対応した。なかなか面会にこれない家族もいたが、その利用者には職員が話しかけるようにした。自分も、最初の1ヶ月間は、休みの日も通常の勤務以外で出勤して顔を出す配慮をした。

◆電池の不足、他地域からの飲み水の確保

電気が2, 3日、水が1週間弱で復旧した。ガスは大丈夫だった。夜間トイレに行くのに懐中電灯だけでは明かりが十分でなかったが、電池も売り切れてなかった。レンタルで発電機を借りようとしても在庫がないなどの状況があった。当然、通常の食事のメニューは出せなかった。2, 3日は非常食、備蓄で対応した。炊飯は、カセットコンロで行う。電気が来たり来なかったりの状況だったため、来た時にお風呂に入ってもらうようにした。水道が止まりトイレで水がでない。浴槽の水を使ってトイレを流した。水の復旧が遅れたが、飲み物は備蓄したものや他の通っている地域からわけてもらうなどしてしのいだ。

◆復旧までのマンパワーの必要性

職員も自身の家のことが気になる状況だったのかもしれないが、通常の勤務以外で協力してもらわなければならない状況であることを説明しお願いした。1階で過ごしている間は夜勤も2人体制で対応した。

全体的に、ケアハウスのみで対処しようとしたら大変だったと考えるが、法人内で協力して対応できたのでよかった。行政から毛布、タオル、取引している福祉用具関係の業者から水、人出をかしてくれた。非常階段や廊下の掃除などを手伝ってくれた。

だんだん暑くなってきたときも、エアコンの修理が入らずなかなか復旧しなかった。7月くらいには復旧した。

震災当初は片づけに、人出が欲しい。時間がたつてくると、介護職員が疲れてきたときにかわってくれるとよかった。当時は、被災地を他の施設で受け入れている状況があったため、頼めなかった。依頼するとすれば、同じ法人の職員だと安心して頼める。直接入所者にかかわる部分では、気心をわかるある程度関わっていた職員だと安心して交代できると思う。

#### 【震災後に行った見直しなど】

##### ◆地震の避難訓練の必要性

普段から消防訓練などはやっていたが、地震の時の対応については改めて訓練をしなければならなかったと感じた。入居者にも服薬など入り口付近に必要なものをひとまとめに置くように伝えたりしている。震災後タンスは腰の高さまでのもの、突っ張り棒を使うなどの処理をした。今は一つ発電機をかった。4月5月に注文して先月くらいにようやく届いた。消防訓練はやっているが、地震に対してもやらないといけなさと意識がでた。出入り口に荷物を置く、逃げる時の靴を準備しておくなど。薬、貴重品など。職員の間でも、地震のときの対応をみなおす。

##### ◆備蓄、マニュアルの見直し

備蓄は、一週間分くらいはしていた。備蓄の見直しを行った。具体的には、使い捨ての容器を1から2週間分、懐中電灯、ランタンみたいなものを用意した。計画停電のため夏場でエアコン使えない状況を考えて大量のアイスノンを購入した。

マニュアルに必要なこととしては、どこに避難するかを決めておくこと。電気と水の確保を明確にしておくことや避難の方法や通路の確認することが必要だと感じた。認知症の人に対しては、パーティションなどで区切るような対応ができることが必要だと感じた。

### ③茨城県 在宅サービス事業所(管理者)、グループホーム(管理者)

#### 【地震発生時】

##### ◆実習生への対応

地震発生時、外部からの研修生の対応をしていたが、対応していた職員2名はすぐにそれぞれの担当部署にかけつけた。また外部からの研修生は各々施設へ連絡を取り早急に帰した。

##### ◆入居者を1階に避難

1階で立っていられないくらいの揺れであった。天井に亀裂が入って据え付けられていた空調が落ちてきた。3階で火災がおきているということで火災報知機がなっていたが、エレベーターが止まっていたので外階段を使って3階にあがったところ、3階に上がると火元はなかったが、ほこりで白くなっていた。天井からの落下物などが散乱しており、このままでは危ないと判断した。3階と2階の入居者80人がベランダに非難していたが、1階におろすことにした。男性職員全員が交

代で外階段を使って4時くらいまで掛けて降ろした。

外階段自体もひびが入っていた。新しい棟から古い棟の継ぎ目が横揺れをしていた。余震も続いていて、このまま中にいたら危ないと判断し、全員を外庭に誘導した。起きた直後は、入居者は落ちついていた様子だった。職員も落ち着いていて、大丈夫だよと声掛けをしていた。

#### ◆通所サービスの利用者の送迎

50名弱いた通所の利用者を、いつもの10倍くらいの時間をかけて順次 2 人体制で送迎した。ただし帰っても家に一人だけの人は送らず、また、家族が帰ってくるまで夜中までその場で待機したケースもあった。マンションに住んでいる人でエレベーターがとまっているので 10 何階までおぶっていったケースもあった。そのため職員の数が必要になったが、家族のいる人は早く返してあげたいとも思った。

#### ◆在宅サービス利用者への安否確認と対応

このあとどうなるのか全く分からない状況だった。施設内の物品を外に出し、足りない物品をデイサービスの送迎の時に買ってくるようにしたが、大きな道路は信号が全部とまっていたり、隣の町に行くための橋の段差が大きくなっていたり、マンホールが隆起したりしていた。裏道はブロック塀が倒れたりしており、交通状態が悪くそれどころではなかった。在宅サービスの利用者全員の確認をとり、認知症の人で独居の人、身寄りがいない人は連れてきて、当日は緊急のショートステイ扱いで受け入れその後にグループホームに入所になった。

#### ◆当面の避難先の確保

定員18名のグループホームの入居者を東のユニットから西のユニットに移動して、ショートステイ利用者20名の居場所を確保した。老健の入居者80名はケアセンターに移動した。事務所のいたるところにデイサービスの帰れなかった人の居場所を確保した。職員も家族を連れて避難してきた。

#### ◆当面の避難先での食事、寝る場所の確保

厨房は卓上のコンロを使って150人分のおかゆを作った。火力が弱いため夕食は8時くらいまでかかった。電気もなく、療養室から布団やマットを敷詰めて寝る場所を作った。

#### ◆避難している事情がわからない認知症利用者

夜中になると、グループホームの入居者は地震が起きたということは忘れていたが、「なんであたしの部屋に帰れないのか」との訴えがあった。「地震があったから」と説明しても「あたしのところにはなかった」と聞いてくれなかった。利用者の持っていたラジオで、茨城県じゃないところが大変だというのが夜中にわかった。テレビもなにもつかず、二日目の朝に東北がひどい状況だということがわかった。津波のくる映像などは3日4日後にみた。

### 【翌日以降】

#### ◆飲料水とガソリンの確保

翌朝、職員みんなで集まって、先が見えない状況だったのでライフラインが復旧するまでの対応について相談したが、幸い、翌日に電気、ガスが復旧した。近所の工場の業者から水とスポーツドリンクを提供してもらい数日つないだ。コンビニには物が全くなっていた。翌朝から在宅サ



ービス利用者の安否確認を開始した。デイサービス、ヘルパーを一日も休まず翌日から再開したが、ガソリンや灯油の確保が大変だった。給油を受けるために送迎時の職員から開いているガソリンスタンドの情報を集約し、開いていた場合は待機していた職員が給油に向かうようにして対応した。ガソリンスタンドで4時間、5時間並んで3000円までしか入れてくれない状態だった。給油のため並んでいる職員に水分を届けたりした。職員もガソリンがないので出勤できなくなる状況があり、工作中でもガソリン確保に時間を割いた。1週間くらいしたら、ガソリンスタンドから連絡がくれるようになった。地域から食料も野菜などたくさんもらった。行政から情報がこなかった。地域包括支援センターをおいていたところには、情報や物資がきたようだが、そうでないところにはなんの情報も支援ももらえなかった。当時は市民から水がどこで配られるか全くわからないなどの苦情がでたらしい。

#### ◆建物の被災状況の確認と避難先の移動

翌日建物については建設業者にみてもらい、すぐに倒壊の恐れがないことを確認し、内部を片づけた。夕方から通電し電気が使えるようになったため、1階にショートステイ利用者20名、2階と3階の入居者80名を移動した。1階の通所リハビリのスペースに2階と3階のベッドをおろしてきて生活した。

#### ◆在宅サービスの早期再開

周辺のホームヘルパー、デイがやっていなかったのも、事業を再開し、受け入れていこうということになり、ケアセンターのスペースで通所リハビリ、デイサービス、認知症デイサービスを一度に行った。食料の確保ができない心配があったが、食料は職員のつてをたどって農家からもらった。物流がストップしてしまい、知り合いからトイレトペーパーを譲ってもらったりした。家族に連絡がとれても「自分のうちも大変なのにばあさんのところにいけるか」と言われたり、送っていても「こっちも大変だから施設に置いておいてくれ」といわれて返ってくるがあった。

14日の夜に水が通ったが、夜10時くらいに2階の居室の壁伝いに水がもれているという報告があり、2階の3部屋では滝のように水が流れていた。そのうちに隣の部屋も浸水してきた。1階でも浸水し、結局8人で朝6時まで水かきをした。

#### ◆破損した施設でのトラブル

設備の業者が動けない状況であり、3月下旬まで修理ができなかったのもそれまで1階にいた。3週間くらい暖房が使えずファンヒーターを使ったが、何度も灯油を入れなければならなかった。

水が出ない間は、わずかに出る水を一滴一滴ためて煮沸して使っていた。それでもここは復旧が早く、隣町では1か月入浴できず、川から水を汲んでトイレを流していたりしていた。ライフラインは比較的早期に復旧したが、業者が対応できず設備のダメージは修理がすすまなかった。入居者が生活している部屋でもしばらく大きなクラックが入ったままの部屋があった。余震でエレベーターがしばしば止まり、夜の2時3時にとまると、朝ごはんが運べないので人海戦術で突然人の手配が必要になるような状況だった。

#### ◆避難先でのアメニティの工夫

その中で、何か楽しいことをしなければということになり、おやつを作ったりした。学校も休みになっていたので、職員も子供を置いて仕事に來れないということで、連れてきた職員もいた。高校生や中学生は手伝ってくれ、小学生くらいの子供はお年寄りにかわいがってもらった。見守り、食器洗いや、話し相手など来てくれれば何か仕事はあるのでそれは助かった。

#### ◆職員への対応

職員は公休も、勤務表もないような状況で「今日誰が來れる？」という感じで働いた。家が被害にあっていて家に歸れないので、2週間泊まっている職員がいた。施設では毎日打ち合わせをしていたが、職員に状況把握をして安心してもらおうということで「震災ニュース」という形で4月くらいまで毎日、情報提供をした。職員は気が張っていたのか、体調を崩す人もおらず元気だった。出勤するために高い自転車しかないが購入したいと職員はどんなことをしても施設に來なくてはと思っていた。施設にいれば安心という気持ちが職員にもあった。心配事があつたら相談にのるという働きかけを当初からおこなってきた。職員は、家にあるものを施設に持って來たりしていた。

#### ◆被災した他の施設や高齢者からの入所の申し出

近隣でも地盤が弱いところに立てた施設などは被害が大きく、施設が使えなくなったので、その間だけショートステイを使いたいという施設があった。震災後、独居で心配だから入所させてくださいという家族の人もいた。

#### ◆利用者の体調の崩れ

夏あたりに具合を悪くする入所者も多かった。

#### ◆被災地の格差

県外などからボランティアで來たいというような申し出はなかった。それどころか、通電した翌日に計画停電の範囲に含まれるという話がきた。茨城県知事が茨城県も被災地であると訴えて中止になった。

#### 【今後に備えて】

#### ◆物品の確保のための処置

取引のある事業所については、今後今回のような事態が生じた場合に、取り扱っている物品については連絡がとれなくなっても搬入してもらおうという契約を結んだ。

#### ◆在宅利用者のための対応マニュアルの整備

各部署がどの程度まで在宅の利用者の安否確認をするのかのマニュアルを作成した。居宅介護支援事業所をベースにして、それ以外の部分を通所介護やホームヘルパーがフォローするようなものを作成した。家族が一緒にいるかどうか、連絡先がどこかなどの情報を整理し、災害が発生したら、まず落ちそうなものを下に降ろすとか、電話のわきに緊急先の連絡先を置くとか、冷蔵庫の中身を確認し、食糧の残量を確認するとか、チェック項目を作って、確認する。そこまでやって家族に連絡し、連絡が取れたら鍵をあけて歸るか、閉めて歸るかを事前に確認しておいて対応するようにした。そこまでしないと歸れない。

今回の震災に伴うマニュアルの変更は多かった。例えば、送迎中の対応や、外出レクなどもそう

いうリスクを入れたものにかえた。信号がない場合の走行の仕方とか。どこに逃げるのかということを確認するとか。避難所につれていけるかどうか家族に確認しなければ判断できない。

◆職員間での伝言の訓練、拘束力の課題

毎月携帯の伝言板の訓練をしている。家族がいる職員からは、もし自宅にいて、地震が来たら、そのまま小さい子をおいていけるかどうか自信がないといわれた。主任以上は絶対来いというような決まりは作れなかった。

◆ガソリン補充のルール of 修正

ガソリンが補充できたら安心できた部分があるので、それまでは、半分以上になったら給油するというルールを作っていたが、今では 3 分の 1 減ったら給油することにした。

④茨城県 特別養護老人ホーム(副施設長)

【地震発生時】

◆状況確認と避難場所の判断

所要により施設から外にでたときに、正面玄関の前で揺れだし、近く of 家の瓦が落ちだした。施設に戻ると、電気が非常灯になっていた。入居者は、おやつを食べた後で、離床されている状態だった。状態を確認すると、怪我をした人はいなかった。頭を保護するために、バスタオルを頭にまいた。余震が続くなか、避難のため外にでるかどう か、事務長、施設長と相談した結果、館内にとどまることになった。崩落のため食堂と多目的ホールが使用できず、各フロアで待機することになった。活動的な認知症の方には、職員が体を支え寄り添っていた。職員が寄り添っていると、利用者は落ち着いていた。

◆夜勤体制の確保

予定していた夜勤者は全員出勤したが、早番、日勤者は残れる人は残るようお願いし、早番の人は当日の夜9時くらいに帰った。日勤者は全員泊まった。リーダークラスは全員残った。施設長、事務長も泊まる。そこで、翌日から勤務どうする という話をした。とりあえず勤務表通りに行うこととした。

◆宿泊するデイサービス利用者への対応

当日は、デイサービスの利用者は家族の人が2、3人迎えにきただけで、あとは施設に宿泊した。そのためデイサービスの職員も宿泊することとなったが、利用者の夜間の様子がわからないため、日中の様子でベッド、布団を選択し、起きてきたらその都度トイレ誘導をして対応した。デイサービスの利用者は地震のこともよく理解し、落ち着いていた。

◆落ち着いていた夜間の状況

認知症のある人で「なんでここに in んだ」ということを繰り返した人が2、3人いたが、攻撃的になることもなく過ごされた。全体的に、その日は特変もなく、起きてくる人もなく一夜がすぎた。暖房がきかなかったが、重ね着したりしてもらっていた。夜間は、認知症状が強い方は職員が脇につきそっていた。眠れないという人には職員が手をつないで一緒にいたり、話をきいて対応した。

そのあたりは日勤の人が残ってくれたりして通常の夜勤体制ではできないことができた。余震はきいていたが、環境的には大きく変わらずに過ごせた。

◆余震に備えた対応

その日の夜は、ベッドの位置を、万が一のことを考えて窓からベッドを離したり、蛍光灯の下に置かないようにするという配慮を行った。暖房はとまっていたが、寒い人は2枚重ねて対応した。湯たんぽなどの暖房器具は使えなかったが、寒くてどうしようもなかったということはない。明りについては、懐中電灯があまりなく、アウトドアを趣味にしている職員がランタンを持ってくるなどして対応した。携帯電話の充電について、車のバッテリーから全機種充電できる職員がヒーローになった。

◆情報の不足

情報が何もなかったのも、利用者が聴いているラジオを借りて、茨城放送から情報を得ていた。職員の携帯電話のワンセグが情報源になった。しかし、東北の情報ばかりで、どうなっているかわからなかった。

◆食事への対応

食事は非常食を3日分あったので、栄養課にお願いして備蓄で対応した。その日の夕飯と翌日の朝食は、冷たいままあっためることができなかった。食器は使い捨てのお弁当パックにラップをしいて、スプーンにもラップをまいておかゆを食べた。水道がでないのも、食べたラップをすてる形で対応した。偶然ラップも入荷したばかりだった。

【翌日】

◆ライフラインの復旧

次の日の土曜日の9時過ぎに電気も水道も復旧した。たまたま付近の中でも1番早いくらいで、別の老人保健施設では1週間くらいのライフラインの復旧しないところもあった。ライフラインが復旧したら安心して、昨晚泊まった職員は帰宅させた。排せつや食事も通常どおりに行えるようになった。次の日はテレビがつかえるようになった。

◆地震のことを忘れていた認知症利用者

入居者は大地震のことを忘れていた。1人だけ、記憶障害の出始めの人だけが、地震を理由により荷物をまとめて家に帰るという訴えを2カ月の間つづけた方がいた。入所者も、職員の家族も誰も怪我をする人はいなかった。

【1週間、2週間の間】。

◆在宅サービス利用者の安否確認と受け入れ

月曜日には、居宅のケアマネが1件ずつ訪問して安否確認を行った。独居の人で希望者は連れてきてそのままショートに切り替えて入所していただいたりした。家が全壊していたためにそうした人もいた。そのようにして最初の1週間は緊急で入所する人が多かった。2、3日のとき90人定員のところ、100名を超える人が入所していた。

◆とろみ剤などの物資の不足

地震発生後1週間、2週間くらいが大変な時期だった。物資が不足した。生鮮食品は入らず、通

常はカロリー計算するところが、3食出せばいいということであるもので食べざるをえなかった。おやつも備蓄がなかったためはぶいた。とろみ剤がなくなってきた。

排泄については地震が発生した日の午前中におむつが入ったばかりだったので通常のおむつ交換などはやろうという判断し、しばらくは不足することなく対応できた。これが前日だったら足りなくなっていたところだった。というのは、ライフラインが復旧しても物流が東北優先でストップしており、3月末くらいからはおむつが足りなくなってきた。その際は、関連グループでまわしたり、県外の関連グループの職員が運んできてくれたりしてしのいだ。水が使えず、トイレの匂いなど色々な匂いがまざった。

#### ◆近隣からの支援

近くの業者から、ヨーグルトなどがたくさん届いて、それが嚥下困難な人の水分補給という意味で助かった。救援物資が行政を通してはほとんどなかった。また、デイサービスをご利用されている近隣の人が野菜を届けてくれたりして助かった。グループホームにはおにぎりや毛布が届いたという話をきいたが、施設には全く届かなかった。壊れたものがいつ修理されるのかの見通しは不透明で、この状況がどうなるかわからない状況だった。

#### ◆新規ショートステイの増加、被災者の受け入れに伴う混乱

状況が落ち着いてきた時期に、新規のショートステイの申し込みが急が増えてきて、職員が混乱した。福島からの被災者も受け入れて欲しいということで理事長から話があった。福島から身寄りを頼って避難してきていたが介護が難しくなったため、施設にお願いしたいという人もいた。通常ケアマネジャーを通すところが、家族と直接交渉する形となり、情報が錯綜したりした。他にも、被災した施設から利用者を受け入れてほしいということで、1日かけて調整したが、結局別に出なくてもいいということになった話もあった。

#### ◆ガソリンの不足

ガソリンがなかったり、家が被害を受けた職員もあり、休ませてガソリンをいれたりする時間をつくってあげた。食堂が使えなくなったので、各フロアで食事介助をするようになり、すぐに対応できなかった職員もいた。職員は買い出しやガソリンを入れる人は助かったが、お風呂も1週間使えなかった。

#### ◆同グループ内の病院からの支援

医療的な部分では、同じグループに病院があり、医師が途切れないように配慮してくれて薬局からも薬が届いたため、薬が足りなくなるということとはなかった。また、幸いに、常時吸引人的はいなかったの、電気がとまっても大丈夫だった。

#### ◆その場その場の判断・意思決定を求められる

判断がその場その場で決めなければならないことが多く、事務長、施設長と決めていくがベストかどうかかわからないまま決めていった。1ヶ月間、1週間ごとにリーダーとのミーティングをした。ミーティングでは、道路やガソリンスタンドの状況についての情報共有、急遽入所した人への対応などについて話し合った。例えば、家が全壊した要介護1でショート入所した人を本入所に切り替える相談があった。ケアマネジャーを介せず入所させていたので、その調整がどこまで進んで

いるかなどについて話し合った。

◆在宅サービスの再開

デイサービスやショートステイの送迎は、家族送迎という形で行った。

◆家族への説明

家族への連絡は後手になってしまった。家族からの問い合わせには答えていたが、こちらから連絡することはおろそかになっていた。結構家族からは連絡があった。なかったのは1割くらいだった。

◆介護優先となるケア

介助のほうが優選で、レクなどまで気が回らなかった。利用者からはなんで体操がないの、なんで歌がないのという声があった。

◆福島県からの被災者の受け入れ

福島県から2人の避難者の受け入れを行った。一人は、グループの職員の親族で、福島において在宅サービスがストップしてしまい、こちらに引っ越したが、一緒に住めずに入所となった。情報については、聴きとりで入所した。2週間で福島が復旧して帰られた。

もう一人は、富岡町から転々と避難所生活を続けて、茨城の親族を頼ってきた方で、膝に水がたまってしまう、親族で介護できないということで入所となった。受け入れに際しては、職員が原発の情報に対して過敏になっており、放射能は大丈夫なのかという話になっていた。また、今いる利用者の食事を減らしても受け入れるのかという職員もいた。社会福祉法人として受け入れていくということで説明した。職員も精神的にだいぶまいている様子がみられた

【震災後に行った対策】

◆防災委員会の設置と備蓄の見直し

震災後、防災委員会を作った。備蓄を見直し、食料品だけでなく毛布や水、ランタン、発電機を買った。施設長、副施設長、事務員、介護職員がユニット、各庁から1名ずつの4名。5月から始動した。これからの避難訓練は地震も想定してということになった。いままで火事を想定したものはあったが、地震を想定したものはなかった。3日間を備蓄でしのいだ後も、流通が途絶えている場合を想定してどのくらい何を優先的に限られたスペースで蓄えていけばいいかを検討している。明りになるもの。ラジオが必要。自家発電の発電機。照明みたいなものがあるといいねということで、施設で買った。

◆避難経路、職員への連絡方法の見直し

避難場所も、正面以外に、横の職員駐車場にもにげられるように段差を解消し、スロープにした。地震発生当初、通話ができないがメールはつながったため、職員の緊急連絡もメールでの連絡が考えてメールアドレスをきいた。

◆近隣住民の避難所として機能

これからの課題なのだが、近隣からの飛び込みの避難はなかった。普段から何かあればどうぞというのが浸透していなかった。

⑤茨城県 指導者(特別養護老人ホーム 生活相談員)

【地震発生時の様子】

◆防災設備の破損

地震が発生したときは事務所にいた。揺れが長いと感じ、事務職員と相談し、館内放送をいれたときに、大きな揺れがきた。それによって防災設備が機能しなくなり、全館放送ができなくなった。

◆施設の破損◆入居者の館外への避難

地震発生時は入浴時間の最中で、一般浴室が4人くらい。機械入浴室に2人ずつ入居者が入っているところであった。また、おやつの時間に向けて2フロア内に4人ずつ職員がいて、入居者の離床作業に入っているところであった。他の職員体制としては、看護職員が4名、調理職員は4、5名で調理中であった。揺れが激しくなったときに、施設長が外出先からちょうど戻ってきた。館内を確認してくるよう指示を受ける。食堂には10人程度の利用者がいたが、外に逃げ出してくれという指示をだした。入浴中だった入居者を急きよ担ぎあげて服を着せる余裕もなくストレッチャーのまま館外に出した。当時76人の入居者が生活をしていた。

正面玄関は自動ドアがずれて開かない状況になっており、さらに玄関前の天井がはがれおちてきてしまい、歩けない状況になっていた。館内の古い空調は天井から落ちてきていた。そのような状況になっていたが、自ら逃げ出す入居者はいなかった。「俺は食堂にいくんだ」と怒りだす入居者がいたが職員が担ぎあげて強制的に連れ出した。揺れで館内のスプリンクラーの配管がずれてしまい水があふれてきていた。地震が発生した時に一時、館内の電気はストップしたが、その後自家発電が作動してまた水が出てきてしまい、館内は水浸しとなったため、本体の電源をおろしてくみ上げをとめる。

【避難後】

◆破損していない施設への避難

館外に避難したあと、今後の対処についての方向性が決まるまで1時間程度を要した。施設内は壁がはがれ、水浸しの状況だったので、ユニットとデイサービスに避難した。ユニットは電源も配管も別だったので、亀裂やガラスが割れた程度で無事だった。デイサービスの利用者は22人で、職員は8人だった。併設の託児所にも小さい子がいて、待機している状況だった。

◆パニック状態の職員

入浴中で裸のまま館外に連れ出した入居者については、本人から「寒いよ」と言われて、はじめて気づいて毛布をかけるぐらいに職員の心理状態は混乱していた。また、避難した利用者の人数を数えるように指示してもパニックで数えられない状況であったため、10人くらいの小さなグループに分けて数を数えさせた。

◆デイサービス利用者を送迎

通信機器が全て使えない状況であった。入居者、利用者を迎えにくる家族はいなかったため、16時くらいにはデイサービス利用者を送りながら地域の様子をみてるよう職員に指示を出す。

家族がおらず戻ってきた人もいたが、その日のうちに全員を送った。

◆ショートステイ利用者の状況

ショートステイの人は送れなかったので、家族が迎えに来た人は3人いたが、それ以外の人は家族とも連絡が取れず、そのまま、いてもらったという形になった。入居者の人で、家族が連れて帰るという人が2名いた。一人はADで徘徊がひどい人だったが、大変でしょうからと外泊扱いで連れて帰ってくれた。家は水が出るからと経管栄養の入居者の家族も連れて帰ってくれた。その他の家族はきてをお願いしますということだったが、施設としてもここが安全とはいいきれないと説明した。

【当日の夜】

◆とりあえず用意できるもので食事、寝る場所を用意

厨房では夕食の準備が6割くらいできていた状態であった。ガスコンロを使用し、米を炊いて、とりあえず出来ているもので夕食を提供した。食器は行事用のプラスチックの容器を使用した。寝具については、デイサービスのリネンや、使えるリネンを使い、フロアにマットを敷きつめてベッドではなく、フロアにそのまま寝てもらった。男性は託児所のほうに寝てもらった。その夜はエアマットを使用できなかったのもので、普通のマットで寝てもらった。

◆混乱する利用者で落ち着かない夜

入居者は入眠せず、騒がしい夜であった。統合失調症の利用者は環境が変わったことから、ここは自分の居場所じゃない、どうしても戻ると大きな声を出した。軽めの認知症の入居者は余震が来るたびに起きて不安を訴えた。「なぜ戻れないのか、なぜ電気がつかないのか」の繰り返される訴えに一晚中職員が傾聴して対応した。一方、徘徊や帰宅願望のあるアルツハイマーの入居者は特に動揺している様子はみられなかった。

◆夜勤体制の確保

地震が発生してから近隣のスタッフで駆けつけてくれた人が5、6名いた。また、8時くらいまで、パート職員も残ってケアにあたった。しかしながら日中の勤務者はかなりの緊張にさらされているだろうということで帰宅させる判断を行った。通常は、夜勤は3人体制であるが。その日は5名とし、加えて看護師、施設長と自分も含めて9名体制で泊まった。

◆明日の食事の打ち合わせ

夜の9時くらいにたまたまラジオで、起こっていることの重大さを認識した。前日のうちに、栄養士、関係職員と話をして明日の朝食の打合せをしておいた。朝と昼が一緒になるかたちだが出せそうだということであった。それ以上のことは職員も考えられない状況だったので、翌朝話そうということで帰宅させた。

【翌日以降】

◆職員シフトの組み直し: 8時間夜勤体制

職員は翌朝勤務表通りきてくれた。リーダークラスの職員で自主的にきてくれた人もいた。その日の午前中にシフトを組みなおした。もともと16時間夜勤だったのを8時間夜勤にしたいというのが現場からでてきた。そうすることで日中の職員、夜勤の職員の確保ができた。託児所に子ども



預けていたほうが安心だということで出勤してくる職員もいた。一方、自分の家も大変なのに、人の世話はできませんという言葉を残し、来なくなってしまった職員もいた。

#### ◆ライフラインのストップと厨房の破損

水も電気もガスもストップしていた。水、電気が復旧したのが4日後くらい。厨房のほうもガス管が曲がっており、爆発の恐れがあるので使えないというのが次の日の午前中にわかった。まきとコンロを使って、炊き出しのような形をとって朝ごはんはだした。朝ごはんは10時くらいになってしまった。全員おかゆになった。水洗いができないため、食品用の消毒液をふりかけるなどして対応した。食器はお皿にラップをまいて出したが、ラップごとを食べてしまうお年寄りもいた。

#### ◆仮設厨房の設置

その後、出入りしていた企業からガスコンロを3基提供してもらい、居室を一つ使用して、仮設厨房を作った。

#### ◆物資の確保における地域からの支援

水に関しては、自衛隊の給水車、行政からの給水車がきたので困らなかった。食材は備蓄があったのと、周辺の方や地元の商店街の人が優先的にもってきてくれたので助けられた。施設ができて19年たっており、その間に培われた地域との関わりを通して、ボランティアで来ていた人などが声をかけてくれた。様々な形で援助してくれた。近隣の施設からも、灯油やストーブをもってきてくれたり、ショートステイを何人か緊急で受け入れてくれたりというヘルプはあった。発電機を家からもってきて、消防団からも発電機をもってきて、吸引関係に対応した。使いすぎて燃料がなくなると、こまるので最小限にとどめるようにした。

#### ◆入居者の生活に必要な物資の把握と生活スペースの確保の手配

今後の入居者の生活に必要なもの、足りないものを紙に書出してもらった。お年寄りの生活スペースをどうわけるとのかについて検討した。認知症の症状別にするか、障害別にするか、これまでの関係性をふまえるのかがいいのか、寝たきりの人を集めるのか、認知症で目が離せない人たちを集めるなど、いくつかの案を検討したが、結局大変だということで、これまでのフロア単位でみたほうが職員もわかっているのだからなんとかかなりそうということになった。こうした方向性が出るまでに1週間くらいかかってしまった。ユニットの1人部屋を急きょ2人部屋にかえて18人ずつのグループにして対応した。残りの50人くらいをデイルームでみていこうということになった。

#### ◆物資の不足と対応

おむつは取引業者ががんばってくれたおかげで納品はとだえなかった。トイレは消毒液を使って感染症にならないよう配慮した。一方、入浴できない状況が続いたためスキントラブルがでてきた。明かりについては懐中電灯でしのいだ。懐中電灯は地震が発生した直後に、水と燃料とあわせて近くのホームセンターに買いにいった確保した。電気が通っても、水漏れしていたために漏電して落ちてしまった。そこで、入居者の家族の人で電気屋の人がブレーカーをつけてくれた。医療面で困ったのは、器具の滅菌ができないことであった。ミルトンにひたしてしのいだ。一番困ったのは、ガソリン不足からスタッフの通勤ができなくなってきたことである。地元のスタンドのはからいで、職員に優先的にガソリンを入れてくれたこともあり、職員もなんとか通勤ができたというのがあ

った。

#### ◆施設の現状に関する家族への説明

このような状態で、続けていいのだろうかという疑問があった。5、6日目くらいに電話がつながってから、家族全員に説明した。ここで、このままでよいか聞いた。家族の人は、できることを協力するからと、全員残る形になった。他の施設は、職員も一緒にきてくれれば預かりますという形であった。ここでみるしかない、がんばろうということになった。

#### ◆BPSD の顕在化

徘徊や異食といった認知症の周辺症状の課題が表面化してきたのが地震発生から2週間くらいたったフロアわけをやりはじめたくらいであった。それまでは、普段たちあがってしまう人も立ち上がらなかつたりと大きな事故もなく、雰囲気としてはなんとかなっている状況が続いていた。地震が起こったことを忘れて利用者がほとんどだった。テレビをみて、大変だったねと他人事で、自分たちのことだとおもっていた人は少なかった。

#### ◆体調を崩す利用者

4月になって体調を崩すお年寄りが出てきた。これまで元気になって歩いていた認知症の人が歩けなくなってしまったりとして、10人くらいが入院した。

4月、5月に突然食事がとれなくなって亡くなったり、入院した人が8名くらいできてきていて、このまま続けていいのかという問いがあった。医師からはお年寄りもストレスを感じているからそれをくみ取るように指示を受けた。しかし、どういうものをストレスとしてみなしていいか職員はわからなかった。4月に入ってから、ある統合失調症のある入居者が全く食事水分をとらず、うつむいてしまっている状況になった。それまでとは違い、1日の流れがわからなくなり、いつ会っても「おはようございます」というようになった。まっすぐに歩けず、横にがれるように歩いて行ってしまった。食欲がなくなり、しまいに起きてこなくなる、トイレもわからなくなる、急に歩けなくなるといった変化が生じた。医師は、原因はわからないがストレス性のものかもしれないということだった。入院しようにもベッドが空かないため、施設でみとるしかないということになった。

#### ◆8月までの長期戦。ケアの方針を見直す

被災後しばらく業者と連絡がとれなかったが、4月の中旬に、ようやく業者から8月上旬に戻れるという話がでた。そこで、今いる環境に慣れてもらう方向にケアを切り替えていこうということにした。「今いるここが住まいですよ」ということにした。そうすることでお年寄りもいきいきとした。昼間に雑務を手伝ってもらい夜寝るようになった。たちあがった人は立てるんだから歩いてもらおうということになり、徘徊する人を徘徊とみなくなった。その人は今でも歩いている。これまでのケアを職員が見直すきっかけになった。現状を行政に相談したらやむをえないでしょう。個室料はとれないでしょうということで、家族に説明した。

#### ◆スタッフへの対応

スタッフのメンタルコントロールに気を使った。目がつりあげて緊張している職員や責任を感じすぎて、休んでといっても大丈夫と言って休まない職員がいた。余震が来るたびに動けなくなる職員もいた。一方、入居者から戦争体験のはなしを聞かされ、職員が支えられた場面もあった。また、

託児所があったので、そこに子どもを預けている職員はできていた。小さい子がお年寄りに遊んでもらう場面も見受けられた。

**【現在の状況】**

**◆記憶の風化**

あの当時の状況について、職員も忘れてきていて、前にできていたことができなくなっているように感じる。不自由な中でも入居者と一緒に生活を組み立てていこうという意識が、介護する側、される側というふうに戻ってきてるように感じている。

**◆備蓄の見直し**

一方、全体として防災の意識は高まった。また、備蓄はどうするのかは見直した。しかし、水の確保については解決できていない。当時ペットボトル30箱くらいあったが、1日もたず、あっというまになくなった。職員の呼び出しの体制についても検討した。衛生管理については、ウェットティッシュを買いこんでおくことになった。

Table1 時間軸ごとの状況と対応（①～⑤の数字は報告に対応）

| 時間軸              | 状況                                                                                                                                                                                                                 | 対応                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 地震発生直後           | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆地震の発生が理解できず、避難後に混乱する認知症の利用者①</li> <li>◆エレベーターが停止した中での避難②</li> <li>◆防災設備の破損⑤</li> <li>◆施設の破損⑤</li> </ul>                                                                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆火災の避難訓練が役立った①</li> <li>◆同一法人内の施設からの支援②</li> <li>◆実習生への対応③</li> <li>◆入居者を1階に避難④</li> <li>◆状況確認と避難場所の判断⑤</li> <li>◆入居者の館外への避難⑤</li> </ul>                                                                                      |
| 避難後              | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆避難先での入居者の不満・不安の発生②</li> <li>◆避難している事情がわからない認知症利用者③</li> <li>◆情報の不足④</li> <li>◆パニック状態の職員⑤</li> </ul>                                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆通所サービスの利用者の送③</li> <li>◆在宅サービス利用者への安否確認と対応③</li> <li>◆当面の避難先の確保③</li> <li>◆当面の避難先での食事、寝る場所の確保③</li> <li>◆夜勤体制の確保④</li> <li>◆宿泊するデイサービス利用者への対応④</li> <li>◆食事への対応④</li> <li>◆破損していない施設への避難⑤</li> <li>◆デイサービス利用者を送迎⑤</li> </ul> |
| 当日の夜             | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆落ち着いていた夜間の状況④</li> <li>◆混乱する利用者で落ち着かない夜⑤</li> </ul>                                                                                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆余震に備えた対応④</li> <li>◆とりあえず用意できるもので食事、寝る場所を用意⑤</li> <li>◆夜勤体制の確保⑤</li> <li>◆明日の食事の打ち合わせ⑤</li> </ul>                                                                                                                            |
| 翌日               | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆施設内の片づけ作業へのマンパワーの振り分け①</li> <li>◆職員のシフト管理・夜勤者の確保①</li> <li>◆地震のことを忘れていた認知症利用者④</li> <li>◆ライフラインのストップと厨房の破損⑤</li> </ul>                                                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆建物の被災状況の確認と避難先の移動③</li> <li>◆職員シフトの組み直し：8時間夜勤体制⑤</li> <li>◆仮設厨房の設置⑤</li> </ul>                                                                                                                                               |
| 地震発生から1週間から2週間程度 | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆避難先での混乱①</li> <li>◆電池の不足、他地域からの飲み水の確保②</li> <li>◆葉損した施設でのトラブル③</li> <li>◆被災した他の施設や高齢者からの入所の申し出③</li> <li>◆利用者の体調の崩れ③</li> <li>◆とろみ剤などの物資の不足④</li> <li>◆近隣からの支援④</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆飲料水とガソリンの確保③</li> <li>◆在宅サービスの早期再開③</li> <li>◆職員への対応③</li> <li>◆在宅サービス利用者の安否確認と受け入れ④</li> <li>◆在宅サービスの再開④</li> <li>◆家族への説明④</li> <li>◆入居者の生活に必要な物資の把握と生活スペースの確保の手配⑤</li> </ul>                                               |

|               |                                                                                                                                                         |                                                                                                                                       |
|---------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|               | <p>◆新規ショートステイの増加、被災者の受け入れに伴う混乱④</p> <p>◆ガソリンの不足④</p> <p>◆その場その場の判断・意思決定を求められる④</p> <p>◆介護優先となるケア④</p> <p>◆福島県からの被災者の受け入れ④</p> <p>◆物資の確保における地域からの支援⑤</p> | <p>◆物資の不足と対応⑤</p> <p>◆施設の現状に関する家族への説明⑤</p>                                                                                            |
| 1 か月後<br>程度まで | <p>◆排せつケアの物資の不足①</p> <p>◆精神的に不安を訴える入居者②</p> <p>◆復旧までのマンパワーの必要性②</p> <p>◆BPSD の顕在化⑤</p> <p>◆体調を崩す利用者⑤</p>                                                | <p>◆避難先での生活の再構築に向けた取り組みの開始①</p> <p>◆医療ニーズへの対応①</p> <p>◆ボランティアへの対応①</p> <p>◆施設復旧後の生活の再構築①</p> <p>◆避難先でのアメニティの工夫③</p> <p>◆スタッフへの対応⑤</p> |

Table2 震災後に行った準備

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>◆力仕事ができる職員①</p> <p>◆備蓄・マニュアルの見直し</p> <p>・防災セット、人数分の毛布とか使えるもののセット。グループホームなのでホーム自体のストックがなかった。懐中電灯の単 1 電池はいっぱい買っておいたほうがよい。マニュアル、避難経路などを整備しておく必要がある。夜間の場合どうしようと考えていた。一緒になっていたのですぐに外にいったが、部屋にいたら逃げられなかったのではないかな。①</p> <p>・使い捨ての容器を 1 から 2 週間分、懐中電灯、ランタンみたいなものを用意した。計画停電のため夏場でエアコン使えない状況を考えて大量のアイスノンを購入した。マニュアルに必要なこととしては、どこに避難するかを決めておくこと。電気と水の確保を明確にしておくことや避難の方法や通路の確認することが必要だと感じた。認知症の人に対しては、パーティションなどで区切るような対応ができることが必要だと感じた。②</p> <p>・水の確保については解決できていない。当時ペットボトル 30 箱くらいあったが、1 日もたず、あっというまになくなった。職員の呼び出しの体制についても検討した。衛生管理については、ウェットティッシュを買いこんでおくことになった。⑤</p> <p>◆地震の避難訓練の必要性②</p> <p>◆物品の確保のための処置③</p> <p>取引のある事業所については、今後今回のような事態が生じた場合に、取り扱っている物品については連絡がとれなくなっても搬入してもらうという契約を結んだ。</p> <p>◆在宅利用者のための対応マニュアルの整備③</p> <p>各部署がどの程度まで在宅の利用者の安否確認をするのかのマニュアルを作成した。居宅介護支援事業所をベースにして、それ以外の部分を通所介護やホームヘルパーがフォローするようなものを作成した。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

家族が一緒にいるかどうか、連絡先がどこかなどの情報を整理し、災害が発生したら、まず落ちそうなものを下に降ろすとか、電話のわきに緊急先の連絡先を置くとか、冷蔵庫の中身を確認し、食糧の残量を確認するとか、チェック項目を作って、確認する。そこまでやって家族に連絡し、連絡が取れたら鍵をあけて帰るか、閉めて帰るかを事前に確認しておいて対応するようにした。そこまでしないと帰れない。

今回の震災に伴うマニュアルの変更は多かった。例えば、送迎中の対応や、外出レクなどもそういうリスクを入れたものにかえた。信号がない場合の走行の仕方とか。どこに逃げるのかということを確認するとか。避難所につれていけるかどうかも家族に確認しなければ判断できない。

#### ◆職員間での伝言の訓練、拘束力の課題③

毎月携帯の伝言板の訓練をしている。家族がいる職員からは、もし自宅にいて、地震が来たら、そのまま小さい子をおいていけるかどうか自信がないといわれた。主任以上は絶対来いというような決まりは作れなかった。

#### ◆ガソリン補充のルールの修正③

ガソリンが補充できたら安心できた部分があるので、それまでは、半分以下になったら給油するというルールを作っていたが、今では3分の1減ったら給油することにした。

#### ◆防災委員会の設置と備蓄の見直し④

震災後、防災委員会を作った。備蓄を見直し、食料品だけでなく毛布や水、ランタン、発電機を買った。施設長、副施設長、事務員、介護職員がユニット、各庁から1名ずつの4名。5月から始動した。これからの避難訓練は地震も想定してということになった。いままで火事を想定したものはあったが、地震を想定したものはなかった。3日間を備蓄でしのいだ後も、流通が途絶えている場合を想定してどのくらい何を優先的に限られたスペースで蓄えていけばいいかを検討している。明りになるもの。ラジオが必要。自家発電の発電機。照明みたいなものがあるといいねということで、施設で買った。

#### ◆避難経路、職員への連絡方法の見直し④

避難場所も、正面以外に、横の職員駐車場にもにげられるように段差を解消し、スロープにした。地震発生当初、通話ができないがメールはつながったため、職員の緊急連絡もメールでの連絡が考えてメールアドレスをきいた。

#### ◆近隣住民の避難所として機能④

これからの課題なのだが、近隣からの飛び込みの避難はなかった。普段から何かあればどうぞというのが浸透していなかった。

## IV 考察

### 1) 地震発生からの状況

#### ①避難した認知症の利用者への対応

認知症の利用者は、地震で揺れている最中よりも避難した先において混乱する人がいたことが明らかになった。避難した後に、なぜ、じっとしていなければならないのか、なぜ自分の部屋に戻れないのかといった不安や混乱状態に陥る認知症者へのケアが必要となっていた。施設が被災し、施設内に戻れない場合は別の建物に避難することになる。その避難先において徘徊等の BPSD が増悪する場合や、ストレス等から体調を崩す場合もあったことがわかった。さらに、その避難先での生活がある程度長期にわたり、復旧したもとの施設に戻る際にも、同様の変化を経験しなければならず、それに対するケアが必要であった。具体的には、居室の位置や、生活に必要なトイレや洗面所、食堂、浴室の場所、さらに居室からそれらの場所への移動距離、入浴施設などの変化による、認知症者は不安や混乱状態へのケアや、できていた行為ができなくなってしまうことについてのケアの必要性が示唆された。一方で、避難先の生活が長期間にわたることが明らかな場合は、むしろ避難先での生活を中心に、ケアのあり方を組みなおすことで認知症者の生活が活性化する状況があった。

#### ②物資の不足

地震発生後、物資、特にガソリンが不足した状況にあった。また、リハビリパンツ、尿とりパットなど排泄ケアに関わるものや、生鮮食品、とろみ剤といった食事に関するものが不足していた。また、ライフラインが早期に復旧した場合でも、物流がストップしたり、滞る状況が長期間継続していた。

#### ③被災したスタッフへの対応を考えながらの人員の確保

避難先での生活環境の変化による認知症の人に混乱や不安への対処のため、いつもよりも手厚いケアの体制で臨む必要が生じるなか、職員の確保やシフト作りに困難を抱える状況があった。被災地では、職員やその家族もまた被災者として、手一杯の状況置かれてしまうこと、要介護者を抱えていたり、小さな子どもを抱えていた場合、福祉サービスがストップしてしまう中出勤できない、ガソリンや電力、食料、備品等の不足によってサービスの提供がストップしていて出勤できないといった事態が起こることが示唆された。

地震発生後からしばらくの間、被災した施設の場合では、居室等の施設内の片づけや、物品等の避難先への移動など、通常の介護以上の仕事が増える状況があった。マンパワー不足に対応できない場合には同一法人内での職員のやりくりや、ボランティアを活用している状況があった。

### 2) 課題の解決に向けての取り組み

物資の不足については、一つの施設で備蓄できる量は限られており、十分な備蓄を準備していたとしても、物流の停滞が長引けばいずれ不足する事態は免れない。大きな法人であれば、法

人内の施設でやりくりをしながら乗り切ることもできるかもしれないが、そうでない場合の対応方法を検討する必要性が示唆された。特にガソリンの不足により、在宅サービスの実施や職員の通勤、入居者の通院などに大きな打撃を与えていたことが明らかになった。この問題は一施設の取り組みでの解決は難しい部分があり、域内で、あるいはもっと広域のレベルで、物資の不足に対応するような方策を行政も含めて検討していくことが求められると考えられる。

職員の確保については、ガソリン確保のための配慮や、託児所の設置、職員の家族を受け入れるなど柔軟な体制を組む必要性が示唆された。

マンパワー不足への対応としては、認知症ケアの特性をふまえれば、やはり直接的なケアは従来からのスタッフが行うことが望ましいので、それ以外の部分の仕事をボランティアや派遣された介護職員を活用していくような采配ができるようにするというのも対処方法の一つとして考えることができる。そのために、普段より、防災対策の一環としてそうした状況を考え、何をもともといた職員で行うのか、何をそうでないものに頼むのか、誰がその采配をふるうのかについておおまかに決めておくことも検討が必要である。



### 第 3 章 認知症介護指導者の被災地支援の実態 に関する調査

## I 調査目的

認知症介護指導者の被災者及び被災した施設等への支援活動に関するアンケート調査を実施し、今回の東日本大震災における支援活動の実態や課題、被災地の認知症の人やそのご家族の状況等について把握する。またそのことを通じて、被災地支援のあり方や、認知症介護指導者の被災地支援のあり方について検討することを目的とする。

## II 調査方法

### 1) 調査方法

アンケート用紙の配布、記載、回収及び電子媒体での記載、電子メール回収

### 2) 調査時期

平成24年1月10日～2月21日

### 3) 調査対象

平成24年1月時点で、認知症介護指導者研修を修了した者

## III 調査結果

### 1) 回収率

アンケート用紙を 1,434 人に配布し、522 票（アンケート用紙の回収数：499 票、電子媒体の回収数 23 票）が回収された。回収率は 36.4%だった。

### 2) 回答者の性別

回答者の性別は、女性が 310 人(59.4%)と 6 割弱を占めた。

Table 1 回答者の性別 (N=522)

| SA |     | 人数  | %     |
|----|-----|-----|-------|
| 1  | 男 性 | 200 | 38.3% |
| 2  | 女 性 | 310 | 59.4% |
| 3  | 無回答 | 12  | 2.3%  |

### 3) 回答者の年齢

回答者の年代は 50 歳代が 166 人 (31.8%) と最も多く、30 歳代が 131 人 (25.1%) と続いた。

Table 2 回答者の年代 (N=522)

| SA |       | 人数  | %     |
|----|-------|-----|-------|
| 1  | 20歳代  | 5   | 1.0%  |
| 2  | 30歳代  | 131 | 25.1% |
| 3  | 40歳代  | 129 | 24.7% |
| 4  | 50歳代  | 166 | 31.8% |
| 5  | 60歳以上 | 72  | 13.8% |
| 6  | 無回答   | 19  | 3.6%  |

### 4) 回答者の職場の所在地

回答者の職場の所在地を都道府県別で尋ねたところ、回答者は北海道が最も多く、30 人 (5.7%) だった。次いで、大阪府で 29 人 (5.4%) だった。

Table3 職場の所在地 (都道府県) (N=522)

| SA |      | 人数 | %    |
|----|------|----|------|
| 1  | 北海道  | 30 | 5.7% |
| 2  | 青森県  | 10 | 1.9% |
| 3  | 岩手県  | 9  | 1.7% |
| 4  | 宮城県  | 6  | 1.1% |
| 5  | 秋田県  | 11 | 2.1% |
| 6  | 山形県  | 6  | 1.1% |
| 7  | 福島県  | 11 | 2.1% |
| 8  | 茨城県  | 10 | 1.9% |
| 9  | 栃木県  | 8  | 1.5% |
| 10 | 群馬県  | 11 | 2.1% |
| 11 | 埼玉県  | 3  | 0.6% |
| 12 | 千葉県  | 16 | 3.1% |
| 13 | 東京都  | 17 | 3.3% |
| 14 | 神奈川県 | 12 | 2.3% |
| 15 | 新潟県  | 14 | 2.7% |
| 16 | 富山県  | 5  | 1.0% |

| SA |      | 人数 | %    |
|----|------|----|------|
| 17 | 石川県  | 4  | 0.8% |
| 18 | 福井県  | 8  | 1.5% |
| 19 | 山梨県  | 7  | 1.3% |
| 20 | 長野県  | 8  | 1.5% |
| 21 | 岐阜県  | 10 | 1.9% |
| 22 | 静岡県  | 7  | 1.3% |
| 23 | 愛知県  | 23 | 4.4% |
| 24 | 三重県  | 12 | 2.3% |
| 25 | 滋賀県  | 7  | 1.3% |
| 26 | 京都府  | 6  | 1.1% |
| 27 | 大阪府  | 28 | 5.4% |
| 28 | 兵庫県  | 11 | 2.1% |
| 29 | 奈良県  | 9  | 1.7% |
| 30 | 和歌山県 | 6  | 1.1% |
| 31 | 鳥取県  | 9  | 1.7% |
| 32 | 島根県  | 7  | 1.3% |
| 33 | 岡山県  | 8  | 1.5% |
| 34 | 広島県  | 26 | 5.0% |
| 35 | 山口県  | 12 | 2.3% |
| 36 | 徳島県  | 5  | 1.0% |
| 37 | 香川県  | 5  | 1.0% |
| 38 | 愛媛県  | 11 | 2.1% |
| 39 | 高知県  | 5  | 1.0% |
| 40 | 福岡県  | 26 | 5.0% |
| 41 | 佐賀県  | 9  | 1.7% |
| 42 | 長崎県  | 8  | 1.5% |
| 43 | 熊本県  | 5  | 1.0% |
| 44 | 大分県  | 6  | 1.1% |
| 45 | 宮崎県  | 12 | 2.3% |

| SA |      | 人数 | %    |
|----|------|----|------|
| 46 | 鹿児島県 | 9  | 1.7% |
| 47 | 沖縄県  | 8  | 1.5% |
| 48 | 無回答  | 26 | 5.0% |

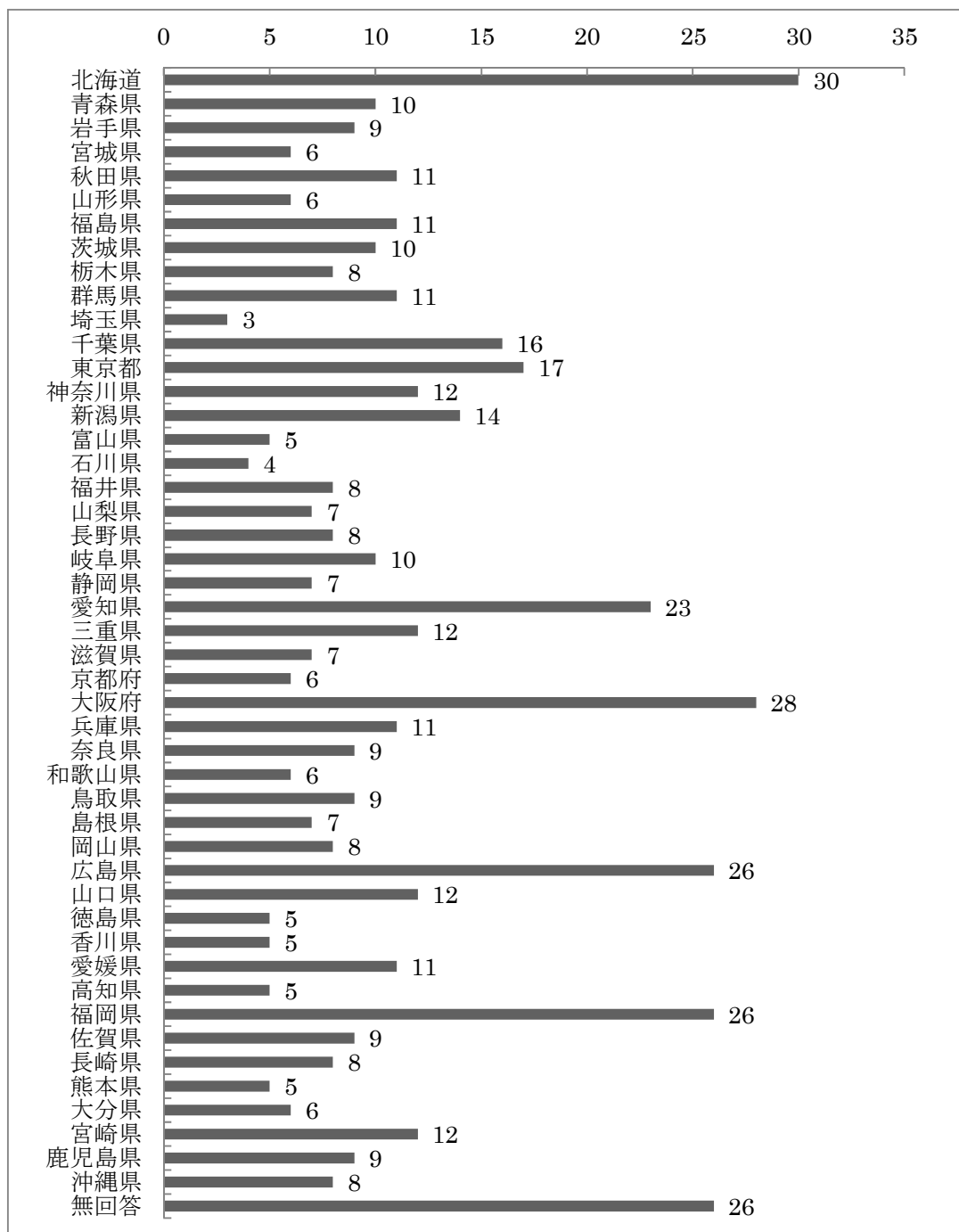


Figure1 職場の所在地(都道府県)(N=522)

## 5)職場での職位

回答者の職場での職位は、経営・管理職が 237 人(45.4%)と最も多かった。次いで監督署が 178 人(34.1%)だった。

Table4 職場での職位 (N=522)

| SA |        | 人数  | %     |
|----|--------|-----|-------|
| 1  | 経営・管理職 | 237 | 45.4% |
| 2  | 監督職    | 178 | 34.1% |
| 3  | 一般職員   | 57  | 10.9% |
| 4  | その他    | 28  | 5.4%  |
| 5  | 無回答    | 22  | 4.2%  |

その他:看護主任. 管理者. 管理職ではあるが、相談員業務.行政職員、主任.現在、看護学生及び夜勤バイト.研修・広報責任者.コーディネーター.事務.職能団体にて活動.新施設開設準備室.スーパーバイザー.専門学校、教務主任.専門学校で福祉に携わる人材育成.退職.代表社員.無職法人内事業の開発、サービスマネジメント、スタッフ教育.保健師.自営(介護保険外).地域包括支援センター センター長

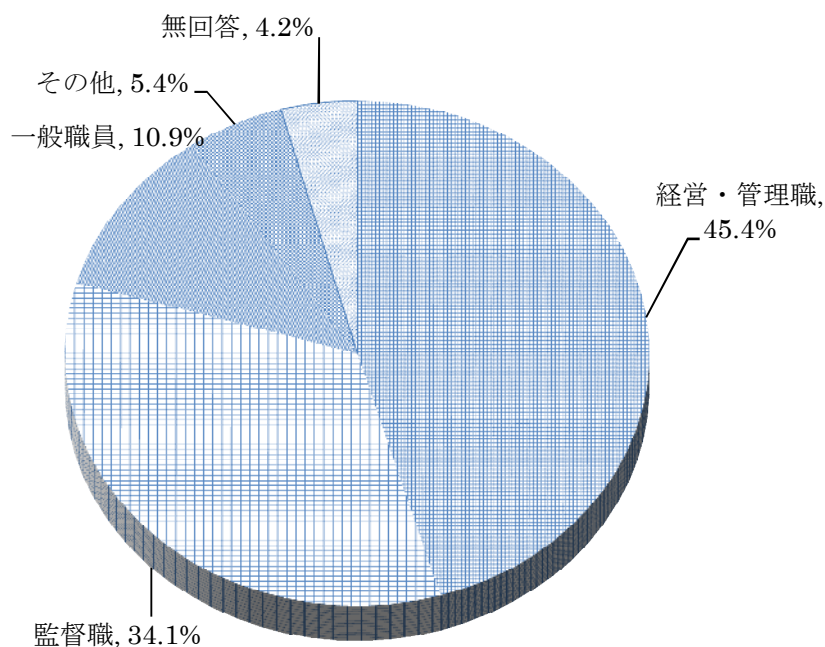


Figure2 職場での職位 (N=522)

## 6) 職場での職種

回答者の職場での職種は、施設長・理事長等の経営・管理職が 227 人(43.5%)と最も多かった。次いで、介護支援専門員が 192 人(36.8%)だった。

Table5 職場での職種(N=522)

| MA |                 | 人数  | %     |
|----|-----------------|-----|-------|
| 1  | 相談員             | 108 | 20.7% |
| 2  | 介護支援専門員         | 192 | 36.8% |
| 3  | 介護職             | 115 | 22.0% |
| 4  | 看護職             | 77  | 14.8% |
| 5  | 施設長・理事長等の経営・管理職 | 227 | 43.5% |
| 6  | その他             | 60  | 11.5% |
| 7  | 無回答             | 21  | 4.0%  |

その他:OT.PT.介護士長.介護長.介護福祉士育成専門学校.外部評価調査員.講師.係長.看護、介護部門責任者.管理者.教育(介護・看護学生).教育担当.教育部長.行政職.グループホーム管理者.グループホーム全般管理.ケアサービス課長.研修担当.コーディネーター.在宅部門次長.雑用.支援員.施設主任.事務.事務長.主任ケアマネ.新事業準備.生活支援事業部長.専任教員.総括.退職.昼食作りの手のない時.統括.統括部長.特養・有料・グループホーム、支配人(管理者).なし.認知症介護研修室課長.部長.法人事務員.法人内の研修・広報に関する責任者.ホーム長.保健師.理学療法.理学療法士.事務.主任介護支援専門員.法人の管理職.防災委員長

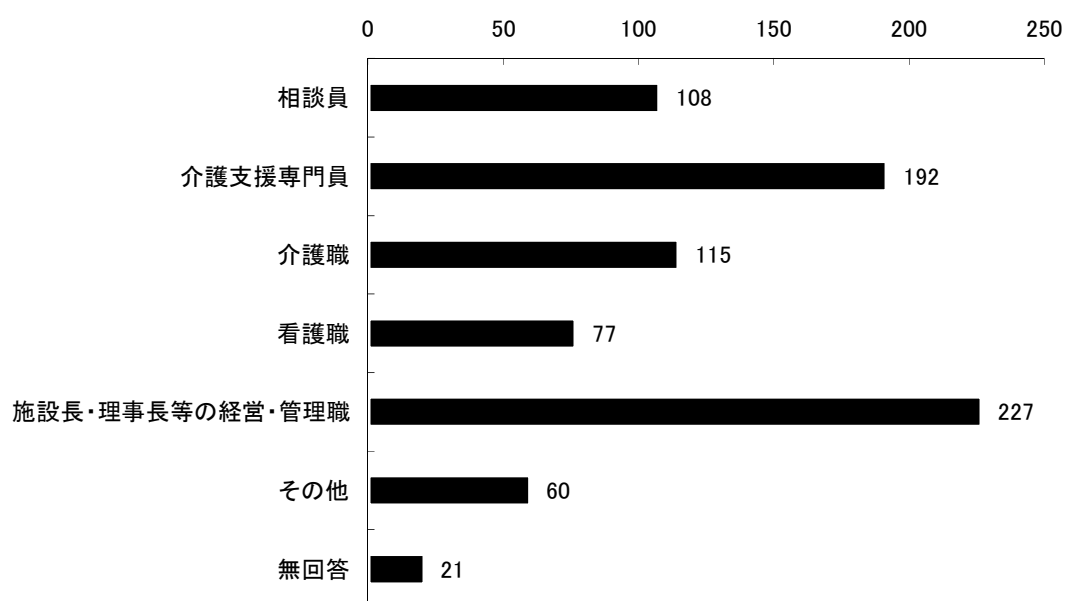


Figure3 職場での職種(N=522)

#### 7)現在の職場での勤務年数

現在の職場での勤務年数を尋ねた結果、10 年以上が 231 人(44.3%)と最も多かった。次いで、5 年以上 10 年未満が 134 人(25.7%)だった。

Table6 現在の職場での勤務年数(N=522)

| SA |           | 人数  | %     |
|----|-----------|-----|-------|
| 1  | 1年未満      | 20  | 3.8%  |
| 2  | 1年以上3年未満  | 51  | 9.8%  |
| 3  | 3年以上5年未満  | 59  | 11.3% |
| 4  | 5年以上10年未満 | 134 | 25.7% |
| 5  | 10年以上     | 231 | 44.3% |
| 6  | 無回答       | 27  | 5.2%  |

#### 8)高齢者ケアの実務経験年数

高齢者ケアの実務経験年数を尋ねた結果、10 年以上が 440 人(84.3%)と最も多く、次いで 5 年以上 10 年未満が 53 人(10.2%)だった。

Table7 高齢者ケアの実務経験年数(N=522)

| SA |           | 人数  | %     |
|----|-----------|-----|-------|
| 1  | 1年未満      | 1   | 0.2%  |
| 2  | 1年以上3年未満  | 0   | 0.0%  |
| 3  | 3年以上5年未満  | 8   | 1.5%  |
| 4  | 5年以上10年未満 | 53  | 10.2% |
| 5  | 10年以上     | 440 | 84.3% |
| 6  | 無回答       | 20  | 3.8%  |



## 8)取得資格

取得資格について、複数回答で尋ねた結果、介護支援専門員が最も多く、398 人(76.2%)だった。次いで、介護福祉士が 318 人(60.9%)だった。

Table8 取得資格(N=522)

| MA |            | 人数  | %     |
|----|------------|-----|-------|
| 1  | 介護福祉士      | 318 | 60.9% |
| 2  | 社会福祉士      | 109 | 20.9% |
| 3  | 看護師        | 99  | 19.0% |
| 4  | 保健師        | 4   | 0.8%  |
| 5  | 介護支援専門員    | 398 | 76.2% |
| 6  | 社会福祉主事任用資格 | 172 | 33.0% |
| 7  | ホームヘルパー    | 83  | 15.9% |
| 8  | その他        | 100 | 19.2% |
| 9  | 無回答        | 14  | 2.7%  |

その他:DCH.OT.PSW.PT.安全衛生管理者.栄養士.看護教諭.救急救命士.ケア専門士.ケア専門士、医療介護福祉士.健康運動指導士.作業療法士.社会福祉主事.准看護師.助産師.鍼灸師、調理師.精神保健福祉士.OTA.認定心理士.保育士.第 2 種衛生管理者.中高社会科教諭.日本介護福祉会指導者養成講習(講師).認知症介護指導者.認証ケア専門士.認知症ケア上級専門士福祉住環境コーディネーター2 級.幼稚園教諭.保育.幼免 2 種.養護教諭 1 級.養護教諭 2 種理学療法士.教員免許状

## 9)所属

回答者の所属について尋ねた。結果、介護老人福祉施設が 139 人(26.6%)と最も多かった。次いで、認知症対応型共同生活介護事業所が 121 人(23.2%)だった。

Table9 所属(N=522)

| SA |                 | 人数  | %     |
|----|-----------------|-----|-------|
| 1  | 認知症対応型共同生活介護事業所 | 121 | 23.2% |
| 2  | 小規模多機能型居宅介護事業所  | 22  | 4.2%  |
| 3  | 介護老人福祉施設        | 139 | 26.6% |
| 4  | 介護老人保健施設        | 68  | 13.0% |
| 5  | 病院・医院・診療所       | 16  | 3.1%  |
| 6  | 特定施設入居者生活介護事業所  | 18  | 3.4%  |
| 7  | 居宅介護支援事業所       | 23  | 4.4%  |
| 8  | 地域包括支援センター      | 10  | 1.9%  |
| 9  | 通所介護事業所         | 30  | 5.7%  |
| 10 | その他             | 56  | 10.7% |
| 11 | 無回答             | 19  | 3.6%  |

その他:地域密着型サービス外部評価員.SS、DS、GH 9 施設統括.あたご研究所.介護実習普及センター.介護福祉士職能団体.介護福祉士専門学校.教育研修.ケアハウス.研修機関.研修センター.県保福祉事務所.在宅複合型施設(通所介護・短期入所・居宅介護支援).退職.

社会福祉協議会.住宅型有料老人ホーム.住宅型老人ホーム.職能団体.専門学校.短期入所.短期入所生活介護.知的障害児施設.中核地域生活支援センター.通所リハビリ.統括.特養ではあるが、高齢部門の統括責任者.無職.認知症対応型通所介護.認知症対応型通所介護事業所

認知症通所介護.広島県健康福祉局、高齢者支援課認知症介護支援グループ.保育園、障害者相談支援事業所.法人全体を管理しているので所属はありません.法人内施設の統括をする部署内.法人本部.法人本部(社会福祉法人).訪問介護事業所.訪問看護ステーション.訪問看護ステーション所長.ホームヘルパーステーション、管理者兼務.保健センター。養護老人ホーム.自営.上記事業書があり、全てに関わっている(高専賃も)

#### 10) 支援活動の有無

東日本大震災において被災した方や施設等に対して何らかの支援をおこなったかどうか、被災地に行って支援をおこなった、被災地に行かず支援をおこなった、両方おこなった、おこなっていない選択肢で尋ねた。

結果、被災地に行かず支援をおこなった、337 人(64.4%)と最も多かった。次いで両方おこなったが 54 人(10.3%)だった。

Table10 支援活動の有無(N=522)

| SA |                  | 人数  | %     |
|----|------------------|-----|-------|
| 1  | 被災地に行って支援をおこなった  | 20  | 3.8%  |
| 2  | 被災地には行かず支援をおこなった | 337 | 64.6% |
| 3  | 両方おこなった          | 54  | 10.3% |
| 4  | おこなっていない         | 111 | 21.3% |
| 5  | 無回答              | 0   | 0.0%  |

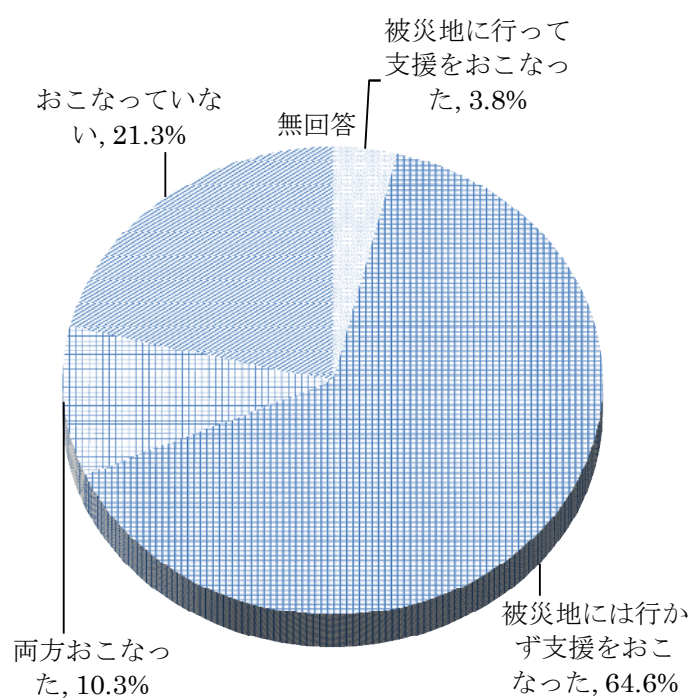


Figure4 支援活動の有無

#### 11)被災地での支援活動の期間・経緯・地域・支援内容

「被災地に行って支援をおこなった」「両方おこなった」と回答した者に支援に行った期間・支援をおこなうに至った経緯、地域・支援内容について自由記述で尋ねた。

支援先の地域としては宮城県が最も多く、69人(60.5%)だった。次いで岩手県が24人(21.1%)だった(Table10)。宮城県に対して支援を行ったものでは、北海道と宮城県が最も多く共に9人(13.0%)だった。次いで山形県の6人(8.7%)だった(Table11)。岩手県に対して支援を行ったものの住所地は青森県が最も多く4人(16.7%)だった(Table12)。福島県に対して支援を行ったものは、福島県が最も多く、4人(33.3%)だった(Table13)。

Table10 支援先の地域

| SA |           | 人数  | %     |
|----|-----------|-----|-------|
| 1  | 岩手県       | 24  | 21.1% |
| 2  | 宮城県       | 69  | 60.5% |
| 3  | 福島県       | 12  | 10.5% |
| 4  | 栃木県       | 1   | 0.9%  |
| 5  | 千葉県       | 2   | 1.8%  |
| 6  | 長野県       | 3   | 2.6%  |
| 7  | その他(地域不明) | 3   | 2.6%  |
| 合計 |           | 114 | 100%  |

Table11 宮城県に入った支援者の地域

| SA |      | 人数 | %     |
|----|------|----|-------|
| 1  | 北海道  | 9  | 13.0% |
| 2  | 宮城県  | 9  | 13.0% |
| 3  | 山形県  | 6  | 8.7%  |
| 4  | 群馬県  | 6  | 8.7%  |
| 5  | 東京都  | 6  | 8.7%  |
| 6  | 愛媛県  | 6  | 8.7%  |
| 7  | 新潟県  | 3  | 4.3%  |
| 8  | 広島県  | 3  | 4.3%  |
| 9  | 青森県  | 2  | 2.9%  |
| 10 | 秋田県  | 2  | 2.9%  |
| 11 | 神奈川県 | 2  | 2.9%  |
| 12 | 長崎県  | 2  | 2.9%  |
| 13 | 福島県  | 1  | 1.4%  |
| 14 | 栃木県  | 1  | 1.4%  |
| 15 | 千葉県  | 1  | 1.4%  |
| 16 | 石川県  | 1  | 1.4%  |
| 17 | 岐阜県  | 1  | 1.4%  |
| 18 | 三重県  | 1  | 1.4%  |
| 19 | 大阪府  | 1  | 1.4%  |
| 20 | 鳥取県  | 1  | 1.4%  |
| 21 | 福岡県  | 1  | 1.4%  |
| 22 | 佐賀県  | 1  | 1.4%  |
| 23 | 無回答  | 3  | 4.3%  |
| 合計 |      | 69 | 100%  |

Table12 岩手県に入った支援者の地域

| SA |      | 人数 | %     |
|----|------|----|-------|
| 1  | 青森県  | 4  | 16.7% |
| 2  | 岩手県  | 3  | 12.5% |
| 3  | 東京都  | 2  | 8.3%  |
| 4  | 新潟県  | 2  | 8.3%  |
| 5  | 大阪府  | 2  | 8.3%  |
| 6  | 秋田県  | 1  | 4.2%  |
| 7  | 山形県  | 1  | 4.2%  |
| 8  | 神奈川県 | 1  | 4.2%  |
| 9  | 静岡県  | 1  | 4.2%  |
| 10 | 広島県  | 1  | 4.2%  |
| 11 | 香川県  | 1  | 4.2%  |
| 12 | 愛媛県  | 1  | 4.2%  |
| 13 | 佐賀県  | 1  | 4.2%  |
| 14 | 無回答  | 3  | 12.5% |
| 合計 |      | 24 | 100%  |

Table13 福島県に入った支援者の地域

| SA |     | 人数 | %     |
|----|-----|----|-------|
| 1  | 福島県 | 4  | 33.3% |
| 2  | 茨城県 | 2  | 16.7% |
| 3  | 山形県 | 1  | 8.3%  |
| 4  | 東京都 | 1  | 8.3%  |
| 5  | 新潟県 | 1  | 8.3%  |
| 6  | 宮城県 | 1  | 8.3%  |
| 7  | 無回答 | 2  | 16.7% |
| 合計 |     | 12 | 100%  |

## 12) 被災地での支援活動の期間・経緯・地域・支援内容

「被災地に行って支援をおこなった」「両方おこなった」と回答した者に支援に行った期間・支援をおこなうに至った経緯、地域・支援内容について自由記述で尋ねた。

そのうち、支援開始の記載のあった 108 事例を分析対象とした。地震発生からの経過に沿って、支援内容と感じたことについて整理を行った。期間の区分けは、地震発生から、「1 か月経過まで」

「1 か月から 3 カ月経過の間」「3カ月～6 カ月経過の間」「6か月経過以降」とした。

① 地震発生から 1 か月経過の間まで(51 件)

支援内容

◆物資の収集・提供

灯油等の物資を届けた・物資を届けた・医薬品の提供・法人内部より支援物資の収集を行った・支援物資、養護金、被災老人の受け入れ・被災が必要な物資を提供。自動車、PC、女性下着、文房具など・就労支援 B 型施設より毎週、豆腐、納豆を購入・リンゴ、ジュース等購入。大阪市内、尼崎市の特養、社協に紹介・支援物資(介護用品、カバン、灯油、食材料等)・支援物資(燃料、介護用品、食料等)・職場の後援組織の方から、物資の提供を受け届ける。・紙オムツの提供、水の提供・同期の指導者への支援の為、はげましと交通手段(車・自転車・タンク)その他の者を届けた

◆物資の仕分け・配給

・支援物資の配給・食料・支援物資の整理と配給

◆被災者の移動支援・「支援物資の整理や配給」「名取文化センターでのお手伝い」

・高齢者(独居)の方々を各地域の避難所に移動支援・法人で沿岸施設へ職員を派遣。5 人のチームを 1 週間交替で派遣。私は送迎と物資調達。・福島県側で移動手段が準備できず、福祉車両(22 台)で被災要介護高齢者を迎えに行った。

◆介護、生活の支援

・高齢者介助、物資支援・「高齢者の介助」「炊き出し」・避難所にて整容支援、避難困難者の支援「老人ホームの利用者等支援」

◆救急の支援

・空港で救急対応

◆状況の確認

・震災後すぐに状況確認を行う

◆被災者の受け入れの支援避難者の受け入れ「要援護者の介護」を仙台市、南三陸町から延べ人数で 200 人を受け入れた

・被災介護老人保健施設(原発避難区域)の入居者等 117 名を法人施設にて受入れ・

◆瓦礫等の撤去

・倒れた塀の撤去作業

◆ボランティアの受け入れ体制の整備

・宿泊の手配・帰宅への交通手段の確認

◆募金活動

・募金活動をおこなった

◆支援提供のリレー

・全国の関連施設より(加盟組織)支援提供のリレーを行い、届けていった。

当施設で高齢者介助

◆ニーズ調査の支援

- ・避難所介護ニーズ調査、避難所介護ニーズ調査従事、ボランティアのコーディネート、高齢者の実態把握調査
- ・避難先となった施設での高齢者介護、支援物資の輸送・避難所での要介護高齢者への介助・避難所での高齢者介助・「避難所にて整容支援、避難困難者の支援」「老人ホームの利用者等支援」

◆被災家家屋の泥だし

- ・「家屋の泥出し」「いちご農家の営農作業」

感じたこと

◆移動手段の困難さ

- ・認知症指導者としての支援活動ではありませんでした。遠方から車で駆けつけるには無理があると思われました。

◆ガソリンがない

- ・ガソリンが手に入らない時期だったので、早い時間からガソリンスタンドに並び、ガソリンを入れて、あらゆる被災地へ物資を届けました。互いの支えが命をつなぐことを再確認しました。
- ・物は集まっても窓口がなく、ガソリンがないため、動きたくても動けない状況が続いた。

◆物資の不足

- ・雪もあり寒く、水、暖かくなるものが不足であった（高齢者は動けない）
- 物資は時間が経つにつれ欲しいものが変化すること。避難所内もコミュニケーションがとれないでいること。

- ・水、食料などが不足しており、物資が入るまで大変だった。地域との連携が大事だと感じた。

◆役割分担・システムの必要性

- ・関係機関（行政、地域も含め）の前もっての役割分担が必要と思います。同じ場所で重なってしまったり、抜けてしまう方もいました。
- ・現場で指示を出す人がいた日は、短時間で整理ができた。・指示する立場の人と、被災者が何を必要としているかという情報を集めることが大切だと感じた。・支援物資は一度にたくさん届くため、それを置くための広い場所も必要であると感じた。
- ・自力避難できない介護度4・5の重度者が多く、福島―新潟間を 6 時間かけての移動に不安材料は多々あったが、行政を含めてのバックアップと、職員48名の連携にて無事受入れを達成した。組織の判断力・行動力と職員間の連携が円滑であり、新潟での被災経験が活かされたものと考え

◆個人的な支援の限界性

- ・直後の活動であったため、全ての事が混乱の状態であった。その中で、現場スタッフと一緒に活動が出来た事で感じた事は、個人では限界であり、支援もスムーズにいかない。

震災直後でもあり、多数の人が文化センターにいた。トイレなどに行くこともままならない状態で



皆、気を使いながら生活を送っていた。

・知り合いのグループホームであったため、何が必要か聞いて、物品を届けたが、個人的な支援には限界があると感じた。しかし、少しでも役立つのであれば、今後も機会があれば行いたいと思った。

◆被災者の劣悪な生活状況

・プライバシーの確保がない(男女関係なく大部屋にいて、カーテンなどのしきりもない状態)、安心できない、落ちつけない雰囲気だった。

震災直後の物資不足でガソリンも不足していて、とりあえずの物資を届けるのがやっとでした。

・水道はまだ復旧せず、入浴が出来ない状態であった。4/18 になり、歩行出来る人は、自衛隊設営の入浴場ヘリフト浴の方達は、山側の施設にもらい湯へと開始になったが、その後すぐにノロが発生し、中止になったと聞いたので、衛生面の対応が早急に必要と感じた。

◆人手不足

・避難所の規模によって医療、食事等の支援に差が大きくあった。要援護者については、台帳など消失したため、民生委員、支援センターなどが足をつかって訪問し、避難をさせていたが、すべてに人手が不足。

・施設も相当の被害があり、家具や電化製品はほとんど倒れてしまった。建物の亀裂や敷地内の陥没等があり、自宅にも戻れなく、人手が欲しかった。

情報の入手の困難さ。

◆がれきと呼んでは申し訳ない

・①「がれき」と呼んでは申し訳ない。②忘れてはならない

◆連携の大切さを痛感

・ライフラインが寸断した中での支援だったので法人内だけでは賄えず、全国各地から応援を頂くなど連携の大切さを痛感した。

◆ボランティア活動で現場を混乱

・情報不足と誤った情報による混乱した状態で、ボランティア活動がむしろ混乱を拡大させるような事もあった。

②地震発生後 1 か月から 3 か月経過の間(31 件)

支援内容

◆避難先での生活支援

・訪問入浴車を持ち込み入浴介助・現地社協指示場所における炊き出しボランティアおよび門脇中避難所向け、食支援活動(栄養士会と連携)・避難所での生活支援・避難所運営全般・避難所での高齢者介助・避難所での高齢者介護・福祉避難所での被災者とのかわり・訪問入浴車を使用した、避難所等での入浴支援、及び今後の支援のコーディネート

義援金を送信した・福祉避難所、一次避難所、在宅でのリハビリテーション・石巻市鮎川浜にあった GH が壊滅し、一時的に生活している施設に生活支援

◆実態把握の調査の支援

・地域高齢者の状況調査・「復興支援調査」を被災施設・地区社協・市町村に実施

◆派遣者のコーディネート

・施設介護職員の派遣コーディネート、老協組織活用、女性 VR は心配であった。・ケアマネ VR の派遣コーディネート、高齢者安否確認（包括支援）介護ボランティアや災害ボランティアの派遣を 100 法人の協力を得て、延べ 300 人を派遣した。・国・県・施設・医療機構等の情報のマッチングを通じた支援。

◆被害家屋の片づけ

・津波の影響のあった飲食店の片付け

◆仮設住宅の準備

・仮設住宅での町づくりの一環としての調査、住宅との関係作り・河岸沿い住宅地の側溝内瓦礫の撤去作業

◆瓦礫の撤去

・瓦礫の撤去

◆支援物資の運搬・配給

・5 施設の所へ支援物資を配給・支援物資運搬、避難所訪問

◆物資の支援

・支援物資を届けた・様々な種別協・民間団体より頂いた支援物資を延べ 50 ヶ所に配った

◆地域包括支援センターへの支援

・地域包括支援センターへの支援（総合相談）

◆被災した施設への支援

・施設での高齢者介護の手伝い・情報収集・特養に派遣となり介護全般の補助を行う。近在の施設でノロが発生していたので、清掃を重点的に行う。・被災グループホームでの高齢者介助、瓦礫の撤去、掃除・施設での介護・老人保健施設での介護業務・介護全般（ケア・掃除・選択）。ご利用者とドライブにも行ってきました。

◆被災者への心のケア

・“東京都こころのケアチーム”の第 8 班として、被災者の心のケアを行った。

◆補助金の申請事務

・復興に向けての補助金の申請事務、清掃等

◆相談会の実施

・「情報交換会」や「相談会」を実施。

感じたこと

◆行政の連携で困る

・水の確保、行政との連携でとまどった

◆移動手段の困難

移動手段確保が課題①活動中②被災地アクセス

◆継続的支援の必要性

- ・単独での支援よりも、複数事業者で連携をし、現地の社会資源を有効に活用する。継続することが大切。自主支援の見極めは現地に居ないと判断が難しい。
- ・震災後3ヶ月経過した後の援助であったが、復興までにまだまだ多くの時間、人員、費用が必要で、継続的な支援を絶やしてはいけなと感じた。
- ・事業所で3グループに分かれて交代で施設へ出向きましたが、介護はもっと計画性を持って中・長期的に行わないと難しいと痛感しました。
- ・土地・資産・職員の確保等の課題が大きく、まだまだ復興の道程は遠いので、中長期の支援が必要である。

◆栄養面、精神面への支援の必要性

- ・物資はたくさんあったが、食事での栄養面、子供達の精神面のフォローが必要であったように感じた。

◆物資の仕分けの大変さ

- ・衣類などは汚れたものやかなり古い物なども多く、あまりにもひどい物があることにおどろいた。それを仕分けるのに時間がかかった。

◆地域のつながりを感じる

- ・自身の地元であり、全国各地の方からの支援を本当にありがたく感じた。又、近隣の高齢者が茶話会を開いており、地域のつながりを感じた。

◆ニーズの変遷と情報共有の大切さ

- ・時間と共に状況の変化にスムーズに対応するため、多くの支援者(各団体)との情報共有が大切だと思った。被災者との会話には十分配慮することも当然ながら大切だと感じた。

◆リーダーへの支援の必要性

- ・指導者は施設のリーダーであるため、精神的にスタッフを支援する立場であるため、頑張りすぎて自分自身の辛苦を吐露する場や話せる相手が必要だと思った。

◆逆に迷惑かけたか心配

- ・避難所では色々な職種の方(現地)が仕事として入っていたため連携を行い、食事やお茶出しの手伝いはしたが、あとはお一人お一人と話をしたり、体操をしたりしました。  
自身のホームで実習生などを受け入れる時、オリエンテーションはしても理念を十分にわかって頂くことは難しく疲れる。今回支援に行かせては頂いたが、どれだけ手助けになったのか不安。逆に職員さんたちのストレスにならなかったか…。入居者さんに「泳ぎにきたの～？いい海だよ～」(海水浴で有名な地域らしく)と言われた。カーテンの掛かっていない窓からはまだまだ片付いていない町が広がっている。早く“いい海”に戻るといいと強く感じた。

◆調整役、コーディネートの必要性

- ・現地のコーディネート機能が重要だと思った
- ・職能集団(専門職)によるボランティアが被災地入りしていたが、全体を通して指揮系統するコーディネーターが不在。避難所での生活が不活発なため早期から予防が必要。

・マッチングがなかなか進まない状況があった(それぞれの職域団体の動きや行政、社協の絡みで、迅速な支援調整にならなかった)。結果的に個々の繋がりにより、以降の支援調整を行った。

・避難所でのコーディネーターの存在の有無によって、情報・支援の充実度が大きく異なった。5月はボランティアの支援内容(質)が問われる時期であり、自立を妨げるものもあった。

・最初は水や食料、その後は日用品、夏物依頼、衛生用品、車椅子、電動ベッド、車両等、時季や場所によるマッチングの難しさを痛感。必要な物は種別協を選ばず、必要な所へ速やかに配布した。

#### ◆人手の不足

・元々の GH があった所より、車で片道 2 時間にてスタッフが 1~2 人しかいなく、「人力」が必要！また、ボランティア 5 人が入り、スタッフを休ませることと、役割分担。寸断されない継続的な支援。

#### ◆宿泊先の確保が大変

・東京都福祉保健局さんに、宿泊先や用務地について手配をしていただいた為、そういった点での混乱はなかった。しかし、手配がなければさぞ大変であったことと思う。支援地周辺では宿泊先の確保が難しいため、50km 離れた比較的被害の少ない一関に滞在した。毎日往復 100km の移動がなかなか大変であった。避難所での活動中、私は東京都の防災服を着用していたが、周囲には北九州市や神戸市などの自治体の服を着用した支援者が数多くいらっしやり、日本全国から支援者が集まっているのだと感じた。水や食料、衣類等の生活用品は避難所に相当量が日本全国から届いていると感じた。

#### ◆避難先での生活の大変さ

・細かな話であるが、昼食にカップラーメンを食べた場合に、活動先では下水が復旧していないため、食べ終えた後にスープを捨てることが出来ず、「こんな普通のことで不便があるのだ」と感じ、被災者の方の苦労が垣間見えた。また、トイレ等もちろん復旧しておらず、限られた数の仮設トイレを 1 ヶ月以上使用している事の大変さも感じた。

#### ◆地元の人の活躍に頭が下がる思い

・主に避難所となっている中学校で活動をしていたが、滞在中に学校の授業が再開され、避難者が数多くいる中で生徒さんが授業を受けている様に、色々と思うところがあった。地域で実際に被災をしているにもかかわらず、その後の支援にあたっている人々が多く、頭が下がる思いであった。主観で恐縮ですが、地域の臨床心理士さんたちの活躍がとくに目に付いた。実際に津波の被害を受けた方のお話を聞くこともあったが、その話を聞いても私はどうすることも出来ない、無力であると痛感した。などなど、とにかくたくさん感じたことはあります。

#### ◆配りきれない物資

・現地に物資はあふれていたが当事者の手もとに届かない。配りきれない状況があった。

#### ◆派遣のシステムの必要性

・受け入れやすい派遣しやすいシステムの構築を心掛けたが、事前の D-mat のようなものが必要。

④地震発生後 3 か月から 6 か月経過の間(14 件)

| 支援内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>◆介護等の生活の支援</p> <p>・介護(夜勤以外)・職員 1 名を派遣、避難所での認知症高齢者(グループホーム)介護<br/>         避難所の運営・入浴サービスのお手伝い・避難所での高齢者介助・主任統括生活支援相談員として勤務(期限は職員)</p> <p>◆物資の支援</p> <p>・高齢者への物資援助、食材援助</p> <p>◆ボランティアへの支援</p> <p>ボランティアの人に対しての食料、お手伝い</p> <p>◆泥の除去</p> <p>アパートとその周囲の泥の除去作業</p> <p>◆調査の支援</p> <p>・被災した介護職員の当日の心理・行動とその後の心の変化の聞き取り・聞き取り調査、事業所が準備するもの等</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 感じたこと                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p>◆物資・スタッフの不足</p> <p>・清拭布、リクライニング車イス、レクリエーション用具等、不足する物品が多い事に気付いた。又、スタッフの不足が大きな課題であった(いかに継続していくか…)</p> <p>◆派遣者へのケアと指導の必要性</p> <p>・居住環境や人的環境が整わない中での、利用者の方々への負担が大きく見られた。入居者も含めて派遣者への心のケアと、派遣者への細やかな指導が必要と思った。<br/>         職員の派遣調整を行う。異なる地域の方々の共同生活の難しさと、生活移行の課題を感じた。</p> <p>◆食材の不足</p> <p>・震災直後は福島から転入してきた高齢者の受け入れなどを実施していたため、被災地へ直接的な支援を検討したのが 5 月。食材が思うように手に入らず、高値になっているという事などで、地域のボランティア団体と協力して、農作物を作り、届けた。これからもまだまだ食材には困るようなので、これを続けたいと思う。</p> <p>◆支援システムの確立</p> <p>・震災から 3 ヶ月経過していたので、支援のシステムが確立されていた。大規模災害時には各ボランティア団体を集める地元の組織が必要。</p> <p>◆現地の人の疲労感</p> <p>・現地で県社協の人と話し、疲労感等あり、事前に自分達ができる内容、期間等を明確にして被災されている人の支援ができれば良かったのではと反省している。</p> <p>◆復興までの道のりの厳しさ</p> <p>・仮設や借り上げ住宅居住者の支援をする生活支援相談員(県下に 170 名配置)を支援する立場</p> |

として就く。課題山積、復興への道程の厳しさを痛感している。

◆目的を絞った支援活動の有効性

・山形ボランティア隊が組織されていて、ニーズを整理して目的を絞った支援活動が行われていて、1つの有効な関わり方だと思った。

◆事業所間ネットワークの必要性

・事業所間のネットワーク(市内、市外、県外)。すぐに駆けつける体制づくり。

◆派遣した職員にとって勉強になる

・当施設で職員を派遣したことで、職員にとって勉強になりました。(4名)しかし、職員の体調不良や移動(人事)が重なり、2ヵ月だけの派遣となりましたが、その後定期的にケア会議に参加しています。

◆受け入れ側の調整の必要性

・グループホームの避難所入居者の支援であったが、町営の施設が避難所であった為、想像していたよりも生活環境(ハード面)は恵まれており、入居者様も落ち着いておられた。受け入れ側の調整だと思うが、何をしたら良いのか、明確にしていただけると動き易いと感じた。

◆残しておくべき記録

・大災害時、極限の状況下で介護という特定の職務の人達が取った行動、見たものと体験した感覚は報道からは聞いてない事ばかりでした。世界の為に残しておくべき内容でした。

⑤地震発生後6か月経過以降(12件)

支援内容

◆イベント等への支援

・音楽交流会、職員交流会・老人保健施設でのイベントの手伝いと交流・サロン活動への参加

◆物資の寄贈

・リクライニング車イス寄贈、介護

◆冬の過ごし方を説明

・会津の冬の過ごし方について具体的に話をした。

◆物資支援

・支援物資を個人に届ける

◆仮設住宅の調査

・仮設住宅を回り、健康調査票の回収、聞きとり調査(地域包括支援センターの手伝い)・仮設住宅へ訪問、リハ、住環境整備ニーズ調査・仮設住宅へ訪問、住環境整備の調査

◆瓦礫の撤去

・瓦礫の撤去

◆地域包括支援センターへの支援

・実態調査(地域包括の後方支援)・包括支援センターに所属し、被災地域を2人1組で訪問し、

自宅に戻って生活している人達の話聞き、チラシを届ける。アンケートも行う。チラシの内容：困り事、心配事がある場合は、包括支援センターにご相談下さい。

#### 感じたこと

##### ◆ボランティアへの研修の必要性

・スタッフ、ボランティアの研修支援の必要性を感じた。

##### ◆何が困るのかの把握が難しい

・美里町は豪雪地域です(会津全域)。原発のある地域は同じ福島県でもほとんど雪も降らない土地ですので、何に困るのかが互いに把握しにくかったです。

##### ◆仮設への支援状況の地域格差

・仮設住宅の地区ごとに支援が行き届いているところと、そうでないところとのバラツキを感じた。地域ごとの支援を感じた。

##### ◆復興への難しさ

・GHの職員3名と元職員2名の5名で参加。団体の募集に参加させて頂いたので支援はスムーズに行うことが出来た。現場の復興は難しいと感じた。

##### ◆自宅に戻った人の孤立

・自宅に戻っていらっしゃる人達(修理後、修理中)には、訪問者も少なく話を聞いてほしいという思いを持っていると強く感じた。

##### ◆冬の寒さ対策の必要性

・冬期間の寒さ対策の必要性。人里離れた仮設住宅街では高齢者の閉じこもり予防対策が重要。

##### ◆廃用症候群の進行が懸念

・段差や手すり設置が困難な状況等、暮らしにくい環境の中で高齢者の自立が妨げられ、廃用症候群の進行が懸念された。

##### ◆災害時に何をすべきかを考える

・介護に携わる身として災害時に何をすべきか、何が必要なかを、職員の方から伺い、日頃の仕事のあり方が最も重要だと思いました。

#### 13)被災地にいかず支援を行った時期

「被災地には行かずに支援をおこなった」「両方おこなった」と回答したものに、被災地外からの支援をおこなった時期を尋ねた。集計は記載された全件数を集計した。

2011年3月が204件(52.7%)と最も多かった。次に2011年4月が133件(34.0%)だった。

Table12 被災地に行かず支援をおこなった時期(N=391)

| MA |             | 件数  | %      |
|----|-------------|-----|--------|
| 1  | 2011 年 3 月  | 204 | 52.2%  |
| 2  | 2011 年 4 月  | 133 | 34.0%  |
| 3  | 2011 年 5 月  | 52  | 13.3%  |
| 4  | 2011 年 6 月  | 30  | 7.7%   |
| 5  | 2011 年 7 月  | 15  | 3.8%   |
| 6  | 2011 年 8 月  | 13  | 3.3%   |
| 7  | 2011 年 9 月  | 5   | 1.3%   |
| 8  | 2011 年 10 月 | 10  | 2.6%   |
| 9  | 2011 年 11 月 | 10  | 2.6%   |
| 10 | 2011 年 12 月 | 11  | 2.8%   |
| 11 | 2012 年 1 月  | 2   | 0.5%   |
| 12 | 2012 年 2 月  | 0   | 0.0%   |
| 13 | 複数期間(6ヶ月未満) | 55  | 14.1%  |
| 14 | 複数期間(6ヶ月以上) | 29  | 7.4%   |
| 15 | その他(時期不明)   | 7   | 1.8%   |
| 16 | 無回答         | 72  | 18.4%  |
| 合計 |             | 648 | 165.7% |

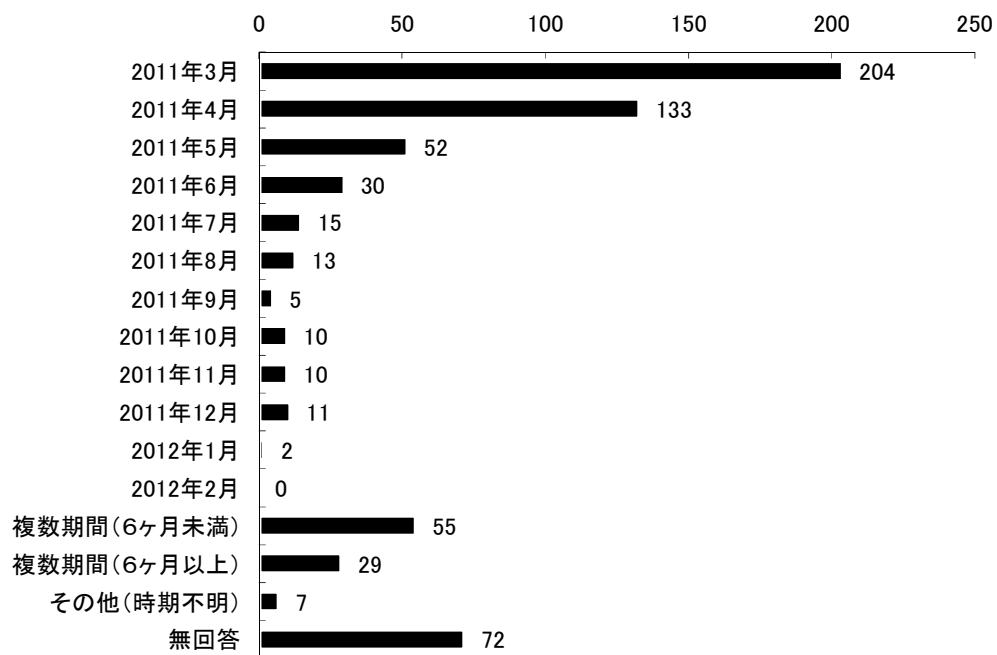


Figure5 被災地外からの支援をおこなった時期(N=391)



#### 14)被災地に行かずおこなった支援の方法

「被災地外からの支援をおこなった」「両方おこなった」と回答したものに、被災地外からの支援の方法を尋ねた。集計は記載された全件数を集計した。

「所属事業所・法人を通じた支援をおこなった」が最も多く343件(87.7%)だった。次に「所属する専門職団体等を通じて支援をおこなった」が179件(43.5%)だった。

Table13 被災地に行かずおこなった支援の方法(N=391)

| MA |                        | 件数  | %      |
|----|------------------------|-----|--------|
| 1  | 所属事業所・法人を通じた支援をおこなった   | 343 | 87.7%  |
| 2  | 所属する専門職団体等を通じて支援をおこなった | 170 | 43.5%  |
| 3  | 個人的な支援をおこなった           | 101 | 25.8%  |
| 4  | その他                    | 19  | 4.9%   |
| 5  | 無回答                    | 15  | 3.8%   |
|    | 合計                     | 648 | 165.7% |

#### ●所属する専門職団体の記載内容

(当時)在福サンライフ、24期仙台研修受講者、Being、GH連絡会、NPO法人 愛媛県ケアプラン研究会、NPO法人福聚会、NPO法人福岡県GH協議会、NPO法人愛媛県ケアプラン研究会、青森県指導者、県ケアマネ協会副会長、老施協会員(県側と協議してニーズ調査チーム組織)。青森県老人福祉協会、アビリティクラブたすけあい、安房しあわせネット、医師会、老人保健施設協会、NPO法人福岡県高齢者GH協議会、大分県老人福祉協議会、大阪市労連、大阪地区認知症グループホーム協議会、大府ネットワーク、沖縄県社会福祉士会、介護支援専門員連絡協議会、グループホーム協会及び協議会、香川県グループホーム協会、学校法人、かめま市民活動サポーターズ、かのや東ロータリークラブ、近畿老人福祉施設協議会、熊本県認知症介護指導者、県介護福祉士会、県老施協、江東区グループホーム連絡会、指導者研修大府30期生、島根県認知症介護指導者連絡会、島原市GH連協、社会福祉会、社会福祉士会 徳島支部、老施協、経営協、社会福祉士会、老人施設部会、社会福祉法人 順和、社会福祉法人 のどか、全国GH団体連合会、全国青年経営者会、宅老所復興支援プロジェクト、ちネット、ちネット愛媛県地域密着型サービス協会、ちネット愛媛支部、ちネット徳島県支部、ちネット鳥取、千葉県認知症ケア専門士会、鳥取県ちネットの会、長崎県GH連絡協議会、長野県宅老所グループホーム連絡会、新潟県老人福祉施設協議会、日赤、社・協、日本介護福祉士会、日本財団、日本精神科看護技術協会、日本登山医学学会、日本認知症GH協会、日本理学療法士協会、認知症介護研究研修東京センター、認知症介護指導者ネットワーク、認知症の人と家族の会、東日本大震災復興支援プロジェクトおおむた、広島県、広島県介護福祉士会、広島県指導者会、広島県社会福祉会、広島県認知症介護指導者会、福岡県介護福祉士会、北海道社会福祉協議会、北海道認知症グループホーム協会 道東ブロック、北海道老人福祉施設協議会、南九州市川辺町、民生児童委員(社会

福祉協議会)、山口県認知症指導者

ゆうゆうの里、聖隷事業団、倫理法人会、老人福祉施設連盟、社会福祉法人長岡三古老人福祉会、日本介護支援専門員協会、福岡県介護福祉士会、民老施協・21老福連・民医連

●その他の記載内容

一関の施設をベースキャンプとして、研修のため来所していた、市議の声かけにより、事業所で行った、市町村を通じて、所属町内会の募金、地域のボランティア団体、ちネット、東京都行政支援、日本福祉大学大学院同志会、認知症研修仲間、無尽の仲間、一関の施設をベースキャンプとして、子供の合唱団、指導者ネット、島根県

15)被災地に行かずおこなった支援の内容

「被災地外からの支援をおこなった」「両方おこなった」と回答したものに、被災地外からの支援の方法を尋ねた。集計は記載された全件数を集計した。

「募金活動をおこなった」が最も多く440件(112.5%)だった。次に「所属する専門職団体等を通じて支援をおこなった」が179人(43.5%)だった。(Table14)

Table14 被災地に行かずおこなった支援の方法(N=391)

| MA                     | 件数   | %      |
|------------------------|------|--------|
| 1 被災地にボランティアを派遣した      | 108  | 27.6%  |
| 2 募金活動をおこなった           | 440  | 112.5% |
| 3 物品を寄付した              | 232  | 59.3%  |
| 4 被災者の受け入れをおこなった       | 65   | 16.6%  |
| 5 被災者の受け入れについての情報を提供した | 130  | 33.2%  |
| 6 その他                  | 74   | 18.9%  |
| 7 無回答                  | 7    | 1.8%   |
| 合計                     | 1056 | 270.1% |

その他の内容:介護スタッフの派遣・職員派遣希望を出し、準備を行った・職員を派遣した・交流協定的なタイ国のマッサージ師と避難に派遣する協力をした。必要としている物資の確認・赤ちゃん用の粉ミルク、赤ちゃん用の紙オムツ等・石巻地区雄勝町へ衣類等・支援物資の配送・食材の寄付・熊本県多良木町の依頼で支援物資の提供先への情報提供連絡を行った。・義援金、大府センター・寄付金を送った(職員一同と法人)・金銭寄付・組合、互助会、法人より義援金を寄付・グループホーム協会からの呼びかけで義援金を振り込んだ・個人的に数ヶ所で募金をした・支援金・自施設の行事にてバザーを行い義援金とした振り込んだ。・チャリティコンサートを主催、義援金として搬出・研修会等機会があれば募金箱を準備している・募金活動に協力した・日赤へ義援金送付、支援に行く知人たちへの金銭的支援の取りまとめ・募金活動に協力した・ポロシャツ購入等、間接的募金活動・連絡会会費からの送金・被災者の受入れや一時就労の調整(受入れはなし)・避難先(県内)でのボラ・避難した被災者の方々に対し、施設の行事等に招待し交流した。・

連絡会会費からの送金・アセスメントシートのデータベース化・あゆかわの郷支援ライブを行った・岩手県の作業所の商品を共同購入(月 2 回 20,000 円)・瓦礫撤去・業者からの品を被災事業者へ紹介した・経営相談に乗っている・医療も行った・地元の漁師の方を県復興対策本部長と直接面会し、現状を説明した・情報収集と帰路の確保等・人材育成・生活状況聞き取りと支援・対策検討(圏域全体の)・炊き出し、入浴、放射能測定・地域の GH で報告会を行った・ドロの撤去・人間関係作り、仮設住宅での暮らしの情報収集と発信・被災者に対する認定調査、ケアプラン作成・被災者の集いのコーナー担当・物品を寄付ではなく気持ち、励まし・冬の過ごし方について・ベクレル測定・法人で施設のお風呂を提供、送迎も含めて・ボランティアさんの宿泊支援・ボランティアでなく介護スタッフ・ボランティアの登録申し入れ・法人の元職員が炊き出しの支援に行くにあたり備品の貸し出しを行った・保健師派遣統括課に対し、認知症関連情報の提供と保健師活動上留意依頼・モバイルデイケアを実施(当センターの多職種協働で実施した出前デイケア)・宮城県山元町への支援・リスニングシートの作成・被災地職員の採用(雇用確保)

#### 15) 支援全体を通して感じたこと

支援全体を通して感じたことを自由記述で尋ねた。312 名の回答があった。

記載された内容について、「義捐金、募金に関すること」「物資の支援に関すること」「行政機関に関すること」「コーディネーターに関すること」「職員、ボランティアの派遣に関すること」「情報に関すること」「支援のシステムに関すること」「支援のための組織に関すること」「継続的な支援の必要性に関すること」「被災者の受け入れに関すること」「認知症ケアに関すること」で分類し、記載された数を集計した。集計には一つの感想に複数の意味が含まれていた場合、意味内容ごとにカウントした。

結果、「義捐金、募金に関すること」は、62 人(19.9%)に記述があった。「物資の支援に関すること」では 25(8.0%)人に記述があった。「行政機関に関すること」14 人(4.5%)に記述があった。「コーディネーターに関すること」5 人(1.6%)に記述があった。「職員、ボランティアの派遣に関すること」では 24 名(7.7%)に記述があった。「情報に関すること」34 人に記述があった。「支援のシステムに関すること」では 14 人(4.5%)の記述があった。「支援のための組織に関すること」では 17 人(5.4%)の記述があった。「継続的な支援の必要性に関すること」25 人(8.0%)の記述があった。「被災者の受け入れに関すること」27 人(8.7%)の記述があった。「認知症ケアに関すること」では 8 人(2.7%)の記述があった。

指導者の支援への意識として、支援する意思はあったが、様々な都合からできなかったといった内容を記述したものは 65 名(20.8%)だった。

「義捐金、募金に関すること」に関する意見・感想では、「遠地であり、被災地に出向くことはできず、情報もなかなかつかめず、もどかしい気持ちだった。できる範囲での募金等の対応で申し訳なく感じた。」といったなんらかの支援したい気持ちの発露として募金活動を行ったという意見や、「寄付したが、どのような形で被災者に届いているか知りたい。」といった募金の用途・行方に関す

る意見がみられた。

「物資の支援に関すること」では、「援助物資や人的支援において、もっと効率良く支援することができればと感じた。阪神の震災においても同様のことが感じられたが、今回の震災を含め、有事の際の支援内容、手順を可能な範囲マニュアル化するなどの整理が必要と思う。」といった支援の仕組みに関する意見や、「自分の目で確認していないため、確実に思った場所に届いたか心配だった。」といった送った物資が有効に活かされていたかどうかに関する意見がみられた。

「行政機関に関すること」では、「被災したホームの利用者 13 名を事業所として受け入れをした。しかし帰る目途は全く立っていない。この先、この利用者達はどうするのか行政の方針が全くない。」といった行政の対応の課題に関する意見がみられた。

「コーディネーターに関すること」では、「コーディネーターの存在がはっきりしていないとニーズがあわない。」といった、ボランティアの受け入れ等におけるコーディネーターの重要性に関する意見がみられた。

「職員、ボランティアの派遣に関すること」では、「介護職の派遣など、人的支援が良いと思うが、1 人が 1 ヶ月程度支援に行くと施設が苦しくなるので、なかなか難しい。」といった、派遣要員の確保に関する課題や、「自治体からの派遣要請を待っていたが、「これは絶対にムリだな」と判断し、自力で民間支援団体と連絡・調整し、ヒト・モノ・カネ・情報収集全て自法人でまかなってボランティア派遣した。」といった派遣の仕組みに関する意見がみられた。

「情報に関すること」では、「いろいろな機関で支援をおこなっていたので、それぞれに対応したが、出来ることなら支援機関や支援内容によりグループ分けをして、必要な事をアナウンスしてもらえるとわかりやすい。例えば、ボランティアもどこに行けばいいのか、また、現地ではどういうことを必要としているのかがわからなかったこともあった。」といった、支援を行うための情報の必要性に関する意見がみられた。

「支援のシステムに関すること」では、「支援するチームは多くあるものの、横の連携がなく、単独で動いていたり動けないでいたり、効率的ではなかった(ない)と思います。指示命令系統がないことで、困ってしまうケースも多かった。」といった現地での支援システムの課題に関する意見や、「具体的に何をどのようにしてほしいのかの、声が届かない。現地に入るのは、法人が小規模でマンパワーが不足し、無理なので個人的にということになってしまう。個人でとしても宿泊～交通費を考えると、無理。声を各地に届け、所属ごとへの支援を具体的とするシステムがないのではと感じた。」どのような支援が必要なのか情報を届ける仕組みの課題に関する意見があった。

「支援のための組織に関すること」では、「組織的な対応より、個別のつながりの中で支援の輪を広げる方が効果的で即効性があった。」「やはり個人だけの力は弱いので、職場や地域など全体としての働きかけ、協力が大事であると実感した。」といった支援を行う上での組織的な対応や連携の有効性、個人的な支援の限界性に関する意見がみられた。

「継続的な支援の必要性に関すること」では、「3 年位かけて継続しての支援を行うべきだと食材を届けに行って痛感した。」といった被災地の状況から、継続的な支援が必要だとする意見がみられた。

「被災者の受け入れに関すること」では、「受け入れに対して(仮設住宅にいる人々)難しくて実行出来なかった。高齢者に住まいと提供、一緒に生活しようと思ったが、その意見を受け入れてもらえなかった。」といった受け入れのシステムに関することや、受け入れた被災者の様子に関する意見がみられた。

「認知症ケアに関すること」では、「避難所で認知症の方は、邪魔者扱いされたり、追い出されたりしているのが現状であった。オムツも介護用品も不足している中での生活は本当につらいものだったと思う。」「支援へ行き、グループホームの方が避難所へ行くが、認知症の方が混乱し避難先を移らざるを得なかったり、精神安定剤の服用や入院(精神科)をさせられたりという話も伺った。あまり被災地で認知症の方がどのような状況であったか表に出て来ないので、認知症ケアに関わる皆さんが知る機会があると良いと思う。」といった被災地での認知症者のおかれた生活環境の課題に関する意見がみられた。

支援する意思はあったが、様々な都合からできなかったという意見・感想では、現地へ出向きたい気持ちがあったが、今働いている現場を犠牲にする状況では動きがとれないため、やりきれない思いもあった。法人、会社としてそのような体制をとれるぐらいの考えが必要と感じた。」といった、現地に行きたいが、仕事等の都合で行けなかったといった意見がみられた。

#### ◆義捐金、募金に関する意見・感想の一部

- ・一般的な支援金募金活動より、支援場所と内容が明確な募金活動の方がわかりやすく、支援が形になって見えた。ボランティア派遣も同様です。
- ・遠地であり、被災地に出向くことはできず、情報もなかなかつかめず、もどかしい気持ちだった。できる範囲での募金等の対応で申し訳なく感じた。
- ・かなりの募金があったが早く振り分けてあげてほしかった。
- ・義援金等が被災者の方々に届いているのか不安。
- ・寄付したが、どのような形で被災者に届いているか知りたい。
- ・現地へ行きたかったが、職場の人数も足りず、せめてお金だけでも送ろうと思った。現地の利用者、介護者の心身を想像すると胸が痛む。
- ・個人的に被災地へ行きボランティア活動にあたった職員もあったが、全体としては募金活動中心だった。関連病院の医師から、被災地での活動、体験報告会などもあったが、それらが全体的な意識には活かしきれていないように感じる。
- ・災害が起きて間もなく募金等を行ったので、みんな協力的であった。(職員)病院の受付や通所リハビリ等でも募金を行ったが、わずかな年金暮らしの人でも募金され、災害の大きさを実感した。
- ・支援金等の早急な配布(分配)ができていなかったのも、改善点となっている(現金はすぐに必要だったと感じたので)
- ・施設の職員は、ボランティアに行きたいと思っている者は多いが、実際に直接介護に関わっているものが対応することが難しいと感じた(現場の職員も人員不足なため)。どうしても、募金活動へ

つながると思った。

- ・施設を離れる事は出来ないので、ボランティア等では行けなかったが、その他で出来る事を考え募金活動を3~4回行った。当施設でも受け入れも行った。

- ・自分から働きかけが出来ず、また方法も分からなかった為、義援金や物品の寄付にとどまってしまい、申し訳なかった。

- ・自分自身は、支援に出向く事は出来なかったが、ボランティアとして、市を通して職員の派遣と募金活動を中心に行った。職員の体験を通じて、被災者地の苦難、苦境を少しでも理解する事が他職員も含めて理解する事が出来たと思う。

- ・自分も業務しながらなので、募金活動に参加するくらいしかできなかった。

#### ◆物資の支援に関する意見の一部

- ・援助物資や人的支援において、もっと効率良く支援することができればと感じた。阪神の震災においても同様のことが感じられたが、今回の震災を含め、有事の際の支援内容、手順を可能な範囲マニュアル化するなどの整理が必要と思う。

- ・現地に行くことが困難な状況だったので、せめて金品で支援できればと思った。困って大変な時に現地に行けず、何の力にもなれなかったことが今も後ろめたく感じている。

今・回、物品の寄付を行えたのは、同じ認知症指導者で同期の方が現地で支援した経過があり、その方が窓口となったので、送付先もスムーズに行えた。

- ・今回、法人としても現地に派遣し、2グループ活動した。私自身は3グループ目の活動班であったが、現地先の都合により派遣は中止となった。但し、支援物資の搬入のみ行った。

支援が細かいきとどいてないと思った。物品は新品に限ると言われた。災害時は中古でも使える物であれば良いのではないか。(物が足りてないのだから)GH協から災害地のGH協へ送ったのは確実に届いていた。

- ・自分の目で確認していないため、確実に思った場所に届いたか心配だった。

- ・正直、何から始めてよい状態か分からずに、募金と物品を寄付しました。まだまだやれる事はあると思いますが、時期的に皆の認識が強いうちに早く対応する事が大切であると感じた。

- ・人員に余裕が無く、ボランティア派遣にいたらなかった。物品等の支援を行ったが、職員の方にも家族等に被災した方にも行った。

- ・団体を通じて支援しました。寒くなるので冬物衣類、男性物とか指定を受けたので、準備しやすく整理しやすかったが、それが役に立ったのかと思いました。

- ・入居者さんたちの服も流されてしまったそうで、支援物品の服を着ていたが、上着はそれなりに違和感のないものがあったが、ズボンが(ゴムのものは)スウェットかジャージしかなかった。自分のまわりに居る年代の人のことは頭にうかんでも(子ども服とか)お年寄りというのはイメージになかったのかも。芸能人の中にそういう活動してくれる人がいればよかった。

- ・物品(紙オムツ、清拭布など)を送ったのですが、かなりの数を保管するところがないと言われ反省しました(事業を行っていると即、まずオムツなどと思いましたが)

#### ◆行政機関に関する意見の一部

- ・被災したホームの利用者 13 名を事業所として受け入れをした。しかし帰る目途は全く立っていない。この先、この利用者達はどのように行政の方針が全くない。
- ・避難当時、避難場所を転々とされていた方を支援したが、自治体も不安定で手続きに戸惑ったり時間を要し、被災者への支援説明もどこまで説明すれば良いのか、その情報が正しいのか、今後はどう被災者を支援するのか見えなかった。このため、被災者の精神的負担の大きさが大きく感じられた。
- ・レセプト請求において、行政間に差があり、手続きに手間、時間を要した。
- ・新潟で発生した 2 回の地震での経験が活かされ、法人の職員と受入施設での準備が冷静に図れた。災害時には積極的に支援活動に望む姿勢が職員に定着しているように感じた。福島県は隣接県ではあるが、被災地域の太平洋側地域は関東圏とのつながりが濃く、新潟への避難よりも栃木、茨木といった方面への避難が多く見られた。そのためか、新潟県と他県とで受入の期間が異なってしまうたり（介護保険財政によるものか？）、自治体の裁量により振り回される避難者が多いと感じた。

#### ◆コーディネーターに関する意見・感想

- ・現地のコーディネーターがなかなか見つからず、支援までに時間がかかった。
- ・コーディネーターの存在がはっきりしていないとニーズがあわない。
- ・道老協協として支援する被災地と派遣側のマッチングが難しい。マッチングするためのコーディネーターが必要であることを感じる。特に、組織化して動く場合その必要性を強く感じる。
- ・法人や現在の仕事に直接的に関連する団体での被災地支援の動きが鈍く、自分が所属する職能団体からの派遣を選ぶ結果となった。職能団体として今後の被災地支援のモデルが出来たと思われ、又、支援の全国ネットワークも広がった。各ボランティア団体におけるコーディネーター、現地でのコーディネーターの存在が不可欠。

#### ◆職員、ボランティアの派遣に関する意見・感想の一部

- ・介護職員派遣等については、継続的支援が必要だが、時間経過によりニーズが変化するのでその調査が重要。※終了時期の見定め方も重要。宿泊場所の（拠点）確保も重要。
- ・介護職の派遣など、人的支援が良いと思うが、1 人が 1 ヶ月程度支援に行くと施設が苦しくなるので、なかなか難しい。
- ・会社として支援をさせて頂いたのが募金だけであったため、被災地へ行く体制がとれるように会社がなぜ動かなかったのか疑問を感じています。
- ・自治体からの派遣要請を待っていたが、「これは絶対にムリだな」と判断し、自力で民間支援団体と連絡・調整し、ヒト・モノ・カネ・情報収集全て自法人でまかなってボランティア派遣した。
- ・東日本大震災の翌日、長野県北部地震により当法人も被災し、5 月下旬に復旧しました。この間、

近隣他法人施設に大変協力していただき、6 月下旬には当法人から東北被災地へ向けてボランティアや物資の支援を老人福祉施設に支援を行いました。思いがつながり合う貴重な体験でした。

#### ◆情報に関する意見・感想の一部

- ・同じ宮城県でも私達の施設は津波の被害はありませんでした。利用者、職員ともに全員負傷することはありませんでした。地震直後のライフライン不通などで、また情報が集約なく混乱されこちら側としては受け入れ OK と県の方に返答しましたが、途中で連絡なく深夜まで待機したことがあり、情報伝達の面で上手くいかなかった。

- ・義援金活動しかできませんでしたが、所属するどの団体と積極的・密に連携すればよいのか迷った。また、それら団体の支援を通じて、どのような効果があったのか、被災地は今何を求めているのか、深い情報が届くのが遅い。または届かない為、自分にできることが分からない。

- ・いろいろな機関で支援をおこなっていたので、それぞれに対応したが、出来ることなら支援機関や支援内容によりグループ分けをして、必要な事をアナウンスしてもらえるとわかりやすい。例えば、ボランティアもどこに行けばいいのか、また、現地ではどういうことを必要としているのかがわからなかったこともあった。

#### ◆支援のシステムに関する意見・感想の一部

- ・具体的に何をどのようにしてほしいのかの、声が届かない。現地に入るのは、法人が小規模でマンパワーが不足し、無理なので個人的にということになってしまう。個人でとしても宿泊～交通費を考えると、無理。声を各地に届け、所属ごとへの支援を具体的とするシステムがないのではと感じた。

- ・国として支えるべき支援ととらえ、例えばボランティア休暇というものがある、それを取得できるのなら、(有給とする、公休扱いではない)それをあてがって現地に向かい直接の支援を行いたかった。

- ・支援するチームは多くあるものの、横の連携がなく、単独で動いていたり動けないでいたり、効率的ではなかった(ない)と思います。指示命令系統がないことで、困ってしまうケースも多かった。また、被災者受け入れの土地でありながら、地元住民が早期退院をせまられたりサービス事業所が休みになったりで、地元の住人をどう支援するかが大きな課題でした。

#### ◆支援のための組織に関する意見・感想の一部

- ・金銭、物品での支援しかできないが、有効に配分できる組織づくりも大変なのだろうと思う。

- ・所属法人全体で支援を行なったため、法人内の協力体制やチームワークの強化にもつながったと感じている。

- ・組織的な対応より、個別のつながりの中で支援の輪を広げる方が効果的で即効性があった。



・ネットワークが事業所の経営・管理識者が多く構築していたので、被災地の必要な支援ができたと思う。

・日頃からのネットワークを強化する必要を感じました。

・被災者の生きることへの力強さを感じた。避難所の施設や多職種の連携の難しさは感じた（仕事としての看護師、ヘルパーボラとしての栄養士、PT など、介護職など）

・非常災害時に行うべき行動が法人としてのルールみたいなものが殆ど無しに等しく、個人での判断になっていた。こういう場合における実質的な備えは現場の職員はどうなっているのか不明である。

・やはり個人だけの力は弱いので、職場や地域など全体としての働きかけ、協力が大事であると実感した。

#### ◆継続的な支援の必要性に関する意見・感想の一部

・3 年位かけて継続しての支援を行うべきだと食材を届けに行って痛感した。

・一時的な支援ではなく、継続的な支援を行うことは、大切だと感じるとともに難しいとも感じている。

・認知症の指導者である以前に人間として当然のことを行ったと思う。作家、山根一真氏を中心とする団体と協力し合い、子どもや高齢者の居場所となる「ドームハウス」が建設され、孤立しがちな仮設ハウスの弱点を補うことが出来た。継続的な支援のあり方を探ることができた様に思う。

・日頃からの有事への備えをいかにして意識し続けられるかが大切だと思いました。その為にも、被災地の状況というものをメディアも継続的に発信をして欲しいと思います。

被災地でボラをした人の話を聞くと、長期な支援と「こころ」へのサポートの大切さを感じた。

・被災地に対して、全ての人が長い期間支援を継続できればと思います。是非、仙台研修センターも窓口になっていただければと思います。個人の力では有効に活用できないのではという気持ちがあります。よろしくお願いします。

#### ◆被災者の受け入れに関する意見・感想の一部

・受け入れた 3 名様の中に（若年性認知症）＋（統合失調症）の方（66 才）がおられ、後になって前施設入所前に精神病院（6 ヶ月）入院されていた方だったらしく、今回のこと、又、遠方に連れてこられたことで、統合失調症の悪化につながり、5/25～近くの精神病院へ今も入院中。今回被災した方々の精神的な負担→大と思われる。

・受け入れに対して（仮設住宅にいる人々）難しくて実行出来なかった。高齢者に住まいと提供、一緒に生活しようと思ったが、その意見を受け入れてもらえなかった。

・おひとりでも被災された方を受け入れることができてよかった。市や他事業所とも連携をとり、こちらで生活できるよう支援をすることができた。

・グループをあげての支援により利用者のみならず、地域住民を多勢受け入れることができた。被災者もボランティア（支援者）も共に心傷つき、各々の立場でのサポート（長期）を計画的に行うこ

とが大切であり、それを実施している。又そこから、被災しなかった地域への防災意識改善の為にセミナーもグループをあげて行っている。

・気仙沼や宮古の病院より患者の受け入れを実施。ストレッチャー積載車と一般車両にて輸送したが、出発から到着まで 15 時間程かかっており、患者の負担を考えると輸送方法、経路に見直しの必要があると感じる。

#### ◆認知症ケアに関する意見・感想の一部

・電気と水がないのは非常に辛い。

・認知症の人の環境変化による混乱は解決できず、とにかく現状の回復に向けてが、精一杯だった。認知症ケアどころではなかった。

・支援へ行き、グループホームの方が避難所へ行くが、認知症の方が混乱し避難先を移らざるを得なかったり、精神安定剤の服用や入院(精神科)をさせられたりという話も伺った。あまり被災地で認知症の方がどのような状況であったか表に出て来ないので、認知症ケアに関わる皆さんが知る機会があると良いと思う。

・土地勘のなさ、言葉(方言)の違い、情報不足などの状況下で、認知症ケアのボランティアを行うのは難しいと思います。(認知症ケアの専門性を発揮し辛い歯がゆさ)

・避難所で認知症の方は、邪魔者扱いされたり、追い出されたりしているのが現状であった。オムツも介護用品も不足している中で生活は本当に辛いものだったと思う。都内の施設で受け入れをするといっても知らない土地ではますます不安になるばかりである。

・避難所には、認知症の方を受け入れない所があったり、BPSD の激しい方は、精神病院へ入院してもらうことにした、又、入所してもらった、という話を聞いています。被災者であり、認知症という病気があるということで、そのような扱い方しか考えられなかったのか…とても残念です。

#### ◆支援する意思はあったが、様々な都合からできなかったという意見・感想の一部

・現地へ出向きたい気持ちがあったが、今働いている現場を犠牲にする状況では動きがとれないため、やりきれない思いもあった。法人、会社としてそのような体制をとれるぐらいの考えが必要と感じた。

・県に登録などをして、職員や元職員が支援に行ったり、友人や親戚(いとこ)が行ったりしたが、自分自身は決算、予算理事会、新人職員研修などや、家庭の事情もあり 5 日も空けられなかった。

・現場に行くことは業務上困難であり、余力のないスタッフ人員ではなかなか難しい面があると感じた。また、入所受け入れに関しても体制は整えたが入所には到らなかった。

現場の状況を想像するも、実際はどれほど大変かと心が痛みながらもほとんど何もできない自分がはがゆい。

・個別(個人単位)でのボランティアは就業もあり行くことは難しかった。法人内でボランティアを募っていたが、希望を出しても自施設の運営もあるためスムーズには行かなかった。

・仙台センターで研修を受けながら、被災地に直接行って支援を行えなかったことを非常に申し訳なく思う。

・直接支援に行きたかったが、仕事を長くストップできず悩んだこと。

・地理的事情により直接の支援（現地でのボランティア活動など）が行えないことなどが悔しかった。

・同期や先輩の指導者の方々が率先して現地に行って、支援活動をされている中、自施設の業務の事情により行きたくても行けない現状に、ただ地団駄を踏んでいる自分を情けなく感じている（県に申請はしているが職員の派遣要請はない）

・何か力になることを行いたいと思うが、現地での活動ができず申し訳ないと思う。

#### 16) 認知症介護指導者としての立場や役割、働き方についての意見

被災地支援において、認知症介護指導者としての立場としての役割や働き方についての意見を自由記述で尋ねた。218名の回答があった。

多かった意見としては、指導者として力を発揮するために、組織的に支援を行う必要性に関する意見があった。認知症介護指導者としての動きを意識していなかった、指導者には何の権限もないといった被災地支援における認知症介護指導者の立場や役割の不明確さに関する意見があった。一方で、認知症介護指導者として、被災地の認知症ケアの向上に貢献できた、貢献できる部分があるとする意見があった。その他、同期の認知症介護指導者のネットワークなどが活用されたという意見や、認知症介護研究・研修センターからの情報発信が役立ったなどの意見があった。

#### ◆組織的に支援を行う必要性に関する意見の一部

・ネットワークを駆使し、個別に動くのではなくシステムとして確立した上で支援体制を整える。決して感情で動くものではない。受入れ側の状況等をふまえた上で自立した支援活動ができるようにする。・危機管理意識の醸成に努める。

・Being等の団体を通じて活動をできたらと思います（個人でバラバラではなく…）

・勝手なお願いですが、何らかの事業所に雇われる身としては、センターなどから県を通して「派遣要請」が事業所にあると、もっと積極的な支援ができるのに—と思いました。

環境の変化、心身のショック等で避難先でも仮設住宅でも、認知症の方の辛い状況を報道やネットで見聞きし、被災地の指導者からも聞いていた。全国の指導者間のネットワークや協力体制等のマニュアルなど具体的なものが作成され、活用できると早めの対応もできるのでは？

#### ◆認知症介護指導者の立場・役割の不明確さに関する意見の一部

・指導者として限定した立場では、どのような働きをすれば良いか難しい。

・所属先によって動きに制限があり、指導者として何をすべきかより、個人で何をすべきかに重きがかったと思う。指導者には何も権限はないので一般人と同じ。

・それぞれの事業所によって、指導者も立ち位置があるので、独断行動はできないと思う。今回は、

指導者としてというよりも、同じ地域の事業者として何ができるかを考えた。今後は確かに指導者として何ができるのかも考えた方が良いと思う…

・実際の被災地では、“認知症介護指導者だから”ということで、特別の役割等を担うことは考えつきません。もし今いる地域に、今後大きな災害が訪れた場合に備えて、指導者として「避難所に認知症の方がいらっしゃることが想定されるから、避難所にきた認知症の方を、地域のグループホーム等の事業所が受け入れられるようにする、その為の体制作りを平時のうちにしておく」というような事は必要かなと思います。

#### ◆被災地における認知症ケアの向上への貢献に関する意見の一部

・各施設が限られたスペース(空間)の中で受け入れを行い、認知症の方が少しでも安らぐことができる環境に配慮したこと、又、被災者同士のつながり、職員、家族とのつながりを通じ、安心できる支援の提供が大切であると思った。

・現地の方に多くのアドバイスができれば役割が果たせるのではないかと。(支援できる方にどのように関われば良いか等を一緒に考えてあげる)

・心のケアや居心地のよい環境作りといった点では、指導者の力量を発揮できる部分であったと思う。

・指導者としては支援を通して、被災地での認知症の方の生活を知り、その事を伝えていくといくことを通して、災害時の対応や支援への協力とつなげていく。

・制限ある環境の中での認知症の人へのアプローチ

・長期的な支援になることを想定して、組織的に何ができるのかを検討することが大事だったと感じています。そして、被災高齢者の心のケアや居心地の良い環境作りはまさに指導者の力の見せ所だったのではないのでしょうか。

・被災後の避難生活で、認知症の出現をみた例は数多いと思う。もっと、行政が私達を活用してくれれば、例えば(相談窓口など)サポートできたのではと思う。個人情報の保護も時と場合によるのではと思った。

・避難場所での認知症の人に関わる(支援)人達へ、認知症の人達を正しく理解していただけるように伝える事。安心できる環境作りなど。

#### ◆指導者間ネットワークの活用に関する意見の一部

・全国各地に仲間が居るため、お互い協力し合えての支援が行うことができて良かった。

・全国としての組織力が情報、支援活動に貢献していたように感じた。

早期に支援体制を作られ良かったと思います。まだまだ継続して行かなければならないと思います。

・早い段階でマニュアルが出され、ネットワークの強さを感じました。又、被災地支援に入った仲間をサポートする事も、間接ながらではあるが大切だと思った。

・同期生が積極的に現地に動いてくれて、その同期生から指示をもらい期生の仲間がいっせいに

動いてくれたことに感心しました。

#### 17) 被災者支援をおこなわなかった、もしくはおこなえなかった理由

被災者支援をおこなわなかった、もしくはおこなえなかった理由について自由記述で尋ねた。結果、126 人の回答を得た。理由の中で最も多かったのが、仕事の都合で職場を離れられないといった理由で 54 件(42.9%)だった。具体的には、小規模の事業所のために抜けることができないといった理由や、責任ある立場のため抜けられないといった理由が挙げられた。その他、ボランティアや派遣職員の登録はしたが依頼がこなかった、法人内で許可がおりなかった、法人内で派遣していたが自分には依頼がなかったといった、組織的な依頼やシステムに乗れなかったという理由は 28 件(22.2%)だった。その他、家族の介護や育児、自身の体調不良などの私事を理由にあげたものは、22 名(17.5%)だった。他に、遠方であったから、現地の調整がつかなかったから、事業所が被災したためといった理由があげられた。

#### ◆職場の都合等の意見の一部

- ・業務の都合で現場が離れられなかったため。
- ・現在施設で働いており、職員数が少なく行えませんでした。募金活動には参加しました。
- ・個人で営業している事業所の為(スタッフ10人以下)業務に余裕がなく、市内の困難事例の認知症対応で支援できる状況ではありません。
- ・施設では代表1名が1週間、釜石の施設に応援に行った。業務的に1名の配置なので、休日を連続し取るのが困難であった。
- ・施設の要として、施設をあける訳にはいかなかった。また、震災後の物流の混乱、余震による停電等、本震で大きな被害はなかったものの、気が抜けない状態が続いていたため。

#### ◆組織的な依頼やシステムに乗れなかったという意見の一部

- ・法人からの要請がなかった。
  - ・業務の都合。・支援依頼における登録は行っていたが、特別依頼はなかった為。
- 県のボランティア依頼について申し込んだが、返事がなく実質上行けなかった。懐中電灯、電池などの必要物品を送ったのみとなった。
- ・現場の人員減による施設ケア低下をよしとしなかった。許可が出なかった。
  - ・直接愛媛県からの要請に対して1ヶ月間は行けると回答しましたが、結局要請はなく、個人的に行こうと思った矢先に病気になり断念しました。別の形で、会社で募金をあつめ送ったりしました。
  - ・登録はしたが(受入れ)希望なし。

#### 18) 震災をきっかけに行った自施設の防災対策

今回の震災をきっかけに行った自施設での防災対策について自由記述で尋ねた。結果、404 名

の回答を得た。

そのうち、設備・備蓄の見直しに関する内容が記載されていたのは、174 件(43.1%)だった。また、マニュアルの見直しや連絡体制に関する内容が記載されていたのは 133 件(32.9%)だった。他には、勉強会や研修会の開催や参加、行政や近隣、他の施設間のとの防災協定やネットワーク形成に関する記載が主にあった。設備・備蓄の見直しに関する具体的な内容として、停電に備えた、自家発電機等の設備に関するものが多かった。また、防災グッズや食料品、飲料水に関する記載も多かった。マニュアルの見直しでは、連絡体制に関するものでは、防砂マニュアルの作成、見直し、職員・家族への連絡手段の構築、避難経路の確認や、防災マップの再確認などが主な内容だった。

#### ◆設備・備蓄の見直しに関する記載の一部

- ・発電機の購入・ポンプの整備・食糧備蓄の見直し・施設全体での防災訓練・防災対策(マニュアル)の見直しと整備
- ・発電機を準備し、井戸と温泉をくみあげられる体制をとった。
- ・発電機を利用した照明を各所に設置した。又、非常用コンセントも各部所に 1 ヶ所ずつ用意し、電子レンジや吸引機等の使用を可能にした。
- ・反射式のストーブの購入とランタン、乾電池の備蓄、車両燃料不足時のスタッフの送迎支援。
- ・非常食の充実、家具の転倒防止対策。
- ・非常食の備蓄を増やす、カセットコンロの購入。避難経路の確認など。
- ・非常用食糧、水のストック量
- ・備蓄食の再確認と量の検討程度。オムツ、おしり拭き等の備蓄。

#### ◆マニュアルの見直しや連絡体制に関する記載の一部

- ・防災時のマニュアルを見直し、より具体的なものを作成
- ・防災マップ作り、再々々防災訓練、家族支援の方法と、行政をまじえ何度も話し合いや支援をお願いしますと伝えました。

防災マニュアルの見直し。地域の方の中の要支援者を把握し、法人として救護、避難の受

- ・防災マニュアルの見直しを行った。避難訓練の内容を検討し、回数を増やして行った。キャリアダ(利用者様を階段から降ろす機材)の購入を行った。
- ・現在、東海、東南海、南海地震、3連動地震を想定しての災害対策を検討しています。現時点では津波に対しての避難マニュアルが作成できました。今後、それ以外の事態に対しての対応を検討する予定です。また、従来我々の地域では避難訓練は年に 1~2 回しか実施していなかったもので、今後は 2 か月に 1 回程度は実施する予定です。また、実際には1次避難(まず生命を守る)2次避難(1次避難より数日の間・利用者と職員の安全と食事、排泄、睡眠等を確保する)3次避難(安定した生活が継続できる体制を作る)というように行政に頼らなくても最低限のことは自分たち

で確保できる体制を検討しています。

#### 19) 今後の被災者支援について予定や意向

今後の被災者支援についての予定や意向について。「支援することが決まっている」「支援する方向で現在調整している」「具体的になっていないが実施することが検討されている」「きっかけがあれば支援してみたい」「計画も意向もあまりない」での選択肢で尋ねた。また、その具体的内容について自由記述で尋ねた。(Table15)

結果、「きっかけがあれば支援してみたい」が最も多く 320 人(61.3%)だった。次いで、支援することが決まっているが 57 人(10.9%)だった。

「支援することが決まっている」と回答したものの、予定や意向についての記載内容としては、募金・義捐金に関するものが、13 件、物資に関するものが 7 件、人材の派遣に関するものが 8 件、被災者の受け入れに関するものが 8 件だった。その他、多様な活動予定が記載された。(Table16)

「支援する方向で現在調整している」と回答したものの予定や意向については、ボランティアの派遣や募金活動などが記載された。(Table17)「具体的になっていないが実施することが検討されている」と回答したものの、予定や意向についての記載内容としては、募金・義捐金に関するものが 6 件、被災者の受け入れに関するものが 6 件、ボランティア等の派遣に関するものが 6 件だった (Table18)。要請があればなんらかの支援を行うとしたものは、7 件だった。その他として、チャリティー研修予定がある等の記載があった。(Table19)

Table15 今後の被災者支援について予定や意向(N=522)

| SA |                           | 人数  | %     |
|----|---------------------------|-----|-------|
| 1  | 支援することが決まっている             | 57  | 10.9% |
| 2  | 支援する方向で現在調整している           | 14  | 2.7%  |
| 3  | 具体的になっていないが実施することが検討されている | 47  | 9.0%  |
| 4  | きっかけがあれば支援してみたい           | 320 | 61.3% |
| 5  | 計画も意向もあまりない               | 51  | 9.8%  |
| 6  | 無回答                       | 33  | 6.3%  |

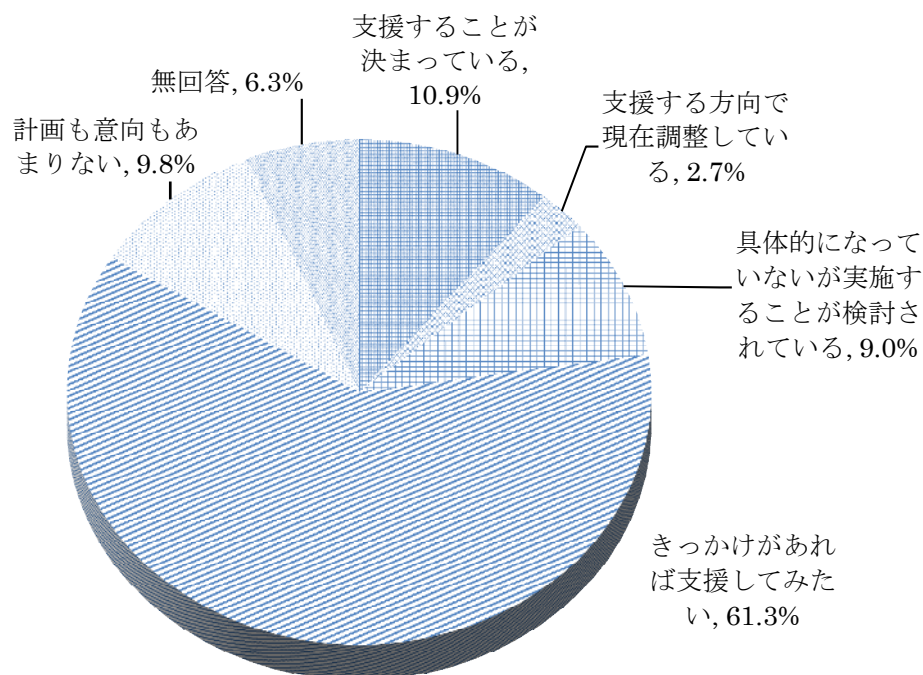


Figure5 今後の被災者支援について予定や意向(N=522)

Table16 「支援することが決まっている」の具体的な支援の予定や意向の一部(54 件)

- ・仮設住宅への継続的な支援。出前デイサービスの取り組み。一回、夏に「納涼祭」的なものを実施しました。今後もスタッフの調整をして仮設住宅がなくなるまでは、支援したいと考えています。
  - ・近隣で地震等があれば受け入れる。食品などを 10 日分備蓄する
- 所属法人から現地への派遣ボランティア、これから現地へ行くスタッフへの対応マニュアル作り、派遣に行ったスタッフの記録まとめ、義援金活動など。
- ・全国の中の 10 法人で結成したネットワーク「災害時法人支援ネットワーク」で、災害が起こったら要請を受けなくとも駆けつけ合う仲間集団で、年 1～2 回交流会を通じて「顔のつながりのある」関係を作っています。
  - ・団体によるサポートセンター支援への参加
  - ・定期的に支援を行った事業所に連絡している※必要なことがあれば、いつでも言っていただきたいメッセージをお伝えしている。
  - ・被災施設リーダーが実施する職員のメンタルサポートの協力
  - ・被災者就労支援
  - ・被災者の心のケア(喫茶の提供、カラオケバス、フットマッサージなど)。ペットの支援(福島県いわき市)(滋賀県)
  - ・被災地域の枯杉を使い、絆ベンチ作成の足がかりを作り、その後の派遣職員の活動により、ペ



ンチが商品化された。今後の復興への支援を継続的に話し合っている。

- ・被災地における専門研修会の開催
- ・復興支援として、情報交換会の実施や人材マッチング、今後の備えとしてシステムの構築や啓蒙活動。
- ・ベクレル測定等
- ・法人がサンダーバード宮城県支部となっており、サポートセンター運営基礎講座等を進めている。(職員派遣も検討)
- ・要擁護者避難(九十九里地域)の計画へ参画
- ・3/11～3/15 法人独自で義援金バザーを行う。被災地から物産を借り入れて販売も予定している。

Table17 「支援する方向で現在調整している」の具体的な支援の予定や意向(14 件)

- ・支援人材の確保→要請があれば対応可能状態への調整・募金活動の継続
- ・2～3 月にかけて介護士の派遣を調整中
- ・4月以降(不明)に、現地ボランティアの職員派遣を予定しているので、その手配や段取りなど。
- ・介護支援専門員協会より、引き続き義援金等を送る。
- ・継続する予定
- ・現在、雪の影響等で社協の支援が見送られていますが、再開したら参加する予定。
- ・現在支援者と共に行動しているが、自身が行けないため後方支援(物品等)のみ
- ・現地依頼があれば、法人全体でグループ班として現地でのボランティア活動をしていく。
- ・震災の状況により何が必要であるかを判断し決めて実施。
- ・定期的な訪問
- ・募金活動
- ・北海道老施協として介護ボランティアの第2陣を派遣する予定
- ・ボランティア派遣(職員を)シフトの調整をして。
- ・毎年の秋祭り行事の中でバザーを通して10年間は続けたいと思っている(支援金)

Table18 「具体的になっていないが実施することが検討されている」の具体的な支援の予定や意向の一部(41 件)

- ・市や地域総合病院と連携し、防災対策計画に参画、震災の被災状況で対応していく。9月に新築し引越予定で地域住民も受け入れ予定である。本部機能の円滑化の為活動予定。
- ・職能団体等を通じて関わっていく予定。
- ・他県法人同志での協定を法人で作っている。
- ・法人全体で検討していますが、時期等も現段階は調整中です。
- ・法人全体では障害者施設には支援に行っています。認知症関係の支援は検討していく方向に

提案していきます。

- ・法人として支援を検討していく予定だが、今後、被災者のニーズの変化を注視しながら適した支援をしていきたい。

- ・法人より、定期的にあるのではと思う。

- ・有志で研修会を企画、運営し、参加費を寄付できるようなチャリティー研修の話がでているが、実現には至っていない。

- ・社会福祉士会を通じて、居を移し、避難生活をされている方への支援

- ・避難施設の再開にあわせた、ご利用者の帰郷に向けた調整

- ・近くの福祉施設や病院間での患者、利用者の受け入れ支援等

- ・被災地にボランティアを派遣

- ・物品等の寄付

- ・法人として、宮城県気仙沼市の高齢者施設への支援が決定しております。これに対し、当事業所からの職員派遣を検討しています。

- ・募金（デイでご利用者が作品を作りバザーを行う予定）

## IV 考察

### 1) 地震発生後の経過でみる被災地での支援内容と課題の状況

#### ①地震発生から1か月経過まで

3月11日の地震発生から1か月経過までの現地での支援内容をみると、物資の支援、高齢者の介助、炊き出し、避難所での整容支援、避難困難者の支援、老人ホーム利用者等の支援、独居高齢者の避難所への移動支援、高齢者のニーズ調査、ボランティアのコーディネートなどが行われていたことがわかった。物資の支援の内容をみると、豆腐、納豆、リンゴ、ジュース等といった食料品、灯油などの燃料に加え、自動車、PC、女性下着、文房具、介護用品、カバンといった、多様な物品の支援が行われていた。

支援を通して感じたことの記載をみると、遠方からの支援についての移動手段の困難さ、ガソリンや、水、温くなるものの不足などの物資に不足に関するものの記載があった。関連して、物資が集まってもそれを取り扱う窓口がなかったことや、必要な物資の内容が刻々と変化していく状況などがあげられた。現地での支援の仕組みについては、役割分担がうまくいかず、現場で指示を出すものがある場合は短時間での作業が進むが、そうでない場合は支援が重複したり、逆に抜けてしまったりといった状況があったという意見があった。また、情報不足から、支援にいったはずのボランティア活動がむしろ混乱を拡大させるような事もあったという記載があった。全国各地から人と物資が集まる中でそれを配給するための窓口や、人の手配や采配する役割の者が十分に準備できなかった状況があったことが伺われる。

台帳など消失したなか、民生委員、地域包括支援センターなどが足をつかって要援護者宅を訪問し、避難させたり、施設も被害を受ける中で人手が不足していたという意見があった。あわせて、連携の大切さや、個人の支援の限界性を感じたという意見があった。以上から、施設、在宅とも、要援護者の支援のためのマンパワーが不足していた状況が推察される。

また、避難所の状況は、トイレなどに行くこともままならない状態や、プライバシーの確保がない、安心できない、落ちつけない雰囲気だったという内容が記載され、避難所の生活が過酷な状況であったことが示された。

#### ②地震発生後1か月から3か月の間

地震発生後1か月から3か月の間の支援内容をみると、避難先での生活支援、実態調査、派遣者のコーディネート、被害家屋の片づけ、仮設住宅の準備、瓦礫の撤去、支援物資の運搬・配給、物資の支援、地域包括支援センターへの支援、被災した施設への支援、被災者への心のケア、補助金の申請事務、情報交換会・相談会の実施などの内容が記載された。

避難所等への生活支援としては、訪問入浴車を持ち込んだ入浴介助、社協指示による炊き出しボランティア、食支援活動(栄養士会と連携)、避難所の運営・避難所での高齢者介助、今後の支援のコーディネート、壊滅したGHから一時的に生活している施設での生活支援、在宅でのリハビ

リテーションなどが実施されていた。また、実態調査や派遣者のコーディネートといった支援では、高齢者の状況調査、被災施設・地区社協・市町村に実施した「復興支援調査」、老協組織を活用した施設介護職員の派遣コーディネート、ケアマネボランティア派遣のコーディネート、高齢者の安否確認、国・県・施設・医療機構等の情報のマッチングを通じた支援等の記載があった。

以上の支援内容をみると、地震発生当初の状況と比較してより組織的な支援の規模が拡大し実施されていることがわかる。また、仮設住宅の準備が開始されていたり、補助金の申請事務、被災者への心のケアや情報交換会、相談会の実施などの支援が実施されており、当初の緊急的な対応からの変化が読み取れる。

支援を通じて感じたことをみると、「職能集団（専門職）によるボランティアが被災地入りしていたが、全体を通して指揮系統するコーディネーターが不在」「避難所でのコーディネーターの存在の有無によって、情報・支援の充実度が大きく異なった。」「マッチングがなかなか進まない状況があった（それぞれの職域団体の動きや行政、社協の絡みで、迅速な支援調整にならなかった）。結果的に個々の繋がりにより、以降の支援調整を行った」といった現地のコーディネート機能や調整役の重要性を指摘する記載があった。様々な団体や個人が被災地を訪れているなか、それらの有機的な連携や組織的な対応が、コーディネーターや調整役の不在によって必ずしもうまく進まなかった状況が指摘されている。

また、「最初は水や食料、その後は日用品、夏物依頼、衛生用品、車椅子、電動ベッド、車両等、時季や場所によるマッチングの難しさを痛感。」「物資はたくさんあったが、食事での栄養面、子供達の精神面のフォローが必要であったように感じた。」「現地に物資はあふれていたが当事者の手もとに届かない。配りきれない状況があった。」など、緊急避難的な状況から復興を想定した段階に差し掛かり、ニーズの変化に対応しながら、大量にある物資をどのようにマッチングさせていくかの課題があったことが指摘された。

「震災後 3 ヶ月経過した後の援助であったが、復興までにまだまだ多くの時間、人員、費用が必要で、継続的な支援を絶やしてはいけないと感じた。」「事業所で 3 グループに分かれて交代で施設へ出向きましたが、介護はもっと計画性を持って中・長期的に行わないと難しいと痛感しました。」「土地・資産・職員の確保等の課題が大きく、まだまだ復興の道程は遠いので、中長期の支援が必要である」といった、一時期の混乱状況が落ち着くなか、改めてその被害の大きさと復興への道のりの困難さが実感され、中長期的な関わり必要性を指摘する意見もみられた。

その他、「指導者は施設のリーダーで、精神的にスタッフを支援する立場であるため、頑張りすぎて自分自身の辛苦を吐露する場や話せる相手が必要だと思った。」という、リーダー職への支援の必要性に関する意見や、「今回支援に行かせては頂いたが、どれだけ手助けになったのか不安。逆に職員さんたちのストレスにならなかったか…。」という、ボランティアすることがかえって、現場のストレスにならなかったかを心配する声もみられた。

#### ④地震発生後 3 か月から 6 か月の間

地震発生後 3 か月から 6 か月の間の支援内容をみると、避難所での認知症高齢者の介護、入

浴サービスのお手伝いといった介護等の生活の支援に関すること、物資の支援、調査の支援など、おおむね地震発生後 1 か月から 3 か月の間と同様の内容がみられた。

支援を通して感じたことをみると、「震災から 3 ヶ月経過していたので、支援のシステムが確立されていた。」「ニーズを整理して目的を絞った支援活動が行われていて、1 つの有効な関わり方だと思った。」という、システム化された中で有効な支援が行われていたとする意見がみられた一方、「受け入れ側の調整だと思うが、何をしたら良いのか、明確にしていただけると動き易いと感じた。」という受け入れ側の調整の必要性に関する意見もあった。

現地の状況としては、物資・スタッフの不足として、「居住環境や人的環境が整わない中での、利用者の方々への負担が大きく見られた。」といった意見や、ケアを継続するために不可欠な清拭布、リクライニング車イス、レクリエーション用具等の物品や食材の不足を心配する意見がみられた。また、「現地で県社協の人と話し、疲労感等あり、事前に自分達ができる内容、期間等を明確にして被災されている人の支援ができれば良かったのではと反省している。」といった現地スタッフの疲労を心配する意見があった。

その他、派遣されたスタッフについて、「職員にとって勉強になりました。」とする被災地支援の体験がスタッフの成長につながるという意見がある一方、「派遣者への心のケアと、派遣者への細やかな指導が必要」とする派遣者へのケアや指導の必要性に関する意見があった。

#### ⑤地震発生後 6 か月以降

地震発生後 6 か月以降に実施された支援内容としては、イベント等への支援、物資の支援・寄贈、仮設住宅の調査、地域包括支援センターへの支援などがあげられた。イベント等の支援については、音楽交流会、職員交流会・老人保健施設でのイベントの手伝いと交流、サロン活動への参加といった活動が記載された。仮設住宅への調査としては、仮設住宅での健康調査票の回収、聞きとり調査(地域包括支援センターの手伝い)、仮設住宅へ訪問、住環境整備ニーズ調査・住環境整備の調査等があげられた。地域包括支援センターへの支援としては、被災地域を 2 人 1 組で訪問し、自宅に戻って生活している人達の話聞き、チラシを届けるといった活動や、アンケートを実施したということが記載された。地震発生後から半年以上が経過し、物資やマンパワーの提供といった直接的、一方通行的な支援から、現地とのイベントの協働開催、地域包括支援センターの事業への参加、ニーズ調査など地域の自立的な活動への支援や間接的な支援へと関わり方が変化していることが覗かれた。

活動を通じて感じたこととしては、「仮設住宅の地区ごとに支援が行き届いているところと、そうでないところとのバラツキを感じた。地域ごとの支援を感じた。」「段差や手すり設置が困難な状況等、暮らしにくい環境の中で高齢者の自立が妨げられ、廃用症候群の進行が懸念された。」「自宅に戻っていらっしゃる人達(修理後、修理中)には、訪問者も少なく話を聞いてほしいという思いを持っていると強く感じた。」「冬期間の寒さ対策の必要性。人里離れた仮設住宅街では高齢者の閉じこもり予防対策が重要。」といった、仮設住宅入居後のニーズや自宅へもどったあとの生活ニーズに関する意見があった。これらをみると、もはや単なる人出や物量の問題ではなく地域に根

差した中・長期的な保健的・福祉的アプローチに関するニーズが高まってきている様子が窺われる。

## 2) 被災地支援における認知症介護指導者の役割

本調査の結果、回答した認知症介護指導者の8割弱が今回の東日本大震災における被災者や被災施設への支援を行っていた。そのうち、被災地へ直接赴いて支援を行ったものは、15%弱であったが、被災地域が東北地方であり、また地震発生後しばらくの間交通機関等の不便があったにもかかわらず、遠くは九州地方から現地に赴いた指導者がいたことが明らかになった。支援を行った時期については、3月、4月が全体の8割以上を占めたが、半年が経過した9月以降も継続して支援を行っている指導者がいることが明らかになった。

被災地に行かず支援を行ったものの支援の方法をみると、認知症介護指導者が所属する所属事業所・法人を通して支援を行ったものが87.7%と大半を占めた。また、所属する専門職団体を通じて支援を行ったものも43.5%、個人的な支援を行ったものも25.8%いたことが明らかになった。専門職団体も多様であり、認知症介護指導者が多様なルートを通して直接的・間接的に支援を行ったことが示唆された。今後の被災地支援について予定や意向について尋ねたところ、回答者の8割以上が支援の予定、前向きな支援への意向を示しており、また、6割以上が「きっかけがあれば支援してみたい」と回答しており、支援への非常に高い意欲をもっていることが示唆された。

被災地支援における認知症介護指導者としての役割や動き方についての意見を自由記述で尋ねたところ、指導者として力を発揮するためには、組織的に支援を行う必要があるとする意見があった。また、実際の支援においては認知症介護指導者としての動きを意識していなかった、指導者には何の権限もない、といった被災地支援における認知症介護指導者の立場や役割の不明確さに関する意見があった。一方で、認知症介護指導者として、被災地の認知症ケアの向上に貢献できた、貢献できる部分があるとする意見もあった。加えて、支援全体を通して感じたことについて自由記述で尋ねた結果を見ると、指導者の支援への意識として、支援する意思はあったが、様々な都合からできなかったといった内容を記述したものが全体の2割強存在していた。また、物品や金銭による支援を行った背景にも、被災地へ行くことができない代わりにそうした支援を行ったとする記載も少なくなかった。前述の今後の支援活動への意向における6割強の「きっかけがあれば支援してみたい」とする回答もふまえると、今回の被災地への支援にあたっては、被災地へ赴くこともふまえた意向をもちながらも、被災地へのアクセスするための情報や手段がない、所属事業所の事情で長期間仕事を離れられないといった理由から支援を断念したという指導者が一定数存在していたことがわかった。

被災地支援における活動では、認知症介護指導者の立場にこだわらず、物資の移送や配給、がれき撤去など様々な活動を行った姿が伺われる一方、避難所での認知症者の生活状況等に関して、認知症介護指導者としてかかわるニーズがあるとする意見もみられた。

以上のことをふまえると、今後、被災地において認知症者がどのような状況におかれていたのかの詳細な状況を分析しながら、認知症介護指導者としてどのような役割が考えられるのか、ま

た認知症介護指導者を現地で活かすための組織や仕組みはどのようなことが考えられるのかについて検討していく必要性が示唆されたといえる。

### 3) 今後の防災対策について

今回の震災をきっかけに行った自施設での防災対策について自由記述で尋ねた結果、全回答者の7割強の回答があり、そのほとんどがなんらかの準備をしている、ないし予定があるとする内容であった。

記載された内容としては特に、設備・備蓄の見直し、防災マニュアルの見直しや職員等への連絡体制の見直しに関する内容などが記載された。他設備・備蓄の見直しに関する具体的な内容としては、停電に備えた、自家発電機等の設備や高層階からの利用者の移動のための設備の設置に関するものが比較的多かった。また、防災グッズや食料品、飲料水に関する記載も多かった。マニュアル・連絡体制に関するものでは、防災マニュアルの作成、見直し、職員・家族への連絡手段の構築、避難経路の確認や、防災マップの再確認などが主な内容だった。他には、勉強会や研修会の開催・参加、行政や近隣、他の施設間との防災協定やネットワーク形成に関する記載が主にあった。

以上をみると、今回、調査に回答した指導者が所属する施設では、その大半が震災を受けてなんらかの防災対策の見直しを行っているか、またはその必要性を感じているとする状況が明らかになった。その内容は大規模停電に備えたものや、物流がストップすることに備えた備蓄の見直しなどで、今回の震災の状況をふまえたものであることが明らかになった。また、一法人、一事業所単位の防災ではなく、地域や他施設との間で防災協定を結ぶようにするなど、広域のネットワーク形成を進める動きが出てきていることが明らかになった。





## 第4章 認知症介護指導者の被災地支援に関する ヒアリング調査

## I 調査の目的

本調査は、東日本大震災等の震災において、被災地の支援活動を行った認知症介護指導者の実態を把握するとともに、それを通して、被災地支援の課題及びそのあり方について検討することを目的に実施する。

## II 調査の方法

### 1) 調査対象と抽出方法

調査対象は、東北関東大震災及び福島県における原発災害加えてその後の各地での震災において、被災地の支援活動を行った認知症介護指導者とし、認知症介護指導者研修を担当する研修スタッフからの紹介をもとに任意に抽出した。

### 2) 調査時期

#### ① 第一次調査

平成23年8月18日

#### ② 第二次調査

平成24年2月16日

### 3) 調査方法

調査対象者より支援活動報告を20分程度してもらい、それらをふまえた上で、グループディスカッションを行う。

### 4) グループディスカッションの論点

以下の論点に留意しながら、自由に意見を交換する。

#### ① 第一次調査

- ・支援活動へのアクセスと現地受け入れの実際と課題
- ・被災地において支援を行ううえで、支援者に求められること
- ・被災地で出会った認知症の人の様子

#### ② 第二次調査

- ・支援活動へのアクセスと現地受け入れの実際と課題
- ・被災地において支援を行ううえで、支援者に求められること
- ・被災地で出会った認知症の人の様子

### 5) 倫理的配慮

協力の得られた調査対象者には、文書によって研究の目的・方法及び倫理的配慮を説明し、同

意書への記入を以って同意を得た。研究参加への同意は強要せず、研究のどの段階においても、同意を取り消すことができること、その際には研究者に口頭または文書でその旨を申し出れば過去にさかのぼって研究データを破棄することを説明した。

また、文書においては、当該調査に協力しないことによる不利益は一切生じないこと、インタビューの結果は東京センター内の施錠できるスペースで厳重に管理し、データ入力終了後溶解処分すること、調査結果の入力・分析は、外部の業者へ委託することを説明した。

公表にあたっては、調査対象者が特定できるような氏名、地名、施設名等の記載する場合は、記載内容を事前に調査協力者に確認をしてもらったうえで、公表することを説明した。

## 6) 調査対象者

### ① 第1次調査

東京都 認知症介護指導者(特別養護老人ホーム 副施設長)

新潟県 認知症介護指導者(老人保健施設 副施設長)

埼玉県 認知症介護指導者(法人 理事長)

熊本県 認知症介護指導者(グループホーム 施設長)

### ② 第2次調査

宮城県 認知症介護指導者(社会福祉法人 住居支援部長)

新潟県 認知症介護指導者(特別養護老人ホーム 施設長)

千葉県 認知症介護指導者(特別養護老人ホーム 施設長)

鳥取県 認知症介護指導者(グループホーム 施設長)

### Ⅲ 結果1 第1次調査結果

#### 1) 活動支援報告

報告1 個人的なつながりを通じた被災施設への支援（熊本県 認知症介護指導者）

##### 1. 支援活動の内容

###### ◆熊本から大船渡へ

###### ○出発の準備と道中

- ・地震発生の当日、12月に研修で行った大船渡の町がテレビで津波に飲み込まれる映像をみた。
- ・3日目に人も食料も足りないという連絡がGH協会にあり、まずは行ってみないということで、準備をはじめた。
- ・3月20日から8日間を使って岩手に行く。被災地へは緊急車両のみで一般の人は行っても駄目だといわれたときに、「私たちは一般の人だろうか」と戸惑ったが、途中カーフェリーを使って2泊三日で移動する。1回目のあともそのあとが気になって、5月2日から1週間赴く。若い職員を2名連れて行き、そのままその職員は1週間留まった。
- ・マスコミからも現地へ向かうことにストップがかかっていた。マスコミを信じていたら現地に入れなかったのではないかな。
- ・介護職は専門職には入らず、一般に入ってしまう。すぐに助けに行けないもどかしさがあり、システムがないのに困った。緊急車両は、太平洋側をとおれず、一般車両として日本海側を通らざるを得なかった。

###### ◆大船渡の状況

###### ○支援先の施設の状況

- ・小規模多機能とグループホームを開設して間もない法人へ行った。小規模多機能の事業所に180人の避難者を受け入れていた。
- ・介護職の自宅で避難者を受け入れているところがある。山から薪を拾ってきて暮らしている。配給のお米は一人1号であった。ガソリンがなく買い物に行けない状況であった。
- ・ご利用者も、話がふとやむと、津波の話がでてきてしまう。認知症の人でも強く印象に残ったと思った。
- ・職員は職場で働くほかに地域では被災者支援にあたっていた。
- ・慢性的な疲労の蓄積があり、法人の職員が事故にあったりしている。
- ・外部からの避難者は低体温症から命を落とす人が多かった。遺体の処理が間に合わず、老健の一角に遺体安置所があるという状況であった。

- ・外出もできず、買い物にもいけず、認知症の利用者を閉じ込めるような形になってしまい、鬱屈しているような雰囲気が3月にはあった。5月にいったときには大分解消されていた。
- ・認知症介護の現場に入るには、認知症介護の専門職でないと、現場には受け入れたくないと言っていた。
- ・物資の不足、2泊3日シフトで働いていた。被災後3日目に職員の家族の生存確認のため、自宅に戻ったため、人数が不足した。
- ・地域密着型に近い仮設が作れないかと思ったが、行政が被災しており、広域のデイサービスのようなものしか作れなかった。
- ・避難された地域住民に、認知症ケアの現場をみてもらい、「本当に大変なことをしているというのがよくわかった」という声をかけられた。職員は認知症ケアに関する理解が生まれてよかったという声もきかれた。

#### ◆熊本での活動

○何かしないとせかされて

- ・自分たちも心が苦しくなり、帰ってきたら何かしなければならぬとせかれて行動した。熊本の空き部屋で被災者を受け入れようとしたが、言葉の壁があり、現地の人でも東北の復興を考えており、現地に残りがたがった。そこで九州までくるのは無理ではないかと思った。
- ・熊本でも考えていかなければいけないと思い、現地に入ったレポートをいろいろな人に送った。
- ・子供たちに伝えていかなければならない。自分たちの周辺地域の防災についてももう一度考えていかなければならないと思った。
- ・グループホーム協会の現地のコーディネーターに依頼して、物資などを送り先の調整をした。
- ・熊本でチャリティコンサートを実施した。福祉系の学生のたくさんの協力を得た。

○支援にいったことで抽象受ける

- ・支援にいったことで、中傷を受けたことがあった。行ったところが有名だから行ったんだろう。様々な団体で考えがあり、自分たちのところで支援するからやらなくていいなどということもあった。自分のところを連絡先にすることで目立とうとしているのかなどという電話を受けた。
- ・それでもやらなくては行けないと鈍感力を発揮して、支援を通してできた友人たちの存在にも助けられ、乗り切った。

## 2. 支援活動からみえた課題

### (1) 緊急介護の必要性

- ・緊急介護が必要ではないかと思った。最初助かった人も、低体温症で多くの方がなくなったり、さみしさから今も命を落としている人がある。

(2) 介護現場まで支援の手が届かない

- ・避難しているひとは、介護現場にもたくさん集まっている。ギリギリの人数でやっているのに、マンパワーが必要なのだが、そこはなんとかやっているだろうと思われる。

(3) 物資が手に届くまでの遅れがある

- ・物資が運ばれてくることが遅れてしまう。物資がほしいといっても、行政は、必要なものをFAX・メールしてくださいと平気で言う。身分証がないと物資を受け取れない。いざとなったときの身分証や、緊急介護のジャケットなどがあればよいのと思った。おむつがほしいと書くと、一袋かふた袋しかこないとか最初のころはあったようだ。

## 報告2 法人での被災者の受け入れ（新潟県 認知症介護指導者）

### 1. 支援活動の内容

#### ◆中越地震の経験からの迅速な対応

##### ○迅速な新潟県の対応

- ・新潟県は平成16年に中越地震、平成18年に中越沖地震を経験していた。過去の2度の震災では、被災者の受け入れなど、かなり動いていた。平成18年には、県老協の派遣を通して避難所の運営にかかわった。かなり災害時の受け入れ、行政との連携にノウハウがあった。県としてもノウハウを積み重ねていた。
- ・震災当日より新潟県は動き始め、知事が全面的な支援を行うことを表明、緊急受け入れの可否についての連絡が入った。
- ・新潟県は、福島県を中心に支援を行うことになった。

##### ○被災者受け入れのための緊急会議の開催

- ・法人としては、震災当日に緊急の会議を開いて受け入れをおこなうことを話し合う。当初は県内で被害があればそちらを対応しようと話し合っていたが、福島県より新潟県、新潟県より長岡市を通じて、福島県の南相馬市と浪江町の被災施設を受け入れてほしいとの依頼があった。
- ・その前からいくつか受け入れの打診があったが、これまでの経験から必ず行政を通してから対応した。今回の震災の規模から考えて、かなりの長期にわたるであろうことが予想され、無期限で受け入れる可能性があった。介護保険、費用、減免、帰宅時

などかならず問題が生じる。直接法人同士のやりとりはせず、時間がかかっても、行政に話をとおしておかないと、問題が生じたときに聞いていなかったという話になる。

#### ◆被災者の受け入れの開始

##### ○福島県へ迎えに行く

- ・原発30キロ圏内の福島県南相馬市、浪江町、老健2施設の利用者の受け入れ117名を受け入れる。
- ・移動の問題を解決するために時間がかかりかかった。バスの運転手は、放射能を恐れて出せず、県警が担当したが、バスの運転になれていないような状況だった。県で手配した大型観光バスで避難可能な利用者40名が福島県内の会津方面の施設で先行して受け入れていた。残された車いす対応の人は、大型バス3台で一人2つの座席を確保した。その調整については法人も関与し、可能な身体レベルについての助言等を行った。寝たきりのリクライニング車いす対応29名の手配は、最終的に法人の判断で福祉車両を手配し、福島へ迎えに行った。その調整の間に、なくなったり、入院したりした方もいた。

21日に大型バス3台で88名が施設へ移動する。翌22日に福祉車両22台、職員46名で福島へ向かい、福島市内の消防署の敷地内で現地からの車両との乗換えを行う。途中、放射能のメディカルチェックを受け29名が施設へ到着する。

- ・迎えに行くのを決めたのは前の日だった。デイスサービス等を調整して23台を確保した。新潟県の職員2名も当日は先導という形で福島へ一緒に移動した。現地では福島県の職員も同行した。看護職員を含め、運転なども対応できる職員を選ぶ。ガソリンが心配だったが、緊急車両の扱いにしてもらい、高速のガソリンスタンドでスムーズに給油できる体制をとっていた。

##### ○迎えの人選

- ・看護職員は救急医療の経験があり、状況の判断が可能なものを人選した。しかし、引き渡しの際に入院させるかどうかについては、実際のところは判断に迷ったとのことだった。
- ・迎えにいく職員については、あまり人選に時間をかけられなかったが、支援に関して法人内で意思統一を図っていたので、それぞれの施設の調整で大きな問題はなかった。

#### ◆新潟へ移動するまでの被災者の状況

##### ○避難を繰り返す

- ・受け入れた被災者のいた施設は、直接津波の被害は受けなかったものの、建物のすぐ近くまで津波がくるような状況だった。津波がひいた翌日に、系列の法人に避難することになったが、その避難をしていたときに、原発で水素爆発が起こった。そのた

め、さらにそこからの避難を求められ、母体の病院・老健へ移動した。しかし、その病院・老健では、医師は検死や被災者の治療などにかりだされて、施設の運営にはまったくかかわれない状況だったという。結局最終的に新潟に来るまでに3から4回の避難を繰り返した。

- ・ライフラインがとまり、食事がとれず、1日1食で過ごしていた。老舗の法人なので、地域の炊き出しの支援などを得ながらしのいでいた。

#### ○事業所の自主解散、県外への避難

- ・事業が成り立たないということで、職員は自主解散となった。目の前の利用者を置いていけないということで残った職員と、いったん県外に避難したが、心配でもどった職員の20数名の職員で利用者に対応した。福島県内の施設はすでに1.5倍の定員超過の状況で、県外施設へ移動の判断となった。

### ◆受け入れ体制の整備

#### ○受け入れの人員体制

- ・夕飯を準備し、嘱託医師が診察して出迎える。
- ・事前に情報をできる限り得ておき、あらかじめ利用者を割り振っておいた。
- ・もとの職員も車両で同乗し、2日間申し送りで留まった。10日間働きつめだったのでやすんでいただく意味もあった。
- ・法人・関連法人内の9施設で受け入れる（老健3施設、特養6施設）施設の定員に応じて割り振る。できる限りの環境を整えるという形で、4人部屋に5人、個室に2人入っていただいたりして対応。

#### ○被災者の状況

- ・着の身着のままで入所された。とりあえずは必要な衣類は職員から衣類の寄付をつのって対応した。後日、元の施設の職員が荷物を届けてきてくれた。
- ・受け入れた方々の平均介護度は3.86で、自力歩行可能な入所者なし、経管栄養17名だった。

#### ○受け入れの3原則

- ・災害時の受け入れの原則として、窓口の一本化した。災害対策本部をつくって、行政との対応、物品等の手配などを行う。今回は4名の職員を配置した。
- ・二つ目の原則として、依頼のあったケースについては断らないこととしていた。本当に大変な人ほどすぐにあがってこないで、後からあがるケースについても精査し、断らないこととした。
- ・三つ目の原則としてサービスの質を確保することがある。多少無理をしても通常の環境をかえず受け入れを行うようにした。廊下やデイルームなどの居室以外の受け入れは避け、5人部屋になっても居室で受け入れることとした。今回、福島からの避難者はできるだけ、部屋をまるごとあけて居室にするなどの対応を行った施設もあった。



○部屋割り、言葉、食事の対応

- ・もともといた入居者は5人部屋になったりした。事前に、入居者には十分に説明を行い、被災者に入ってもらふ部屋は、混乱しない、同意してもらえる人からお願いした。震災に係る減免等を活用して費用負担が過重にならないよう配慮した。
- ・言葉・食事の問題については、言葉を利用者から教えてもらったりして対応した。食事についても大きな問題は存在していない。

◆受け入れ後の被災者の状況

- ・一人は到着直後に入院された。
- ・昨日までで8名が死亡。来初後数日後に1名が死亡、4. 5月に3名ずつ死亡する。4. 5月にかけて入院も多い。徐々に落ち着いてきている。
- ・横浜の有料老人ホームや、北海道函館に特養の手配ができ家族の居住地に移った。
- ・最後は地元でということで、南相馬市の病院へ戻った人がいる。
- ・前の職員が面会に来ると、「前より元気がなくなった」という感想がある。

◆被災者のいた施設の職員の状況

- ・事業の再開ができるかどうか法人で検討しているが、職員はかなり避難等で分散してしまっている。
- ・110数名いた職員のうち、再就職が決まっているのが2人のみという状況だった。当法人でも、避難先が長岡であったため1名が就職した。

2. 支援活動からみえた課題

- ・認知症の方などのリロケーションダメージや、環境・生活面からみた移動の必要性の判断など、福祉的なトリアージの必要性

報告3 東京都からの派遣による支援（東京都 認知症介護指導者）

1. 避難所へ向かう

- ・東京都から依頼を受けて5月28日から6月3日まで宮城県の気仙沼に支援にいった。
- ・当時気仙沼市内に一時避難所に時避難所が60か所程度あるということで4000人の方々が避難生活を送られていた。
- ・色々な県から職員が派遣されていた。気仙沼市内の福祉避難所は6箇所あり、特別養護老人ホームと保育所の福祉避難所2か所に東京都は派遣していた。
- ・特養ではなく保育所のほうに派遣となる。震災前は宮城県が認定している小規模の保育所ということで、児童定員が5人以下である。市街地から車で20分ほどいったところの山沿いにある。

## 2. 避難所の状況

### ○避難所の運営

- ・気仙沼市から委託を受けている関西の業者の職員が常時2, 3名駐在をしてボランティアの受け入れや気仙沼市との調整を行っていた。

### ○被災者の状況

- ・介護認定を受けていない人も避難していた。ご自身の車で避難してきて、明るいうちは自分の家に戻って片づけをし、夜になると戻ってくる人も中にはいた。

- ・15人を定員として受け入れるということであったが、15人はとても入れないような広さだった。5月21日現在で避難されている方は11名であった。

- ・身の回りのことはほとんど自分でできる方で、中には車いすや歩行に付き添いが必要な方がいた。もともと在宅で生活をされていて、地震と津波で被災され、避難されてきた方だった。認知症という方もいなかった。

### ○支援内容

- ・支援内容としては、トイレの付き添い、洗濯、食事の準備、避難所の清潔の保持などがメインとなっている。ライフラインは整っていた。名目は介護付きの高齢者避難所という形になっていた。物資の面で優遇されていて、色々なものが届いた。

- ・医療面では、内科、歯科の先生が必要に応じて不定期に来ていた。看護師が月曜日から金曜日の日中は来て健康面の管理をしていた。栄養士は週2回来て栄養の管理はしていたが糖尿病に対する特別な食事などは対応しきれていない状況だった。

- ・3交代でチームを組んで支援にあたっていた。朝食は、献立にあわせて派遣職員が作った。グループホームやデイサービスのような形で1日が流れていく。

- ・介護保険制度を利用している人は、介護支援専門員の方が来たりされていた。1週間に1回か2回くらいは行政の方が来ているようだった。

- ・スタッフは男性10名で避難所の一角で雑魚寝をしながら生活した。

### ○同じ食材での調理

- ・食材は、量は不自由はしなかったが、同じ食材のため、同じようなメニューになってしまう。日替わりで毎日昼食と夕食をボランティアが作りに来てくれていた。

### ○強い仲間意識

- ・とても仲間意識が強く、色々な思いがありつつも、仲間を思いやってまとまって生活されていた。自分の住まいやお金のことなど、このあとどうなるのかという行政への不満がでてきていた。福祉事務所に不平を言いに行く人、頼りにならないから自分でやるという人など様々であった。

## 2. 支援活動からみえた課題

### (1) 支援に赴くものとしての心構え

- ・行った状況は、事前にもらっていた資料とは違っていた。それはそれとして、行った先

で状況を見極め、臨機応変に動ける職員でないと厳しいだろう。前のグループの状況を聞くと、チームワークがなかったり、次のグループでは行かされた感があったりという状況だった。状況が全然違う、聞いていないという反応をしたスタッフがいたという。

(2) 児童用の住環境での生活

- ・古い建物で、入口を入るとすぐにトイレがあり、トイレも児童向けの小さいもので、足の不自由な方向けにポータブルトイレが用意されていた。タイルも滑りやすく段差があったため、すのこをひいたりして工夫していた。水は流れるが貴重なので、トイレの中におむつを敷いて、何回か使用したらまとめて捨てるという形で対応していた。洗面台も保育園児用の高さで使いづらい。

(3) プライバシーの確保が難しい生活環境

- ・生活スペースはパーティションもなくプライバシーが守られていない。団らんする場所にもいくつかのベッドがあるような状況だった。

(4) 気仙沼市、宮城県、東京都の連携の課題

- ・プライバシーが守られていないということでパーティションの件を東京都に相談すると、東京都は宮城県に言っているといい、宮城県は気仙沼市に言っているというような感じで、結局2～3週間後入れ替わりのスタッフが持っていくような状況だった。関西の業者も近々撤退することになっていたが、そのことを東京都まで情報が伝わっていない状況だった。戻ってきた後、東京都に、避難している人の話を聞いてあげて欲しいということを伝えた。

## 報告4 被災したグループホームを丸ごと受け入れる試み（埼玉県 認知症介護指導者）

### 1. 支援内容

#### ◆被災したグループホーム支援の

##### ○被災地の要介護高齢者受け入れに関するアンケート

- ・震災翌週、厚生労働省より被災地の要介護高齢者受け入れに関するアンケートがくる。緊急の会議を招集し、グループホーム（1ユニット9人定員）と小規模多機能型（24名登録定員）で5名まで受入可能と回答する。職員体制の配置についても計画し待機していたが、その後なんの連絡もなかった。

##### ○グループホームをまるごと受け入れられる準備

- ・福島県グループホーム協議会に今必要な支援は何か問い合わせる。「入居者と職員、できればその家族までまるごと引き受けてもらえる場所が欲しい」との回答がある。
- ・グループホーム2ユニットが受け入れられる建物がないか、法人の会員や関係団体
- ・法人所在地の隣接市に使っていない3階建てビル1棟と1年半ほど前に閉鎖したビジネス旅館がある、との情報が入る。ビジネス旅館が引受先には適と判断、福島に伝

える。

- ・ 10 日ほどして、福島県南相馬市のグループホームが移転を検討していると連絡が入り、移転先として考えたいとのこと。ビジネス旅館の簡単な改装や福祉機器などを福祉用具会社に協力を要請。
- ・ 上記経過をメール、ブログなどで報告したところNHKニュースより高齢要介護者の避難支援ケースとして取材の申し出がある。
- ・ その後この「受け入れ作戦」に応じる事業所はなく、中途半端な形で終わっている。

#### ◆原発付近の状況

○現地の様子を見に行く

- ・ 4月9日に福島現地に取材同行する。福島県グループホーム協議会と意見交換。南相馬市グループホーム訪問する。
- ・ 夜になると辺りは真っ暗だった。1週間前までこのあたりで電気がついているのはあのグループホームだけだったという。
- ・ 逃げる場所もなく、職員も家族もいなくなり、残った職員は家がなくなったため、避難所代わりにグループホームに移り、2ユニット8人体制で介護されていた。

○避難されたグループホーム責任者からの話

- ・ 福島県で、グループホームの責任者の方に会う。栃木県のグループホームに自分のところの入居者を預けて、休止・解散しましたという方がいた。
- ・ 原発から逃げて、入居者と共に転々と避難を繰り返してきた南相馬市の施設長の方から当時の状況について話を聞くことができた。原発が爆発したあと、自分の車を連ねて逃げ出した。避難所でも認知症の方なので、行ってみたがとてももたなかった。中に肺炎を起こしたと思われる人がいて救急車を呼んだところ、この人は被爆の検査をしたのかと聞かれ、していないのであれば病院が受け入れないといわれた、という。
- ・ 南相馬市グループホームは、一時の混乱から回復しはじめ、避難地域からもはずれ、外部に避難していた入居者の家族も面会に来るようになった。ここでがんばってみたいとのこと。

#### ◆在宅の認知症高齢者の状況把握の必要性

- ・ 石巻市に医療チームと3日間入る機会があった。このチームは医療職・介護職がチームとなって、1階が流されてしまい、かろうじて残った2階で住んでいる家の実態調査を行っていた。その中で、避難所に物資は届いているが、そうしたお宅には十分に必要なものが届いていないことがわかってきた。そこで、必要な物資を届けるために1件1件まわって必要なものを聞くという御用聞きを行った。

#### ◆自施設での被災者の受け入れ

- ・厚生労働省のルートからは1名も受け入れはなかった。
- ・福島県原発避難地域のグループホームから転々とされていた方を1名受け入れることになる。定員超過でリビングルームにベッドを入れカーテンで仕切って対応した。
- ・4月初旬から2ヶ月間そのような形で利用し、6月初旬近隣のグループホームに正式入居された。
- ・認知症対応型サービスは、すべて地域密着型サービスのため、利用時には当該自治体の指定事業所になることが求められる。今回の震災では指定を受けた後に利用開始のルールは外されたが、後で指定については通常の事務手続きが必要だといわれた。
- ・特養ホームや医療機関では不要な手続き。事業所・自治体担当者双方に大きな負担がかかる。今後地域包括ケア推進で自治体の指定権限が大きくなる過渡期でもあり、非常時の事務手続き簡素化を望む。
- ・栃木県のグループホームでは1事業所から5名引き受けたが、3つの自治体の指定が必要で、事務作業が繁雑となったという話を聞いた。

## 2. 支援活動からみえた課題

### (1) 災害時におけるグループホームの弱さ

グループホームは、NPOや小さな株式会社など経営基盤が弱いものが多く、数ヶ月先の見通しが立たないだけで閉鎖に追い込まれる。その結果、認知症利用者は被災の混乱に加えて「なじみの関係」を失う。

- ・小規模のケアがいい、馴染みの関係がいいといわれたが、その小ささゆえに、こうした大規模災害によってもろくも崩れ去ってしまう。それはあまりにも悲しい。

### (2) 早期対応の重要性

- ・もっと早期に「引き受ける」という情報を出す必要があった等、反省点多い。1週間以内に受け入れ態勢を作っていれば、解散しなくてもよい施設があったのではないか。

### (3) 今後に備えた避難体制の整備の必要性

- ・今後起きるだろう首都圏での災害時における自事業所の避難態勢を考えるきっかけとなった。一時受け入れ先を今から提携を結んでおいたほうがいいんだということを知らされた。

### (4) 在宅の認知症高齢者の状況の情報のなさ

- ・在宅の認知症高齢者の状況がどうなっているのかの情報が無い。

## 2) グループディスカッションで出された意見

### (1) 支援活動通じて体験したこと、感じたこと

#### ① 思い切りのよさでとにかく現地に行ってみる

・マスコミと行政から、一般の人たちの支援は受け入れていないとストップがかかった。緊急車両や自衛隊の車が行っているのだから邪魔にならないようにということと、余震が続く中で保障がない。そうした状況について納得して着いてきてくれる人を募り、もしかしたら、物資を積んできても役に立たないといわれるかもしれないが、とにかく行ってみようという気持ち。後先考えない思い切りのよさはあった。

#### ② 現地の状況がわからない中で準備したこと

・受け入れ態勢もわからなかったの、物資を降ろした後、車の中で寝れるように寝袋や、自分たちの食料品も一応用意していった。

#### ③ 現地で生まれたネットワークの一員になれたのは貴重な体験

・行ってよかったのは、きちんと受け入れてくれる事業所の方や、現地のことをもっと広めてほしいと持ってくれる人や、現地のコーディネーターとして自分の業務の傍ら電話の対応や物資を運んでいる方々がいて、そういう人々とネットワークの一員に入れたというのは貴重な機会だった。

### (2) 被災地の状況と課題

#### ① 避難所にいられない認知症の方とその家族

・認知症の人を抱えている家族で、一旦避難所へ行くけれども、ご本人が落ち着かれなくて、あるいは周りから色々言われて、結局不十分な環境の自宅に戻って無理やり過ごしているケースが多く、そういったものがローラー作成であがってくる。家に戻ってしまうと、中々把握ができなくなってしまう。

#### ② 3日目までの支援の必要性

・低体温症で亡くなっている人、現地の介護職が不足したのは3日目だった。3日目には自分の家族を捜しに行く職員が多く、食料も3日目くらいに尽きてしまった。3日目には支援が必要だった。避難所には支援に行くが、大きな施設にはいかない。半壊していたり倒壊していた場合はみにきてくれるが。3日目くらいから、支援にきてくれた1週間目くらいの間がとてもつらかったと言っていた。そのくらいの間に介護のレスキュー隊みたいのは必要ではないか。システムとして構築され、医師会や看護協会のように、舞台上で派遣される人があらかじめ決まってい、ベストを来てさっと現地に向かえる、そういうシステムが介護にも必要だと感じた。行政を通さずにさっといきたい。

・最初のうちは低体温症が多かったということで、そこを救えたら、助かった命は多かったのかなと思う。雪が降っていたので、防寒用品を大量に差し入れてあげたらよかったのでは。

### ③小さなグループホームの課題

- ・家族の人は避難してしまい、グループホームは入居者とともにそのまま残り、何日も真っ暗中過ごすという状況があった。小さなグループホームは孤立する可能性がある。
- ・大きな特養よりはグループホームは機動性があるが、次どこにいくのかとすると、人がたくさんいる避難所には入れない。グループホームのスペースを確保するというのもできない。トイレを汚したり徘徊したりしてしまうので大きな避難所には入れないかなと思う。

### ④地震発生時の在宅サービス事業者の活動

- ・関東でもかなり揺れたが、自分の事業所でも在宅サービスのご利用者の安全を確認するためサービス外で1件1件確認した。そうした状況では、ホームヘルパーや居宅介護支援事業所が活躍する。おそらくそうした活動が展開されていたはずなのでそれをきちんと明らかにする必要がある。
- ・地震のときにホームヘルプサービスに入っていて、抱きつかれて帰れず3時間いたケースがあった。

### ⑤被災した施設のボランティア受け入れに対する心理

- ・人がいるようにみえても2泊3日シフトなのでほとんど休みをとっていない。休ませてあげたいが、その事業所からすると遠くからボランティアできてくれた人が働いているのにあたしたちが休んでいいんだろうかというのがある。そのところも理解したうえで、どうぞ休んでくださいという、その間に掃除でもなんでもやりますからというようなボランティアがいい。
- ・状況を伝えたり、説明したりということもそれさえも大変なんだという心理状態だろう。
- ・いっぱいいっぱいではないですか、と聞くと涙を流しながら、最初から拒否されたところもあった。
- ・介護職も熱心な事業所はプライドがある。外部からきた人がじゃんじゃんやりだすとむかつくのではないか。自分たちのやり方を崩されるような。
- ・ちょっと肩の力を抜いて色々手伝わせてよといってもそれが受け入れられない状況。
- ・まわりを見渡すことができず、ずっと走り続けしまう心理状態。
- ・行って、支援を受け入れてくれるかどうかは、現地が SOS を出しているかにもよる。自分が行ったところは SOS を出していて、人と物資が足りないということだった。

### ⑥避難所での認知症対策

- ・各避難所で、認知症スペースを作るとか、教室を一つ空けてもらわないと安心できない。肩身の狭い思いをしない。
- ・施設を福祉避難所にあらかじめ指定する場合があるが、施設はそれどころではないのでそれは厳しい。岩手でデイサービスを福祉避難所にしたが、サービスが再開しないため、もともとの利用者の家族がパニックになった。たまつきのように困る人がふえてくる。

### (3) 支援活動における課題

#### ① 支援物資の偏り

・支援物資は、企業から日持ちのするものが来るが、現地では口内炎がよくなりません。夜もよく眠れず野菜や果物が不足してビタミンがとれない。最初にグループホームに行ったときはご飯が主食、おかずがあんぱんみたいな状況だった。賞味期限が切れるので食べないといけないという状況。あらかじめサプリメントみたいなのを用意するのがよいのでは。

・最初入ってくる食料は、お米、カップラーメン、パン、おかしなどで、そういう食材ばかりだとかわいそう。

#### ② 支援物資の配給方法の課題

・現地の人に聞くと、買いにもいけないと、下着がない。体育館にあったが、下着はただ下着というだけで男性ものしかはいていなかったり、本当に欲しいものがあたるかどうか大変だった。

・行政の物資の配布については、FAX 用紙にあらかじめ書いて渡すという方式をとっていた。その場で欲しいと思っても、事前に申し込んでいないからダメといわれたりしたところがある。たくさん持っていく人は、それはそれでしょうがないという腹のくくりがどこかでないとああいふ状況はだめなのではないか。

・車があつて2, 30分走らせると十分な物資は届いている。しかし必要とする施設はガソリンがないのでとりにいけない、1ヶ月半の間、コンビニ弁当ならまだしも、おにぎりや菓子パンだけで生きてきますという状況一方にある。石巻の大学の構内に巨大な倉庫を作って、ものすごく色々なものがある。一番足りないものは果物と生の野菜だというのがそれを持っていく手段がなく腐りかかってある。

・物資を現地まできめ細やかに配分してくれるボランティアと、介護現場の中にも、単発ではなく10日単位とかでローテーションを組んで入ってくれる人がいてくれたらいいのになというのが現地の願いだった。

#### ③ 最低1週間の支援期間が必要

・来てもらうほうからすれば3日くらいでは用が足りない。最低1週間以上いてもらわないと受け入れと送りだしの調整にかなりの人出をとられる。ほとんど一人がそれにつききりにならざるをえなくなる。

・ボランティアで入る人と、情報を全国に投げる人と両方が必要だった。8日間休みをとっても現地にいるのは2泊3日しかいれなかった。その中でできることは現地の情報を速やかに色々な人たちに伝えて支援を募るとかそういうことしかできなかった。

・ボランティアセンターのような活動の拠点を構築できるかどうか。GH 協や老健協会でも拠点をかまえて、ある程度情報の収集と発信をする人が張り付いていて動いていたが、そういったのが確保できるかどうかというのが大きい。ただ、そういういったものがいっぱいあるのが現状。



#### (4) 支援活動に必要な資質・スキル、工夫

##### ① 認知症ケアのわかる人に支援にきてもらいたい

・うちの事業所だから受け入れてくれたが、認知症ケアをどれくらいわかっている人かわからないといいたくない。そうでないとどれくらいのひとか軽い人からみてもらって見極めるということ。

##### ② 派遣された介護職員の課題

・介護職なのに介護させてもらえませんでしたという話も聞こえてくる。そんなプライドは捨ててしまえという、送り出す側もそうして送りださないといけない。

##### ③ 派遣介護職員に求められる資質・スキル

・介護職は生活という面で、医療と違い、やることのボーダーがあいまい。それゆえにボランティアに来てもなんとかやっていますということになるのではないか。介護職ボランティアの部分を作っておく。

・中途半端な新人は派遣してはならない。それを1回受け入れてしまうと、もう受け入れないということになってしまう。

##### ④ 受け入れてもらう工夫

・どんな資格でどんな特技があるかどうかぐらいは把握しておく必要がある。

・ボランティアのころえみたいなパンフレットがあり、こういうのを便居してきていますみたいなのがあれば。

・最低限のマナーとルール。

・紹介シートとか。

・そういうボランティアの姿勢もパンフレットにまとめてそれを持って、私たちはこういう姿勢でボランティアに入りますということを説明する。

・グループホームでも、間口が広いところと、せまいところとがある。運営の体質があるのではない。そうだとすると、災害時には、こまごましたことは外からきた人にやってもらって、私たちは介護をやりましょうということを初めから災害マニュアルみたいなことに落としてしまうのが必要。支援を受けるマニュアルも必要。

・言われたのは、介護職だから介護をやりますではなく、なんでもやりますよという構えでないといけないということ。

・そのときそのとき仕事・作業が異なるので、そこにあわせていけるかどうか。

・例えば食事でも「刻み」というと、よくわからないボランティアはただひたすら刻んでしまいが、私たちは「刻み食」はわかるので、専門職との違いはある。

・身元の保証としてボランティアシートみたいに資質特技考え方などを紹介してコーディネーターの役に立つ資料がないと現地でも受け入れがたいのではないか。

- ・現地でも、あらかじめこういうことを頼みましょうねということをやっとなないと受け入れるのは無理なのではないか。

- ・ケアはやってもらって、昼間の片づけとか食事作りとか周辺のことを外から入った人がやっていくという、そういうやり方をしましょうよ、お互い楽になりますよということで、今回のことを教訓にしたらどうか。

#### ⑤指導者ネットワークの活用を

- ・全国の指導者のネットワークを使って、コーディネートをしていくとうまくいくのかなと感じた。東京センターに一本メールを送ったらひろげてくださって、そこから物資や義捐金を集めてくださったという話を聞いている。その点はありがたかった。

## IV 結果2 第2次調査結果

### 1) 支援活動報告

#### 報告 1 被災県内での支援活動 (宮城県 認知症介護指導者)

##### 1 支援活動の現状

##### ◆法人として、発災から現在まで続く地域での支援活動

##### ○震災で大きな被害を受けた法人施設

- ・勤務する社会福祉法人は大規模であり、また、本体施設から車で5分のところにグループホームとデイサービスもある。今回の震災で建物一部が損壊し、被害額も大きかった。
- ・震災後ライフラインが寸断した。電気は3日後に復旧したが、水道の復旧は1週間、都市ガスは1か月かかり、利用者の清拭や入浴ができなかった。ガソリンがなく食料が底もつき、流動食や紙おむつは医師が対応した。

##### ○発災直後から福祉避難所として活動

- ・発災直後は入居者の体調確認、ショート利用者は延長利用となり、特養は「福祉避難所」として、認知症の人や重度障害者等20名超の宿泊を受け入れた。デイサービスは職員が利用者の自宅を確認し、そのまま宿泊となる。地域包括等と連携して在宅高齢者等の安否確認、食料や水の支給、病院への移送、施設への保護等を自律的に行った(各約100人)。食事は、食材業者からの大量の冷凍肉等の寄付で給食を行うことができ、職員、近隣施設に配布した。浴室は職員や地域住民に開放した。また、4月末から9月末まで石巻市の桃生の農業者トレーニングセンターでの福祉避難所の運営を受託した。

##### ○近隣の仮設住宅でのコミュニティ活動支援を実施

- ・福祉避難所の閉鎖後は近くの仮設住宅でコミュニティを広げる支援を行っている。地域包括を含めた仮設連絡協議会の開催、24時間ホームヘルプ事業をモデル的に実施。
- ・職員の心のケア。被災した職員と被災していない職員の格差が大きな問題になっている。

##### ◆認知症介護指導者の仲間とともに物資配給のボランティア

- ・連休前に同期の認知症介護指導者と一緒に、何とかガソリンを手に入れて、自分の車に支援物資を積んで支援活動に行った。大船渡、陸前高田に物資(ガソリン、経管栄養、オムツなど)を配給し、その間1か月で必要物資が変わってくるのを肌で感じた。

- ・ その同時期には、知り合いのボランティアと一緒に気仙沼のGH内のヘドロの掃除に行った。
- ・ 5月以降は物資の届けられない在宅の方（1階が被災して2階で居住）にチラシや物資を届けたり、テント市を開き、ニーズを探って、地域包括等につないだ。9/14、冬場に向けてストーブ、毛布を届けた。
- ・ 秋になると、知り合いの商店に予告のチラシをまいて、1週間後に炊き出しや物資を届けた。

#### ◆県社会福祉士会での多様なニーズ調査、後方支援活動

##### ○雄勝・北上地域包括支援センターの後方支援

- ・ 5/18、19から石巻市の雄勝・北上地域包括の後方支援に参加。雄勝・北上は2つの町に1つの地域包括支援センターがあるが、2町間の橋が流され同じ日に2つの町へは行けず、2日にわたって行った。
- ・ 石巻市は居宅介護支援事業所39か所のうち16事業所が被災し、地域包括も9か所のうち4事業者が被災して、職員がなかなか活動できない状況だった。
- ・ 雄勝町は山間で道のないところ。地震当日は誰も入れず、翌日にヘリコプターで自衛隊が入った。病院が1つ3階建ての老人病院があったが、津波で流され、医療やサービスが全くない状況だった。
- ・ 住民は高台で生活。当初、在宅の人は避難所に行くと、避難者やボランティアに「これは避難所の方のものだから、在宅はダメだよ」と言われ、配給物資がもらえない。それが心に残っているという方もいる。
- ・ 40代の精神疾患の息子と70歳過ぎの高齢夫婦が3人で暮らしていて、津波が2階まで来て息子の肩までつかったが、そんな状況でも息子は外に出ようとしなかった。両親は息子が今後どうして行くのか心配している、というケースもあった。
- ・ 認知症の人も避難所にいたが、すごく混乱したり他の避難者とうまく行かず、遠くの病院やショートに入れられた人が多くいたという状況だった。

##### ○仮設住宅等での総合相談、ニーズ調査への参加

##### <宮城県女川町の仮設住宅のニーズ調査>

- ・ 10月に女川町の仮設住宅に行き、宮城県のケアマネージャー協会や弁護士会と一緒に総合相談を行った。

##### <岩手県山田町での本人確認等の調査>

- ・ 11月に岩手県山田町に1週間、地域包括の後方支援として行った。山田町は住民台帳が流された。全戸調査を行い、本人確認や現在の居住場所の確認を行った。

##### <宮城県東松島市でのニーズ調査>

- ・ 現在、東松島市でニーズ調査。ニーズ把握して支援を行うということをやっている。宮城県の中では在宅へのアプローチが一番遅く、1年たって、ようやく来たのかと、不

満を持っている人が多い。

## 2 支援活動から見えた課題

### (1) 支援の範囲

- ・福祉避難所等ではどこまで支援するか。支援しすぎると、自立が難しくなる。またボランティアの責任範囲のあり方も課題である。

### (2) 備蓄のあり方

- ・備蓄は地域住民や避難者を考えると定員の倍くらいに増える。そのことを含めて考える必要がある。

### (3) ニーズの移り変わりへの対応

- ・発災直後、避難所、仮設、復興期など時期によってニーズは変わる。地域によっても違う。どう把握し対応していくかが課題

### (4) 認知症の方への支援

- ・認知症の方にはチームケアで対応する。

### (5) 仮設住宅でのコミュニティ形成

- ・仮設住宅はコミュニティの有無に違いがある。日頃から知り合う必要がある。

## 報告 2 新潟県中越地震の経験からの災害対策（新潟県 認知症介護指導者）

### 1 支援活動の内容

#### ◆はじめに

- ・被災地に出来る限りのお手伝いをしたいと考え、被災地の事業所に人の派遣を中心に行ってきたが、現実の中で戦っている多くの人の苦労を考えると『支援』という言葉に違和感を覚えている。

#### ◆大震災発生後に行ってきたこと

##### ○長野県北部地震では

- ・東日本大震災の翌 3 月 12 日未明に長野県北部地震が発生。E 町の知り合いの社会福祉法人の老人保健施設とケアハウスが浸水した。入居者の移動を手伝い、その後人的支援を行った。
- ・新潟・福島豪雨では 7 月 29 日夜 1 時過ぎに同法人は避難勧告を受ける。夜勤者からの連絡を受けて、第一責任者は「夜中でも無駄になっても良いからとにかく逃げるように」と伝えた。避難完了したのが朝 5 時、職員が荷物を取りに戻った時には水が上がってきた。

##### ○東日本大震災での支援（法人支援チーム、県チームでの活動）

- ・新潟中越地震ではいろいろな人的支援を受けて助けていただいたので、3月15日の週には法人内に支援チームを組織し、情報収集、人的支援派遣を準備した。(3月15日の週に新潟県から人の派遣について問い合わせがあったが、その後の連絡がなかった。調査だけで終わっていた。
- ・3月19日から岩手県に入った石川県チームと連携して、4月4日から1班5名・5日間を5月中旬まで6班派遣し、9月に3班派遣した。(大船渡市、宮城県色麻町)
- ・4月30日～5月2日まで被災地の認知症ケアの現状を聞きに行く(GH災害支援本部・被災GH等)
- ・6月26日～28日には、平成23年度厚労省の老人保健等健康増進事業「GHにおける災害時対策に関する研究」で被災GHに事実経過を中心に訪問調査を行う。年度末に向けて認知症に関わる人向けの演習教材を作成した。
- ・遠くからでもできることとして、人的支援をした法人には定期的に、「忘れていない」というメッセージと少しの品物を送り続けている。

#### ◆中越地震の体験から

- ・中越地震は高、齢者の小規模事業所が本格定義されてから初めての災害であった。大規模施設や複数の事業所を営んでいる法人は、その関係性の中で比較的対応ができたが、単独事業所は非常に困難だった。
- ・地震発生時が夕方の6時少し前。GHでは夜勤が1人の場合が多い。被災したその時、何をしなければならないか、しっかり訓練されていないと難しい。
- ・電話が役に立たない中で自動的に駆けつけることのできるしくみが必要。中越地震以降には「震度5以上の場合は、職員は身の安全、家族の安全を確保して集合する」というマニュアルを作った。
- ・一斉メール配信サービスを利用して一方通行でのメールを配信して自動的に駆けつけるようにした。

#### ◆自然災害とグループホーム

- ・大震災、自然災害はどこでもある。現在、11,000か所を超えたGHは無関係ではいられない。リスクに備えなければならない。
- ・中越地震は高齢者の小規模事業所が本格定義されて初めての災害。GH18か所のうち5か所が避難生活を送った。特養も3か所使用不能になった。
- ・安全の確保は、あまり安全だけをみていくと非常に窮屈な生活空間ができたり、窮屈な生活が強いられることになる。

## 2 支援活動から見た課題（グループホームが備えておくべきこと）

### (1) 自らのグループホームの特性を理解

- (2) 地域とのつながり
- (3) 近隣や県内のグループホームとの姉妹関係づくり
- (4) 全国や都道府県単位でのケアの DMAT の必要性

報告3 ケアマネ団体のメンバーとして、被災地の困りごとやニーズをさまざまな形で把握（千葉県 認知症介護指導者）

## 1 支援活動の内容

### ◆各被災地の困りごとやニーズを把握

#### ◎陸前高田市で

- ・陸前高田で訪問した事業所は津波でケアマネ3人に1人が亡くなった。残ったケアマネ2人で利用者の安否確認を始めたが、余震もありなかなか地域に入れなかった。事業所のパソコンも全部流された。失った利用者情報はサービス事業者や国保連のデータを貰って紙資料からゼロからデータ入力を行い、大変だったと聞いている。
- ・陸前高田は土地がないので高台に数多くの仮設住宅ができています。入居者は下までおりて買い物・病院に行っているが大変な状況と思われる。

#### ◎石巻市で

- ・避難所で「大丈夫ですか」と声をかけると、皆「大丈夫」と答える。杖を流されている人が多いと聞いていたので、杖の配布を始めたが、ようやく反応があった。「実は私も杖がなくなりました」と。杖を配給しながら許可をもらって個人情報ももらい、写真も撮らせてもらった。
- ・1回目に避難所に行った時は夫婦2人（70代）でいたが、2回目は夫が一人で泣いていたので、その理由を尋ねたところ、夫は水も電気も使えないが自宅の2階に暮らしている。盗難が多いので自宅に戻った。車が使えたので果物等を買って、避難所の妻に届けていたら、「半壊でも家があり、車があり、ご主人もいるのだから、避難所のご飯を食べることはないわね」といじめにあった。実は妻は膠原病で動けないのに、避難所から出て行かざるを得なかったという。
- ・中学校の体育館は緞帳のある舞台があるが、市役所が占めている。発災後2か月後でもまだ女性の更衣室、プライバシーを守る空間が作られていなかった。
- ・避難所の中学のトイレはほとんど様式ではなく、杖の必要な高齢者等は苦労していた。介護保険の設置式のトイレを持ってくるという発想もなかった。
- ・石巻の避難所で合った右麻痺の男性は、息子が助けに来たので着の身着のまま逃げてきた。避難所でも、とても怖くて、古い靴と装具をはずすことができずにいた。そのため潰瘍が出来ていたが、誰にも話せないでいたという。杖を配ってようやく

そういった話しが出てきた。

- ・女川町の総合体育館は全てバリアフリーで車椅子利用者も家族と一緒に過ごせたが、石巻市の体育館はバリアフリーでないため福祉避難所をつくらざるをえなかった。

#### ◎女川町で

- ・女川町の体育館は広く最初から段ボールの区画があり、5人くらい一緒に過ごせる。80代の認知症とみられる方がいたが混乱していなかった。家族と一緒に居られるなら、同じ避難所ですごせるのだと思った。認知症の人も避難所に入って機能低下を起こす人と改善する人の2通りあるという。改善する人は、家では話し相手がいないが避難所ではたくさんいる、トイレが50mも離れていて歩く距離が長くなるなどで、機能改善が図られる場合があるという。
- ・女川町の避難所の食事は2か月後も朝はパン、夜はおにぎり。昼は炊き出して温かいものが食べられるという状態で、栄養状態の低下がみられた。
- ・女川は高台に広い運動場があり、自衛隊が普通は1基しか入れないのに4基入って、男女別々のお風呂、女性の洗濯室などの設備があった。広い土地もあるので仮設住宅の建設も早かった。そういう意味では女川は恵まれている。

#### ◎福島県で

- ・ケアマネの人的被害はなかったが、原発でケアマネも避難せざるを得なかったため、すべてその日で仕事を中断した。情報を持ちだせなかったため、利用者の把握が非常に難しかった。避難所も1か所だけでなく転々とせざるを得なかったため、その追跡が難しかった。
- ・4月2日から福島に入った。看護協会が派遣した救急チームは宮城県には70チーム入ったが、福島には2チームしか入らず、福島の様子が分からなかった。
- ・4月6日に南相馬に看護協会とケアマネがGHに物資を届けるというので一緒に入った。情報がなく入れなかった。GHの居住者は避難しているが在宅で残っている人がいた。
- ・大規模避難所となったビッグパレット（郡山市）は、川内村や富岡町などから避難者が多く、最大2,000人が避難していて誰がどこにいるか分からない状況だった。
- ・3月28日川内村がニーズを把握する目的で住民調査を実施した。その結果を元にしてPT、MSW、PSW、ケアマネ協会他6つの専門職チームを立ち上げ、ワンストップ相談をして、必要なところにつなぐことを行った。認知症だけでなく精神疾患、リハビリ相談もあった。精神疾患の方は避難所で騒ぐので、何か所も移転しているという話しもあった。
- ・避難所は、認知症だけでなく、騒ぐといられない状況だった。

#### ◎その他（場所は不特定）

- ・5月初めに「母を探しています。3月12日に避難所に行く途中に行方不明になりました。住所・名前が言えない可能性があります」という張り紙をみた。認知症の方



が、地震と津波で助かった命が二次被害に遭われた可能性が高いと思った。

- ・運動場に砂利を敷き詰めて仮設住宅を作られると、高齢者は歩きにくく暮らしにくい。車椅子の人は暮らせない。厚労省に写真をすぐに送った。

◆災害対応マニュアルの改訂版を検討中

- ・当ケアマネ団体では災害対応マニュアルを発行しているが、足りないところが見えてきている。

## 2 支援活動から見た課題

### (1) 潜在的なニーズの把握

- ・避難者は、うったえることはなかなかしない。

### (2) 避難生活での楽しみ、生きがいづくり

- ・避難所に不足していることは、楽しいこと。例えば、プロ野球のTV観戦でも。

### (3) 仮設住宅等でのバリアフリー

- ・仮設住宅は通路が砂利になっていて、高齢者が歩けない、車いすはとても無理な所が多い。

### (4) 認知症者の被災状況の把握の必要性

- ・認知症は津波から助かったが、避難所に行く時いなくなった人もいる。特徴的な出来事。
- ・避難所にいて、話を聞いてもらえる、家より歩くことで、認知症が改善する人もいる。

## 報告4 グループホーム施設長として支援活動を振り返る（鳥取県 認知症介護指導者）

### 振り返る

#### 1 支援活動の内容

◆震災直後の1週間の活動

- ・発災直後、警察に何度も足を運んで、緊急車両の指定を依頼した。3月16日にワンボックスカーを緊急車両に指定してもらい、鳥取県を出た。サンダーバードから法人へ災害支援の依頼がきた。
- ・日本海側を2日半走行した。富山は豪雪のため高速道路で車が1回転するハプニングがあったが車は何とか無事だった。警察にそのままでは危険なので高速道路から降りるように言われ、一般道で何とか走って3/18に仙台に入った。
- ・被災地に行きたいという思いだけで、期限は決めず、人的・物的支援を行おうと考えていた。せんだんセンターへの電話が1回しか通じなかったので、必要な物を車に積めるだけ積んで出掛けた。ガソリンは5缶積んだ。自分とサンダーバードから

- もう1人、看護師2人の4人で1週間、某特養に行き、1週間支援活動に取り組んだ。
- ・何かできた、支援できた、という感じはなく、職員の「やっと休みが取れる」という言葉を聞くことが唯一楽しみだった。あとは、利用者と話をした、食事介助をさせてもらった、ということが1週間続いたような記憶しかない。
  - ・余震が続く中で、利用者は、「もう1回でも大きな地震がきたら、私みたいなものは置いて、若いあんたが逃げなさい」と1日に1回以上何回も言われたことが記憶にある。

#### ◆法人としての支援活動

- ・法人として、10月まで2週間交代で、ボランティアを宮城・福島に送った。
- ・帰って来る職員が自分と同じように、「学ばせてもらうことが多くて」という感情を抱いて帰って来る。
- ・現在は、福島の南相馬市で、被災した方の心のケアといったところで活動している状況が続いている。法人としては、今後もできる限りのことは何らかの支援をしたいと思っている。場所や人が変わってもそういった支援ができると思っている。被災地の高齢者、精神疾患の人の相談を受けたこともあるが、家や地域ではなく、最終的には病院や施設に入られるのが現状である。

## 2 支援活動から見た課題（グループホーム施設長として考えていること）

- （1）災害時の避難行動やチームケアの具体化
- ・グループホーム施設長として、大震災時に1人で利用者を助けられるかという危機感を感じる。何も起きていない状況では、避難するのが当たり前と思っているが、一人では難しい。避難行動やチームでの支援を考えておく必要がある。
- （2）日ごろからの備蓄や緊急連絡等の取組み
- ・この1年、備蓄や緊急連絡等の取組みみをしてきたが、震災後の1週間の経験で勉強させてもらって、改めていろいろなことに気付かせられた。
- （3）被災地の高齢者、精神疾患の人の在宅生活の支援
- ・被災地の高齢者、精神疾患の人の相談を受けたことがあるが、在宅ではなく病院で受けることが多かった。

## 2) グループディスカッションで出された意見

### 1 被災地での支援活動の状況

#### (1) 被災者のニーズに関すること

##### ① 被災地でニーズを把握する難しさ

・ケアマネの活動の基本は、避難所でどのようなニーズが起こるか、課題とニーズがあるかということ把握することである。しかし「いかがですか」、「大丈夫ですか」と声をかけても、皆さん絶対「大丈夫です」とおっしゃる。大丈夫ですとおっしゃるのには、もう医者も看護師も保健師も、みんながまわってきているから、もう、みんなには話していると。なので、また私たちが行って、話を聞いても「本当に大丈夫です」とおっしゃるが、いざ杖の配布を始めると、やっと声をかけてくださるようになった。「実は私も杖がなくなりました・・・」と。ニーズの把握は本当にたいへんだと思う。

##### ② 時間経過とニーズの変化への対応

・生活支援、生活再建に関する総合相談をしていて感じることは、やはり被災者のニーズが変わっていくということです。その部分の生活支援とか生活復興のための保障とか、相続とか金銭とか、様々なものが本当にひとつの家庭の中に入っていて、そこに認知症の人の生活も含まれているのですけれども、そういう中でいかに異職種の方やボランティアの方々とも連携してチームケアを行うことがとても重要だと思っています。

##### ③ 大規模な住民調査の実施

・ビッグパレットは2,000人規模の避難所で、川内村と富岡町等いろいろなところから避難してきた人が入っていたので、誰がどこにいるのかが本当にわかりませんでした。ただ嬉しいことに、川内村の社協が、社協としての自分たちの住民のニーズは把握するのが使命だとして住民調査をやっていました。そのニーズ調査の結果をもとに、福島県では、直後の3月28日にはPT、MSW、PSW、ケアマネ協会とあと6団体が専門職チームを立ち上げました。この専門職チームの役割というのはワンストップ相談をして、必ずそれぞれのところでつないでいくところを明確にしながら、相談をそこで終わりにするのではなく必ず繋ごいでいこうということを目指していました。

##### ④ 在宅被災者の支援の困難さ

・千葉県旭市では津波が3波あり、1・2波は逃げたが、3波目は来ないと油断し、帰宅した人達が吞まれた。川沿いでは1階部分が津波でやられ、避難している間に2階のテレビを盗まれた等、色々な相談があった。)私たちの活動ではアセスメント表をきちんと使って、どういう生活ニーズがあるかということをしている。避難所に行っていない方たちの在宅の調査では、津波被害がなかった高台の地域でも、津波で家族がさらわれてしまったため、もう誰も住んでいない家がたくさんあり、皆様のご存じのような状況がありました。それを現地に赴いたケアマネ、ボランティアケアマネが、地域包括支援センターと常にミーティングをしながら、どのように、どういうところに行って支援をし

たらよいかが大変難しいと感じました。(Cさん)

#### ⑤大規模避難所での認知症者や精神障害の方等のニーズ把握の問題

・福島県南相馬市に有名な精神病院がありそこから避難した人が多数いましたが、ビッグパレット等には、在宅にいらっしゃった方たちとも混在して一緒に入ってしまったりました。PSWの方たちがニーズ把握につとめていましたが、なかなか把握が難しいのかと思います。

・本当に認知症や精神疾患の方とか、騒ぐとすごく非難されて、やはりいられなくて、そこから出て行かなくてはいけないという状況があって、もう本当に何力所も移転をしていたというところがありました。

### (2)避難所に関すること

#### ①福祉避難所での支援の“引き際”の問題

・福祉避難所での活動を経験してみて、どこまで支援するかというのをきちんと決めておかないと、風呂敷を広げたままでは良いのが、そのあとどこで引き上げていくかというところが難しいと思いました。というのも、依存してしまうというところが多く、最初は「有り難うございます」というところが、だんだん「これ、やってくれないの」というところにもなってくるので、「自立支援」を考えるときに、引き際というところもきちんと考えていかないと難しいと思いました。

#### ②避難所でのプライバシーへの配慮

・支援先の避難所体育館には、舞台があつて緞帳があるのですが、その一番良いところを役所が陣取っていて、一般の方たちは下の方で生活している状況が見られました。2カ月経ってもその状態というのは、どういうことなのだろうと思っていました。そのときまだ女性の更衣室がつくられておらず、要するに何かのプライバシーを守るような空間が設置されていなかったのも「すみません、お着替えはどこでしているのですか」と聞いたら「毛布をかぶって毛布の中で着替えています」と。その後6月頃には、NHKニュースの中で「〇〇中の避難所で、段ボールで大きな衝立をつくり、女性の方が着替えをできるような、プライバシーを守られる空間をつくりました」との報道があったのですが、すぐに舞台と緞帳を工夫すればプライバシーを守れる空間になったのではなかったのかな、と思いました。

#### ③支援物資の配布方法の問題

・当初は避難所、またのちに仮設住宅で本当にすぐ近くなのですけれども、在宅の方が避難所に行ったら「あんたは家があるんだから、いいでしょ。何しに来ているの」といわれる人が多かった。ボランティアの方も実際に、「いや、これは避難所の方のだから在宅の方は駄目だよ」というようなことを言われたということで、そういうのがたいへん心残りであるという方々もいました。

### (3)緊急期の支援に関すること

#### ①ひたすら夢中で現地に赴く

・サンダーバードからは法人に依頼がきて、3月16日にはもう鳥取県を出ました。車で2日半かかりました。日本海側をずっと車でひたすら走ったのですけれども、富山の辺で、ちょうど雪がすごくてですね。何と高速で1回転いうハプニングがあり、被災地支援に行くのが被災者になりかけてしまったこともありました。車は何とか無事で一般道におりてそこで1泊させてもらい、そのまま仙台に入ったのが、3月18日でした。電話が通じないなかで必要なものを最低限、車に積めるだけ積んでいきました。ガソリンの調達も難しく、職場から帰れない職員さん、また逆に家から出て来られない職員さんもおられました。何かできたとか何か手伝えたとか、役に立ったとかいう感じは全くなかったです。ただひたすら職員さんが「休める」、「やっと休みが取れる、帰れるよ」という言葉を聞くことが、唯一の楽しみで、あとはひたすら本当にその現場にいる、利用されている方とお話をさせてもらったりとか、お食事の介助をさせていただいたりとかという時期が1週間続いたような記憶しかありません。

#### ②生活リズムの変化に合わせた支援

・トイレの場所や距離、食事の場所がみんな変わってしまうわけですね、お年寄りの人の生活リズムも全く変わってしまうわけなので、どう過ごしていただくかということ、残ったスタッフと一緒に考えながら、利用者さんの生活の利益を組み立て、次の組に送ってくる、ということをやらせていただいていた状況でした。

#### ③自己責任・自己完結の意識の必要性

・ボランティアとして活動する際の、自己責任ということ、自己完結をどこにもっていくかということと、やはり、認知症の方々のニーズを見たときに、どこにどうつなげていくか。居宅とか、地域包括支援センターで被災しているところも多いですし、いかにそのサービスに結びつけていくか、イニシアチブをどこで取っていくかというところ、私たちがいかにそこで引き上げていくかというところが、今後の課題だと思いました。

・最初にいろいろと言って申し訳ないのですけれども、最初の1週間ぐらいで落ち着き先が決まり、そこを確保できて次の段階かなというところ。あと行く側は、自分たちが完結できるようにして行かないと、相手に迷惑をかけていますね。というのは、衣食住に対して完結できるようにして行かないと、結果として相手さまが寝る場所を提供して「一緒にご飯どうか」といわれますが、これは結果の話であって、特に初期に入る人の支度というのは必ず自分たちで完結できる体制を持って行かないとかえて相手に迷惑をかけることになるかなと思います。

#### (4)緊急時の体制づくりに関すること

##### ①被災地でのコーディネートの問題

・まずは一時的に、しつこいのですが、現状を誰が、どの程度、具体的にとらえているかというの

は、とても大事だなということと、あと、個人で支援したときも、やはり、行政によっても色がありまして、被災しているところ、被災していないところもあるのですが、なかなか、情報がなかなか教えてもらえなかったりしました。そういうところ、ローラー作戦で全部確認してみて、あとから行政からもらったら、実は、ここもう、保健師がまわっていたのですけれどもとか、〇〇協会をまわって、というので、訪問すれば「毎日、いろいろな方、来ていますよ」となっていて、毎回、毎回、同じことを、先程Cさんが言ったように、杖を持ってまわっていましたがけれども、毎回、同じようなことを聞いていたりというのがあるので、そういう、きちんとまずは一時的に把握をして、では、具体的にどう結びつけるかというところが、きちんと誰が誰を結びつける必要があります。そのうえで、誰をどの程度の人を派遣していったら良いかというのが、マッチングしていかないと、なかなか難しい。

## ②被災した職員の心のケアの問題

・沿岸部の老人ホームで被災した方がいて、内陸部の同じ法人の特養50名のところに100名の利用者を受け入れていました。その分、ちょっと厳しい状況もあるのではないかなということで、そちらの施設長とも話をしていたのですが、実際に被災を受けた職員と、そうではない職員のケアが課題だと思いました。同じように仕事をしなければならないのですが、すごくストレスがあったりとか、「あなたはどうせ被災していないんでしょう」といわれたり、「被災している人のこうやってほしい、ああやってほしいというケアの共有が、なかなかできない」とおっしゃっていました。まだフラッシュバックしているところもありますし、職員のストレスというものが大きいというのは感じているところでもあります。

## (5)避難期から仮設期への移行に関すること

### ①避難所が統合する過程での懸念事項

・本当にぐしゃぐしゃで非常に整然とした避難所の映像が流れるのですけれども、大きな体育館の中で、こんなかたちで、最初1,300人もいたのが、このときだいぶ減っていたのです。500人ぐらいに減っていたと思うのですけれども、中には、本当に整理整頓できていない避難所というのまだありました。

### ②仮設住宅でのバリアフリーの問題

・宮城県の名取市からは実態調査の依頼があり、特定高齢者をピックアップすることも含めて仮設住宅の調査を行いました。仮設住宅に行き、現状を見た時、手すりは付いているのだけれども段差があって、下は砂利でやはり生活しにくいとの報告がありました。

### ③仮設住宅入居者と在宅被災者との格差の問題

・当初は避難所、またのちに仮設住宅で、本当にすぐ近くなのですけれども、在宅の方が避難所に行ったら「あんたは家があるんだから、いいでしょ。何しに来ているの」といわれる人が多かった。ボランティアの方も実際に、「いや、これは避難所の方のだから在宅の方は駄目だよ」というよう

なことを言われたということで、そういうのがたいへん心残りであるという方々もいました。

#### ④避難所や仮設住宅での「楽しみ」と「交流」が重要

・女川の避難所(総合運動場)で「生活の中で何が一番不足していますか」と聴いたら、「楽しいこと」とおっしゃった人がいました。「楽しいことがない」と。この写真はロビーでのテレビの野球観戦のようすです。車いすの人も子どももいて、周りにはゲームだとか本だとか、寄付された物がたくさんあるのですが、子どもはそれに触らないです。誰かと一緒に遊ぶのでなければ、置いてあっても使わないのです。そのとき私はやはり人が集うということが必要なのではないかなと思いました。

#### (6)被災地での認知症の人の状況に関すること

##### ①避難所における事例

###### ◆ 被災直後の混乱で体調が悪くなった事例

・認知症の方も実際に避難所にはいたのですが、その状況の中ですごく混乱したりとか、ほかの方々とうまく行かないというのもあって、1週間いたあとに実際に家族の方々から連れられて仙台に来る方々もいたりとか、あと遠くのところにショートステイとか、病院に入られる方もとても多くいらっしゃいました。

###### ◆ 周囲の理解が得られず避難所を離れた事例

・小さい避難所での事例。認知症の1人暮らしの人で、近所の方が避難所に連れて行っても、夜になると、トイレがわからなくなってしまう。何度も失禁するので、ご近所の方が迷惑で、最初の1日2日は我慢するのだけれども、だんだん、もう本人も混乱して周りも駄目になる。そこで親戚がいる人は、親戚の2階建てにおぶって2階まで連れて行って、そこでずっと寝かせっぱなしにしてしまうとか、誰にも相談する人がいないといった状況がありますね。

###### ◆ 家族と一緒にいて落ち着いて過ごせた事例

・女川はすごく広い体育館で、最初から段ボールはこういうふうにできていて、本当に差があるのですよね。実は、この一番広い区画はワンファミリー5人ぐらいが一緒にいられるところで、実はこのワンファミリーの中に「認知症かな」という、眼鏡をかけた80代ぐらいの女性がいらっしゃいました。でも、その方は混乱していないのです。家族と一緒にこの空間にいられたので。なので、「ああ、家族と一緒にいるということは、もう一緒に、周りに安心できる人がいるということは、同じ避難所にいられるんだ」ということを実感しました。

###### ◆ 認知症のあるご夫婦のコミュニケーションの事例

・避難所にいたご夫妻の奥さまが軽度の認知症。そばにいた元・町会議員のご主人から、「この人ね、トイレに行っても戻れないんだよ」と言われて初めて認知症だと気付くほど、認知症だとわからなかった。トイレに行っても自分のところに戻れないのに、ニコニコして誰かが来たら必ず話しかけ、自分のご主人に「あなたがまた自分の支持者を集めて、女川のために働けば良いのに」とおっしゃる。ご主人のほうはクールに「こんな復興には、5年10年の単位で時間がかかるんだ、自分ではできない」と言う。すると「大丈夫よ。あなただったらできるわ」みたいな夫婦の会話があって、感心し

ていました。

## ②避難所利用による機能低下と機能改善

・実はK病院のO先生も石巻のローラー作戦で入ったのです。そのときに、O先生と話したときに、避難所に入って機能低下を起こす人と、避難所に入って機能が改善する人と2通りあると言われていました。改善する人というのは、このように、もしかしたら家だったら話し相手が少なくて、あまりいなかった方が、逆に避難所に入って生き生きする人もいるのだとか、歩く距離が家よりも長くなって、機能が改善する人もいるという、とても面白いお話があったのですけれども、確かにそういうことがあるかなと。

## ③避難所では少なかった認知症相談

・避難所では、そういうお困りごとの相談をしていました。でも福島のビッグパレットで、認知症の人と家族の会が相談会を設け、相談日を設けたものの、相談者があまり来ませんでした。

## ④在宅の認知症者の所在は

・今回は、そういうような認知症の方が避難所で叩いたりとかしたので、居づらくなって移ったところまで話を聞いています。でも避難所にも行けなかったとかいう話まではあまり聞いていなくて、一体全体、認知症の方は一番大半を過ごしたのはどこなのだろうか、そのデータがあまりないのです。

・意外と避難所にはあまりいなかった可能性がある。

・「津波が来る」ということが理解できないで、津波被害者の多く軽度の認知症の人がいるのではないかという想定はできました。

・あるいは避難所には行っただけでもみんなから邪魔にされてしまうので、いられなかった人が多いのです。壊れた家に普通に家に帰ってしまう。帰ってから食事できない人がきつとおられます

## 2 これからの課題と方向・取組み

### (1) 今後の被災地支援にとって必要なこと

#### ①継続的で、早急な取組みが必要

・昨年度、厚生労働省の老人健康保健事業で、グループホームにおける災害時の対策と対処を研究していて、報告書とDVDをつくっていたところでした。その最後のとりまとめの時期となり、「来年はほかの地震等のこともやらないといけないね」と3月の初めに話していたところ、今回の大震災があり、結果としてまた震災のことを取り組むことが必要になりました。

#### ②コミュニティの視点が必要

・本当にニーズって、1日でも変わっていくのだなというのがありますし、ちょっと前後するのですが、仮設住宅においても全くコミュニティができていところとできていないところがありまして、でき



ているところは、学校に近いとか子どもが多いとかというのは、コミュニティが自然発生的にできているのですが、そうではないところ、たとえば高台にあって高齢者だけの方が多いところでは外にも行けない。そうすると、結局孤立死をする人が増えてしまうのではと危惧します。

### ③被災状況に対応した柔軟な体制であるべき

・町内会同士、どこへ逃げましょう、っていう取り決めがありますよね。あんなの全く無駄です。みんな命からがら、そのときの状況に応じて、一番逃げられるところに逃げて、たまたま肩を寄せ合って助かった人たちが、同じ布団に毛布を寄せ合って生活が始まるわけですね。この方たち、全然違う町会です。違う町会の方たちが、たまたま、こちら80代、70代で「たまたま一緒になったのよね」ということなのですね。なので、避難所の想定というものが、どの時期に地震が起こるかによって、全然違ってくるのだということも、ひとつ考えておかなければいけないと思います。

### ④震災後だからこそ丁寧なケアを

・例えばグループホームの中で「今、ご飯がいない」と言われて、少し残したご飯を僕は平気でレンジでチンして提供している事実があったのですけれども、「違うな」と。確かに便利なのですから、決して豊かではないかと、考え直すきっかけにもなったような気がします。どういうことかと言ったら、やはりご飯はジャーから、しゃもじですくって取り出すこと。お茶は湯を沸かしてから茶葉を入れて、お茶をつくること。そういう大事なことを抜かして、その部分だけ見ていたような気がしたので、本当に、当たり前のようにしていたことが、本当はもしかしたら、認知症の人たちの支援とかよりは、すごく大事なことなのにかかわらず、便利な道具を使ってしまうが故に、その大事な部分に目がやれていなかった自分がいるのもその通りです。反省をしました。

### ⑤在宅系と施設系の違いを忘れずに

・被災地支援ということに関しては、施設系か在宅系かですごく違いがあるのですね。施設であれば、ある程度のネットワークがあり、やはり施設の中でのマニュアルだとか、災害対策でもそういうのを中心にしっかりとしていると思うのですけれども、在宅にいてなおかつ認知症で、家族が介護していてという、そういうネットワークが、非常につくりにくい部分があるだろうなというのも。なので、少しフィールドをちょっと分けていただいて、そういった方々につくるのか、在宅のところにつくるのか、私などは、割と在宅にどこも関わってしまうので、そうすると持つて行く方向性が、ちょっと違うのではないかなと、今、お話を聞いていて、ここはちょっとどういうふうにするのか、ただ、大まかに被災者支援といっても、在宅の方向を見ているのか、施設なのか違うのでそれを忘れないようにしないといけないと思います。

## (2) 予防の観点からの取組み

### ①日頃からのリスク管理が重要

・実際にうちの事業所では非常食も地域の方も含めて300人分、1週間分の備蓄をする計画であ

り、災害時に役に立つ発電機も設置できるような計画を立てています。震災から1年経つこともありますので、防災訓練の見直しをしていけたらなと思っています。

#### ②利用者を含めた防災訓練を

・備えとして、これらはやはりきちんと自分の施設の訓練を考えておかないといけないと思います。これは火災のときにも同じことが言えたのですが、備えとしての招集体制、訓練、想定ですね。避難場所、方法、地域との関係。様々なものがあります。私ども、今回で新たに付け加えたのが、うちの事業所内にありますが、特養には少なくとも授水槽があるのですが、いくら金かからないので、受水槽に蛇口を付けるということをやったのです。あれだけでも違います。つまり少なくとも水が飲み水として使えるということは非常に大きいことだろうし、あとはうちには温泉があるので、それを生活用水にも使えるので、どのようなことができるのか明確にしていく必要があると思います。

#### ③まずは自分の施設から始める

・備蓄が必要というが、まずやはり自分のところをどうするかという備えをきちんとしておかないと、よそはどうだとか言えないと思います。また同時に、何か職員の側にしっかりとした主体として動けるトレーニングをしっかりとっておかないといけない。私はうちのスタッフのひとりひとりがどういった主体で動けるか、そしてわれわれはどういう判断を下せるかというトレーニングをしっかりとっておかないと、他のいろいろなことをやっても何もならないような気がします。しっかりとした判断と、しっかりした行動が取れるようにしていきたいと思います。

### (3)緊急時の判断と避難

#### ①的確な避難判断と避難行動を

・新潟県の水害の際には7月29日の夜中1時に避難勧告が出ましたが、そのときあるグループホーム責任者の女性は即座に逃げる判断をしました。「無駄になっても良いから、取りあえず逃げてほしい。」と。避難を完了したのは朝5時。それで朝8時から水が出た。「待てという判断には何の根拠もない。無駄でも良いから逃げる。これを徹底していかないといけない。救うべきは人の命だから」と、これは何回か経験されたこととも裏付けられているのですが、「予測できないときには避難する勇気を持つ。時間と勝負だ」ということが重要です。

### (4)地域での取組み

#### ①地域の防災協定等への参画

・地域防災の仕組みへの参加をしています。グループホームでは、地域の老人支援会議に町内の方々や地域包括支援センターの方とも一緒に入っているのです。その中での防災のとりくみ、またワーキングチームというのをつくりまして、そちらに参加させていただいています。

・近隣との連携、顔のつながりが一番重要です。自分のところの車を1台も水没させなかったの

すが、1台ずつ高台に車を運ぼうとしたら、近所のスーパーのおじさんが「そんなことをやっていたら、ずっとかかる。水がくる」、「うちのマイクロバスを使え」と言われた。車できている職員はみんな自分の車に乗って逃げて、車がない人はマイクロバスを乗せてもらえた。そのためにスーパーのおじさんにつきあったわけではないのでしょうけれども、ネットワークというか、関係性というのは大事だろうと思います。

## ②地域で互いのことを知る関係性づくり

・小さなコミュニティの中で関係先を築いていくことや、知り合っていくことはとても大切だと思っているので、先程の話ではないけれども、僕も仙台とはつながりがあったから行きたいと思いました。最初に言いましたけれども、そういう関係性を築くことがたぶん大事だし、自治会に入っているとか、入っていないとか、町内会でどうのこうのとか、子ども会でどうのこうのという以前の問題で、地域のこともお互いのことを、知る関係性というのが、それをつくれるのもまた地域密着型サービスの事業に求められることだとすれば、やはり小さなコミュニティで関係性を築かないといけないと思います。

## ③災害時要援護者情報の整備（個人情報提供方針、台帳づくり）

・今、個人情報の管理がすごく大変で絶対外に出さない仕組みになっています。民生委員さんは独居老人の情報をたくさん持っているのですが、絶対出してくれないのです。避難所でどこそこのおばあちゃんが、ということがわかれば、良かったのですが。支援者にもデータがあれば、まず動きやすくなると思います。

・幾つかの自治体では災害とはまた別に、地域づくりなどの一環でいかに個人情報を共有するか、どこまでどういうふうに共有するかということを検討しています。中野などは新たに条例をつくって、議会を通して個人情報の扱いを新たに決めています。そういうところはあると思います。結局、方向としてそうなるのではないですか。

## ④地域での認知症サポーターや介護マーク等の普及

・認知症の人の支援で大切なのは、その人が認知症なのかどうかというのがわかること。ただ、それがわからないで、ただの困ったお年寄りではなくて「私は認知症です」もしくは「私は介護しているのです」という関係性が周囲の人にわかるということが大切で、現在はパッと見ではわからないので問題があるなと思います。

・静岡県が「介護中マーク」をつくり、厚労省が普及しようという話が出ていますが、まだあまり見たことがありません。認知症サポーターのオレンジリングを本人もつけたら良いのではないかなという話もありますが、見えにくいという問題もあります。

## (5)被災地の支援現場での体制づくり

### ①地域包括支援センターの役割

・もう少し、地域包括支援センターが他のセンターともうまく連携が取れればと思います。センターが具体的なニーズを把握し、お互いが共有してケアマネの役割との連携がうまく図れることが重要です。そのようなシステムがあって、さらに展開が広がって、さらにボランティアの方にもネットワークが広がるのがよいと思います。

・平常時に考えておくのは、やはり地域包括支援センターにいる主任ケアマネージャーの役割ではないかと思います。日頃の役割ができていれば、そういったときに核として活動していただくのはすごく大事なことだと思います。システムをつくっておいて、震災というスイッチが入ったらすぐに動くようにしておかなくてはいけないのかな、というところですね。スイッチが入ったときに実際に動くようにしなければ何の役にも立ちません。

## ②地域のコーディネーターを

・地域包括支援センターや行政が基本的の方針を立てている地域は強い。そうではないところでは、何となくやって、何となく行っているんで、今回も、たとえば今支援しているところの地域では、そういう意味で在宅支援が遅れていたんで、結果として行くと、在宅の人から「1年経って、今ごろ何しに来たのか」と言われることがあり、すごく不満に感じています。先程言ったコーディネーター役の人のところがうまく機能していなかったところもあるのかなという意味では、現地として見ている限りでも、そういうのは弱いのかなと感じました。ただ誰がどのようにやるかというのも、システムと意識と両方を合わせて考えないと難しいのだろうなと思うのですけれどもね。

## ③避難所マニュアルに盛り込むこと

・避難所マニュアルのなかに、知的障害児の子どもたちなどでもやはり奇声を上げたりなどしますので、仮にそういう避難所か何かで生活を仮にしているでもやはり同じようにはずされているので、盛り込む必要があります。またそういう社会的弱者の人たちと一緒にあった避難所づくりが必要だと思います。

・ケアマネ協会では、要介護者の実態把握だとか、安否確認の方法を記したマニュアルを作っています。しかし私たちがどこで活動しているかによって、利用者が答えるパターンが違います。「非常にハイになっているときの言葉だけを聴いてはいけないよ」とか、そういうことを一応最初にみんなに伝えてボランティアに入るようにしているが、その点を含めた見直しが必要だと思っています。

## ④クラウドやICTを活用した情報のバックアップ

・パソコンが全部なくなってしまってデータもわからなくなったとき、例えばモデル的にでも例えばクラウドを使って集中的にバックアップをつくるのが考えられる。この時期にあって良い。

## (6)ボランティアの専門性

### ①ボランティアを一般・専門に分ける仕組みの必要性

・たくさんのボランティアが入ったと言われているが、専門職のボランティアと一般のボランティアと

は分けて考えなければならないと思います。その整備がやっと今回初めてできたのではないかと思います。社協等がボランティアセンターを運営して、一般ボランティアはそこできちんと登録をしてほしいこと全部言うてから始まる仕組みとなっています。しかしその一般ボランティアと違うやはある程度専門性の必要なところのボランティアが必要でしたが、その数が少なかったのではないかなと思います。これから数値化されてくると思うが専門職チームのなり手が少なかった。救命のDMATだとか、看護協会からの派遣とか、そういうのはすごく明確にいっぱい入っていましたけれども、福祉専門とか、非常に認知症ケア専門士とか、少なかったのではないかなと思います。「ケアDMATが必要だ」と言うぐらい、初めてその点に光が当たったのではないかなと考えています。

## ②専門職ごとの専門性を生かした支援を

- ・最初に役に立つのは、避難所のマップだと思います。保健師が実はつくっていたのに出してくれなかったということがあって、避難所マップができないかと思っていました。
- ・ケアマネも避難所づくりに関してのノウハウはもっと言ってもよいと思います。ビッグパレットでは救急班が入るスペースや寝たきりの人が住めるスペースはなく、元気な人から入ったから、どこせられないのですよね。なので、そういうような避難所づくりとか何かは、本当は行政がノウハウ的に持っていて、それに力を使ってやる。なかなか民間の人たちが言っても、その人たちの権利になるので、私はどこかで「寝たきりの人のスペースです」、「救護班つくって」と言って駄目だったのです。受け入れるようなところは、預かってくれました。でも、ケアマネがやはり入り出すのは、やはりまずこうつくりながら、そこで「この人は必ず」というニーズを把握するのがケアマネの本来的な仕事ではないかなと思っています。

## (7)被災地の認知症ケアに必要なこと

### ①認知症の在宅被災者への支援

- ・女川で4月の何日でしたか、5月の初めだったですかね。「母親を探しています。3月12日に避難所に行く途中に行方不明になりました」名前が書いてあって、これはだから、全部、はってありましたですね。撮らせていただいたのですけれども、要するに認知症の始まりで、「住所・名前が言えない可能性があります」といって連絡先を書いています。ということは、地震・津波では助かっていらっしやるのです。翌日の避難所に行くときにいらっしやらなくなった。これが、認知症の方の、新潟でもありましたけれども、やはり、避難所に行くときに、家族と一緒にいながら、ちょっと手を離れた瞬間に、いろいろなことが起きている。これは現状の認知症介護のところで見られている。今、駅のトイレに行ったときにいなくなったとかいうのは、結構もう首都圏でも多くでているのですけれども、それと同じことが、やはり避難所でも起きたということです。

### ②ニーズを聴く力の醸成

- ・私が言いたいのは、きちんと状況を冷静に受け止められること、もうひとつは感情を表現できる

ようになることです。話を聞けるキャパと忍耐。少ししんどい中で、やはりスタッフの方は少しずつ時間をともにする中でいろいろな話をしてくださり、いろいろなことをやるべく、ご本人にとって目いっぱいの話をやられている中で、自分の話の結果として、別に無理を聞きましょうというのではなく、ずれてくるわけですね。そのときに、きちんと話が聞けるだけの聞ける力がほしい。

### ③緊急度・優先度を把握できる力の育成

・こちらが何をするかではなくて、何を必要とするかに対してプライオリティの仕事をして、特にたぶん最初にお入りになった人って、まず、飛び込んでみているという話だってありますし、うちも入るときに、最初にやる人間というのは、かなり限られているのです。情報をきちんと把握できて、そして次の人に連絡ができて、そこで何を必要としているかということも、人やモノをうまく出せる人間を1人は入れておきます。ケアができるスタッフでも、ある程度のやはりキャリアを持っていないと、ただ行けば良いという問題ではないと思います。

### ④責任をもってサービスにつなげる力を

・自己責任と自己完結というのがあると思うので、きちんと引き際とか見立てを見た上で、引き際というのをしていかないと、自立というか、もともと在宅にいた方で認知症でも在宅だった方もいますが、だんだんと依存をしてきてしまい、最終的にはロングのショートとか入居になってしまったりする方も多いので、そこをどう、先々まで見立てていくかというのが必要なだろうというのは、ちょっとそういう意味で反省を込めていきたいなと思います。

### ⑤認知症の人の支援から考える地域づくり

・今日、議論、全くしていないのですけれども、今回の津波等で亡くなった方、高齢者が多いと言われています。その中でもたぶん、障害を持った高齢者の人の割合は高いと感じます。より弱い人が、やはり巻き込まれたと思うのです。だから、私たちは自分の地域で、障害を持った高齢者の人たちを、まずどう命を救うかということも目を向けていかないと、認知症という以前に、命を守るということから、われわれは、やはり、自分たちの地域づくりを考えていく。

## (8) 認知症グループホームの地域での役割

### ①地域での役割確認と連携体制づくり

・防災対策は大事なのですけれども、一方であまり安全だけを見ていくと、人の生活が脅かされる危険もあるのです。安全対策を考えるとときに押さえておかないと、非常に窮屈な生活空間ができたり、それが窮屈な生活を強いられる状態にもなる。これは、あらゆる安全対策を考えるとときに、人の生活として、リスクをやはり伴った中で生きていかなければいけない。そしてそのときに、どうすることが必要なのだということを、しっかりと認識しておかなければいけないのだろうと思っており

ます。

・立地条件だとか、あと都市部ですと、高層階のところで地震があつてどうするのだとか、様々なこ

とがあるわけで、全般的な立地条件と自分のところの固有の立地条件、もちろん気候条件、そして組織的特性だってそうです。それから人類的特性、また建物の特性、様々な法則をきちんと理解しておかないといけないだろうとか。それからご近所とのつきあい方を考えないといけません。(Bさん)

・「町内会が機能していなかった」、「コミュニティどうするのだ」、と言われると非常に弱いのですが、やはり、われわれが少なくとも今関わっている地域性で考えたとき、もう少し小さい単位で考えると、「あの人は知的障害がある」、「認知症である」とか、ある程度、許容されるというか、お互いの中での了解事項ができる範囲での、避難できる場所というものを確保していくことを考えると、われわれの施設というのも一定の役割を果たしていくように思える。もう少し意識的に、施設がどう地域と関わっていくかということを考え、これだけ事業所が増えたのですから、それをこうつないでいけばかなりの部分ができる、そういう発想で考えていかないといけないかなと思っています。

## ②施設同士の姉妹関係づくり

・ひとつは先程言った災害等のかの衣食住、もうひとつは研修等ですね。年がら年中よその法人の職員、うちに出入りして、うちの法人職員が研修をしています。相互研修をするということで、いずれちょっと出向も考えていますが、外に少し出して、受け入れるころをみつける。それから職員の福利厚生です。ひとつの法人がやっている保育事業にうちの法人の職員も使わせてもらっています。そうすることによって、姉妹関係というのをしっかりつくっておいてお互い融通しあうことが大事だと思います。

## (9)被災地の現場でのチーム編成の方法

### ①構成メンバーとリーダーシップ

・チームを派遣するときメンバーの構成が重要です。1人ではまず駄目で複数構成でやる必要があります。それから全く波長合わせができていない人と行くというのは、なかなか厳しいものがあるってチームの編成のあり方が関係するかなと思います。

・やはり同じケアマネが行っていても、その中でコーディネーターをきちっとおかないと、おかしな方向に行ってしまう。チームの中である程度リーダー的な存在をどうするのかとか、そのチームのコーディネートはどうするのかみたいなことが必要です。実際ナースも本当2人か3人が一緒になっていただけでも、やはりそこの中のチームをきちんとまとめていく必要があることを今回強く感じました。人を出す以上は、チームづくりをある程度考えてやっておかないと無理だと思います。

### ②被災地の現場で複数チームがシフトできる体制づくり

・僕らもシフトというか、もう組まれていたのですよ。サンダーバードを通じて依頼があって、依頼を

受けた時点で「行きますよ」と、こちらから言っているのに、僕らが着く2日前ぐらいには、こちらから相手のところに向かう、先に「何人行きますから」ということから、情報が下りてくるのですよ。「どんな職種で、どういうことをしてほしい」だとか、「こんなことの支援が」とかというところが、明確でした。現地との間でそういうことが必要です。

#### (10)被災地に支援チームを派遣する方法

##### ①被災地にチームを送り込むシステムづくり

- ・被災地に入って、どこに行くのかということを考えなければいけないということで、やはり大きく分けて3つあって、つまり施設に行くということの、特養、老健等に入っていく方、それから避難所に支援に行く方と、それからいわゆるローラー作戦ではないのですけれども、少しニーズ把握とかも含めて、在宅のまわる方とあるのかなと思ってまして、そういうふうに、自分の頭の中では整理がついています。

##### ②認知症介護指導者同士のネットワークづくり

- ・認知症介護指導者同士のネットワークづくりが大切。知っている人が来るというのが一番良いみたいである。あの人が来ているというので。知らない人が来るよりは頼みやすい。
- ・同じところで研修を受けたというだけですけれども、それはそれで、顔ではなくても意味があるわけです。それだけでも共有したという部分があるだけで安心である。
- ・姉妹提携をしているが、やったほうが良いと思う。特に近県都はその必要性を感じます。

##### ③ケアのDMATの構築(確実にうごける仕組みづくり)

- ・最近盛んに「ケアのDMAT」と最近言われるようになっていますが、これは本当に重要です。今回もやはりケアを必要とする人にしてみたら、やはりライフラインに等しいくらいとても大切なものなのですが、それに対してわれわれは本当に自然発生的に出てくるものを待たざるを得なかったのです。ということで、きちんとした体制づくりがなかった。これは行政単位もそうでしょうし、事業者団体もそうです。職能団体もそうですけれども、本当の意味でちゃんとしたトレーニングだとか、準備だとかしていたのかといったのがなされていなかった。今後はしっかりとしていかなければいけないだろう。まず、やれることから、やっていかなければいけないだろうと思います。
- ・少なくともこの動き、僕はシステムが動いてほしいのですけれども、ただしあんまりシステムがあっても、無駄をなくそうと、遠くへ行く人は、結構無駄が出るはずで。無駄があってもある程度やむを得ないということですね。福祉関係で少しずつやっていく中で整備されていくものだと思います。逆に被災地の人からみると、あまりシステムだけで動かそうとしても、無理があるかなとも思います。



## V 考察

### 1) 被災地支援のためのシステム構築の必要性

公的な被災地支援のシステム構築の必要性に関する意見があった。今回の震災において実施された介護職員の派遣システムは、3月18日の厚生労働省からの事務連絡に基づき行われたものであった。そのため、DMATに代表される医療関係者の災害時の専門職派遣のシステムに比較し、迅速かつ自律的なシステムとは言い難い面があるといえる。一方、本調査において、地震発生からまもなくの被災地の状況は、低体温症による要介護高齢者の死亡や、職員の被災、在宅要支援者の安否確認と避難、施設における定員超過受け入れ等を原因とした介護・福祉系スタッフのマンパワー不足が発生していた状況が指摘されている。そうした状況への支援として、個人的なつてを通じた自主的な支援活動が行われていたが、あくまで個人的支援であり、限界性があったという意見があった。また、ある程度の専門性が必要な部分でボランティアが必要だったが、福祉専門とか認知症ケアの専門家についてはその数が少なかったのではないかとする指摘がされ、現場のニーズと必要な専門性に乖離があったことが示唆された。

それらの状況をふまえ、介護職員の派遣についても公的システムの必要性に関する意見が出された。具体的には、派遣する職員へのトレーニングの必要性や、チームを組む際の、メンバー構成を行うコーディネートする役割の重要性、リーダー的な立場のメンバーがいることの必要性が指摘された。また、在宅と施設ではニーズの違いから、特養や老健なのか避難所なのか在宅なのかの派遣先の区別が必要であるとする意見があった。派遣期間についても引き継ぎの関係から最低1週間以上の派遣期間が必要だとする意見があった。関連する仕組みに関する意見としては、現地で支援にあたるものと、必要なニーズを把握しそれを発信する役割のものが必要だとする意見があった。

付随して、在宅高齢者の安否確認等で住民基本台帳などの個人情報入手する必要性が生じるが、その管理が厳しくなっているという意見があった。しかるべき支援者については、そうした情報にアクセスできるような仕組みづくりの必要性についても検討していく必要があることが示唆された。

### 2) 被災地での支援に必要な資質・スキル

被災地での支援に必要な資質・スキルについての意見が出された。新人スタッフなど経験のないものではなく、ある程度のキャリアが必要出るとする意見があった。また具体的なスキルとしては以下のような点があげられた。

#### ○行った先で状況を見極め、臨機応変に動けること

被災地での状況は刻々と変化する。被災地に赴く前に得た情報がそのまま活かされるとは限らない。現地での状況に合わせて臨機応変に対応できる柔軟さが求められる。

#### ○緊急度・優先度を把握できる力

例えば介護職だから介護をしますというような派遣された職員の側から仕事を限定するのでは

なく、現地で何が必要とされているかの情報を把握し、その緊急度、優先度を把握しながら仕事ができることが求められる。

#### ○聴く力

被災した職員と共に業務にあたるなか、その職員が話す、辛さや苦しさを受け止め、感情の側面への関りをしながら話を聞ける力。

#### ○自己責任・自己完結の意識

避難所や被災した施設では、居住等のスペースや水、食糧など必ずしも十分でない状況にある。派遣されたものは、自分の衣食住については派遣先の手を煩わせることなく、自らの責任で対処するという意識を持つことが必要である。

#### ○認知症ケア

派遣先において必要とされる業務は必ずしも専門的な内容ばかりではなく、片づけや書類整理などの雑用である場合も想定される。一方で、現場のニーズを見極め必要と求めに応じて認知症者への介護等の支援を行う場合もある。必要と求めに応じて臨機応変に対応するための認知症ケアに関する専門性を有していることが必要である。

以上のようなスキル等を担保するためには、当然研修等の仕組みが必要となる。そうした教育・研修システムの構築に関する必要性も示唆されたといえる。

### 3)被災地において支援活動を展開する上での工夫、取り組み

地震の影響からグループホームや特別養護老人ホーム等の介護施設は、定員の超過受け入れや、ライフラインや流通のストップによる物資の不足など様々な状況にみまわれ、過酷な労働環境に陥るが、その一方で、マンパワー不足の状態にあっても、外部から派遣された介護職員の受け入れにはたやすく踏み切れない事情があるとする意見があった。その背景として例えば、仕事の割り振りや説明、入居者に関する情報を伝えることさえも大変な状況であることや、ギリギリのバランスで保たれている現場の中に外部から人が入ることの心配、あるいは、介護職としてのプライドもあり、自分たちのやり方を崩されるような仕事をしてほしくないという思いなどがあるのではないかという意見があった。

そこで、支援活動を行っていくための工夫にはどのようなことが考えられるのかについて意見があげられた。具体的には、どんな資格でどんな特技があるかといった紹介シートのようなものを持参する、専門の研修を受け、その修了の証としてボランティアの心得のようなパンフレットを提示するといった身分と能力に関する情報を派遣先に伝えるためのツールの必要性に関する意見があった。また、支援する側の姿勢として、介護職だから介護だけをやるというのではなく、なんでもやりますよという構えでないといけないといった意見があった。関連して、認知症ケアであれば、馴染みの関係性が重要であるため、直接的なケアはその事業所のスタッフが行い、片づけや食事の準備などの周辺のことから支援に入るようにするといった意見があった。あるいは、受け入れ側の準備として、初めから災害マニュアルに支援を受けるためのマニュアルを用意しておくという意見もあった。

これらの工夫や取組みを、前述の被災地での支援に必要な資質・スキルと合わせることでより一層、支援の効果があがることが期待される。

#### 4) 防災対策

今後の防災対策に関する意見があった。今回のような大規模災害が発生し、ライフラインや物流のストップし、マンパワー不足が発生した場合、小さい法人や、単独事業所での運営を行っているような場合に非常に困難な状況に陥るのではないかという指摘がされた。認知症ケアの代表的なサービスの一つであるグループホームや小規模多機能といったサービスを提供する事業所はそうした傾向が強く、大規模災害時に発生する様々な状況を自律的に乗り越えていける体力が大きくないという指摘があった。

そうした状況に対する対策として、施設間の姉妹関係づくりや災害時の相互支援提携の必要性に関する意見がだされた。施設間の姉妹関係づくりでは、災害時の衣食住の相互支援の提携や、職員の交換研修等での交流を通じたマンパワー確保対策などの意見がだされた。

また、グループホームが被災し認知症者が避難をしても、BPSDなどを原因として避難所に落ち着くことができなかった状況があったというエピソードが紹介された。その一方で、公的な支援の他に地域からの様々な支援を受けながら食糧不足やマンパワー不足を乗り越えたという事例もあり、災害時の地域での役割確認と連携体制づくりが必要であるとする意見があった。普段から地域との関わりを大切にし、認知症者等との馴染みの関係を形成することで、避難所で一緒になってある程度許容される状況ができるのではないかといった意見があった。また、グループホームとして地域の防災協定等へ参加しているといった事例も紹介された。備蓄やマンパワーの確保などは一事業所、ないし一法人での取り組みでは限界がある。それに対し、法人間、事業所間のネットワーク、あるいは地域ぐるみで解決していく方法を検討する必要性が示唆された。



## 第5章 被災地の行政担当者に対するヒアリング 調査

## I 調査の目的

本調査は、東日本大震災の被災地支援における介護職員の派遣・受け入れシステム及び県外施設への福祉サービス利用者の避難と受け入れのシステムの実態と課題を明らかにすることを目的とする。D-MATに代表される災害時の保健医療専門職の派遣のシステムに対し、介護職員の派遣については十分にシステム化されていたとはいえない。今回の東日本大震災においては3月18日の厚生労働省老健局からの事務連絡によって、被災地からの要請に基づいて厚労省を通して各県に介護職員の募集がかけられるという仕組みの中で、数多くの介護職員が現地に赴いた。また、その他に社会福祉士会等の各専門職団体の派遣も行われている。加えてNPOなどによる民間の派遣と受け入れもおこなわれた。また、津波等によって多くの施設入所者が居場所をなくす事態となり、それらの被災者を県外施設へ避難させる動きもみられた。そのこれらの当時関わった行政職員からの視点で概観し、どのような実態と課題があったのかを明らかにし、今後どのようなシステムが考えられるのかを検討する。

## II 調査の方法

### 1) 調査対象

宮城県職員のうち、介護職員の派遣及び県外福祉施設への避難に関わったもの

### 2) 調査時期

平成24年1月28日

### 3) 調査方法・内容

以下のポイントに留意しながら、構造化されていないインタビュー形式でヒアリングを行った。

- ①地震発生からの経過
- ②介護職員派遣・受け入れシステムの運用の実態
- ③介護職員派遣・受け入れシステムの課題
- ④県外施設への被災者の避難の実態

### 4) 倫理的配慮

調査の主旨、目的、方法、倫理的配慮について説明し、了解を得たうえで調査を行った。また、インタビュー結果の公表にあたっては、事前に調査対象者に内容を確認してもらい、了解を取った上で公表することを説明した。

### 5) データの処理

得られたデータは、逐語録をもとに、特定の人物等の固有名詞を削除した。さらに、まとまった意味・内容ごとの再整理するとともに、時間経過にそった形で整理した。再整理したデータの正確さ、記載内容の適切さについてはインフォーマントに確認・修正を依頼した。

### Ⅲ 結果

#### ◆県・厚労省が介在して介護職員を派遣するスキームについて

3月18日付の事務連絡をもとに、主に避難所に介護職員を派遣することになった方法として、ニーズを県で集約し、厚労省を仲介として各県で募集したのち、必要なところに派遣するという方法で実施された。これにより3月25日から職員の派遣が開始された。これは、8月まで続いて全体で937人の受け入れを行った。1都10県から派遣していただいた。実際には、避難所だけでなく施設でも支援を行っていただいた。

国で、これとは別に両輪という形で被災者の受け入れに関するマッチングの制度を用意した。こちらは被災者について施設から施設へのマッチングを厚労省が仲介して行うもので、受け入れてもよいという施設と被災県のニーズをマッチングするものである。これによって、受け入れてもよいという施設のリストをもらった。大阪府や熊本県からもお話をいただいたが、隣県の山形県へお願いすることで対応した。この他県内の施設に定員超過でお願いする形で対応した。

介護職員の派遣は、厚生労働省が仲介し、どの町で何人くらいというオーダーを派遣元の都道府県に出すと、通常は1週間くらいの期間で、5～6人くらいの1パーティを交代で派遣するパターンが多かった。遠いところだと山梨県、富山県、石川県などかなり遠隔地の都道府県から派遣してもらうようになってきた。

この方法の問題点としては、まず、都道府県によって多くの介護職員を確保できないところがあり、募集しても長期間派遣できないという県もあった。被災地としては介護職員のニーズがあり来て欲しいが、すでに派遣の人員が尽きてしまい、厚労省にまた次の県を探してもらうという状況だった。

また、国や県から介護施設に声掛けをした際に、費用負担はどうなるかという話があり、当初はそうした部分に不明確な部分があった。4月29日の時点で災害救助法の対象として県同士でかかった経費については求償できるという通知が国からきたが、実際に細かい取扱いが整備されたのが7月以降になった。それまでは、国からこのような通知が出ているがはっきりしたことは決まっていませんという形をお願いしていたのが実態である。これは例えば東京都がボランティアを集めて宮城県に送った場合、一旦東京都がそれを立て替え払いで負担し、後でそれを宮城県に対して求償してもらうというものだが、どこまで対象経費として認めていいのかの細部については決まっておらず、また、全くボランティアという形なのか、事業所の負担で出張という扱いになるのか、さらに、東京都のようにバスをチャーターしてくるところもあれば、自前で来るところもある、新幹線で来る経費を県が負担するところもあって、そうした扱いがバラバラだった。実際の運用において都道府県と話をする場合には、都道府県の一番やりやすい方法でやっていただいて、あとでそれを宮城県へ求償するという形でしか対応できなかった。

介護職員も、期間として通常1週間の派遣でも、移動時間が前後1日あるほか、遠隔地になると、引き継ぎの時間が十分にとれなかったり、前泊という形になったりした。基本的に避難所に寝泊まりすることを前提にしている、前泊は別のところで宿をとらなくてはならないなど様々あっ

た。

派遣先の避難所においては、ある程度住民のことがわかるリーダー的な人がいないと、派遣された介護職員も何をどうすればいいか混乱するなど、受け入れ態勢の問題もあった。判断を市町におおくと、そこでも現場がよくわからず指示ができないという状況であった。実際には都道府県から派遣された介護職員以外にも、職能団体であったり、NPO法人であったり、県でも把握していないルートでボランティアが入っている場合もあった。全くのボランティアという人もいたので、どれくらいの人が避難所の支援に入っているのかについては、県でも全体像は把握できなかった。市町村のほうでもおそらく、避難所がどういうふう運営されているのかを把握してコントロールはできていなかった状況なのではないか。

#### ◆関連団体を通して介護職員を派遣するスキームについて

一方、3月23日付の事務連絡をもとに、老人福祉施設協議会や老人保健施設協議会、GH協会などを介して、マッチングを行い、必要な施設に対して介護職員を派遣するスキームもあったが、そちらはうまく機能しなかった。そのため、各団体に4月1日に各会員に連絡先を伝え、県で調整する旨を連絡した。何件かリクエストはあったが、受け入れるほうとしてはすぐに来てほしいのだが、調整に時間がかかりうまくいかなかった。結局、依頼した施設では派遣なしで間に合わせる形になってしまった。

その原因としては、まず、費用負担について送る側受け入れる側のどちらですか、また、誰がマッチングをするのかなどの問題などがあったと考えられる。国では旅費などについては災害救助法を適応するという連絡があったが、そうした調整については県が介在しないと難しいと考える。また、当時は通信手段が確立していなかったこともあり、本当に必要なところに伝わっていたかという疑問はある。当時は郵便で送ったとしても届かない時期であった。介護施設の状況については3月の2、3週間はかなり厳しかったはずであるが、結局このスキームの実績は0だった。逆に県が介在する避難所への派遣スキームは大多数のマッチングが行われた。両方あったことも混乱した原因かもしれない。

県が介在したスキームは市町村がニーズを集約し、まとまった段階で県を通して国にあげられるというルートである。一方の各団体を介在するスキームは各団体自体も被災者であり、県が行っているような作業ができない、自分のところで手いっぱいなのに、派遣調整する余力はなかったことが想定され、それにより団体経由のスキームはうまく機能できなかったのではないかと。

金銭的な負担についても、来て欲しい側はすぐに来て欲しい、負担の話は後にして欲しいという声があった。そういう仕組みが従前にできていて、万が一の時はそれに対応するというルール決めなり業界内での了解事項があればおそらくもっとスムーズにいったのではないと思う。こちらのスキームでは県は情報提供だけで、あとは民間にお願いしますというスキームだったのでそれが大きな違いとなったのではないかと。

派遣したときの宿泊の問題もでてきていた。受け入れ施設側では用意できないが、ホテルなども復旧の業者などによって抑えられている。避難所であれば、避難所の隅のほうで、寝袋で寝る



ということもできたが、施設のほうは定員を超えてぎっしり入っていたのでそういうわけにもいかない。受け入れ側も、派遣された介護職員から寝る場所の確保までできなかったのでは。派遣された人への食糧も必ずしも十分でなかったはずなので、そこまで手がまわらなかったのでは。利用者の情報も伝えなければならないし、それなら慣れた職員でやったほうがいいということかもしれない。そういうこともあり、受け入れ施設側も対応がちょっと厳しいから現状のままがんばろうということになったのではないかな。

被災した施設のニーズについて考えてみると、同一法人内で複数の施設をもっていた場合は、事業継続が可能な施設に利用者と職員と一緒に移動する。それによって超過受け入れとなったとしても職員数についてはとりあえずのところは完全に不足する状況にない。しかし、時間の経過とともに、職員も被災者であるため、自分の後片付けなどを考えた時に外からの支援が必要な時期がある。それが今回は4、5月くらいの時期になったのだろう。最初のころはフル回転でやってしまいが、ある程度時間がたつてくるともたなくなってくるのでそのときの交代要員などの話はあったと思う。しかし、ニーズはあったが結果がついてこなかった。

実際、施設のマッチングは5月の連休前くらいに必要なという声があがっていたのだが、結局調整ができず、間に合いましたということで、そのうちニーズが出てこなくなった。逆に、きちんと勤めてくれる人を募集したいが、来てくれないという声のほうが多い状況になってきた。ある程度時間がたつてくると、とりあえず超過定員で入っていただいていた人も、次の落ち着き先を探すようになってくる。そうした時期にピークを過ぎたと施設のほうも感じてきたのかもしれない。具体的には、グループホームであれば仮設のグループホームの話が出てきたり、そうになるとボランティアよりも職員の確保という話になる。一番早い仮設グループホームの着工は6月8日で、5月の半ばにはどのようなものを作るのかという話が始まっている。連休明けには実際にグループホームの側でも仮設に移動することを想定して動き始めてきていた時期ではないかな。

県、厚労省を介在するルートと、社会福祉士会等の専門職団体を通じたルート、全く自主的に来た人などが混在している状況だった。少なくとも厚労省ルートで入った人については、受け入れた市町でどのような人が何人来るのか、いつまでいるのかということ把握していた。ニーズを把握したうえで要請しているので、行ってみて支援業務が何もなかったとはならなかった。県、厚労省を介在するルートで介護職員が派遣されたのは、沿岸部の市町村の気仙沼、南三陸などの4市町で、それ以外のところはこのルートを使っていない。例えば仙台市などには入っていなかったが、そうしたところはすでに様々な団体を通じて支援が行われており、ニーズが県まであがってこなかったのではないかな。意図的ではないが、交通の便が悪いところには県、厚労省を介在するルートから派遣し、そうでないところにはボランティアや別の団体等が支援していくという棲み分けが結果としてできたのではないかな。

自主的に避難所に支援に入ったが、言葉があわず混乱したという人がいた。阪神淡路のときにお世話になったという思いが強く関西から多くの方に来ていただいたが、言葉の違いでうまく意思疎通ができなかったというのはあったのではないかな。自主的に来ていただいた人のオリエンテーションはできなかったが、そうしたことができれば混乱は少なかったのではないかな。

◆県外施設への被災者の受け入れについて

地震発生から1週間の間に地盤の問題やライフラインの問題から施設が危険な状況にあり、これ以上高齢者を置いておけないということで、施設から市へ、市から県に緊急で66名の調整をしてもらいたいという要請があった。山形県庁に直接やり取りして老施協、老健協にも間に入ってもらい受け入れてもかまわないという施設をリストアップしてもらった。それをもとに受け入れをお願いした。従前に山形県との間でそうした協定があったわけではなく、飛び込みで行ったが、山形県にも快く協力していただいた。また、自主的に避難先の施設を探した人で、搬送の部分だけを県で手伝った人が24名、老健で自主的に系列の山形の施設に移られた人が63名いた。

福島県や岩手県がお互いに被災している状況で、日本海側の県ということでお願いした。今回県が介在したケースは山形県だけであった。東京、千葉、関西から申し出はあったが、ご家族も近いほうがいいということで頼むまでには至らなかった。個人的なつてを頼って行かれた方はいたと思うが、福島県とは違い、原発ということではなかったもので、どうしても遠くに避難したいという話は聞いていない。早い段階で、定員超過で受け入れてもよいという通知を出したことで、県内施設で対応できたのではないかと。これで減算になりますよということになれば当然いられないので、隣県の施設にお世話にならなければならなかったかもしれない。

山形県におられる66名についてはまだ施設が復旧作業中だが、何人か家族の強い要望で、系列の施設に定員超過で移られた人もいるがまだ山形の人もいる。今年の3月には再開できる見通しなのでそうしたら戻ってこられるのではないかと。

Table 1 介護職員派遣システムの実態と課題

| 【県・厚労省が介在して介護職員を派遣するスキーム】 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|---------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 概要                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・主に避難所に介護職員を派遣することになった方法として、ニーズを県で集約し、厚労省を仲介として各県で募集したのち、必要なところに派遣するという方法</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 実態                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆多数のマッチングが行われる <ul style="list-style-type: none"> <li>・3月20日から派遣された職員が県内に入ってきた。これは、8月まで続いて全体で937人の受け入れをおこなった。1都6県から派遣していただいた。実際には、避難所だけでなく施設のほうにいった手伝っていた。</li> <li>・県が介在する避難所のスキームは大多数のマッチングが行われた。</li> </ul> </li> <li>◆1週間程度のスパンで5～6人体制で派遣 <ul style="list-style-type: none"> <li>・厚生労働省が仲介して、どの町で何人くらいというオーダーを手挙げしてくれた都道府県に出すと、通常は1週間くらいのスパンで、5～6人くらいの1パーティを交代で派遣するパターンが多かった。</li> </ul> </li> <li>◆遠隔地からの派遣 <ul style="list-style-type: none"> <li>・遠いところだと山梨、富山、石川などかなり遠隔地の都道府県から派遣してもらうようになってきた。</li> </ul> </li> <li>◆費用負担の取り決めが不明確なまま運用 <ul style="list-style-type: none"> <li>・4月29日の時点で災害救助法の対象として県同士でかかったお金については請求してくださいという国から手続きの通知がきたが、実際にきちんとした形が整備されたのが7月以降になった。それまでは、国のほうからこのような規定がでているがはっきりしたことはきまっていませんという形をお願いしていたのが実態である。</li> <li>・都道府県と話をする場合には、都道府県の一番やりやすい方法でやっていただいて、あとでそれを宮城県のほうへ求償するという形でしか対応できなかった。</li> </ul> </li> </ul> |
| 課題                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>◆都道府県によって長期の派遣が難しい場合もある <ul style="list-style-type: none"> <li>・都道府県でも大きなところと小さなところがあり、募集しても長期間派遣できないという県もあった。</li> </ul> </li> <li>◆安定した人員の確保が困難 <ul style="list-style-type: none"> <li>・被災地のほうとしては介護職員のニーズがあり来て欲しいが、すでに派遣の人員が尽きてしまい、厚労省のほうにもどって、また次の県を探してもらうという状況</li> </ul> </li> <li>◆費用負担に関する細かいルールが不明確 <ul style="list-style-type: none"> <li>・国や県から介護施設に声掛けをした際に、費用負担はどうなるかという話になったが、当時はそうした部分に不明確な部分があった。</li> </ul> </li> <li>◆前泊、引き継ぎの課題 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアの人も、期間として通常1週間ということでも、引き継ぎの時間が前後数日あるとして、遠隔地になると、引き継ぎの時間が十分にとれなかったり、前泊という形に</li> </ul> </li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                      |

|  |                                                                                                                                                                                                                                           |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  | <p>なったりした。基本的に避難所に寝泊まりすることを前提にしても前泊は別のところで宿をとらなくてはならないなどのことがあった。</p> <p>◆受け入れ先のコーディネート課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・派遣先の避難所においては、ある程度住民のことがわるリーダー的な人がいないと、派遣された介護職員も何をどうすればいいか混乱する場合など、受け入れ態勢の問題が聞かれたところもあった。</li> </ul> |
|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| 【関連団体を通して介護職員を派遣するスキーム】 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 概要                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・老人福祉施設協議会や老人保健施設協議会、GH 協会などを介して、マッチングを行い、必要な施設に対して介護職員を派遣するスキーム</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 実態                      | <p>◆ニーズに即応できなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各団体に4月1日に各会員はここに連絡するように、そうすれば調整するからという連絡をした。何件かリクエストはあったが、受け入れるほうとしてはすぐに来てほしいのだが、調整に時間がかかりうまくいかなかった。</li> <li>・実績は0だった。</li> <li>・施設のマッチングは5月の連休前くらいに必要だという声があがっていたのだが、結局調整ができず、間に合いましたということで、そのうちニーズがでてこなくなった。実際、逆に、きちんと勤めてくれる人を募集したいが、きてくれないという声のほうが多くなってきた状況になってきた。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 課題                      | <p>◆費用負担のルール・マッチングに課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・費用負担について送る側受け入れる側のどちらですのか、また、誰がマッチングをするのかなど問題などがあつたのではないかな。</li> </ul> <p>◆情報伝達の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本当に必要なところに伝わっていたかという疑問はある。</li> </ul> <p>◆調整機関が被災し機能できない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各団体を介在するスキームの方は各団体自体も被災者であり、県が行っているような作業ができるかといえできない、自分のところで手いっぱいなのに、その余力はないということだったと想定され、それにより団体経由のスキームのほうはそこまでうまく機能できなかったのではないかな。</li> </ul> <p>◆受け入れ施設側の負担</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・派遣された人への食糧も必ずしも十分でなかったはずなので、そこまでまわらなかったのでは。利用者の情報も伝えなければならないし、それなら慣れた職員でやったほうがいいということかもしれない。</li> </ul> |

## IV 考察

### 1) 介護職員派遣システムの実態と課題

被災地への介護職員派遣システムとして、厚生労働省からの公的なものとしては、県・厚労省が介在して介護職員を派遣するスキームと関連団体を通して介護職員を派遣するスキームの二つが提示された。調査より、宮城県においては前者のシステムについては多くのマッチングが行われ、後者についてはうまく機能しなかったことが明らかになった。

まず、県・厚労省が介在して介護職員を派遣するスキームについては、地震発生後 9 日目の 3 月 20 日から派遣職員が活動を開始した。その後、避難所を中心に 8 月まで 900 人を超える介護職員が派遣されていた。介護職員は 1 都 6 県から派遣され、山梨、富山、石川などかなり遠隔地の都道府県から派遣されたという実態が明らかになった。

一方、このスキームについても運用上いくつかの課題があったことが指摘された。一つは、派遣される介護職員の確保の問題である。今回のスキームにおいては厚労省より派遣を依頼された都道府県が介護職員を募集して随時派遣するという方式をとった。しかし、都道府県によっては十分な人員の確保や、長期派遣の要請に答えられない状況もあり、そうした場合はまた次の都道府県に要請を行うといった自転車操業のような状況だったことが指摘された。

また、費用負担に関する細かいルールが不明確なまま、運用されたことが明らかになった。経費や現地までの移動の方法、宿泊の手配など各都道府県によって状況が異なり、派遣に手をあげた介護職員はそうした状況の中で対応していたことが明らかになった。

もう一つの関連団体を通して介護職員を派遣するスキームについては、宮城県の実績は 0 だったことが明らかになった。このスキームについて、ニーズの収集と調整の課題があげられた。ニーズの収集については、当時の通信手段の問題から各施設に情報がうまく伝わらなかったかもしれないという見解が示された。また調整の部分については調整役として考えられていた関連団体そのものが被災し対応できなかったのではないかという見解が示された。

また、受け入れ側として、派遣された職員の宿泊や食事、受け入れのためのコーディネートに割く労力への懸念などがあったのではないかという見解が述べられた。定員超過で受け入れを行っていた当時の施設の状況を考えると、職員・入居者とも際どいバランスの中でなんとかケアを行っていたことが推測される。そうした状況において外部の人間を受け入れる余裕がなかったことが推測される。しかし、実際に 5 月の連休前にはそうした声を県の担当者も認識していたことから、職員の疲労や自らも被災者である状況を考えて一息入れることが必要な時期があったことも推測される。以上から、ニーズがあったにもかかわらずこのスキームが機能しなかった原因の一つとして、受け入れ側にとっても受け入れ態勢をどう作るかの課題があったことが示唆されたいえる。

今回の震災において、各施設の介護ニーズを吸い上げ、それを集約しマッチングの調整をする機能が被災地の専門職団体で可能であったかどうかという点、結果からすると困難だったといえるであろう。とはいえ、市町村も同様に被災しているものの、もう一方のスキームが機能していること

を考えれば、行政機関が関与する形が有効であったということが示唆されているといえる。

以上から、介護施設等への職員派遣のシステムのあり方としては、調整役となる機関と、ニーズを有する施設側の両者にとってそのあり方を検討する必要があると思われる。調整役については、県担当者が指摘しているとおり、都道府県等の行政がからむことの必要性を検討すべきである。また、受け入れる施設側にとっては、システムとニーズがあるのにも関わらず利用を躊躇するという課題について検討する必要がある。具体的には、災害時のマンパワー確保の方策について防災マニュアル等を整備する際に、外部からの介護職員の支援を受けるための体制づくりについて取り上げる等の取り組みが必要であると考ええる。

## 2) 県外施設への被災者の受け入れについて

宮城県の場合は、市からの要請にこたえる形で、隣県の山形県に対し、66名の施設入所者の受け入れ要請を行った。その他、搬送の部分だけを県で手伝った人が24名、老健で自主的に系列の山形の施設に移った人が63名いたことがわかった。

津波の被害が大きかった沿岸部を中心に多くの施設入所者の被災者が別の施設に移った状況が考えられるが、福島県とは違い原発の問題がなかったこと、早い段階で、定員超過で受け入れてもよいという通知をだしたことで、県内施設で対応できたのではないかとの見解が示された。一方で、山形県とのやりとりについて従前に協定があったわけではなく、飛びおり込みで行った結果だった状況も明らかになり、事前に都道府県間で被災者の避難のための相互支援協定のようなものの必要性が示唆された。

## まとめ

本研究では認知症介護指導者の被災地支援の実態に関するアンケート調査、被災地の認知症介護指導者に対するヒアリング調査、認知症介護指導者の被災地支援の実態に関するヒアリング調査、被災地の行政担当者に対するヒアリング調査の4つの調査研究を実施しました。

その結果、被災地及び被災地支援の実態と課題として、認知症の利用者は地震で揺れている最中には認知症の利用者に大きな混乱はみられないが、その後、避難した先において状況がのみこめず、混乱する人がいたことがわかりました。また、施設が被災した場合、通常よりもマンパワーを確保する必要性が生じることが示唆されたが、今回では、職員やその家族も被災者となり、ガソリン不足からの通勤手段の確保の問題も重なり、マンパワーを確保して夜勤等がまわるようにシフトを組むことに、大きな困難が生じていた状況が明らかになった。さらに、被害があまりにも大きく、広域にわたっていたため、ライフラインが回復しても物流が滞る状態が続き、ガソリンはもちろんのこと、生鮮食品やとろみ剤、高カロリー栄養剤などの食事に関する物資や、おむつ、尿取りパットなどの排泄ケアに関する物資の不足していたことが明らかになった。

被災地に対して支援を行った状況をみると、地震発生から1, 2カ月の間に多くの支援が集中していた。その頃の状況をみると、ガソリン不足による移動手段の困難さや、人と物資が押し寄せる中で、それをどう采配をとるかの混乱した状況があったことが覗かれた。地震発生からしばらくすると、

リーダー職員の疲れを心配する意見や、現地スタッフの疲労を心配する意見がアンケートで記載された。宮城県職員のヒアリングでは、5月の連休明けくらいには、介護施設への介護職員の派遣のニーズがあったが、そのために用意されたスキームの活用には至らなかった事実が明らかになった。宮城県では主に避難所に対して派遣されていたもう一方のスキームについても、実際の運用がはじまったのが3月20日と1週間以上が経過していたことに加え、都道府県間の費用負担のルールなどが決まらないままに仕組みが動き出し、派遣される職員の確保も、ある都道府県で確保ができなくなると別の都道府県をあたるといった自転車操業のような運用が行われていたことが明らかになった。

本研究の結果、被災地における施設、及び支援先の状況の変遷及び、支援の内容、支援システムの状況等の実態が明らかになった。また、防災の課題、支援システム構築に関する課題が示唆された。

### 3)被災地支援のための仕組みづくりの検討に向けて

本研究の結果、被災地における施設と支援先の状況の変遷、そして支援の内容、支援システムの状況等の実態が明らかになった、また、防災においての課題、支援システム構築に関する課題が示唆された。

次年度以降は、本データの分析を進め、今後の激甚災害に備えた、被災地支援の仕組みづくりについて更なる検討を行っていく。





## 第6章 総合考察

## I 被災地及び被災地支援の実態と課題

ヒアリング調査の結果、今回、地震が発生した際に、グループホーム等に入所している認知症の利用者がどのような行動をとったのかと、そしてその時の状況が明らかになった。認知症の利用者は地震で揺れている最中には認知症の利用者に大きな混乱はみられなかった。しかし、その後、避難した先において状況のみこめず、混乱する人がいたことがわかった。避難後になぜ、じっとしていなければならないのか、なぜ自分の部屋に戻れないのか理解できず、不安や混乱状態にある認知症の利用者へのケアを行う必要が示唆された。また、自施設が破損し、しばらくの間別の場所で生活をしていかなければならなかったケースでは、そこでの新しい生活に慣れるまでのケアが必要とされた。さらに、元の施設が復旧し戻る際にも、それまでできていた行為ができなくなってしまうような状況があり、このようなケースに対してもケアを行う必要性が示唆された。このように、施設が被災した場合、通常よりもマンパワーを確保する必要性が生じることが示唆された。しかし、今回のような大きな災害では、職員やその家族も被災者となり、ガソリン不足からの通勤手段の確保の問題も重なり、マンパワーを確保して夜勤等がまわるようにシフトを組むこと自体に大きな困難があったことが明らかになった。さらに、被害があまりにも大きく、広域にわたっていたため、ライフラインが回復しても物流が滞る状態が続き、ガソリンはもちろんのこと、生鮮食品やとろみ剤、高カロリー栄養剤などの食事に関する物資や、おむつ、尿取りパットなどの排泄ケアに関する物資の不足していたことが明らかになった。津波や原発などの影響で利用者・職員共々避難をしなければならなかった状況において、小さな法人や一事業所のみで運営していたグループホームなどの小規模単位の事業所の場合は、避難所にも受け入れてもらえず転々としなければならなかったというエピソードが紹介された。

被災地に対して支援を行った状況を見ると、地震発生から1、2カ月の間に多くの支援が集中していた。その頃の状況を見ると、ガソリン不足による移動手段の困難さや、人と物資が押し寄せる中でそれをどう配取をとるかの混乱した状況があったことが覗かれた。ニーズを把握し、資源とのマッチングを行っていく調整役の存在の重要性が指摘され、それがうまく機能していなかったところでは支援が重複したり、逆に漏れがでてきてしまったという指摘がされた。また、ボランティアの存在が逆に現場を混乱させているのではないかという指摘もあった。しかしもう一方では、避難できなかった在宅の要援護者の洗い出しや、必要なニーズが刻々と変化する中で、全国から大量に押し寄せる物資の配給などに多くのマンパワーが必要とされていたことがわかった。

地震発生からしばらくすると、リーダー職員の疲れを心配する意見や、現地スタッフの疲労を心配する意見がアンケートで記載された。宮城県職員のヒアリングでは、5月の連休明けくらいには、介護施設への介護職員の派遣のニーズがあったが、そのために用意されたスキームの活用には至らなかった事実が明らかになった。この背景には、システム自体の課題と、介護職員の派遣があっても施設側にそれを受け入れる余裕がなく、ニーズがあっても手をあげなかったという点が指摘され、派遣を行うシステムと、受け入れ施設側の準備の両側に課題があることが示唆された。

宮城県では主に避難所に対して派遣されていたもう一方のスキームについても、実際の運用

がはじまったのが3月20日と1週間以上が経過していたことに加え、都道府県間の費用負担のルールなどが決まらないままに仕組みが動き出した状況であった。そのため、派遣される職員の確保の困難はもちろん、ある都道府県で確保ができなくなると別の都道府県をあたるといった自転車操業のような非効率的な運用が行われていたことが明らかになった。

アンケートに回答した認知症介護指導者の中には、できれば現地に行ってなんらかの形で支援を行いたい、仕事の都合や、情報がない、なんらかの組織を通した派遣要請がないといった理由から現地に行けなかった状態が明らかになった。

以上から、施設・事業所として、ライフライン回復後も続くガソリンや物資の不足、施設の破損等の理由で一時的に別の場所等へ避難しなければならなくなるなど、状況の変化に対応するために必要なマンパワーの確保について、どう対処していくべきかについての課題があることが明らかになった。また、小さな法人や小規模の事業所が被災した場合の避難先や、上述の物資等の不足にどう対応していくかについても課題があることが示唆された。介護職員の派遣については、地震発生と同時に自律的に動き出すシステム構築への課題や、派遣される介護職員の人員及び質の確保の課題、現地でのコーディネーターの確保の課題、さらにはそれらの介護職員を受け入れる施設側の課題が明らかになった。

## Ⅱ 課題の解決に向けて

ライフラインの長期間にわたる途絶、さらにはライフライン回復後も続く燃料や物資の不足にどのように対応していくかについて、アンケート調査の結果をみると、回答した指導者の所属施設の多くが、備蓄やマニュアルの見直しの取り組みを開始していることが明らかになった。その他、広域での施設間同士の姉妹提携や、地域の防災協定に参加するといったネットワークを形成する動きもあることが明らかになった。同様の指摘がヒアリング調査でもあった。マンパワーの確保においても姉妹提携した施設間で交換研修などを行い、震災の際に対応できるような準備をしているという取り組みが紹介された。

いくら、備蓄を見直したとしても、一施設、一事業所で蓄えられる量には限りがある。マンパワーにしても同様である。今回の震災では、同一法人内でいくつも事業所を持っていた場合はその中で物資やマンパワーの補填が行われていたケースがヒアリングで明らかになった。しかし、認知症ケアの代表的なサービスであるグループホームや小規模多機能を提供する事業所の中には、小さな法人や事業所が少なくないと思われる。そうした施設が今回のような激甚災害を乗り越えるためには、やはり広域でネットワークを形成し、被災した利用者の受け入れや、物資・燃料の確保、マンパワーの確保などの対応ができるような準備が求められると考える。また、公的な支援が届かない状況でも地域に根を下ろしていた施設は、様々な有形無形の支援を地域から得ながら厳しい状況を乗り越えていたことが明らかになった。震災時には、施設は地域の避難所となりうる。そうした相互協力できる土壌を地域の中で形成していく努力も必要であることが示唆された。

介護職員の派遣の課題については、やはり DMAT などをモデルとしながら、地震発生と共に自

律的に機能するシステム構築が求められる。宮城県では、特に交通の便が悪い地域に厚労省ルート職員が派遣され、仙台市内などでは NPO などのボランティアが対応するという棲み分けが行われていたが、公的なシステムが担うべき役割とそれ以外の団体、ボランティアが担うべき役割についてそれなりの整理を行い、まずは公的な支援システムが一義的に被災地の支援をおこなえるように体制を整えるべきであると考ええる。今回のノウハウを活かし、システム作りの検討を進めていくべきである。その際には、現地のニーズを掘り起こし、そのニーズを集約し、情報として発信していく機能について併せて検討していく必要があると考ええる。認知症介護指導者に対するアンケート調査をみると、支援の意向があっても、情報の不足から被災地へ赴くことができなかった、どのような支援をすればよいのかわからなかったとするケースが少なからずあったことが示唆されている。そのため、特に公的な派遣システムだけではカバーしきれない地域や施設等への支援、短期的に集中してマンパワーが必要となる局面や、長期的に安定したマンパワーの確保が必要な局面など、刻々と変化する現地のそのときどきのニーズを集約し、支援したいという意向をもつものに情報を届け、マッチングさせいくための仕組みのあり方を考えていく必要がある。そうした情報の共有のために、専門職団体や事業者団体等の役割分担やネットワークの活用のある方についても更なる検討が必要であると考ええる。

特に公的なシステムを検討する場合は、派遣される介護職員の質の担保を考えなければならない。そのためには被災地支援において求められるスキルや資質等を明らかにし、研修という形で人材の養成をしていくシステムの構築が必要である。派遣された介護職員が行う仕事は介護だけでなく、雑用も含めて様々であると考えられる。これは生活支援という、業務のボーダーラインが定めづらい領域であることもあるが、むしろそれを専門性であると考え、柔軟に被災地の状況に合わせた支援を行えるような人材養成が求められると考ええる。一方で、認知症ケアなどの専門性を必要に応じて発揮する必要もあり、そうした人材の確保には認知症介護指導者や認知症ケア専門士といった現存の資源を活用する方法も検討すべきである。

受け入れる介護施設の側も普段より、防災対策の一環として被災後のマンパワー不足になる状況を想定し、何をもともといた職員で行うのか、何をそうでないものに頼むのか、誰がその采配をふるうのかについておおまかに決めておくことも検討が必要である。

宮城県のヒアリングから都道府県間の被災者避難が、飛び込みで行われている状況が明らかになった。一方新潟の指導者の法人では、中越地震の体験を活かして速やかに新潟県と連携をとりながら多くの福島県からの被災者を受け入れたことがわかった。日本は島国であり、原子力発電所も全国に設置されている。それ故に津波や原発の被害は決して希なケースであるとはいえないと考える。津波や原発は多くの避難者を生み出す可能性があり、そうした場合を想定した都道府県間の被災者の受け入れに関する相互協定のあり方、さらに実際の受け入れ先となる施設側との連携や協力のあり方について検討しておく必要があると考える。

### Ⅲ まとめ

本研究の結果、被災地における施設、及び支援先の状況の変遷、そして支援の内容、支援システムの状況等の実態が以下のように明らかになった。

- 地震で揺れている最中よりも避難した先において混乱する認知症者がいた。
- 地震発生後、物資、特にガソリンが不足した。また、リハビリパンツ、尿とりパットなど排泄ケアに関わるものや、生鮮食品、とろみ剤といった食事に関するものが不足していた。
- ライフラインが早期に復旧した場合でも、物流がストップしたり、滞る状況が長期間継続していた。
- 職員の確保やシフト作りに困難を抱える状況があった。
- 地震発生から1, 2カ月の間に多くの支援が集中していた。その頃の状況をみると、ガソリン不足による移動手段の困難さや、人と物資が押し寄せる中でそれをどう采配をとるかの混乱した状況があったことが覗かれた。
- ニーズを把握し、資源とのマッチングを行っていく調整役の存在の重要性が指摘され、それがうまく機能していなかったところでは支援が重複したり、逆に漏れがでてきてしまったという指摘がされた。
- ボランティアの存在が逆に現場を混乱させているのではないかという指摘があった。
- 主に避難所に介護職員を派遣することになった方法として、ニーズを県で集約し、厚労省を仲介として各県で募集したのち、必要なところに派遣するという方法では、多数のマッチングが行われる一方、費用負担の取り決めが不明確なまま運用され、派遣者の確保も自転車操業のような実態であったことが明らかになった。
- 関連団体を通して介護職員を派遣する方法では、ニーズに即応できず、結果として実績がなかったという事実が明らかになった。
- 防災の課題、支援システム構築に関する以下のような課題が示唆された。
- ライフラインの長期間にわたる途絶、さらにはライフライン回復後も続く燃料や物資の不足、マンパワー不足に対応していくため、備蓄やマニュアルの見直しに加え、広域での施設間同士の姉妹提携や、地域の防災協定に参加するといったネットワークを形成する必要がある。
- 介護職員の派遣の課題については、やはり DMAT などをモデルとしながら、地震発生と共に自律的に機能するシステム構築が求められる。
- 派遣システムについては、現地のニーズを掘り起こし、そのニーズの集約し、情報として発信していく機能について併せて検討していく必要がある。
- 派遣される介護職員の質の担保のためには被災地支援において求められるスキルや資質等を明らかにし、研修という形で人材の養成をしていくシステムの構築が必要である。
- 受け入れる介護施設の側も普段より、防災対策の一環として被災後のマンパワー不足になる状況を想定し、何をもともといた職員で行うのか、何をそうでないものに頼むのか、誰がその采配をふるうのかについておおまかに決めておくことも検討が必要である。

次年度以降は、本データの分析を進め、今後の激甚災害に備えたどのような防災のあり方や災害時の支援のための仕組みについてさらなる検討を行っていく。



資料



## 資料 1 実態調査の自由記述結果

1) 被災地に行って支援にいったものの、支援に行かれた期間・支援をおこなうに至った経緯、地域・支援内容の結果

| No. | 支援に行った期間                    | 支援をおこなうに至った経緯               | 支援に行った地域               | 支援した内容                    |
|-----|-----------------------------|-----------------------------|------------------------|---------------------------|
| 1   | 平成 23 年 3 月 11 日～           | 自分が住んでいる地区だから               | 栃木県高根沢町                | 倒れた塀の撤去作業                 |
| 2   | 平成 23 年 3 月～4 月 2 回         | 被災地の避難所へ聞きとりをして物資がほしいとなった時。 | 福島県相馬市                 | 支援物資の配給                   |
| 3   | 平成 23 年 8 月 6 日～12 日        | 佐々木薫氏の依頼                    | 色麻町（GH あゆかわの郷の避難先）     | 介護（夜勤以外）                  |
|     | 平成 23 年 9 月 23 日～26 日       | GH あゆかわの郷の依頼                | 色麻町（GH あゆかわの郷の避難先）     | リクライニング車イス寄贈、音楽交流会、介護     |
|     | 平成 23 年 12 月 2 日～5 日        | GH あゆかわの郷の依頼                | 石巻市北上公園内（GH あゆかわの郷）    | 音楽交流会、職員交流会               |
| 4   | 平成 23 年 3 月 14 日～16 日       | 個人で情報を集め                    | 「宮城県仙台市」               | 「高齢者の介助」「炊き出し」            |
| 5   | 平成 23 年 4 月～6 月 週末（土日）に 3 回 | 個人で情報を集めて                   | 宮城県東松島市山元町             | 「家屋の泥出し」「いちご農家の営農作業」      |
| 6   | 平成 23 年 12 月                | 社会福祉士会を通じた依頼「冬の過ごし方を教えて」    | 会津美里町                  | 会津の冬の過ごし方について具体的に話をした。    |
|     | 平成 23 年 3 月                 | 美里町と連携して安否確認と状況把握           | 会津美里町                  | 震災後すぐに状況確認を行う             |
| 7   | 平成 23 年 4 月 6 日～9 日         | ユニットケア研修（CLC）で交流のあった施設の情報で  | 岩手県一関市をベースに沿岸地域（大槌町など） | 支援物資、養護金、被災老人の受け入れ        |
|     | 平成 23 年 3 月 11 日～           | 出張中だった一関市の施設職員への支援（宿泊の手配    | 大阪市                    | ・宿泊の手配・帰宅への交通手段の確認・医薬品の提供 |

|    |                          |                                      |               |                                                        |
|----|--------------------------|--------------------------------------|---------------|--------------------------------------------------------|
|    |                          | など)                                  |               |                                                        |
|    | 平成 23 年 3 月 20 日～        | 同上、一関の施設より沿岸部の状況報告があった               | 一関、花巻の障害者施設   | ・就労支援 B 型施設より毎週、豆腐、納豆を購入・リンゴ、ジュース等購入。大阪市内、尼崎市の特養、社協に紹介 |
| 8  | 平成 23 年 9 月 11 日         | 仕事で仙台に行った為、自分でも何かできないか、地元の施設の方をお願いした | 石巻あたり         | 支援物資を個人に届ける                                            |
| 9  | 平成 23 年 4 月 10 日～11 日    | 同期指導者からの依頼                           | 宮城県塩釜市        | 被災が必要な物資を提供。自動車、PC、女性下着、文房具など                          |
| 10 | 平成 23 年 10 月 27 日～31 日   | 社会福祉士会の依頼で健康調査のため                    | 宮城県南三陸町       | 仮設住宅を回り、健康調査票の回収、聞きとり調査（地域包括支援センターの手伝い）                |
| 11 | 平成 23 年 4 月～5 月中旬        | 訪問入浴の団体から依頼され                        | 石巻市           | 訪問入浴車を持ち込み入浴介助                                         |
|    | 平成 23 年 4 月～5 月中旬位       | 入浴介助の合間に依頼され                         | 石巻市           | 地域高齢者の状況調査                                             |
| 12 | 平成 23 年 4 月 4 日～6 日      | 県行政、老施協、ケアマネ協会で協議してニーズ調査団を組織         | 岩手県大船渡市、陸前高田市 | 避難所介護ニーズ調査、避難所介護ニーズ調査従事、ボランティアのコーディネート                 |
|    | 平成 23 年 4 月 10 日～11 日    | 県行政、老施協、ケアマネ協会で協議してニーズ調査団を組織         | 岩手県大船渡市、陸前高田市 | 避難所介護ニーズ調査、避難所介護ニーズ調査従事、ボランティアのコーディネート                 |
|    | 平成 23 年 5 月 7 日～9 日      | 県行政、老施協、ケアマネ協会で協議してニーズ調査団を組織         | 岩手県大船渡市、陸前高田市 | 施設介護職員の派遣コーディネート、老施協組織活用、女性 VR は心配であった。                |
|    | 平成 23 年 5 月 7 日～9 日      |                                      | 大槌町、山田町       | ケアマネ VR の派遣コーディネート、高齢者安否確認（包括支援）                       |
| 13 | 平成 23 年 4 月 2 日～10 日     | 県から所属事業所へ依頼があり、登録申し込んだ               | 宮城県石巻市、鹿妻小学校  | 避難所での要介護高齢者への介助                                        |
| 14 | 平成 23 年 7 月 31 日～8 月 9 日 | 指導者の会を通してボランティア派遣を申し込む               | 宮城県色麻町        | 職員 1 名を派遣、避難所での認知症高齢者（グループホーム）介護                       |

|    |                                  |                                 |               |                                                  |
|----|----------------------------------|---------------------------------|---------------|--------------------------------------------------|
| 15 | 平成 23 年 5 月 8 日～8 月 21 日の内 6 回訪問 | 地元、社会福祉施設経営者協議会主催の炊き出しボランティアに参加 | 宮城県石巻市        | 現地社協指示場所における炊き出しボランティアおよび門脇中避難所向け、食支援活動（栄養士会と連携） |
| 16 |                                  | 孤立化している漁村を探し、支援を行った             | 宮城県南三陸町大指     | 子どもドームハウス建築支援、わかめ養殖支援診察                          |
| 17 | 平成 23 年 5 月 6 日～13 日             | 会社の方針                           | 石巻市           | 避難所での生活支援                                        |
| 18 | 平成 23 年 5 月                      | 知人がいる為                          | 気仙沼           | 津波の影響のあった飲食店の片付け                                 |
|    | 平成 23 年 6 月～9 月                  | 法人の事業として                        | 石巻            | 避難所運営全般                                          |
| 19 | 平成 23 年 4 月                      | 自治体にボランティア情報を確認して               | 岩手県野田村        | 支援物資の仕分け                                         |
| 20 | 平成 23 年 6 月 17 日～7 月 4 日         | 所属法人に対する依頼で                     | 宮城県南三陸        | 仮設住宅での町づくりの一環としての調査、住宅との関係作り                     |
| 21 | 平成 23 年 3 月 21～4 月 20 日          | 県高齢協からの派遣依頼                     | 岩手県大槌町        | 法人で沿岸施設へ職員を派遣。5 人のチームを 1 週間交替で派遣。私は送迎と物資調達。      |
|    | 平成 23 年 3 月下旬                    | 県高齢協からの依頼                       | 岩手県陸前高田市      | 被災施設への物資運搬                                       |
| 22 | 平成 23 年 3 月 11 日～14 日            | 病院の DMAT を福島へ派遣                 | 福島            | 空港で救急対応                                          |
| 23 | 平成 23 年 6 月 7 日                  | 市の社会福祉協議会の呼びかけに賛同               | 福島県いわき市       | 河岸沿い住宅地の側溝内瓦礫の撤去作業                               |
| 24 | 平成 23 年 6 月 9 日～11 日             | 個人で                             | 岩手県大船渡市       | 瓦礫の撤去                                            |
|    | 平成 23 年 6 月 13 日～9 月 30 日        | 法人への依頼                          | 宮城県石巻市        | 避難所の運営                                           |
| 25 | 平成 23 年 3 月 14 日～                | 所属する専門職団体等を通じて支援をおこなった          | 宮城県石巻市、岩手県宮古市 | 募金活動をおこなった                                       |

|    |                          |                       |                            |                                                           |
|----|--------------------------|-----------------------|----------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 26 | 平成 23 年 3 月 26 日         | 指導者仲間（仙台市）と 2 人で声かけ合い | 岩手県大船渡市、陸前高田市              | 支援物資（介護用品、カバン、灯油、食材料等）                                    |
|    | 平成 23 年 4 月 3 日          | 職場の関連施設               | 仙台市                        | 支援物資（燃料、介護用品、食料等）                                         |
|    | 平成 23 年 4 月 9 日          | 職場の関連施設               | 仙台市                        | 職場の後援組織の方から、物資の提供を受け届ける。                                  |
|    | 平成 23 年 3 月 15 日～        | 職場の関連施設               | 仙台市、福島市、郡山市                | 全国の関連施設より（加盟組織）支援提供のリレーを行い、届けていった。                        |
| 27 | 平成 23 年 4 月以降月に 1 ～2 回   | 個人で情報を集めボランティア団体に登録して | 福島県いわき市、千葉県浦安、宮城県石巻、南三陸、仙台 | 「避難所での高齢者、障害者のケア」「ドロの撤去」「被災ペット保護の手伝い」「心のケア」「炊き出し」「支援物資配布」 |
|    |                          |                       |                            | 「手紙のやりとり」「作品作りの手伝い」                                       |
|    | 平成 23 年 3 月              | ボランティア団体              | 千葉県浦安                      | 液状化の片付け                                                   |
| 28 | 平成 23 年 4 月 10 日～15 日    | 県からの支援要請があった為         | 宮城県気仙沼市                    | 避難所での高齢者介助                                                |
| 29 | 平成 23 年 4 月 10 日～12 日    | 法人内にて                 | 宮城石巻等                      | 支援物資配給                                                    |
| 30 | 平成 23 年 4 月 11 日～15 日    | 日本認知症 GH 協会の新潟県支部の活動  | 岩手県大船渡市                    | 避難先となった施設での高齢者介護、支援物資の輸送                                  |
| 31 | 平成 23 年 4 月末             | 県ならび老施協（県）で実施         | 宮城県気仙沼市                    | 5 施設の所へ支援物資を配給                                            |
| 32 | 平成 23 年 8 月 29 日～9 月 3 日 | 広島県介護福祉士会として取り組む      | 陸前高田市                      | サロン活動への参加                                                 |
| 33 | 1 回                      | 県青年経営者協議会             | 岩手県                        | 避難所等、うどん食事を。                                              |
| 34 | 平成 23 年 7 月～11 月         | 「被災した団体に困った事を確認して」    | 宮城県名取市                     | 高齢者への物資援助、食材援助                                            |
| 35 | 平成 23 年 10 月             | 個人で情報を集めて             | 宮城県石巻市                     | 瓦礫の撤去                                                     |
| 36 | 平成 23 年 4 月              | 福島県で働いている知人の          | 福島県                        | 紙オムツの提供、水の提供                                              |

|    |                           |                                              |                    |                                                   |
|----|---------------------------|----------------------------------------------|--------------------|---------------------------------------------------|
|    | 月                         | 相談により                                        |                    |                                                   |
|    | 福島県で働いている知人の相談により         | 福島県→茨城県へ                                     | 入居者の受け入れ及び受け入れ先の紹介 |                                                   |
| 37 | 平成 23 年 3 月 12 日～30 日     | 市町村（役場）からの友人として TEL あり                       | 長野県北部栄村            | 高齢者（独居）の方々を各地域の避難所に移動支援                           |
|    | ほ ぼ 週 末（土、日）              | 小さな部落（集落）の瓦礫集め                               | 長野県北部栄村            | 各集落の自宅内の整理                                        |
|    | ほ ぼ 週 末（土、日）              | 入浴場への移動支援                                    | 長野県北部              | 集落の水分、物資の配給                                       |
| 38 | 平成 23 年 3 月 14 日～         |                                              |                    | 法人内部より支援物資の収集を行った                                 |
|    | 平成 23 年 3 月 21 日～週末を利用して  |                                              | 宮城県仙台市内（松島）        | 支援物資の配給、拠点間の物資運搬の手伝い                              |
| 39 | 平成 23 年 10 月 26 日～30 日    | 日本認知症 GH 協議会の依頼                              | 石巻市                | 実態調査（地域包括の後方支援）                                   |
| 40 | 平成 23 年 6 月 16 日～7 月 18 日 | 法人全体でボランティアに参加した                             | 岩手県大槌町             | 入浴サービスのお手伝い                                       |
| 41 | 平成 23 年 5 月 12 日～17 日     | 9 期生東北の人と声をかけあい行った                           | 宮城県古川、石巻、女川        | ボランティアの人に対しての食料、お手伝い                              |
| 42 | 平成 23 年 3 月 11 日～12 月 6 日 | 近隣町内会と防災・災害協力協定、市と福祉避難所の協定を締結していた            | 本施設（仙台市）           | 「避難者の受け入れ」「要援護者の介護」を仙台市、南三陸町から延べ人数で 200 人を受け入れた   |
|    | 平成 23 年 4 月以降随時           | 様々な種別協・民間団体の知り合いからの依頼で                       | 「宮城県沿岸部全域」         | 様々な種別協・民間団体より頂いた支援物資を延べ 50 ヶ所に配った                 |
|    | 平成 23 年 4 月以降～現在          | 介護職員派遣事業がうまくいってなかったのを、自らネットワークを構築しコーディネートした。 | 「宮城県内の被災施設 11 ヶ所」  | 介護ボランティアや災害ボランティアの派遣を 100 法人の協力を得て、延べ 300 人を派遣した。 |

|    |                        |                           |           |                                                                         |
|----|------------------------|---------------------------|-----------|-------------------------------------------------------------------------|
|    | 平成 23 年 6 月以降～現在       | 団体の役員をしていた関係で現地復興対策本部長となる | 「宮城県全域」   | 「復興支援調査」を被災施設・地区社協・市町村に実施、「情報交換会」や「相談会」を実施。国・県・施設・医療機構等の情報のマッチングを通じた支援。 |
| 43 | 平成 23 年 4 月 26～5 月 1 日 | 所属事業に対する依頼と個人での希望         | 宮城県気仙沼    | 避難所での高齢者介助                                                              |
| 44 | 平成 23 年 3 月            | 所属団体から依頼                  | 東北        | 義援金、義捐物資                                                                |
|    | 平成 23 年 6 月            |                           |           |                                                                         |
| 45 | 平成 23 年 5 月 22 日～26 日  | 社会福祉士会の依頼から職場を通じて         | 宮城県南三陸    | 地域包括支援センターへの支援（総合相談）                                                    |
| 46 | 平成 23 年 4 月上旬          | 専門職団体を通じて                 | 「岩手県大船渡」  | 施設での高齢者介護の手伝い・情報収集                                                      |
| 47 | 平成 23 年 3 月 16 日～24 日  |                           | 宮城県仙台市    | 高齢者介助、物資支援                                                              |
| 48 |                        | 佐賀県宅老所連絡会を通じて             | 仙台、山元町    | 仮設住宅内でのボランティア                                                           |
|    |                        | さわやか福祉財団を通じて              | 岩手、大船渡    | 仮設住宅内でのボランティア                                                           |
| 49 | 平成 23 年 3 月 26 日～28 日  | 「ボランティア団体」の依頼             | 「宮城県名取市」  | 「支援物資の整理や配給」「名取文化センターでのお手伝い」                                            |
| 50 | 平成 23 年 4 月末           | 「同期の指導者の安否、被災状況の確認並びに応援」  | 「宮城県東松島市」 | 復興に向けての補助金の申請事務、清掃等                                                     |
|    | 平成 23 年 6 月末           | 全社協より依頼有                  | 福島県社協     | 主任統括生活支援相談員として勤務（期限は職員）                                                 |
|    | 平成 23 年 8 月 8 日～       |                           |           |                                                                         |
| 51 | 平成 23 年 3 月 22 日       | 福島・新潟両県からの依頼をきっかけに、協議して。  | 福島県福島市    | 福島県側で移動手段が準備できず、福祉車両（22 台）で被災要介護高齢者を迎えに行った。                             |
| 52 | 平成 23 年 5 月            | 東京都の介護職員派遣とし              | 宮城県気仙沼市   | 避難所での高齢者介護                                                              |

|    |                                |                            |                                    |                                                                                                                              |
|----|--------------------------------|----------------------------|------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | 月 28 日～6<br>月 3 日              | て                          |                                    |                                                                                                                              |
| 53 | 平成 23 年 4<br>月 14 日～19<br>日    | 所属事業所に東京都からの<br>依頼があり希望する  | 宮城県気仙沼市                            | 特養に派遣となり介護全般の補助を行<br>う。近在の施設でノロが発生していた<br>ので、清掃を重点的に行う。                                                                      |
|    | 平成 23 年 9<br>月 19 日～24<br>日    | 日本社会福祉士会のボラン<br>ティア募集で応募する | 宮城県石巻市                             | 包括支援センターに所属し、被災地域<br>を 2 人 1 組で訪問し、自宅に戻って生<br>活している人達の話聞き、チラシを<br>届ける。アンケートも行う。チラシの<br>内容：困り事、心配事がある場合は、<br>包括支援センターにご相談下さい。 |
| 54 | 平成 23 年 4<br>月 30 日～5<br>月 7 日 | 会社からの依頼により参加               | 石巻市遊学館                             | 福祉避難所での被災者とのかわり                                                                                                              |
| 55 | 平成 23 年 5<br>月 23 日～27<br>日    | 個人で情報を集めて                  | 岩手県釜石市                             | 被災グループホームでの高齢者介助、<br>瓦礫の撤去、掃除                                                                                                |
| 56 | 平成 23 年 4<br>月 11 日～15<br>日    | 日本 GH 協からの依頼を受け            | 陸前高田、大船渡                           | 施設での介護                                                                                                                       |
| 57 | 平成 23 年 5<br>月                 | 日本認知症 GH 協議会の要請<br>を受けて    | 石巻で被災された<br>GH の避難先（宮城<br>県加美郡色麻町） | 介護全般（ケア・掃除・選択）。ご利用<br>者とドライブにも行ってきました。                                                                                       |
| 58 | 平成 23 年 3<br>月 20 日            | センター同期の人に電話連<br>絡して        | 宮城県宮城郡松島<br>町の GH                  | 食料、灯油等の物資を届けた                                                                                                                |
|    | 平成 23 年 4<br>月 25 日～26<br>日    | 所属事業所に対する依頼で               | 宮城県塩釜市                             | 老人保健施設での介護業務                                                                                                                 |
|    | 平成 23 年 6<br>月 25 日            | 山形ボランティア隊に応募<br>して（個人）     | 宮城県石巻市                             | アパートとその周囲の泥の除去作業                                                                                                             |
| 59 |                                | 東京都における支援事業                | 宮城県気仙沼市                            | 特養に避難された方々及び利用者の生<br>活支援                                                                                                     |
| 60 | 平成 23 年 4<br>月 19 日～22<br>日    | 情報収集及び調査、被災地<br>（南三陸内）宮城県庁 | 南三陸町                               | 支援物資運搬、避難所訪問                                                                                                                 |
|    | 平成 23 年 7                      | 情報収集                       | 仙台市内                               | 聞き取り調査、事業所が準備するもの                                                                                                            |

|    |                          |                                                  |                       |                                      |
|----|--------------------------|--------------------------------------------------|-----------------------|--------------------------------------|
|    | 月 14 日～16 日              |                                                  |                       | 等                                    |
| 61 | 平成 23 年 3 月 12 日～5 月下旬   | ・ケアマネージャー・市町村・避難地責任者                             | 宮城県石巻市、宮城県多賀城市、宮城県松島町 | 当施設で高齢者介助                            |
|    | 平成 23 年 6 月～7 月          | 全国認知症介護指導者ネットワーク                                 | 「宮城県色麻町」              | 避難所での高齢者介助                           |
|    | 平成 23 年 3 月 12 日～        |                                                  | 「宮 城 県 の 被 災 地」       | 支援物資配給                               |
| 62 | 平成 23 年 5 月 9 日～13 日     | 全国 GH 協より支援の協力依頼が法人に有り                           | 宮城県加美郡色麻町             | 石巻市鮎川浜にあった GH が壊滅し、一時的に生活している施設に生活支援 |
| 63 | 平成 23 年 7 月 3 日～6 日      | 個人で情報を集めているうちに、DC net を見て連絡する。                   | 宮城県石巻市                | 避難所での高齢者介助                           |
| 64 | 平成 23 年 3 月下旬 (2 日間)     | 知人より情報を得て                                        | 福島県福島市                | 支援物資の整理と配給                           |
|    | 平成 23 年 3 月下旬～4 月上旬      | 個人で情報を集めて                                        | 福島県いわき市、福島県須賀川市       | 物資を届けた                               |
| 65 | 平成 23 年 3 月 25 日         | 県から老施協など 3 団体へ介護職の派遣支援要請があった                     | 宮城県気仙沼市               | 「避難所にて整容支援、避難困難者の支援」「老人ホームの利用者等支援」   |
|    | 平成 23 年 3 月 26 日         | 県から老施協など 3 団体へ介護職の派遣支援要請があった                     | 宮城県気仙沼市               | 「避難所にて整容支援、避難困難者の支援」「老人ホームの利用者等支援」   |
|    | 平成 23 年 3 月 26 日～4 月 2 日 | 県から老施協など 3 団体へ介護職の派遣支援要請があった                     | 宮城県気仙沼市               | 「避難所にて整容支援、避難困難者の支援」「老人ホームの利用者等支援」   |
| 66 | 平成 23 年 4 月 7 日～12 日     | 所属事業所で被災地支援を行わないと言われたため、介護支援専門員協会として、公休と有給を使い現地へ | 岩手県陸前高田市<br>／岩手県大槌町   | 高齢者の実態把握調査                           |
| 67 | 平成 23 年 4 月              | 職域団体からの呼び掛け、                                     | 宮城県石巻市                | 訪問入浴車を使用した、避難所等での                    |



|    |                             |                                   |                 |                                                    |
|----|-----------------------------|-----------------------------------|-----------------|----------------------------------------------------|
|    | 月 24 日～5<br>月 1 日           | 要請による法人からの派遣<br>にて                |                 | 入浴支援、及び今後の支援のコーディ<br>ネート                           |
| 68 | 平成 23 年 4<br>月              | GH 協議会の義援金の案内                     |                 | 義援金を送信した                                           |
| 69 | 平成 23 年 4<br>月 23 日～27<br>日 | 所属事業所に対する依頼で                      | 岩手県 陸前高田<br>市   | “東京都こころのケアチーム”の第 8<br>班として、被災者の心のケアを行った。           |
| 70 | 平成 23 年 3<br>月 22 日         | 所属法人の支援活動にて                       |                 | 被災介護老人保健施設（原発避難区域）<br>の入居者等 117 名を法人施設にて受入<br>れ    |
| 71 | 平成 23 年 3<br>月 19 日         | 指導者の仲間の呼びかけ                       | 宮城県仙台市          | 支援物資を届けた                                           |
|    | 平成 23 年 3<br>月 20 日         | 仙台に行った時、他の仲間<br>の様子を見て            | 宮城県仙台市          | 支援物資を届けた                                           |
|    | 平成 23 年 4<br>月 24 日～27<br>日 | 所属団体からの要請                         | 宮城県石巻市、仙<br>台市  | 支援物資を届けた                                           |
| 72 | 平成 23 年 5<br>月 7 日～14<br>日  | 所属職能団体（日本理学療<br>法士協会）の派遣事業に参<br>加 | 宮城県石巻市、気<br>仙沼市 | 福祉避難所、一次避難所、在宅でのリ<br>ハビリテーション                      |
|    | 平成 23 年 11<br>月 6 日         | 宮城県理学療法士会の関係<br>者に同行              | 宮城県気仙沼市         | 仮説住宅へ訪問、住環境整備の調査                                   |
|    | 平成 23 年 11<br>月 7 日         | 宮城県理学療法士会の関係<br>者に同行              | 宮城県石巻市          | 仮説住宅へ訪問、リハ、住環境整備ニ<br>ーズ調査                          |
| 73 | 平成 23 年 4<br>月 8 日～9 日      | 支援物資を届ける為                         | 宮城県仙台市、名<br>取市  | 同期の指導者への支援の為、はげまし<br>と交通手段（車・自転車・タンク）そ<br>の他の者を届けた |
|    | 平成 23 年 8<br>月 9 日～11<br>日  | 研修で災害と介護をテーマ<br>に話すことになり、調査の<br>為 | 宮城県仙台市          | 被災した介護職員の当日の心理・行動<br>とその後の心の変化の聞き取り                |
| 74 | 平成 23 年 9<br>月 25 日         | 関係団体からの情報を得て                      | 陸前高田市           | 老人保健施設でのイベントの手伝いと<br>交流                            |



2) 支援全体を通して感じたこと回答者 312 名

| No. |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | 「～が不足している」「～は足りている」こういった情報が職団体から入ってくことで現地に行けない状況でも出来ることを見つけることが出来たが…。個人や職場（会社）バラバラの動きより、団体や地域としての活動の方が無駄のないように思った。                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 2   | 「あゆかわの郷を応援する会」を愛媛県で立ち上げ、夏以降支援させていただいた。一段落する中で、今後集まってくれた福祉の仲間たちのパワーをどこへ持っていくのか、悩んでいる。                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 3   | 「自分にはなにができるか」という問いを自分にした所、被災地に行きたいと思ったが、まわりの状況（仕事や家庭）を考えるとかなり自分勝手な行動であると思い中止した。他の事ではテレビやネットの情報で物品の仕分けを行う事ができないというので義援金を法人で集める方法をとることにした。自分一人の力はわずかなので、たくさんの人の力を借りようと考えた。職員や入居者家族に声かけを行っていった。中には「なんで募金せなあかんの？」「こういう興味ない」などの人間の悲しい部分をみることにもなり少数であったがかなりの憤りを感じた。しかし多数は協力をしてくれ、かなりの金額を集めることができた。これは自己満足なのかと思う時もあったが、今思うと行動することが重要であり、理由など後からどうとでもなる。とにかくあの場面では行動することが重要であったと思う。 |
| 4   | 「出来ることをしよう」という気持ちでした。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 5   | 「何か自分達に出来る事はないか」と、多くの人々が今も、なお考え、実践されている。ここは「日本の素晴らしい所」と感じた。又、多くの支援を受け入れる被災地が困惑しないように配慮することとても大事と思った。                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 6   | ・淡路阪神大震災の時と比して、本震災の規模を考えた時、何をどうして良いかわからなかった。・寄付金品の取扱いで義援金、支援金の区別や配分の方法の違い等を知ることができた。・日赤の仕組みが理解できた。                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 7   | ・いつ、どのように動いて良いのかわかりにくかった。・距離が遠いと直接的には行きにくい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 8   | ・家庭や自事業所の人員もあるので、なかなか被災地に行くことは難しかった。・老健協会からの要請でボランティアの登録はしたが、実際に声はかからなかった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 9   | ・行政にボランティアの派遣登録をしたが、実施に至らなかった。・1人に対して様々な団体からの支援要請があったが、金銭が多かったが、それらが生かされているのかと思っている。                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 10  | ・ご利用者お一人お一人が現実を受け止めて、生活をされている様子がとてもうかがえました。泣くことも我慢し、皆さん必死に生活をされていました。・同じ県内でも被災されてない方の温度差を感じました。                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 11  | ・支援したい気持ちは十分にあったが、システム・具体的方法がよくわからなかった。・職場での支援意識は対岸の火事的で、物・金の支援で形骸的ではあったが、物や金がきちんと早く届くのか心配した。                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 12  | ・施設…ボランティアで派遣を1回ではなく、数回できれば良いと思うが、個人の健康への被害の                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

|    |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | 問題等があり難しいと感じた。(今回は放射線の問題があったため)・個人…身内が被害地にいたこともあり、動揺が大きかった。自分の無力さをあらためて思い知らされた。                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 13 | ・新施設への移転オープンだった為、旧施設を被災者受け入れの体制を6月までとり、連絡を待っていたが、1件もなかったようで、県から連絡入る。・地元を離れるのが嫌な方が多かったのかな？と思います。                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 14 | ・電気と水がないのは非常に辛い。・認知症の人の環境変化による混乱は解決できず、とにかく現状の回復に向けてが、精一杯だった。認知症ケアどころではなかった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 15 | ・被災者の受け入れについては行政(市町村)のトリアージ(認知症サポーター講座等、基本の必要性の再認識がされて)は重要だという意見がなかった。・今回、被災された市町村の中には、行政社協の職員が津波の被害を受けていた。こうした状況に対する課題の提示がされたと思われる。(多都市間法人内の協力と地域のつながり等で)                                                                                                                                                                                                                                   |
| 16 | ・人の力強さ・支援のコーディネートの大切さ・人の心の傷深さ・迅速力の大切さ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 17 | ・募金が被災された方になかなか届いていない。・必要な物資の見極めに時間がかかりすぎ。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 18 | 1) 物資に関しては、被災地より遠方が調達しやすい。2) 介護スタッフと介護用品のセットで派遣したのが良かった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 19 | 1) 震災当初は仲間の指導者の方々の安否が最も心配であった。2) また震災当初、地元行政や警察などに現地に入るための許可をもらおうとしたが、なかなか許可が頂けなかった。3) 私自身が15年前の阪神淡路大震災に被災した経験があり、今回の震災並びに津波の映像を見ているうちに阪神淡路大震災時の恐怖が蘇り(心的外傷と思われる)現地への足が鈍ってしまった。4) 大震災後3カ月程度である程度心的外傷はおさまったので、仙台市内までは赴くことができた。5) 義捐金等関係団体、機関を通して支援した。6) 個人的に被災した指導者等と連絡を取り、必要な物資を4~5回現地の指導者宛に送った。7) 15年以上前の心的外傷が出現したことは私自身最も驚いたことであり、また同時に今回の大震災で被災された方々の多くが今後も私と同じような心的外傷を感じられるであろうことに心が痛みます。 |
| 20 | 1人のボランティアの派遣期間は被災地での受け入れ体制にもよるが、短期間というよりは、ある程度長期間での派遣が必要と思われる。だが、ボランティアスタッフの疲弊も考えられるため、ボランティア同志の引き継ぎ(事前の申し送り)を確実にし、即戦力として動ける体制を整えていく必要があると思った。                                                                                                                                                                                                                                               |
| 21 | 3月下旬の輸送事情の不安定なときでしたので、未だ受け取られたのか不明です。取り敢えずお米が必要だったので、次に果実をと思いましたが、生鮮物はお米の受取りを確認してからと思いましたが、とうとう食品の支援はあきらめました。                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 22 | 3年位かけて継続しての支援を行うべきだと食材を届けに行き、痛感した。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 23 | 焦り、何もできない。現地情報の少なさ、仕事との関係(業務)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 24 | 一時的な支援ではなく、継続的な支援を行うことは、大切だと感じるとともに難しいとも感じている。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 25 | 一番感じたことは、何もない!と思った。私自身ボランティアは好きでないのに、どうしようかと                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |

|    |                                                                                                                                                               |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | 迷った。(嫌いな理由もあるが、被災された人々を見学しに行つてはいけないと思っていた。自分がたった 1 週間で出来ることがあるのか悩んだ)。一行つてよかったと思っています。自分の肌で知ること、感じることの大切さを改めて実感しました。                                           |
| 26 | 一過性ではなく、継続的に支援できる様、今後も情報含め、考えていきたい。(本来ならすぐにも被災地に向かいたかったが、支援者としてエントリーする事で(大阪市)、受け入れ側への負担が少ないのではと思い、“待ち”の姿勢であった。結果としては数回エントリーするも声がかからず、行政もコーディネート仕切れなかったかと)     |
| 27 | 一般的な支援金募金活動より、支援場所と内容が明確な募金活動の方がわかりやすく、支援が形になって見えた。ボランティア派遣も同様です。                                                                                             |
| 28 | いつも何かしないといけない…と思いながら、日が過ぎてしまつて反省しています。今からでもできることがあれば行いたいと思います。「こういう事を求めている」と教えていただければありがたいです。                                                                 |
| 29 | 命にかかわる事態が過ぎて、生活や仕事が通常に戻ってくると、被災者への支援を忘れてしまうのではないと思う。引き続きこんな支援が必要とか、発信する人が必要かと感じた。                                                                             |
| 30 | 今、現在募金はどこにあるのだろう。                                                                                                                                             |
| 31 | いろいろな機関で支援をおこなっていたので、それぞれに対応したが、出来ることなら支援機関や支援内容によりグループ分けをして、必要な事をアナウンスしてもらえとわかりやすい。例えば、ボランティアもどこに行けばいいのか、また、現地ではどういうことを必要としているのかがわからなかったこともあった。              |
| 32 | 受け入れた 3 名様の中に(若年性認知症)＋(統合失調症)の方(66 才)がおられ、後になって前施設入所前に精神病院(6 ヶ月)入院されていた方だったらしく、今回のこと、又、遠方に連れてこられたことで、統合失調症の悪化につながり、5/25～近くの精神病院へ今も入院中。今回被災した方々の精神的な負担→大と思われる。 |
| 33 | 受け入れに対して(仮設住宅にいる人々)難しくて実行出来なかった。高齢者に住まいと提供、一緒に生活しようと思ったが、その意見を受け入れてもらえなかった。                                                                                   |
| 34 | うちの物品は市の方で断つてこられた。(残期限が 3 ヶ月程の災害用の食材)                                                                                                                         |
| 35 | 援助物資や人的支援において、もっと効率良く支援することができればと感じた。阪神の震災においても同様のことが感じられたが、今回の震災を含め、有事の際の支援内容、手順を可能な範囲マニュアル化するなどの整理が必要と思う。                                                   |
| 36 | 遠地であり、被災地に出向くことはできず、情報もなかなかつかめず、もどかしい気持ちだった。できる範囲での募金等の対応で申し訳なく感じた。                                                                                           |
| 37 | 遠方な為、具体的な支援は行えなかったが、施設としてはその方向で検討が進んでいた。個人的にボランティアをしたいという職員もいたが、実現しなかった。今後も支援できる事があれば協力したい。                                                                   |
| 38 | 大きな支援はできなかったが、何か 1 つでもできることとして行つた。1 事業所では、活動するのにどうしていいかわからないことがありました。                                                                                         |

|    |                                                                                                                                                          |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 39 | 多くのボランティアの方の活動を見聞きして、自身が現地に行けなかったことが残念に感じた。                                                                                                              |
| 40 | 同じ宮城県でも私達の施設は津波の被害はありませんでした。利用者、職員ともに全員負傷することはありませんでした。地震直後のライフライン不通などで、また情報が集約なく混乱されこちら側としては受け入れ OK と県の方に返答しましたが、途中で連絡なく深夜まで待機したことがあり、情報伝達の面で上手くいかなかった。 |
| 41 | おひとりでも被災された方を受け入れることができてよかった。市や他事業所とも連携をとり、こちらで生活できるよう支援をすることができた。                                                                                       |
| 42 | 介護職員派遣等については、継続的の支援が必要だが、時間経過によりニーズが変化するのでその調査が重要。※終了時期の見定め方も重要。宿泊場所の（拠点）確保も重要。                                                                          |
| 43 | 介護職の派遣など、人的支援が良いと思うが、1 人が 1 ヶ月程度支援に行くと施設が苦しくなるので、なかなか難しい。                                                                                                |
| 44 | 会社として支援をさせて頂いたのが募金だけであったため、被災地へ行く体制がとれるように会社がなぜ動かなかったのか疑問を感じています。                                                                                        |
| 45 | 仮設住宅の支援は目立たないが、最も必要とする支援。                                                                                                                                |
| 46 | 家族に病人がおり介護が必要な為、現地への直接支援が出来ず、残念だと思っています。                                                                                                                 |
| 47 | かなりの募金があったが早く振り分けてあげてほしかった。                                                                                                                              |
| 48 | 義援金活動しかできませんでしたが、所属するどの団体と積極的・密に連携すればよいのか迷った。また、それら団体の支援を通じて、どのような効果があったのか、被災地は今何を求めているのか、深い情報が届くのが遅い。または届かない為、自分にできることが分からない。                           |
| 49 | 義援金等が被災者の方々に届いているのか不安。                                                                                                                                   |
| 50 | 義援金と物品の応援になりましたが、できる限りのことはしました。ただ今後も出来ることがあれば継続して支援していきたい。                                                                                               |
| 51 | 期間を限定してでも、大胆な規制の緩和構造が必要ではないでしょうか。                                                                                                                        |
| 52 | 既存組織の対応の悪さ（特に行政、社協）                                                                                                                                      |
| 53 | 寄付したが、どのような形で被災者に届いているか知りたい。                                                                                                                             |
| 54 | 救援が入るまでの自己管理、判断力が生死を左右する。                                                                                                                                |
| 55 | 休暇が取れなかった為、現地でのボランティア活動ができず申し訳なく思いました。                                                                                                                   |
| 56 | 行政、社協、種別協団体、専門職団体、NPO、民間など様々な機関が一致協力して、オールジャパンで支援する必要性を感じた。                                                                                              |
| 57 | 行政からのアンケートで受け入れを申し出たが何もなかった。                                                                                                                             |
| 58 | 行政の支援の流れがおそい。本当に必要な所に必要な物が届かない。                                                                                                                          |
| 59 | 金銭、物品での支援しかできないが、有効に配分できる組織づくりも大変なのだろうと思う。                                                                                                               |
| 60 | 具体的な支援になっているのか心配だった。何が必要なのか。どんなふうに関与すればいいのか、とまどった。                                                                                                       |
| 61 | 具体的に何をどのようにしてほしいのかの、声が届かない。現地に入るのは、法人が小規模でマン                                                                                                             |

|    |                                                                                                                                                                                          |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | パワーが不足し、無理なので個人的にということになってしまう。個人でとしても宿泊～交通費を考えると、無理。声を各地に届け、各所属ごとへの支援を具体的とするシステムがないのではと感じた。                                                                                              |
| 62 | 国として支えるべき支援ととらえ、例えばボランティア休暇というものがある、それを取得できるのなら、（有給とする、公休扱いではない）それをあてがって現地に向かい直接の支援を行いたかった。                                                                                              |
| 63 | グループをあげての支援により利用者のみならず、地域住民を多勢受け入れることができた。被災者もボランティア（支援者）も共に心傷つき、各々の立場でのサポート（長期）を計画的に行うことが大切であり、それを実施している。又そこから、被災しなかった地域への防災意識改善の為のセミナーもグループをあげて行っている。                                  |
| 64 | 継続した支援活動が課題                                                                                                                                                                              |
| 65 | 継続性が足りないと感じた。                                                                                                                                                                            |
| 66 | 継続的な支援の必要性。柔軟性→連携、縦の連絡及び連携はスムーズにいったが、横のつながりがうまくいかない。                                                                                                                                     |
| 67 | 気仙沼や宮古の病院より患者の受け入れを実施。ストレッチャー積載車と一般車両にて輸送したが、出発から到着まで 15 時間程かかっており、患者の負担を考えると輸送方法、経路に見直しの必要があると感じる。                                                                                      |
| 68 | 現在、学生であるので、夏休みや冬休みにボランティアに行こうと思いましたが、宿泊先を確保してから自分のことは自分でしないといけないことや、車がないと不便であることなど聞いていたため、物品を送るだけとなってしまいました。帰るのも、予定通りに帰れないこともあることなども考えておかないといけないと聞いていたので、中々、行動に移せませんでした。個人だと中々動きにくかったです。 |
| 69 | 現在の就業環境におきまして、仕事を離れて現地に行くということができず、もどかしい気持ちになりました。職場を離れずにできることを考えました。                                                                                                                    |
| 70 | 現在も支援の必要な場面は多くありますが、継続的な取り組みをするための仕組みづくりが大切であると思う。個人的には大震災、津波で多くの方が同時に被災されたが、不慮の事故や災害で同じように悲しい思いをされている方は、他にも多くいるよなあ～。                                                                    |
| 71 | 現時点では直接赴くことはまだありませんが、長期的に支援を継続していければと考えています。                                                                                                                                             |
| 72 | 現地支援を行いたかったが、情報も少なく支援する側のバックアップに不安があった。                                                                                                                                                  |
| 73 | 現地に行くことが困難な状況だったので、せめて金品で支援できればと思った。困って大変な時に現地に行けず、何の力にもなれなかったことが今も後ろめたく感じている。                                                                                                           |
| 74 | 現地に職員を送りたかったが、現場職員の人員に余裕がなく、結局法人内の障害者事業所の各事業所の管理職が順番に現地に向かう支援しかできなかったのは残念。しかし、報告をする場があり、家族や関係者に現地の状況を伝え支援を訴えることはできた。                                                                     |
| 75 | 現地のコーディネーターがなかなか見つからず、支援までに時間がかかった。                                                                                                                                                      |
| 76 | 現地の情報がテレビからで、今何を必要とされているか分からない。団体での規制があり自由に動                                                                                                                                             |

|    |                                                                                                                                                                            |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | けない。                                                                                                                                                                       |
| 77 | 現地へ行かなくても行える支援はたくさんあるということ。逆に現地スタッフでなくても取り組めるデータベースの整理やアセスメントシートのまとめなどは、現地外の場所でも積極的に行って良いと思います。                                                                            |
| 78 | 現地へ行き、感じてみなければ外からわからないことがたくさんあると思った。避難されている方の、明るく前向きな姿勢が印象に残っており、「ありがとうございます」といつも感謝の気持ちを持っていた。現地へ行かなくとも、自分の仕事、できることをしっかりやることが大切と思った。                                       |
| 79 | 現地へ行きたかったが、職場の人数も足りず、せめてお金だけでも送ろうと思った。現地の利用者、介護者の心身を想像すると胸が痛む。                                                                                                             |
| 80 | 現地へ出向きたい気持ちがあったが、今働いている現場を犠牲にする状況では動きがとれないため、やりきれない思いもあった。法人、会社としてそのような体制をとれるぐらいの考えが必要と感じた。                                                                                |
| 81 | 県に登録などをして、職員や元職員が支援に行ったり、友人や親戚（いとこ）が行ったりしたが、自分自身は決算、予算理事会、新人職員研修などや、家庭の事情もあり5日も空けられなかった。                                                                                   |
| 82 | 現場に行くことは業務上困難であり、余力のないスタッフ人員ではなかなか難しい面があると感じた。また、入所受け入れに関しても体制は整えたが入所には到らなかった。                                                                                             |
| 83 | 現場の状況を想像するも、実際はどれほど大変かと心が痛みながらもほとんど何もできない自分のはがゆい。                                                                                                                          |
| 84 | コーディネーターの存在がはっきりしていないとニーズがあわない。                                                                                                                                            |
| 85 | 個人的に被災地へ行きボランティア活動にあたった職員もあったが、全体としては募金活動中心だった。関連病院の医師から、被災地での活動、体験報告会などもあったが、それらが全体的な意識には活かしきれていないように感じる。                                                                 |
| 86 | この東日本大震災があまりにも巨大で予想外であったことと、情報が錯乱していて、混乱している方が多くいるのが印象に残った。                                                                                                                |
| 87 | このような大きな災害になると、色々な問題がおきることがあるんだと感じた。                                                                                                                                       |
| 88 | 個別（個人単位）でのボランティアは就業もあり行くことは難しかった。法人内でボランティアを募っていたが、希望を出しても自施設の運営もあるためスムーズには行かなかった。                                                                                         |
| 89 | 今回、物品の寄付を行えたのは、同じ認知症指導者で同期の方が現地で支援した経過があり、その方が窓口となったので、送付先もスムーズに行えた。                                                                                                       |
| 90 | 今回、法人としても現地に派遣し、2グループ活動した。私自身は3グループ目の活動班であったが、現地先の都合により派遣は中止となった。但し、支援物資の搬入のみ行った。                                                                                          |
| 91 | 今回の震災において、認知症グループホームの経営者がお亡くなりになった事を聞きました。「利用者様の今後について、どうしてよいかわからない」という認証グループホームに対してどのような支援をしてあげる事が良いのか、自分自身とても悩みました。金銭、物資、メンタルな支援以外の経営存続に関する事は、多々他にもあるのではないかと、とても心を痛めました。 |
| 92 | 災害が起きて間もなく募金等を行ったので、みんな協力的であった。（職員）病院の受付や通所リ                                                                                                                               |



|     |                                                                                                                                                                      |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | ハビリ等でも募金を行ったが、わずかな年金暮らしの人でも募金され、災害の大きさを実感した。                                                                                                                         |
| 93  | 災害の種類、規模によって必要となる支援も違ってくこと、また、発生からの時間経過によって、支援内容も刻々と変化してゆくことを強く感じました。                                                                                                |
| 94  | ささやかなことしか出来ませんでした。                                                                                                                                                   |
| 95  | 支援が細くいきとどいてないと思った。物品は新品に限ると言われた。災害時は中古でも使える物であれば良いのではないか。(物が足りてないのだから) GH 協から災害地の GH 協へ送ったのは確実に届いていた。                                                                |
| 96  | 支援金等の早急な配布（分配）ができていなかったのも、改善点となっている（現金はすぐに必要だったと感じたので）                                                                                                               |
| 97  | 支援先の職員さんが、「朝、いつも通りに家族におはようという仕事にきて、14：45 までいつもと変わらない時間だった。」という言葉が今でも心から離れず、今この時の大切さを思うこと、またいつ自らが被災するか分からないことを考えておくことを強く感じています。                                       |
| 98  | 支援自体少ないので、言葉にすることは難しいのですが、復旧、復興にはまだまだボランティア等の支援は必要です。情報を風化させないで、現状を伝え、今何が必要なのかという情報を発信し続けなくてはいけないと思います。                                                              |
| 99  | 支援するチームは多くあるものの、横の連携がなく、単独で動いていたり動けないでいたり、効率的ではなかった（ない）と思います。指示命令系統がないことで、困ってしまうケースも多かった。また、被災者受け入れの土地でありながら、地元住民が早期退院をせまられたりサービス事業所が休みになったり、地元の住人をどう支援するかが大きな課題でした。 |
| 100 | 支援の必要性の認識は持っていたが、行動には至らなかった。自分自身の身体的なこと、環境面など考えると次の一歩が出なかった。                                                                                                         |
| 101 | 支援のやり方はいろいろあり「できることをやっていく、考える」ことがまずは大切                                                                                                                               |
| 102 | 支援へ行き、グループホームの方が避難所へ行くが、認知症の方が混乱し避難先を移らざるを得なかったり、精神安定剤の服用や入院（精神科）をさせられたりという話も伺った。あまり被災地で認知症の方がどのような状況であったか表に出て来ないので、認知症ケアに関わる皆さんが知る機会があると良いと思う。                      |
| 103 | 支援を行うまでに 3 ヶ月かかっているため、対応が遅かったと思う。                                                                                                                                    |
| 104 | 時間が経過すると支援活動も少なくなるので、継続的に支援を行っていきたい。                                                                                                                                 |
| 105 | 事業所に所属しており、個人での支援、活動は自由に行いづらかった。                                                                                                                                     |
| 106 | 指揮を明確にしないと、組織の中では活動しにくいと感じた。その為、休日等を利用した個人ボランティアになってしまうようです。                                                                                                         |
| 107 | 自施設、自らの家庭も有り、被災地に行き、出来る事があれば実際にボランティアしたかったが出来なかった。また被災地に行ってもどんな事が出来たかも自信がない。                                                                                         |
| 108 | 施設で避難者の受入れ体制をとっていたが、結果的に利用にならなかった。ボランティア活動に対しての窓口が分かりづらかった。                                                                                                          |
| 109 | 施設の職員は、ボランティアに行きたいと思っている者は多いが、実際に直接介護に関わっている                                                                                                                         |

|     |                                                                                                            |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | ものが対応することが難しいと感じた（現場の職員も人員不足なため）。どうしても、募金活動へつながると思った。                                                      |
| 110 | 施設の男性職員が参加。自分は参加していない。                                                                                     |
| 111 | 施設を離れる事は出来ないで、ボランティア等では行けなかったが、その他で出来る事を考え募金活動を3~4回行った。当施設でも受け入れも行った。                                      |
| 112 | 自治体からの派遣要請を待っていたが、「これは絶対にムリだな」と判断し、自力で民間支援団体と連絡・調整し、ヒト・モノ・カネ・情報収集全て自法人でまかなってボランティア派遣した。                    |
| 113 | 指導者研修同期生に東北の方が多く大変心配しました。時間の経過に伴い、被災地のボランティア必要性がどの程度か情報が少なくなっています。                                         |
| 114 | 自分が動けない場合、信頼できる（顔が見える）団体、組織を通してやれることを行えば充分である。                                                             |
| 115 | 自分から働きかけが出来ず、また方法も分からなかった為、義援金や物品の寄付にとどまってしまう、申し訳なかった。                                                     |
| 116 | 自分自身、当時者である意識をもてず、専門職団体の活動に「任せて」と感じている。現在に至るまでも受け身状態である。                                                   |
| 117 | 自分自身の中で、自分の事としてとらえることができておらず、他人事と考えている自分がいて、積極的行動を起こさなかった。                                                 |
| 118 | 自分自身は、支援に出向く事は出来なかったが、ボランティアとして、市を通して職員の派遣と募金活動を中心に行った。職員の体験を通じて、被災者地の苦難、苦境を少しでも理解する事が他職員も含めて理解する事が出来たと思う。 |
| 119 | 自分に今できることを考えました（現在主婦であり、震災時妊娠中でしたので）                                                                       |
| 120 | 自分に何かできる事を継続的に考えたい。                                                                                        |
| 121 | 自分の目で確認していないため、確実に思った場所に届いたか心配だった。                                                                         |
| 122 | 自分も業務しながらなので、募金活動に参加するくらいしかできなかった。                                                                         |
| 123 | 社会福祉法人のあるべき姿、使命を実感できたことや、当初117名の被災高齢者を受け入れるにあたり、法人職員全体で協力しあった中で、「仲間の存在」を実感でき、結果、チームワークの強化にもつながったと思います。     |
| 124 | 社会福祉法人のあるべき姿、使命を実感できたことや、当初117名の被災高齢者を受け入れるにあたり、法人職員全体で協力しあった中で、「仲間の存在」を実感でき、結果、チームワークの強化にもつながったと思います。     |
| 125 | 社協等のボランティアに登録したが、派遣依頼がなかった。職場の長の所属する団体の活動が具体的であった。                                                         |
| 126 | 十分ではないと感じている。                                                                                              |
| 127 | 種数の職能団体の動きが、連携が上手くいかず、必要の見極めが浅かったと感じる。法人では個定施設に独自でルートを作り、継続した派遣を続けると同時に、同グループでのモデル事業である短                   |

|     |                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 時間訪問事業を展開した。                                                                                                                                                                                                          |
| 128 | 小規模の事業所では、人員に余裕がなく派遣等したくてもできない。まとまった休暇も取得が難しく、個人的にボランティアに向かうことも困難であった為、自分としてはジレンマを強く感じました。                                                                                                                            |
| 129 | 正直、何から始めてよい状態が分からずに、募金と物品を寄付しました。まだまだやれる事はあると思いますが、時期的に皆の認識が強いうちに早く対応する事が大切であると感じた。                                                                                                                                   |
| 130 | 情報が少ない為、処遇に困った。物を買うお金の出所がはっきりせず、本人に必要なものがそろわなかった。(施設内でカバーできないものがある)                                                                                                                                                   |
| 131 | 職員、地域が一つにまとまる事の実感を得た。                                                                                                                                                                                                 |
| 132 | 職員の積極的な募金が得られた。                                                                                                                                                                                                       |
| 133 | 所属が特養のため、県老協に職員がボランティア登録を行い、要請を待ったが、全く依頼もなく行えなかったので、どこにどのように働きかければ良いのかわからなかった。                                                                                                                                        |
| 134 | 所属事業所の方針と個人の支援方法のズレがあり、個人の意見は通りにくい。                                                                                                                                                                                   |
| 135 | 所属事業所も被災している中、福島県から被災者を受け入れることについて、事業所全体として意識の統一をしていくことの難しさを感じた。                                                                                                                                                      |
| 136 | 所属職員を被災地へ派遣 (Dr、Nrs、放射線、事務)。自身は所属での業務を行う。                                                                                                                                                                             |
| 137 | 所属する法人として、定期的に職員を現地へ送り出し、その報告もあったので、現状でのリアルな様子も聞くことができた。TV等のマスメディアのみであったら、本当に他人事であった。                                                                                                                                 |
| 138 | 所属団体に直後支援に対しての質問をしたが予定なしとの返事があり、団体に対しての失望を持った。遠い場所なので情報もなく動きにくかった。                                                                                                                                                    |
| 139 | 所属法人全体で支援を行なったため、法人内の協力体制やチームワークの強化にもつながったと感じている。                                                                                                                                                                     |
| 140 | 人員に余裕が無く、ボランティア派遣にいたらなかった。物品等の支援を行ったが、職員の方にも家族等に被災した方にも行った。                                                                                                                                                           |
| 141 | 震災が発生してすぐに県や各団体より派遣可能職員と施設の受け入れ状況の調査があり、当施設からも支援の意思を示したのですが、その後何の話もなく、結局募金活動のみとなってしまいました。法人施設、個人と募金を、各団体を通じて行いました。未だ支援は必要だと思いますが、情報があまりなく、どう行動すれば適切な支援につながるのか良く解らない現状です。                                              |
| 142 | 震災直後、区へ「被災地支援として、被災者の受け入れ依頼ができる」と手を挙げたものの、実際に相談があり、区へ受け入れについて金銭的な話や保険請求の相談を具体的にすると明確な答えがなく、受け入れに躊躇した。相談者はその後、具体的な依頼はなかったが…                                                                                            |
| 143 | 震災直後は情報が交錯し、寄附等についても何が必要なのか、どこに必要なのか情報の把握が難しかったように思う。何かをしたいという気持ちからかボランティア保険に入る人が多くみられたが、どう行動を起こしたら良いのかわからないのが一般的。たまたま被災地の方からの直接の要望があり、地域の団体の方々に声をかけると素早い対応がみられたということがあった。具体的な要望を知らせていただき、できるかどうかを聞いてもらえると良いのか…とも思った。 |

|     |                                                                                                                                                                                                                   |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 144 | 震災による傷が深い状況を忘れる事なく、後世に伝えていく事が大切だと感じます。                                                                                                                                                                            |
| 145 | 震災の規模があまりにも大きく、現実の支援の微力さを感じます。これからも長く支援が必要と感じています。                                                                                                                                                                |
| 146 | 親族が被災、逝去したので支援という考えは一切ない。生まれた地のためにすることはしたい。                                                                                                                                                                       |
| 147 | 少しでもお役に立ってほしいと思いました。                                                                                                                                                                                              |
| 148 | 少しでも助けになればと思いました。                                                                                                                                                                                                 |
| 149 | 少しでも私に出来ることはないかと考え、些細なことでも誰かの役に立てればと思い行った。                                                                                                                                                                        |
| 150 | 全ての人々に義援金が行き届けば良いのですが、法人内募金もすさまじいスピードで高額集い、事の重大さを感じ、日本人で良かったと感じた。                                                                                                                                                 |
| 151 | 正確な情報不足。                                                                                                                                                                                                          |
| 152 | 精神的な支援はかなり長期に必要と感じた。受け入れ施設として、もっと多くの施設が手をあげて欲しいと感じた。                                                                                                                                                              |
| 153 | 積極的に支援することの重要性を感じました。                                                                                                                                                                                             |
| 154 | 全国グループホーム団体連合会を通じて、直接被災地へのボランティア派遣、必要物品の送付、GH協議会会員さんからの義援金を直接お渡しする事が出来た事は小さな事かも知れないが、現地の方からは喜ばれたとの事。                                                                                                              |
| 155 | 前述通り、①「がれき」と呼んでは申し訳ない（3/11 2:46 まで、家であり店であり人々が集まっていたもの）。②忘れてはいけない。風化させてはいけない。                                                                                                                                     |
| 156 | 仙台センターで研修を受けながら、被災地に直接行って支援を行えなかったことを非常に申し訳なく思う。                                                                                                                                                                  |
| 157 | 組織的な対応より、個別のつながりの中で支援の輪を広げる方が効果的で即効性があった。                                                                                                                                                                         |
| 158 | その時だけでなく、継続した支援が必要と感じました。                                                                                                                                                                                         |
| 159 | それぞれの団体がそれぞれに支援活動することで、個性ある支援につながったのかもしれないが、もう少しお互い連携して支援できることもあるのでは…と感じた。                                                                                                                                        |
| 160 | 大災害で他人事とは思えず、法人の関係者、職員、利用者の方々の気持ちとして募金をした。                                                                                                                                                                        |
| 161 | 台東区もゆれ、自宅で津波の生中継を見て独居高齢者が心配になり、夫に子を見てもらい、居宅へ向かった。職場はラジオのみで、津波のことを皆知らず、動こうとしなかった。ヘルパーが入る所は、ヘルパーにまかせ、自転車でエレベーターが止まった要介護度5の方の自宅へ行った。デイから戻っても、4Fの部屋へ息子さん2人が抱えてあがることになっていた。その方のデイへ行くとエレベーターが止まっており、階段で利用者を降ろして送迎をしていた。 |
| 162 | 大変なことだと思う。原発に同情します。                                                                                                                                                                                               |
| 163 | 他人事とは思えず、少しでもお役に立てればと支援を行いました。                                                                                                                                                                                    |
| 164 | 他の地域のことでなく、自分達の出来事として、出来る事を行った。                                                                                                                                                                                   |
| 165 | 団体を通じて支援しました。寒くなるので冬物衣類、男性物とか指定を受けたので、準備しやすく整理しやすかったが、それが役に立ったのかと思いました。                                                                                                                                           |

|     |                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 166 | 地域によって自治会が組織され、活動されているところと、組織されていないが活動されていないところ、組織すらされていないところなどバラツキを感じた。個人（世帯）に対する調査などはさまざまな団体がされているため、地区ごとへの支援する必要性を強く感じた。 |
| 167 | 地域の中での相互的な支援関係の有無、孤立など元々地域における課題につながることが多い様に感じています。                                                                         |
| 168 | 千葉も被災地の為、利用者宅が液状化の為、水が断水等により緊急の泊まり利用をしたり、他の利用者さん地域の人々の安否確認に協力。                                                              |
| 169 | 直接支援に行きたかったが、仕事を長くストップできず悩んだこと。                                                                                             |
| 170 | 地理的事情により直接の支援（現地でのボランティア活動など）が行えないことなどが悔しかった。                                                                               |
| 171 | 出来ることなら被災地に赴き支援を行いたかったのですが、諸事情に依り残念です。                                                                                      |
| 172 | 同期や先輩の指導者の方々が率先して現地に行って、支援活動をされている中、自施設の業務の事情により行きたくても行けない現状に、ただ地団駄を踏んでいる自分を情けなく感じている（県に申請はしているが職員の派遣要請はない）                 |
| 173 | 東京センター発行の支援ガイドは大変参考になり、認知症ケアの原点だと思えたので、特養職員の学習資料として使わせていただきました。                                                             |
| 174 | 当県（茨城県）も被災地であり、特に海岸には津波被害が大きかった。人身災害は少なかった事が幸いであった。                                                                         |
| 175 | 当時は認知症介護指導者ではなく、その考え方で支援方法は考えていなかった。自分の募金が確実にどういうルートで届けられるのだろうかと考えていた。                                                      |
| 176 | 当事宮崎では、火山の噴火が続き、全国の方に大きな協力をしていただいていたいました。募金という形でしか協力できませんでしたが、少しでも力になってよかった。                                                |
| 177 | 当初、物資援助や人的援助等を、行政に対して打診したが、考慮されず何もできない状態だった。双葉町より被災者の依頼があり、1名受け入れを行った。婿が大船渡にボランティアで行ったが、年寄りが行ける状態ではないとのことで断念する。             |
| 178 | 当初は物品等の寄付を行う事も検討したが、物品の過不足が判断できなかったために、現金のみとした。必要物品がタイムリーに情報が入るとよいと思う。                                                      |
| 179 | 当然の義務として事業所全体が一体となり、被災者の受け入れを行ったが、行政の対応として一度も状況確認を実際に行っていただけなかったことが残念です（文書のやりとりのみ）。実際足を運んで話を聞いたり、情報提供をしてほしかったと思います。         |
| 180 | 東電原発事故に伴う避難受け入れ要請による緊急入所という形の支援で、被災地、被災者の方への積極的な支援とは言えないと感じます。                                                              |
| 181 | 道老施協として支援する被災地と派遣側のマッチングが難しい。マッチングするためのコーディネーターが必要であることを感じる。特に、組織化して動く場合その必要性を強く感じる。                                        |
| 182 | 特になし                                                                                                                        |
| 183 | 土地勘のなさ、言葉（方言）の違い、情報不足などの状況下で、認知症ケアのボランティアを行うのは難しいと思います。（認知症ケアの専門性を発揮し辛い歯がゆさ）                                                |

|     |                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 184 | どのような形で支援を行うと良いのか、又、本当に必要な物は何か等、細やかな情報が大変参考になりました。支援を行った際に、それがどのように活かされたのかを知りたいと思います。継続した支援を行っていくことが大切かと思いますが、上記内容が明確にされることで、今後につながると思います。                                                                                                            |
| 185 | 長く支援が必要と思う。体力的に現地活動への参加は自信なく、機会あるごとに募金等で支援していきたいと思う。                                                                                                                                                                                                  |
| 186 | 何かしたいという思いとそのお金は何に使われるのか不明な事等がとても不安に感じ、きちっとした所にきちっと行くべきと思った。                                                                                                                                                                                          |
| 187 | 何か力になることを行いたいと思うが、現地で活動ができず申し訳ないと思う。                                                                                                                                                                                                                  |
| 188 | 何かをしなればという気持ちはあっても、何をすれば良いのかわからない。どうすれば支援できるのかわからない…このような方達も多くいました。「誰かに誘われればそれに一緒に」ということで、支援を始めていました。他人事のように思うかも知れませんが、「気持ちがあっても方法がわからない」「自発的に検討し、行動をおこす」、この二通りになっていました。(自分の周囲)つまりあれだけの被害でも、受け止め方なのでしょうか、それとも報道の在り方なのか行政なのか個人なのか明確ではなく、今は個人に支援をしています。 |
| 189 | 何も出来ない自分達に無力を感じる。自施設維持だけでいっぱいなので人的派遣等出来なかった。近くで起こった災害は派遣をしたが…                                                                                                                                                                                         |
| 190 | 何を支援してほしいのかわからない。                                                                                                                                                                                                                                     |
| 191 | 日本赤十字社からの各個人へは募金の配布はまだ何も実現がないとの報道、集まった募金を早く各個人へは送金されないのでしょうか。私どもは、グループホームなのでその様な施設へ募金してほしいと希望しました。                                                                                                                                                    |
| 192 | 入居者さんたちの服も流されてしまったそうで、支援物品の服を着ていたが、上着はそれなりに違和感のないものがあつたが、ズボンが(ゴムのものは)スウェットかジャージしかなかった。自分のまわりに居る年代の人のことは頭にうかんでも(子ども服とか)お年寄りというのはイメージになかったのかも。芸能人の中にそういう活動してくれる人がいればよかった。                                                                               |
| 193 | 認知症のある高齢者を特養に受け入れた際、当県の行政は何をして良いのかわからず、ほぼ相談できるような体制でなかった。被災地の行政は電話も通じず(1Wに1回)国からの通達のみが情報収集の方法であった。いくら受け入れを行おうとしても、その方法がわからないため相談窓口が必要と感じた。                                                                                                            |
| 194 | 認知症の指導者である以前に人間として当然のことを行ったと思う。作家、山根一真氏を中心とする団体と協力し合い、子どもや高齢者の居場所となる「ドームハウス」が建設され、孤立しがちな仮設ハウスの弱点を補うことが出来た。継続的な支援のあり方を探ることができた様に思う。                                                                                                                    |
| 195 | ネットワークが事業所の経営・管理識者が多く構築していたので、被災地の必要な支援ができたと思う。                                                                                                                                                                                                       |
| 196 | ビーイングとして、情報を早めに頂きたかった。行政の支援は遅れ気味なので直接だと支援が早く出来たのではないかと思います。                                                                                                                                                                                           |

|     |                                                                                                                                    |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 197 | 東日本大震災の翌日、長野県北部地震により当法人も被災し、5月下旬に復旧しました。この間、近隣他法人施設に大変協力していただき、6月下旬には当法人から東北被災地へ向けてボランティアや物資の支援を老人福祉施設に支援を行いました。思いがつながり合う貴重な体験でした。 |
| 198 | 日頃からのネットワークを強化する必要を感じました。                                                                                                          |
| 199 | 日頃からの有事への備えをいかにして意識し続けられるかが大切だと思いました。その為にも、被災地の状況というものをメディアも継続的に発信をして欲しいと思います。                                                     |
| 200 | 被災規模が大きすぎ、支援そのものが必要な時に必要な形で届かなかった感があります。                                                                                           |
| 201 | 被災された方とのライフラインが難しく、物資の提供の難しさや情報収集の難しさ等を感じた。                                                                                        |
| 202 | 被災したホームの利用者13名を事業所として受け入れをした。しかし帰る目途は全く立っていない。この先、この利用者達はどのようにするのか行政の方針が全くない。                                                      |
| 203 | 被災してまもなくのスタッフ行動により、多くの街頭募金が集まり、スタッフにとっても意識の改革になった。                                                                                 |
| 204 | 被災者が、日が経つにつれて、心身共に疲れがピークになってきていた。イライラ感が伝わってきた。プライバシースペースの確保や心のケアが必要。                                                               |
| 205 | 被災者の生きることへの力強さを感じた。避難所の施設や多職種の連携の難しさは感じた（仕事としての看護師、ヘルパーボラとしての栄養士、PTなど、介護職など）                                                       |
| 206 | 被災者の受け入れについての情報を提供したが、その後の状況がわからない。                                                                                                |
| 207 | 被災者の支援に対しての満足度が重要になってくる（今後の活動に）                                                                                                    |
| 208 | 被災地遠方のため、募金のみの支援しかできなかった。                                                                                                          |
| 209 | 被災地が遠いこともあり、我々の中でやれることは何か—？ということで上記の支援を行った。個人の立場で直接被災地に行った職員もいたが、直接支援を行うには、食・住の確保を個人で手配する難しさも感じた。                                  |
| 210 | 被災地から離れた場所にあるため、直接的支援は難しく、募金活動での支援となったが、マスコミ等で募金が有効に活用されていない等の報道があり、支援活動としての有効性に疑問を持ちました。                                          |
| 211 | 被災地で実際に支援を行うことは、時間的に無理であるため、容易に支援出来る募金活動のみ行う。                                                                                      |
| 212 | 被災地で認知症の人達がケアを受けられない状況にあると聞き、行って支援ができればと思った。思いはあっても一歩踏み出す事の難しさを感じた。                                                                |
| 213 | 被災地での活動をしたいと希望はあったが、現場での人材不足の為、出来なかった事が残念でした。私に今出来る事を行っただけになってしまった。                                                                |
| 214 | 被災地でボラをした人の話を聞くと、長期な支援と「こころ」へのサポートの大切さを感じた。                                                                                        |
| 215 | 被災地に行きたかったが、難しい状況であった。施設の募金箱を設置し対応したが、皆さん協力的で多額を寄付できた。                                                                             |
| 216 | 被災地に行つての支援も行いたいと思ったが、事業所を開けることができず残念だった。                                                                                           |
| 217 | 被災地に対して、全ての人が長い期間支援を継続できればと思います。是非、仙台研修センターも                                                                                       |

|     |                                                                                                                |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 窓口になっていただければと思います。個人の力では有効に活用できないのではという気持ちがあります。よろしくお願いします。                                                    |
| 218 | 被災地に直接行って支援することが現実的に難しかった為、募金（義援金）という形で支援を行いました。しかし、被災地ではまだまだ様々な問題が起きているので、何か別の形で支援できればという考えはあります。             |
| 219 | 被災地の受け入れを行った際、寝る場所や食料、職員の確保に苦労しました。しかし、皆で何とか支え合い、この状況を乗り越えたことで、地域に根ざした施設につながり、又、職員の質の向上につながったと感じております。         |
| 220 | 被災地の方はいろいろ忙しく、毎日分資の仕分けの現場での指揮ができない状況のようだった。短期間のボランティアでは仕事を覚えたら終わってしまうので、長期間のボランティアができる人がいれば被災地の方に変わって指揮できると思う。 |
| 221 | 被災地の状況がつかみづらかった。                                                                                               |
| 222 | 被災地の状況を知ることで募金活動につながりやすい。（被災地に行った人の体験を聞く）                                                                      |
| 223 | 被災地の情報を早急に収集し、何の援助が必要か情報を発信したり、又、支援を受け入れる窓口がなかなかできなかった事。                                                       |
| 224 | 被災地への支援の呼びかけに耳を傾け募金をしてくださる方々が多数いたこと。                                                                           |
| 225 | 被災地への支援を国策として重点を置く。                                                                                            |
| 226 | 被災地へのボランティアを派遣は勿論、被災地の方達の受け入れをもっとスムーズに行えたらと思いました。                                                              |
| 227 | 被災地ボラを実施したいと思っても、職員が一名ぬけることで、自施設の現場がまわらなくなってしまう。職員配置（人員数）の問題                                                   |
| 228 | 被災地より避難して来られた方（要介護認定を受けていない）の家族より相談を受け、介護保険外でのデイサービス利用を提案、準備したが、様々な要因で実現できなかった。結果、相談援助で終わってしまった。               |
| 229 | 被災に行き支援を行いたいと言う職員が多数いた。しかし個々の事情が優先し、ボランティアには行けなかった。自己都合での支援に自分に蟠りが残った。                                         |
| 230 | 非常災害時に行うべき行動が法人としてのルールみたいなものが殆ど無しに等しく、個人での判断になっていた。こういう場合における実質的な備えは現場の職員はどうなっているのか不明である。                      |
| 231 | 人、それぞれできることを出し合う気持ちが原点となる。現地へ飛んで行きたい気持ちはあっても身体的、家庭的、仕事上できないこともある。大切なことはその身（当事者の立場）になってできることをする。                |
| 232 | 人と人のつながりの大切さと同時に、パニックになった時のその時に本当の人の姿が見えてしまうように感じました。                                                          |
| 233 | 人の派遣を行いたかったが、県社協・県からの連絡や指示がないままとなった。希望を申し出し、又、県も早い時期に調査したが支援に結びつかなかった。                                         |



|     |                                                                                                                                        |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 234 | 一人ひとりが今後の生き方について考えていく必要があると思いました。                                                                                                      |
| 235 | 避難した被災者（仮設住宅の住人・相馬地方で被災にあい、6 回位避難場所を変わって仮設に来た人達）。与えられた支援ではなく「私達が出来ることをして社会貢献したい」という要望が強いことにおどろかされた。                                    |
| 236 | 避難者として法人で7 人の方々を受け入れたものの、被災地支援としては、避難者受け入れ以外は一時的であり、継続した活動になっていない、と考えます。                                                               |
| 237 | 避難所で認知症の方は、邪魔者扱いされたり、追い出されたりしているのが現状であった。オムツも介護用品も不足している中での生活は本当につらいものだったと思う。都内の施設で受け入れをするといっても知らない土地ではますます不安になるばかりである。                |
| 238 | 避難所には、認知症の方を受け入れない所があったり、BPSD の激しい方は、精神病院へ入院してもらうことにした、又、入所してもらった、という話を聞いています。被災者であり、認知症という病気があるということで、そのような扱い方しか考えられなかったのか…とても残念です。   |
| 239 | 避難当時、避難場所を転々とされていた方を支援したが、自治体も不安定で手続きに戸惑ったり時間を要し、被災者への支援説明もどこまで説明すれば良いのか、その情報が正しいのか、今後はどう被災者を支援するのか見えなかった。このため、被災者の精神的負担の大きさが大きく感じられた。 |
| 240 | 福島市は原発の関係で先が見えず、別に進んでいる感じが無い。人口は減る一方で若い人の県外へ出るケースが多く、どのように支援すべきか地域支援のあり方に悩む。                                                           |
| 241 | 福島や仙台から札幌に逃げてきて、当施設の通所リハビリを利用していました。3 ヶ月暮らし、それぞれ地元にもどって行き、介護していた妻がピック病を発病したとの連絡ありショックをうけました。                                           |
| 242 | 復興に向けた支援は、イベント的な事や炊き出しも被災直後は効果があると思うが、仮設住宅に移り住む時期（回復期）には、見知らぬ同志の仲間入りや助け合いを、そこで暮らす住民同志が作っていける様に支援する事だと思う。                               |
| 243 | 復興はまだ時間がかかりそうですね。                                                                                                                      |
| 244 | 物品（紙オムツ、清拭布など）を送ったのですが、かなりの数を保管するところがないと言われ反省しました（事業を行っていると即、まずオムツなどと思いましたが）                                                           |
| 245 | 物品の寄付については、被災地の方々に必要な物を、町を通して情報を得ていたので、スムーズに提供できたと思う。                                                                                  |
| 246 | 物品の支援など行いたい個人の人も大勢いたが、混乱すればと控えていた。どこで何をまとめて送るのかなどの情報がもっとあればよかったと思う。                                                                    |
| 247 | 物品の物資寄付については、同期生が現地に向かうという形で協力するにつき、その方の元に職場（法人）を募り声をかけ、物資を郵送した。直接的な支援にはならない事にもどかしさを感じたが、自分なりに出来る力で協力したかった。                            |
| 248 | 振り返ってみると私自身、特別なことをしなかったように思います。                                                                                                        |
| 249 | 法人から被災地への派遣職員を募り応募するが要請されなかった。支援体制のシステム作りが課題                                                                                           |

|     |                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | であると感じた。                                                                                                                    |
| 250 | 法人全体で義援金、物品を送る。地域、家族の協力を得てバザーを行い、売り上げ全額を義援金として送る。                                                                           |
| 251 | 法人としてお金は送金したが、活動等に行っていない。個人としても何も行っていない。                                                                                    |
| 252 | 法人として実施。募金以外に自職場の対応に追われ、何もできなかったもどかしさがあった。                                                                                  |
| 253 | 法人の運営方針で、現地への支援（被災地に行く）が出来ず、残念だった。被災者の受け入れ等情報提供はしたものの、その後の状況が全く分からなかった。                                                     |
| 254 | 法人は、県からも意向調査がきているから一と、GH 協の依頼での支援を毎 W1 名とした。しかし、県から支援の依頼はこなかった…。団体を越えてすぐに支援に出る体制が必要である。                                     |
| 255 | 法人を通しての情報で受身的な支援しかできなかった。                                                                                                   |
| 256 | 報道を通じて被災地の苦しさ、つらさに心が痛んでいます。自分に何ができるのか？やみくもに個人で行動することがいいことなのかなどと考えているだけで、行動を起こすことができていない。私同様思いがある人は多い。何かをしたいと多くの人が思っている。     |
| 257 | 募金活動ぐらいしか出来なかった事をとても残念に思いました。                                                                                               |
| 258 | 募金活動しかできず、また支援に行くこともできずにいて、自身は何の役に立てられるか？と考えることもありました。                                                                      |
| 259 | 募金活動は継続しており、周囲の関心もとぎれていない。どこでどう使われるのか具体的に聞かれ答えられなかった。                                                                       |
| 260 | 募金活動を急いで一生懸命に行い、お金をまとめて日本赤十字他、に送金したが、なかなか現地に届いていないようで、イライラしました。                                                             |
| 261 | 募金がどのように届いたか心配（ニュース等で届いていないことを聞き）。ボランティア派遣については断られた。                                                                        |
| 262 | 募金が被災された方に本当に届くのかな？被災者に早めに届くようにしてあげたいが…                                                                                     |
| 263 | 募金が被災者の方に早く届き、活用できるシステムが難しいと思った。認知症の方の環境の変化に対応するのが大変と思った。                                                                   |
| 264 | 募金がメインの活動だったが、様々な研修の場などで呼びかけたところ、理解者は多かった。                                                                                  |
| 265 | 募金の活用が実際にどのようになされたのか。                                                                                                       |
| 266 | ボランティアとして勝手に行くことも疑問に感じ、何もせず、見守っているのみでは申し訳なく、義援金や施設から代表として派遣した職員に託した。その間不在となった職員の業務を行ったりした。（介護福祉士 2 名、心のケアチームとして看護師 1 名派遣した） |
| 267 | ボランティアとして参加したい気持ちは強くありましたが、自分の年齢を考えると「逆に迷惑をかけては」との思いもあり、遠慮し募金活動に回りました。                                                      |
| 268 | ボランティアの方々は多数協力して下さいましたが、そのボランティアの方々が何をしたらよいのかがわからず、時間のみ過ぎてしまった。                                                             |
| 269 | ボランティア派遣について、団体を通じて継続的に行えたので、他事所と互いに派遣先の状況につ                                                                                |

|     |                                                                                                                                                                          |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | いて共有ができた。                                                                                                                                                                |
| 270 | ボランティアを通して支援が行えた事より、人間としての成長を感じる活動になりました。                                                                                                                                |
| 271 | 本当に届いたのか不安                                                                                                                                                               |
| 272 | まだまだ支援金が不足しているのではないかと感（TV 等での情報において）                                                                                                                                     |
| 273 | 待っているだけでは情報が入ってこない。必要な情報を自ら集めていくことが必要と感じました。                                                                                                                             |
| 274 | 皆さんがとても他者に気を使いながら生活を送っているのが痛々しかった。何をどのようにしたらよいかわからなく、支援する側も混乱した。すぐに現地に行けなかったことも心配の種である。                                                                                  |
| 275 | 目の前の利用者を置いてボランティアに行けなかった。本当は行きたかったが？…                                                                                                                                    |
| 276 | もっと場所が近い場合には違う支援ができたのではないかと感じた。（ボランティアや受け入れ等）                                                                                                                            |
| 277 | 役割的には訪問は困難なので、社長と娘が岩手にボランティア参加している。                                                                                                                                      |
| 278 | やはり個人だけの力は弱いので、職場や地域など全体としての働きかけ、協力が大事であると実感した。                                                                                                                          |
| 279 | 有事に備えて、日常的にネットワークを強化しておく必要性を感じました。支援に対して無力さを感じると同時に、小さなことでもゼロからではないので積み重ねたいと思います。                                                                                        |
| 280 | より早急に、そしてより現場に行き渡る在り方について考えさせられました。                                                                                                                                      |
| 281 | レセプト請求において、行政間に差があり、手続きに手間、時間を要した。                                                                                                                                       |
| 282 | 私自身は募金という形でしか支援できなかったが、職員数名は何度か被災地に行き、活動に参加できた事は良かった。被災された方の受け入れも施設では希望していたが、受け入れには及ばなかった。被災地に支援として出向けたこと、と同時に職員の中でもボランティアとして希望したいが、原発等のことで心配でという声もたくさんあった為、参加する職員も限られた。 |
| 283 | 私たちに今できることは何か、社会福祉法人として一人の人間として、助け合う、思いやる心を強く感じた。法人のスケールメリットを最大限発揮することができるチーム力、役割の認識、仲間とのつながり（絆）を実感した。                                                                   |
| 284 | 私達の HP では透析の関係で 5 名の受け入れを行いました。被災者の心労は私達では計り知れなく言葉につまる所が沢山ありました。あれだけの大きな震災をうけ、私達は何ができるかということを感じさせられました。                                                                  |
| 285 | 私どもの施設は地方に有る為、なかなか情報が来なく、何かの支援をと考えてもどうして良いか分からなかった。                                                                                                                      |
| 286 | 私は個人的に交流のある施設に何が必要かを尋ね、物品を直接送りました。義援金も団体で送っていますが、何に使われたかわかりません。むしろ、団体から団体へ直接送る様にしようと、皆で話し合っている所です。                                                                       |
| 287 | 私は今回、自費で参加させて頂き、休暇が長く取れず、短い期間での参加でしたが、復興支援は昨年一年で終わるものではなく、長期に渡るといいます。被災された皆様が少しでも早く、心安らぐ生活が送れる様、まだまだ支援の手も必要かと思いますが、今は震災自体が風化する事が心配です。継続的取組みの PR をしていただきたい。               |

|     |                                                                                                                                                                                                              |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 288 | 県よりボランティアの依頼があった時に、活動に参加させてもらいたいと職場の上司に伝えましたが、管理職が施設を不在になることはよくないとのことで、参加を断念しましたが、同法人の医療職が参加した時の思いは、やさしくしっかりと話の聞ける人達が必要だと思ったとのこと。その時、その状況により柔軟な人材の投入を考える必要があったように思った。                                        |
| 289 | 今回の災害では、自施設も被害を受けて大変な状況であったが、他団体や施設独自で募金の呼びかけを行なったり、現地へ支援のための職員を派遣したりした。しかし今回高齢者がいつもと違う環境の中で生活することへの不安でいつもと違う行動を起こしたり体調不良となったりすることの対応を多くの職員が休みなく関わることとなる。このような時に人の手が本当に助かった。専門職でなくてもいいので支援に来てほしいと思った。        |
| 290 | 今回の支援は、救援物資の呼びかけと受付、仕分け作業と発送しか行えなかったが老若男女関係なく広く地域の方々が救援を行いたい気持ちが確認できた。専門職としては、事態の動向がなかなか把握できずに行動まで至らなく、不甲斐無さを感じてしまった。                                                                                        |
| 291 | 今回の震災で遠く離れた九州からの支援と考えたら募金等の金銭的な支援しか出来ない状況でした。実際に人員不足の中で日々業務を行っており、現地に行つての支援というのが法人含め理解して頂けない現状がありました。                                                                                                        |
| 292 | 今回は所属法人職員のボランティア派遣の手続き等が私の役割であった。ＤＣＮＥＴに登録後の派遣であったが、ＮＥＴ上では具体的な派遣には繋がらず、個別連絡になり、受入側の対応が大変そうであった。所属法人の理解と受入側の協力のおかげで実現でき、「何か出来ないか！」と思っていたことが、少しでも現場の一助につながったのではないかと考えている。派遣したことにより、所属法人の職員の育成にも大きく影響したものと強く感じる。 |
| 293 | 支援したい思いはあるが、具体的にどういうふうな支援をしていいのか戸惑ってしまった。法人としての取り組みも各関係機関や団体の取り組みに便乗する形での支援になり、1法人として支援にあたることができなかった。                                                                                                        |
| 294 | 実際に被災地に支援に行つてはきましたが、特段何も出来ないんだな、というのが印象です。もう少し長期間滞在して、支援に当たってみたかったとも思います。ただ、東京において募金に協力したり、物資（オムツやタオル）を送ったりしたこと。事業所としては被災した看護師等を雇用し、居住先や生活用品を支給したこと。こういった小さなことの積み重ねが、支援になっていると実感できました。                       |
| 295 | 実際に報道で悲惨な現状をみて、何かしてやりたいという気持ちが強い職員が多く金銭的な協力しかなかったが、普段の募金活動では集まらないほど多く募金が集まった。実際に募金活動等、支援をする時はその現状を実際に感じる必要性があると感じた。                                                                                          |
| 296 | 実際問題として、被災地にボランティアに行きたくても具体的にどこへ連絡し、どう訪ねて行くか、交通状況もどうなっているのか確認する方法が分からなかった。自分の所属する事業所でも物資の不足、計画停電の実施、被災（建物の損壊）もあり、落ち着くまでの間は被災地へ出掛ける余裕はなかった。行政から被災者の受け入れについて要請があったが、プライバシーを守れる居室を用意できず事業所では受け入れられなかった。         |

|     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 297 | 情報が少ないので、何をどのようにしたらよいのか？思案した                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 298 | 新潟で発生した2回の地震での経験が活かされ、法人の職員と受入施設での準備が冷静に図れた。災害時には積極的に支援活動に望む姿勢が職員に定着しているように感じた。福島県は隣接県ではあるが、被災地域の太平洋側地域は関東圏とのつながりが濃く、新潟への避難よりも栃木、茨木といった方面への避難が多く見られた。そのためか、新潟県と他県とで受入の期間が異なってしまったり（介護保険財政によるものか？）、自治体の裁量により振り回される避難者が多いと感じた。                                                                                                                                                                                                                  |
| 299 | 多くの被災者に何が出来るだろうと考えたが、必要な物を調達出来るお金が一番なのではと考えた。自分の出来る範囲の事をする事が支援と考えるので、自分のやるべき事をせずに被災地に行く事は考えなかった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 300 | 地域性もありますが情報量が少なかったので出来ることも分からず、出来る範囲も限られたため金銭的な支援が中心となりました。また義援金について日赤等や3センターでの取り組みも含め必要な方へ必要な時に支援が行き届かないという現実が非常に歯がゆかったです。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 301 | 認知症の方を受け入れたい旨、準備はしていましたが要請は、なかった。職員人数の少ない所は、現地に行くことは出来なかった。認知症に限らず東北の雇用に繋がる様に支援は出来る限り続けて行きたい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 302 | 判断力…現場の状況や物資、人出等を鳥瞰的に捉えて、判断を下す力<br>チームワーク…お互いの価値観や考え方を認め合いながら、一つの方角に進む力<br>関係構築…認知症の方や現地スタッフの方々との関係構築を行う為に、1回の支援期間を1～2Wとした。<br>継続性…支援者がやりすぎることなく、支援終了後も現地スタッフの方々が担っていけるように考え、相互に話し合いをしながら進めた。<br>支援の在り方の再考…被災による介護従事者の不足、不活発による虚弱化、要介護度の悪化が見られた状況は、今後の少子超高齢社会の縮図とも言える。こうした状況の中で必要な支援の在り方を考えさせられた。                                                                                                                                             |
| 303 | 被災者の受入についての情報を提供したが、その後の状況が分からない。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 304 | 被災地域に行き日常の業務である介護が、被災した介護職員の代わり行える状況にあったならば行きたかったところですが、中々そのような環境に自分が無かったため募金と言う選択をしました。自職場施設長には施設として被災地域への職員ボランティアの派遣や被災者の受け入れについての考えを確認したのですが、全くそのような気持ちがありませんでした。それに対し職員によっては会社としてボランティアとして行かせてもらえるなら、ボランティアで行っている間の給料を会社負担で出してもらえるならば給料が減ってしまうことも心配せず行けるのに、と考えている人もいました。スタッフが自主的に休みを使ってボランティアにいけないのは給料が減ることを気にしていたため、どの会社もボランティアで行った分の給料を負担してくれたら、全国に有る施設系から一人ずつボランティアを排出することが出来たら良かったと思います。厚生労働省から送信されたFAX内容よりも強制力の有る連携が全国で取れると良いと思いました。 |
| 305 | 法人を通しての活動が中心でした。1割くらいの職員は個人でも何らかの支援を行っていました。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |

|     |                                                                                                                                                                                                      |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 305 | 良かれと思って行った支援が、一部の方の不利益になったという話を聞いた（例：支援物品を送付したら購入可能な人まで支援品をもらっており、近隣の商店等の販売力が落ちたなど）。提供側の自己満足で終わらせないためには、まとめ的な役割を果たす人や機関と、それをいち早く発信するフロー等を整えることの大切さと難しさを感じた。また、発信された情報を私たちがどのように受信するのか？はいまだに理解できていない。 |
| 306 | 本来なら現地へ行きたい思いは十分であったが、法人からも G0 がからず、又、新規立ち上げも重なり、募金活動と物品の寄付しかできなかった。                                                                                                                                 |
| 307 | 他人事ではなく、自分自身の問題として考えさせられ、できることをしたいと考えました。                                                                                                                                                            |
| 308 | 顔の見える関係の大切さ                                                                                                                                                                                          |
| 309 | 法人や現在の仕事に直接的に関連する団体での被災地支援の動きが鈍く、自分が所属する職能団体からの派遣を選ぶ結果となった。職能団体として今後の被災地支援のモデルが出来たと思われ、又、支援の全国ネットワークも広がった。各ボランティア団体におけるコーディネーター、現地でのコーディネーターの存在が不可欠。                                                 |
| 310 | 何も支援を行っていない自分を恥ずかしく思います。                                                                                                                                                                             |
| 311 | 二度目の時にお話を聞いた、ある女性介護士はその時（地震・津波）は夢中で対応していたが、数ヵ月後の余震の時に私用で出かけていて、そのショックで体が動かなくなり、友人におぶってもらい帰ってきた話や、いざという時は、人は一人しか助けられない話など、とても心に残る事を聞くことができました。願わくはこの方々がいつか普通の生活を取り戻すことができるよう願わずにはいられませんでした。           |
| 312 | 福島からの避難者への物資の提供時に、行政、社会福祉協議会などの動きが悪く、スピーディに対応できず、独自のネットワークで行った。                                                                                                                                      |

3) 被災地支援において、認知症介護指導者としての立場としての役割や動き方についての意見回答者 218 名

| No. | 今回の被災地支援において、認知症介護指導者としての立場としての役割や動き方についての意見がありましたら下記に自由にお書きください。                                                                                                               |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | “避難所でがんばっている認知症の人、家族等への支援ガイド”を看護学生等の授業・実習の教材として使用して、次の災害に備えるための一助となったと思う。                                                                                                       |
| 2   | 「指導者としての立場」という視点では、やはり力を合わせた方が良く感じ都道府県や市町村レベルでのまとめ役、リーダーが必要だと感じた。話を聞くと個々に色々な事をしているのだがよりよい支援と考えると力を合わせた方が有効であると感じた。東日本大震災のような緊急時には団結できる仕組みがあるとよいのではないかなと思う。しかしそれは難しい事だということもわかる。 |
| 3   | ・お話し相手、相談相手が必要なことを実感した。・私は看護師として現場にいたが（モバイルデイクケアを実施）、血圧は電動で自分で出来るのに、ほぼ全員が私の所に来て血圧測定を望んでいた。色々お話をすることで喜ばれた。私は今回介護福祉士のたん吸引の指導者としての仕事もあったのであまり関われなかった。                              |
| 4   | ・ネットワークを駆使し、個別に動くのではなくシステムとして確立した上で支援体制を整える。決して感情で動くものではない。受入れ側の状況等をふまえた上で自立した支援活動ができるようにする。・危機管理意識の醸成に努める。                                                                     |
| 5   | ・派遣ボランティアの方々へ認知症ケアに関して伝える。相談にのる。・ボランティアの必要性を伝える                                                                                                                                 |
| 6   | Being 等の団体を通じて活動をできたらと思います（個人でバラバラではなく…）                                                                                                                                        |
| 7   | H24.1/13 現在、まだ 1 名様受け入れ継続中ですが、職員に対し日常的に、又、会議の中で『認知症の方々のストレス』に関し、話し合いの場をもち、精神面でのフォローに心掛けています。                                                                                    |
| 8   | 足が座る事が出来ず、被災地ボランティアはやむなく辞退しましたが、今後は被災された独居の方の心の支援に伺う場面があったら行きたいです。                                                                                                              |
| 9   | あまりにも甚大な被害の為、避難場所では弱者といわれる人たちが隅に追いやられている状況があったと仲間から聞きました。認知症の人たちへの支援はどうなっていたのだろうと思いました。                                                                                         |
| 10  | あまり指導者としての立場を意識しての活動ではなかった。仙台センター出身ならもっと活動意欲が増したかも。でも今回は「人として・・・」が重要だったかな。                                                                                                      |
| 11  | あれだけの映像を見ると、「指導者」としてより、「介護者」として現場へ行って支援したいと感じた。                                                                                                                                 |
| 12  | 一個人として支援を行いました。認知症介護指導者としての立場ということ意識した支援はありませんでした。                                                                                                                              |
| 13  | 一日も早く元の生活にもどれる様願っています。その為の協力は惜しみません。                                                                                                                                            |
| 14  | 一本化し、すべてについて支援できる場所があった方がよいと思った。                                                                                                                                                |
| 15  | いつ身近で起こるかもしれない災害、支援される側になることもある中で、自分達の地域で被災した高齢者や認知症の人を受け入れる体制作り、行政と連携していくことを努めていきたい。                                                                                           |

|    |                                                                                                                                                            |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 16 | 動きたいと思っても、法人の動きに合わさなければならない為、思うように動けない。                                                                                                                    |
| 17 | 大府ネットなど立ち上げているのに、この様な大災害になってしまうと、把握して支援することは中々難しいと思いますが、何か起こってから考えるのではなく、何か起こった時にどうしていくか、窓口をあらかじめ決めて頂いて、支援が円滑に行える様にして頂きたいと思います。                            |
| 18 | 介護手帳の普及が必要だと思いました。                                                                                                                                         |
| 19 | 会社に所属しているため、会社の指示で動かなくてはならない事に歯痒さを感じました。国や県などから、会社へ要請をして頂いたりと被災地へ行ける体制を作ってもらえたなら、個人として動きやすかったのではと考えています。今からでも要請があれば動きたいという気持ちはあります。                        |
| 20 | 各施設が限られたスペース（空間）の中で受け入れを行い、認知症の方が少しでも安らぐことができる環境に配慮したこと、又、被災者同士のつながり、職員、家族とのつながりを通じ、安心できる支援の提供が大切であると思った。                                                  |
| 21 | 各指導者は各々の地区で地域の力を結集し、まとめ上げる義務があると思っています。                                                                                                                    |
| 22 | 各都道府県ごとで集まり、指導者個人でなく全体で行える活動を今後考えていってもよいかと感じました。                                                                                                           |
| 23 | 勝手なお願いですが、何らかの事業所に雇われる身としては、センターなどから県を通して「派遣要請」が事業所にあると、もっと積極的な支援ができるのに—と思いました。                                                                            |
| 24 | 悲しい事に、時間が経つにつれ人の意識は少しずつ薄れていってしまう。今でも大変な思いをしている被災者の方々のことを忘れないよう、私達は現実を伝えていかなければいけないと思う。                                                                     |
| 25 | 環境の変化、心身のショック等で避難先でも仮設住宅でも、認知症の方の辛い状況を報道やネットで見聞きし、被災地の指導者からも聞いていた。全国の指導者間のネットワークや協力体制等のマニュアルなど具体的なものが作成され、活用できると早めの対応もできるのでは？                              |
| 26 | 関西や関東地域の方々が義援金をつのって頂いたり、早急にボランティアに出動して頂いたことに大変感謝しています。                                                                                                     |
| 27 | 九州は東京センターの研修だったので直接、東日本の方々との交流がなかったので、現場の情報が欲しかった。                                                                                                         |
| 28 | 協議会を通してまとめて支援活動をしていただいている。又、地域の中でも声かけし継続的に支援を行っていきたい。                                                                                                      |
| 29 | グループホーム管理者様の配慮で、避難所色麻町～石巻市内の被災地を見学させて頂き、私の出来ることは、災害の恐ろしさと日頃の防災意識の大切さ、そしてボランティアを通して感じた認知症ケアにおいて最も重要なのは、人との関わり（ソフト面）で、人は人によって支えられている事などを地域の中で伝えていきたいと思っています。 |
| 30 | 現地では何の情報もないまま、職員と同様に働かなければならない状況。専門職（ちゃんと動ける）として、もっと機能出来たらよいと感じた。ex：避難所での認知症の方への環境助言など…                                                                    |
| 31 | 現地にはまだまだ危険があったにせよ、私達指導者はまず声をあげ認知症の方の支援に積極的に参画すべきと思う。実際の姿をみると、本当に他人事ではないし、正しい支援をしなければいけなかったと思う。                                                             |



|    |                                                                                                                                                              |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 32 | 現地の方との手紙や TEL での情報交換で学ぶことが多かったです。                                                                                                                            |
| 33 | 現地の方に多くのアドバイスができれば役割が果たせるのではないかと。（支援できる方にどのように関われば良いか等を一緒に考えてあげる）                                                                                            |
| 34 | 現地の情報が限られ、何を必要とされているのか（物の不足？人の不足？お金の不足？）など、確認しにくく、また、距離的な面もありアクションにつなげられず申し訳なかったと思っています。                                                                     |
| 35 | 現場の方たちが何を必要としているのかなどの声を聞けると、適切な支援に繋げることができると思うので、現地と指導者連絡会のパイプ役となる事務局があると、情報が集約できやすくよいのではないかと考えた（あるのかも知れないけど…）                                               |
| 36 | 高齢者に携わる立場として、現地の事はとても気がかりだったが、業務の事もあり、物品や募金の支援しか行えなかった。                                                                                                      |
| 37 | 高齢者の災害時の対応について日頃よりシミュレーションしておく。                                                                                                                              |
| 38 | 厚労省と 3 センターで被災自治体と調整→役割を決めて派遣。指導者個人では殆どアプローチ不可。国+県→所属先に依頼                                                                                                    |
| 39 | 心のケアや居心地のよい環境作りといった点では、指導者の力量を発揮できる部分であったと思う。                                                                                                                |
| 40 | 個人的に動くのにも、情報不足やニーズに合っているか等、不明な点が多い。認知症介護指導者のネットワークを通して必要とされる分に行えればと思います。所属する事業所の理解も必要となるとありますが。社協や老健協といった団体に所属していると思うので、そちらの活動との兼ね合いも…。                      |
| 41 | 個人で行動を起こす事の難しさは、組織のバックアップ（こういう役割を認知症介護指導者として受け持つなどの）が糸口となれば解消できると思う。                                                                                         |
| 42 | ご利用者を支えることも勿論ですが、ケアに当たっているスタッフはフォローがとても大切だと思いました。24h 働きつめの姿を、1 週間を通して見ました。体力の限界は越え、気力で動いているスタッフ、特に GH の管理者。こんな現実でもご利用者にはやさしく接している姿を見て、自分達の使命をしっかりと果たしてられました。 |
| 43 | 今回センターの HP を通して避難所でがんばっている認知症の人・家族等への支援ガイドが示されたことはよかった。この HP の情報を被災地の知人・友人に送ることができた。認知症介護指導者としてそのような情報提供が行えることは重要だと感じました。                                    |
| 44 | 今回の支援で現地から求められたのは、高齢者全体への支援であった。施設、地域に関係なく、直接支援の必要性が高く、緊急時にどのような立場の方でも参考にできる分かりやすい対応マニュアルの作成が必要だと思います。                                                       |
| 45 | 今回の様な事は、日本全国どこでも起こり得る可能性がある為、単に介護という視点だけでの地域作りではなく、災害時の認知症の人への支援も視野に入れた地域作りや役割が求められると感じました。                                                                  |
| 46 | 今回は実際被災地へ出向かず、受け入れで支援させていただいたが、指導者間で連携して専門的なスキルを活用しての支援体制を構築するべきだと感じた。                                                                                       |

|    |                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 47 | 今回は認知症介護指導者としてのボランティアはしなかったが、被災したことで認知症の方も増えているということを知った。そのことで混乱している家族の方の話を聞くとか、避難所をまわるなど、できることがあったと思った。                                                                                                                                                           |
| 48 | 今回は被災者の受け入れには至りませんでした。今後同様のことがあれば受け入れの意思表示を公にするシステムが必要かと思いました。                                                                                                                                                                                                     |
| 49 | 災害時に、地域に暮らす認知症の方は避難所などで慣れない環境の中、ストレスが大きかったと聞かれています。いざという時に、認知症の方への適切な配慮が地域の中に根付くといいと考えます。                                                                                                                                                                          |
| 50 | 災害発生直後の支援よりも、これまでの生活を取り戻していく上での役割が必要だと思います。語り継いでいくことや活動を伝えることも重要です。支援センターなどともに、訪問活動や仮設内でのサロン活動の手伝いなど、様々なものと思います。                                                                                                                                                   |
| 51 | サロン活動への参加ですが、最初に行ったチームより、サロンの場に座布団、コップ、ヤカン等が無いと連絡があった。私達は必要な物品を集めて持参する。持参した物品をサロン会場へ持参し、参加者と共に1つ1つ取り出した。その時、ある女性がつぶやくように「自分達はもらうことに慣れてきて、まるで、こじきになっていくように思う」と言われました。その時、ボランティアをする私達の心構え等がとても大切と感じました。ただ優しい行為だけでボランティアをするのではなく、どう書けばよいか解らないが、ボランティアの在り方に強いものを感じました。 |
| 52 | 支援のため現地派遣が可能な施設として登録しているにも関わらず、派遣要請がないのは何故なのか疑問である。                                                                                                                                                                                                                |
| 53 | 支援をしたいと思ったが、体力のある若い人のほうが良いと言われた。遠方からの支援は物品や募金に限られてしまうように思う。                                                                                                                                                                                                        |
| 54 | 施設の中だけでなく、地域全体に目を向けることが必要。防災協定やネットワークの重要性を再確認した。                                                                                                                                                                                                                   |
| 55 | 施設や自宅介護における認知症の方々の受け入れが出来る限り可能な環境が理想とされる。緊急時の体制づくりがポイントかと思う。                                                                                                                                                                                                       |
| 56 | 実際現地に行ってもどんな役割が担え、活動できたのか、特に指導者だから云々ということはないように思う。今後のことを考えると、災害時の対応策として、地域別にフォロー支援体制を決めておくと、いざという時に機能するのではないかと思う（対応窓口も一本化するなど）                                                                                                                                     |
| 57 | 実際に何が必要で、どう関わったらよいのか、現地の友人から聞かなければ本当の事がわからない状況だった。地ネットなどのネットワークを生かし、具体的で有効な情報や指示が現地から出るようなくみがほしい。                                                                                                                                                                  |
| 58 | 実際の現地に活動に向かってもよいと思ひまして市役所に書類を提出しましたが、自社事業所からの看護師がいなくなるのはだめですと解答。                                                                                                                                                                                                   |
| 59 | 指導者間のネットワーク（特に同期生）が頼りだった。各地に居る指導者からの情報を元に何をすれば良いかを考えられると思った。                                                                                                                                                                                                       |
| 60 | 指導者団体としての活動を行えることはとても今後に生かされると思います。例えば、今後、行政命令等で被災地支援を行うようになれば、自施設のしほりも軽減されると思います。                                                                                                                                                                                 |

|    |                                                                                                                                        |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 61 | 指導者というよりは、人として、またあえていうなら認知症を理解している人としてという立ち位置の方が重要だと思います。                                                                              |
| 62 | 指導者といっても社会的地位が違い統一した動き方は難しいと感じた。それ以前に指導者とは実践者、リーダー研修をしていれば良い存在でしょうか？                                                                   |
| 63 | 指導者同志の話し合いや連携で、具体的な支援策や参加者をつのるなどの活動があったなら、もっとよく考えられたのではないと思う。                                                                          |
| 64 | 指導者として限定した立場では、どのような働きをすれば良いか難しい。                                                                                                      |
| 65 | 指導者として支援出来ればと思いましたが、国からの依頼等が具体的にあれば良かったと思います。                                                                                          |
| 66 | 指導者として全国に知人が居たので、様々な支援に役立った。広域のネットワークの大切さを改めて感じた。                                                                                      |
| 67 | 指導者として何も行うことはできなかったが、現地で認知症の人や施設の方は、どのように過ごされているのか気になるが、それを知る方法が分からない。もし分かるのなら知ることができれば何かしらの支援はしたい気持ちはある。                              |
| 68 | 指導者としての動きは出来なかったが、法人全体で受け入れ6名の支援を行う。現実すぐに被災地に支援に行く事は出来なかった。栃木県の指導者の施設も受け入れを行っていたので、そこでの協力が大きかったのではないと思う。                               |
| 69 | 指導者としての役割は、訪問直後には見えてこなかった。例えば、被災した GH や特養、老健施設などに介護職としてボランティアに入るのは可能だが、指導者としては受け入れ先の気持ちに余裕がないと思う。                                      |
| 70 | 指導者としての役割や動き方は特にありませんでしたが、意識して対応していたと思います。                                                                                             |
| 71 | 指導者としては支援を通して、被災地での認知症の方の生活を知り、その事を伝えていくといくことを通して、災害時の対応や支援への協力とつなげていく。                                                                |
| 72 | 指導者に特に必要な情報が入る訳ではないので難しいですが、個人的には現地に行って出来ることはあると思いましたが、年齢、自分の体調を考慮し止めました。                                                              |
| 73 | 指導者の研修の際、一緒に学んだ方の施設であれば支援しやすいのではと考える。地域の支援と考えると何が出来るか、自分が役に立てるのかと二の足を踏んでしまうが、共に学んだ仲間・施設であれば行動しやすい。またそこを拠点としたある一定地域の支援に携わることは可能ではと考えます。 |
| 74 | 指導者の所属する法人に支援要請をかけてほしい。                                                                                                                |
| 75 | 指導者の立場でというより、法人職員として動くことが多かった。指導者への情報を取り入れ、情報提供として所属法人の各事業所に渡していた認知症の方への災害時の対応は、役立つ情報としてよこされた。今後に役立てたい。                                |
| 76 | 指導者も含めて、それぞれ影響のある人々が、それぞれ力を発揮されていたので、安心してみることができた。                                                                                     |
| 77 | 指導者を統括する部署からの要請等があれば、事業所の中で活動し易くなるのではないかと感じま                                                                                           |

|    |                                                                                                                                               |
|----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | した。                                                                                                                                           |
| 78 | 自分が役に立つとは思えない。                                                                                                                                |
| 79 | 自分の施設の中でのケアで精一杯の面がありました。（認知症介護指導者という立場より、看護師として利用者の生命に対してのケアが中心となりケアに従事しておりました）                                                               |
| 80 | 自分の出来ることはすべて行いたかったが、認知症の人と精神疾患の人が混在した受け入れは、施設として場所があったが無理であった。                                                                                |
| 81 | 事務局→地区代表→ブロックへの連絡網が必要かと思いました。                                                                                                                 |
| 82 | 社会的弱者になりがちな、認知症高齢者への理解が更に進む事が必要だと思えた。                                                                                                         |
| 83 | 社会福祉は様々な団体があって別々に行動しています。例）老健協会、介護福祉会などなど。まとまりのない福祉社会の中で指導者としての立場は、なかなか…。                                                                     |
| 84 | 出身者、人としての立場の方が強いので、特に意見はない。身内のために何かしたいだけ。                                                                                                     |
| 85 | 状況がわからないので、組織として「〇〇が必要」とか「〇〇に活動」のような指示が適確にできるように。認知症の対応マニュアルがでてよかった。                                                                          |
| 86 | 職員達が少ないながらも募金をつのり、送ることが出来たことはうれしかった。法人も町を通して寄付してくれたのがうれしかった。町全体で認知症の方達は何人いるか、どこに住んでいるか等把握しておかなくてはならないのと、皆に認知症とはどのような病気かを知ってもらうことも大事だと感じた。     |
| 87 | 職場、組織、団体としての関わりで手一杯となり、指導者としての立場での動きが出来ませんでした。                                                                                                |
| 88 | 所属先によって動きに制限があり、指導者として何をすべきかより、個人で何をすべきかに重きがあったと思う。指導者には何も権限はないので一般人と同じ。                                                                      |
| 89 | 震災から 10 ヶ月経過したが、半年程は気持ち（がんばらなくて）だけで動いてきたが、今は疲れのピークに達している。また、他職員も同じ気持ちである。                                                                     |
| 90 | 震災直後、自分の施設の認知症の方々に落ち着いて頂くことにとても苦労しました。避難所では専門的な知識を持っている人が少ないので、対応ができないのではと思います。指導者として避難所へ赴き、認知症の方々への直接対応や、避難されている方への対応方法等の指導をすることが良いのではと思います。 |
| 91 | 震災復興段階に合った専門職派遣の調整ができれば良かった。                                                                                                                  |
| 92 | 数日間の停電で「なぜ停電しているのか」理解できず興奮されたり、店頭が品薄になっている理由もわからず混乱される方がいた。あらためて地域の理解が必要だと思った。                                                                |
| 93 | すみません。指導者としては考えていませんでした。                                                                                                                      |
| 94 | 制限ある環境の中での認知症の人へのアプローチ                                                                                                                        |
| 95 | ゼッケンに介護スタッフと書かれるより、小さな文字で良いので、「認知症介護スタッフ」と添え書きがあれば良いと思った。                                                                                     |
| 96 | 全員が大変な時でも、ハンディを持っていらっしゃる方への配慮が出来るよう、まわりの人々に理                                                                                                  |

|     |                                                                                                                                                                                      |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 解を得られる環境をつくる。もちろん個人情報の保護を行いながら。                                                                                                                                                      |
| 97  | 全国各地に仲間が居るため、お互い協力し合えての支援が行うことができて良かった。                                                                                                                                              |
| 98  | 全国としての組織力が情報、支援活動に貢献していたように感じた。                                                                                                                                                      |
| 99  | 全国に3センターあり、実際の被災地区にある指導者からの必要ボラの情報提供、情報から自分達にできる支援は何かを考える。                                                                                                                           |
| 100 | 全国のネットワークなので、迅速、スムーズにサポートできる体制を整備し、次に備える。                                                                                                                                            |
| 101 | 専門職として現地へ行き支援できず心苦しい気持ちです。認知症介護指導者は、ネットワークづくりとして日頃よりもっと他県の指導者との交流をはかっていく必要があるし、各地域でも地域ネットワークづくりを進めていかないといけない。指導者1年生の自分の力不足を感じています。もっとがんばらねば！！（私）認知症の人の気持ちを代弁してくれている先輩指導者の方々はすばらしいです。 |
| 102 | 早期に支援体制を作られ良かったと思います。まだまだ継続して行かなければならないと思います。                                                                                                                                        |
| 103 | その場に、その施設の者が居なくては！！という考えではなく、環境や介護する方々は違うかも知れないが、判断としてTPOが必要だったと考えます。                                                                                                                |
| 104 | それぞれの事業所によって、指導者も立ち位置があるので、独断行動はできないと思う。今回は、指導者としてというよりも、同じ地域の事業者として何ができるかを考えた。今後は確かに指導者として何ができるのかも考えた方が良くと思う…                                                                       |
| 105 | 大変な環境下、設備、物品も何もかも整っていないところでの支援は、今までの介護経験の1つの集大成を発揮できなければならなかった。現地のスタッフ、共に派遣となった職員とのチームワーク、連携をうまく保たなければ支援に結びついていかないと感じた。                                                              |
| 106 | 他施設の実際の状況を伝え、協力を得ることしかない。                                                                                                                                                            |
| 107 | 地域毎、又は県単位で指導者に集合をかけ、いける人（参加出来る人）は5日～10日と期限付きで順番に行ければと思っていました。指導者本人が参加出来ない時は、施設から代人でも良いとされたらいいのではないのでしょうか？                                                                            |
| 108 | 地域の方々に支援ガイドを使って啓発活動等を行った。実際に被災地に入れなかったのも、少しでも指導者としてできることをやりたいし提案をうけたい。                                                                                                               |
| 109 | 力不足、役に立てず申し訳ないです。                                                                                                                                                                    |
| 110 | ちネットのネットワークがもっと活用できるようになると良いと思います。又、県内での会員同志での話し合いを行い、今回のような災害時の情報発信窓口の役割など検討したら良いと思います。                                                                                             |
| 111 | 長期的な支援になることを想定して、組織的に何ができるのかを検討することが大事だったと感じています。そして、被災高齢者の心のケアや居心地の良い環境作りはまさに指導者の力の見せ所だったのではないのでしょうか。                                                                               |
| 112 | 長期的な支援になることを想定して、組織的に何ができるのかを検討することが大事だったと感じます。そして被災高齢者の心のケアや、居心地のよい環境作りは、まさに指導者の力の見せ所だったのではないかと思います。                                                                                |

|     |                                                                                                                                                                                                      |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 113 | 直接的な支援がなかなか難しかったが、気持ちはいつも持っていた。やはり、利用者の状態悪化が懸念されるので、その辺で何かできないかと思う。又、スタッフに対しても同様に感じる。                                                                                                                |
| 114 | 東京センターより情報がネットで発信されていたので、少しは認知症の方の現状が理解できたが、マスコミ等はあまり、認知症の方の被災状況を流していないと感じた。                                                                                                                         |
| 115 | 当地域における防災対策を改めて考える                                                                                                                                                                                   |
| 116 | 当地域も近い将来、確実に被災すると予測されています。今回被災された方々のアドバイス・体験はとても貴重で、お話しを伺ったり、行政や介護者の方々と共に地域に応じた防災対策や支援チーム作りの意識を育くむことができればと思います。                                                                                      |
| 117 | 東北の仲間たちの応援をしてあげたい。                                                                                                                                                                                   |
| 118 | 遠く離れた愛媛で、仙台センターは大丈夫なのか、先生方やスタッフの皆様、又、東北の方々が大丈夫か大変心配致しました。ただ、テレビの情報等で、単独で動くことも行っただけで迷惑なこともあるかもしれないと、その交通費他、募金させて頂きました。たとえば、東北地方が災害に遭い、動き方の情報が流せなければ、D.C ネット等で、東京、大府センターから（他センターから）動き方の連絡が入るといいなと思います。 |
| 119 | 特になし                                                                                                                                                                                                 |
| 120 | 特になし                                                                                                                                                                                                 |
| 121 | 特に何もできません。（募金しか…）                                                                                                                                                                                    |
| 122 | 独居の認知症の方（要介3）は地震で住まいがいたみ、それがきっかけで他県に住む家族と同居することになった。翌日の土曜日、夫に子を見てもらい出勤し、利用者宅に電話で安否確認した。特に独居の方へのすみやかな支援が必要と思いました。                                                                                     |
| 123 | どのようなことをして欲しいのかを依頼をしてくれれば活動も広がったのではないだろうか。どうしたらよいのか、どのようなことを望んでいるのか、遠い県であると募金くらいしか思いつかなかった。                                                                                                          |
| 124 | 永田久美子さんが、すぐ避難所におられる認知症がある人の対応の仕方を発信されたことは、とても周囲の皆さんの役に立ったのではないかと思います。専門職だったら当然のことでも一般の人達にも理解できたと思います。                                                                                                |
| 125 | 何もできなかったで…。                                                                                                                                                                                          |
| 126 | 何らかの支援の要望や情報を流していただきたかった。                                                                                                                                                                            |
| 127 | 何をしたいのかが分からなかった。ネットワーク（自らの）力不足を感じた為、今後の連携を考えたい。                                                                                                                                                      |
| 128 | 日常業務に追われる中で、職場を離れることの難しさを感じた。                                                                                                                                                                        |
| 129 | ニュースや特集報道や現地に直接行かれた人達の話を見聞きすると大変さが伝わった。支援の仕方にも段階があるのでその都度、適切に対応することが必要だと感じた。自分自身でできることを探し、意識づけることとし納得することにした。                                                                                        |
| 130 | 認知症介護指導者個人のスキルではなく、3センターの連携と協力体制がこのような大災害時などにスムーズに構築できるような仕組みがあると良いかな。                                                                                                                               |

|     |                                                                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 131 | 認知症介護指導者というより施設スタッフとしての立場を、役割として明確にしていきたい。(正直施設を守ることが精一杯でした)。被災していない地域の指導者が施設に応援に来る体制があると良い。                                     |
| 132 | 認知症介護指導者としての活動は行っていない。                                                                                                           |
| 133 | 認知症介護指導者としての立場としての役割や動きは特にしていません。                                                                                                |
| 134 | 認知症介護指導者としては活動できなかったです。                                                                                                          |
| 135 | 認知症介護指導者の支援というが、様々な基礎資格があり、法人、会社に所属している中で、認知症介護指導者の役割は何だろう、と考えています。ただ、認知症の方のインタープリターとして有効な動き、例えば永田さん(東京センター)の作成ガイド等はヒントになると思われる。 |
| 136 | 認知症介護指導者の立場ではなく、人道的に実施したまで。                                                                                                      |
| 137 | 認知症介護指導者のネットワークを通じて、もっと役割をたてて行えばスムーズに行えるのではないかと感じた。                                                                              |
| 138 | 認知症ケアの実践や、実践者研修をしっかりと行うことが最も重要だと思う。                                                                                              |
| 139 | 認知症指導者として、現地での対応する指示があれば、動きやすいが今回は見守るしか手立てがなかった。                                                                                 |
| 140 | 認知症指導者として被災者に何ができるのか、又、何ができたのかわからない。                                                                                             |
| 141 | 認知症の方、家族などへどのような支援ができるか(本人として)また、日頃から地域、周囲の人が何ができるか、協力をお願いしたり(認知症の方やその家族に対して)できるのは、震災がおきてからではなく事前に。                              |
| 142 | 認知症の方が混乱することはわかりますが、どんな支援をしたら良いかわかりません。                                                                                          |
| 143 | 認知症の方々への支援などの状況について、又、実際に被災地支援された方の情報をよく多く知ることができればと思いました。                                                                       |
| 144 | 認知症の方を指導者のいる施設で一時預けて介護を行うのはどうでしょうか?指導者が現地へ長期間行って支援するには限られます。                                                                     |
| 145 | 認知症の方を守るという事(不安感などが増す)を他職員に理解してもらえた事                                                                                             |
| 146 | 認知症の正しい知識や関わり方を、パンフレットを配布して広められていたのを聞き、大切なことだと思った。改めて地域住民に広めたり支援をしているスタッフに講義したり相談にのるなどができたらいいと思う。                                |
| 147 | 認知症の人、その家族、周りの人への具体的なマニュアルを、地域ごとに地域の特長に合わせて作成する必要性を感じている。                                                                        |
| 148 | 認知症の人が実際にどういう対応をされているのか、全く情報が入ってこないの、情報を共有し、どういう支援を必要とされ提供することを考えるシステムが必要。                                                       |
| 149 | ネットワークを活用し、情報の収集を指導者に伝えてほしい(情報が断片的で曖昧)                                                                                           |
| 150 | 発信してよいのか(遠慮していた)わからず、動けなかったのが正直なところ。(※燃料がないうちは、動きが取れなかったのですが。)                                                                   |

|     |                                                                                                                                                                                                  |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 151 | 話を聞くことなどを通して支援することができればと思います。                                                                                                                                                                    |
| 152 | 早い段階でマニュアルが出され、ネットワークの強さを感じました。又、被災地支援に入った仲間をサポートする事も、間接ながらではあるが大切だと思った。                                                                                                                         |
| 153 | 被災後の避難生活で、認知症の出現をみた例は数多いと思う。もっと、行政が私達を活用してくれれば、例えば（相談窓口など）サポートできたのではと思う。個人情報の保護も時と場合によるのではと思った。                                                                                                  |
| 154 | 被災された認知症高齢者のストレスを減らす取り組みは専門職が関わらなくてはむづかしいと思いますが、情報の少ない中で適切な支援ができたのか不安が残りました。                                                                                                                     |
| 155 | 被災者の受け入れとして、認知症の方を受け入れについて、役所に問い合わせをしたが、確実な、前向きな話をして頂けなかったのが残念でした。                                                                                                                               |
| 156 | 被災者の方々の中で、希望があれば他の都道府県に一時的にでも移り住んだ方がある程度いらっしゃると思うとニュースで聞きました。認知症の方もしっかりと意思決定が出来ないから、精神病院等へ入れたのでしょうか？その方々を擁護する、という高い意識を持って対応し、動きたいと感じました。                                                         |
| 157 | 被災地から遠く離れた地に住む者は、間接的な支援しかできないのではないかと考えている。例、義援金や支援金、物品等の募金活動                                                                                                                                     |
| 158 | 被災地において認知症の方々は、その環境の変化に大変戸惑われている事と思います。それと同時に、ケアに携わる介護スタッフの方々も大変な苦勞をしているものだと思います。認知症介護指導者としては、現状の被災地の状況を適確に把握し、今、行える事を具体的に上げていく必要があると思います。又今後、同じような震災が発生した場合の対応についても考慮し、その方法を考えて行くことも必要であると思います。 |
| 159 | 被災地において認知症の方の環境に対する配慮が求められるため、利用者自身が不安な中でも居心地良くすごせる場所、又、家族が引き取り避難と介護の二重の負担や苦勞、悩みがあると思われ、その方の相談や受け入れ体制（施設だけでなく行政、地域単位で）を作る、参加することが求められると思う。                                                       |
| 160 | 被災地に直接派遣をするための招集をするべきと思う（国として指導者を派遣するよう所属企業への協力を求める）その上で、指導者は被災地域に行き、必要とされるコーディネートや対応を行う。                                                                                                        |
| 161 | 被災地の指導者のお話を聞く機会がありました。ご自分も被災されていることを忘れるくらい、高齢者のために動かれていました。                                                                                                                                      |
| 162 | 被災地の職員は、ストレスを強く感じている。ストレスケアやストレスマネジメントの出前研修会、勉強会などを企画実行できたら…                                                                                                                                     |
| 163 | 被災地のニーズを知るためにも、各地域の指導者個人とのつながりは重要だと思った。全国の指導者が個人でつながることで、国内の具体的なネットワークになると再確認した。                                                                                                                 |
| 164 | 被災地の認知症の方々に対しての対応方法等について、TV でも放送されていた。自分が直接現地に行けない現実に、ただ申し訳なかった。職場での被災者受け入れについても、許可が下りず、力不足を申し訳なく感じた。                                                                                            |



|     |                                                                                                                             |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 165 | 被災地の認知症の方の生活避難状況の情報がまったく無かった。協力体制が確立されていないと感じた。                                                                             |
| 166 | 被災地の福祉施設の状況など、直接情報が入らない為わからない。募金活動、寄付の支援を行うことしかできない。                                                                        |
| 167 | 必要な人材を必要とされる場所にいかにかーディネートできるかが、鍵だと思います（私自身が必要な人材だとは決して思いませんが…）                                                              |
| 168 | 避難所及び仮設住宅での認知症の状態の人への支援を、現地の専門職と情報を共有する為に動かなければならない。                                                                        |
| 169 | 避難所など様々なところで認知症を有する方の支援が必要であったと聞きました。指導者ネットワークとして避難所等にコーディネーターとして出向く支援体制を今から構築できないかと感じました。                                  |
| 170 | 避難所にいる認知症の方々に必要なケアを届ける為、現地での相談など強化すべきだと思います。                                                                                |
| 171 | 避難所にいる認知症の方のお世話などの力になれば良かったのかと考える。当の本人さん、家族の周囲に対する遠慮や気苦労を思うと後悔している。                                                         |
| 172 | 避難場所での認知症の人に関わる（支援）人達へ、認知症の人達を正しく理解していただけるように伝える事。安心できる環境作りなど。                                                              |
| 173 | 福祉にかかわりを持ち 10 年程だが、医療職との非常時に対する教育に差を感じた。命に関わる職業である事を講義の中で伝えていきたいと思った。                                                       |
| 174 | 普段から認知症についての知識を広めていきたい。災害だからとかではなく、共に生活している人々という捉え方ができるような広め方ができればと思う。                                                      |
| 175 | 普段からのケアの内容や支援（非被災地）のベースが落ちついていないと、被災地支援をしたくても出来ないと感じました。                                                                    |
| 176 | 物品やお金は支援しやすいが、認知症の人の心のケアや介護する人が、介護する前にしなければならぬことがある状況の中で、私たち専門職が被災地に出かけ支援していくことが求められていると感じる。しかし、自施設の職員確保も困難であり行政の支援もお願いしたい。 |
| 177 | 法人として動いているので、率先にという訳には行かない。                                                                                                 |
| 178 | 法人の一職員という立場上、指導者とはいえ、独断の行動は限界がある。気持ちはあっても目の前の業務で精一杯というのが現実。                                                                 |
| 179 | 他域へのアピール（指導者の存在と役割）が少なかった事は反省しております。」                                                                                       |
| 180 | 募金活動、物品、被災地への支援に対して、速やかに対応していただきたい。東北から離れていることがメリットでもあり、応援体制もできると思います。今後もできることは継続したい。                                       |
| 181 | 募金の活用方法を色々考えられ、ちネットでは沢山の意見があったように思います。遠方のため、自分の仕事も考えると、思いを寄せるしかないと思っています。                                                   |
| 182 | ボランティアとして参加したい気持ちは強くありましたが、自分の年齢を考えると「逆に迷惑をかけては」との思いもあり、遠慮し募金活動に回りました。                                                      |

|     |                                                                                                                                                                       |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 183 | ボランティアをする時期によって変わってくると思いますが、認知症の方の思いを受けとめたり混乱されている方への対応など。                                                                                                            |
| 184 | 本当は介護職などの悩みとかストレスを聞く役目に行きたかった。                                                                                                                                        |
| 185 | 自らの意思で単独行動が出来ないため、各都道府県から施設あてに通知するなりして、参加するようにつのってもらえたら、施設側の理解が得られて行動しやすくなる。                                                                                          |
| 186 | 自らの地域も被災地域にあったが、被害が軽度であったが、自施設を守るのに手一杯であり、指導者としての役割は果たせなかったと思っている。                                                                                                    |
| 187 | 難しい問題です。個々に動くのは厳しいです。被災されている方々へ、こんな指導者がここにいるので…といった情報提示をしてはいかがでしょうか。                                                                                                  |
| 188 | もともとこうした事態を全く想定していなかったため対応が後手に回ったと思います。今後はこのことを教訓に様々な事態を想定し、強いつながりを作るべきではないかと思います。                                                                                    |
| 189 | やはり、「つながり」が大切なんだと思います。個人的に被災地に出向いても何もできないので各センターや指導者の集まりで派遣依頼とかがあれば良いと思いました。                                                                                          |
| 190 | 山形県は停電や物資不足など、震災の影響があったにもかかわらず、新規（増床）事業や認知症介護研修、県実施指導などが予定通り行われたため、震災の負荷と業務負荷の2重の重みに身動きがとれなくなってしまいました。行政も法人としても被災地支援を第一に業務を見直すべきだったと思います。                             |
| 191 | 要介護、認知症の人が混乱しないよう、簡易でも良いのでグループホームみたいな施設を準備できたら、周囲の環境に影響されなかったのでは。                                                                                                     |
| 192 | 理想と現実をしっかりとふまえ、できる事は何かを考えたアドバイスを、支援の職員に具体的に伝えた。                                                                                                                       |
| 193 | 老施協を通じたボランティア派遣の名簿登録を希望したが、許可が出なかった。強制力のあるご指示があれば、各事業所・教名等。地域や被災地との関わり、協力意識の向上への取り組み。                                                                                 |
| 194 | 私個人としては、被災地に行って何らかの支援が出来ると良かったし、やりたかったが、様々な事情で実現できなかった。こうした災害の時、認知症介護指導者を派遣する仕組み（システム）があれば良いと思います。                                                                    |
| 195 | 私個人としては、募金以外の実働は出来なかった。職場の中では、支援隊を送り出すのも役割であるとする。指導者としては何も出来ていないと悔やんでいる。                                                                                              |
| 196 | 私は、まだ被災地へ行っての支援は行っていないが、今後、現地にて認知症介護を実践されているスタッフの人の精神的な支援（話に耳を傾けることぐらいしかできないかもしれないが…）を行っていきたいと考えている。今までの間は何とか日々を生き抜くことで精一杯だったと思われるが、今後は支援スタッフの心の支援がとても重要なのではないかと思います。 |
| 197 | 一職員の認知症介護指導者では施設長の考えを変えることは難しくその為、単独で動くことは難しいと感じました。国や東京都として会社に対し災害時など緊急事態の場合、指導者の扱いについて効力があるようにすると言うのも良いのではないかと感じました。                                                |
| 198 | 永田久美子先生の「避難所の認知症の人と家族への支援ガイド」を拝見させていただきました。具体                                                                                                                         |

|     |                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 的な対応方法が書いており、感銘を受けました。地域の認知症の人やその家族の方への支援方法としても実際に活用していきたいと思いました。                                                                                                                                                                                     |
| 199 | 建築系技術者の友人が支援に行き、現場で義援金の手続きの代行等をした活動は素直に感動した。日常業務においては、職種や役割が専門分化されているが、震災等の有事にそれぞれの特色をどのように出すべきなのか？ 反対に出さないとならないのか？ 特に、福祉系職種の専門性を前面に出して活動することが本当に求められていることなのだろうか？ 報告会等が盛んだが、支援者側の自己満足や既得権益争いに感じ、白けた気持ちになることもある。                                       |
| 200 | 今回の地震後利用者がいつもの環境と違う場所にいることへの不安や恐怖で混乱する様子を見て、職員も不自由な中対応に苦慮することもあった。地震が起きたことは忘れており、なぜここにいなければならないのかで混乱している人が多かった。施設でもこのような状況であったために、避難所にいる認知症の方や在宅での認知症の方などはもっといい気な戸惑いがあったと思う。ここで認知症の指導者がチームとなり支援が出来ると思う。個人ではなかなか出来ないこともチームや組織ぐるみで行うと大きなことが出来るようにと思います。 |
| 201 | 指導者の皆様のネットワークで現地への技術的・精神的支援の支柱となることが必要だと思います。ただ、指導者といえども一法人に雇用される身では、中々個人的な活動は難しいと感じています。                                                                                                                                                             |
| 202 | 指導者研修を修了したのは9月だったので、具体的には指導者としてどの様に関わることが出来るのかについて考えたことはなかった。今後、出来ることは協力したいと思うので、他の指導者の取り組み等を教えて頂きたいと思う。また、改めてネットワークの大切さを感じた。                                                                                                                         |
| 203 | 私個人として認知症介護指導者としての支援は全くできなかった。法人としても高齢者の受け入れ要請があることを見据え、その体制を整備していたが、結果受け入れにはつながらなかった。                                                                                                                                                                |
| 204 | 実際の被災地では、“認知症介護指導者だから”ということで、特別の役割等を担うことは考えつきません。もし今いる地域に、今後大きな災害が訪れた場合に備えて、指導者として「避難所に認知症の方がいらっしゃることが想定されるから、避難所にきた認知症の方を、地域のグループホーム等の事業所が受け入れられるようにする、その為の体制作りを平時のうちにしておく」というような事は必要かなと思います。                                                        |
| 205 | 情報が不足していた。DCネットにもヘルプ情報もなく、どこに問い合わせしたらよいのかわからなかった。被災者のかたの受け入れにも手を挙げたが情報もなく連絡もなく動きようがなかった。                                                                                                                                                              |
| 206 | 全国にあるネットワークをフルに活用し、要介護者への支援を速やかに行える橋渡しの仕事が行えると良い。                                                                                                                                                                                                     |
| 207 | 認知症介護指導者としての役割は後方支援が中心となるのかな、と思います。実際に被災地の状況を目で見て確認をして医療職や介護職、社会福祉士などの相談職との連絡、調整、連携といったところでしょうか。あとは作った組織がスムーズに動くことが出来るように簡素化、簡略化することや、被災地の指導者の負担軽減や冷静な判断のため一歩離れたところの人が物事の決定権を持って動けるようにしたほうがよいかなと思います。                                                 |
| 208 | 認知症介護指導者として出来ることは、認知症の方へのケア、その方たちが不利益をこうむらない                                                                                                                                                                                                          |

|     |                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | <p>ように、ケア方法の周知など、やることはあると思いますが、実際現場にいれば”指導者”という考えは役に立たない気がします。社福士会やケアマネ協会においてもそれぞれの専門性を発揮できる場面を考えているようですが、人として出来ることをやり、その一場面においては、専門性を生かせることがある、という考えでないと、現場で役に立ちません。ただ、ほとんどの人が、別団体の構成員にもなっている現状から考えると、各種団体をつなぐ(協働)役割はあるのかもしれませんが。</p> |
| 209 | <p>被災施設、事業所はそれぞれの団体等に参加し、各団体から支援を受けていると思いますが、指導者の団体ちネットも、もっと効果的に活動できたらと思います。個人で動かれている方や団体での義援金活動はありますが、詳しい全体像がみえにくいので。災害対策組織の具体化など。</p>                                                                                                |
| 210 | <p>被災状況が甚大であり、情報も錯綜している状況があった。ニーズのマッチングが遅々として進まない状況で、特に初期に支援が必要な方々に支援が届かず、また支援に入りたい人が悶々とする状況があったのではないかと？</p> <p>行政を始め、職能団体、職域団体それぞれがそれぞれに動くのではなく、ネットワーク化してエリアや役割分担を行いながら、迅速な支援に入れるような体制整備が必要ではないかと？</p>                                |
| 211 | <p>被災地の施設等に派遣要請があれば動きやすかったと思います。県老協から派遣できる人材があれば。お知らせくださいの文書が5月に1回。施設長会では2団・・3団と今後も派遣要請があるはずなので状況を見て行きましょう。になったらいいです。友人は退職して被災地に行きました。残念ですが私にはその勇気がありませんでした。</p>                                                                       |
| 212 | <p>避難をされている状況において、そこは日常ではないと考えます。よりよいケアは目指すものではありますが、まずは安全確保が優先され、状況を見据えたケア内容の展開を考え、伝えて行けたらと考えます。また、避難期間も長期化することで、ケアを行う体制にもバランスを考えなくてはいけませんので、「一時がんばる」側面ばかりではなく、「続ける」ことを考慮した体制を常に心得ていくことが必要かと思います。</p>                                 |
| 213 | <p>同期生が積極的に現地に動いてくれて、その同期生から指示をもらい期生の仲間がいっせいに動いてくれたことに感心しました。</p>                                                                                                                                                                      |
| 214 | <p>一人ではなかなか困難だが、ちネット他の組織的な形を通じて、行政他関係機関との連携でできる支援を行うべきと思う。</p>                                                                                                                                                                         |
| 215 | <p>広域から集まった人たちなので同時に被災しにくい。</p>                                                                                                                                                                                                        |
| 216 | <p>これからの災害支援として、認知症介護指導者全国、あるいは地区ネットワークを通じての早期から対応できる体制を構築することが望ましい。</p>                                                                                                                                                               |
| 217 | <p>協力する事が大切。行くことが大切。</p>                                                                                                                                                                                                               |
| 218 | <p>認知症の方が避難所や仮設では過ごせないため、避難先をどうするか、その時の対応など話し合っておく必要があると思います。</p>                                                                                                                                                                      |

4) 支援を行わなかった、行えなかった理由回答者 126 名

| No. | 被災者支援をおこなわなかった、もしくはおこなえなかった理由について可能な範囲でお書きください。                                                       |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | ・遠方であった。・法人からの要請がなかった。                                                                                |
| 2   | ・業務の都合。・支援依頼における登録は行っていたが、特別依頼はなかった為。                                                                 |
| 3   | ・具体的にどうすればよいのか、申し込み方法等が不明だったから。・情報不足。                                                                 |
| 4   | ・行動できる時間がとれなかった。・募金活動はした・受け入れについては検討され法人として県へ伝達した                                                     |
| 5   | ・どのように行えばよいか分からなかった。・今 2 才の子供の世話と自身が妊婦のために被災地に行くことは難しい。                                               |
| 6   | 1. 他の事業所より支援するものが法人の命により参加した。2. 事務所が現場でないので、法人より指示がなかった。                                              |
| 7   | 1. 被災地の中で、現在も余震が続き、恐くて家を空けられない。2. 現在退職して三年目。何かしたい気持ちはあるが、体調も悪くできない。                                   |
| 8   | 1. 法人の本部施設で対応した為。2. 直接依頼（具体的な）が無かった為。3. 自施設の事情により積極的に支援できなかった為。                                       |
| 9   | ①実際に現地に出向ける状態になかった。②義援金という方法もあったが、お金で気が済む問題でもないと思った。                                                  |
| 10  | 2011 年、7 月末迄は施設長として勤務しており、介護職員を派遣（5 日間）した例はあるが、自身での実践はない。しかし、今後出来る事があれば少しでも関わりを実施したいと思う。              |
| 11  | 2011 年 4 月オープンするという状況での 3 月 11 日の災害でした。その後も立ち上げていく中で支援に行くのは難しかったです。スタッフは休みの時に物資の仕分けなどのボランティアに行っていました。 |
| 12  | 21 年にすでに所属施設を退職していた事と高齢の夫が目が不自由になり、1 人にしておけなかった事、自分自身の体力が低下していた事。自分に出来る事をして義援金に極力協力してきました。            |
| 13  | 3 月に被災地へ行く希望を出したのですが、障害福祉課が募集したときで、その時には県から除されて行けなかった。行政の窓口を一本化必要。福祉、種別によって異なることが要因と思われる。             |
| 14  | 医療支援チームが 3/11 に DMAT から参加、その後、3 回医療救護チームとして派遣。気仙沼市立本吉病院に医療支援を国診協より要請で行ったが、個人としては勤務の都合上、行っていない。        |
| 15  | 岩手県釜石市が出身地であり、ほとんど連絡がとれなくなった状態。今年のお盆に行く予定であるが、今は何も考えられない。                                             |
| 16  | 遠方のため出掛けることができなかった。                                                                                   |
| 17  | 介護主任のような職種についたばかりだった為                                                                                 |
| 18  | 家族、職場の反対                                                                                              |
| 19  | 家庭事情なども重なり（子どもの受験や就職など）すみません。                                                                         |

|    |                                                                                                                               |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 20 | 仮要請があった時に、一旦、支援体制を組んだが、対象地域との調整がはかれず、代表のみ支援の調整に伺った経緯があります。                                                                    |
| 21 | 休日が取れなかった。健康上の理由で。                                                                                                            |
| 22 | 業務多忙                                                                                                                          |
| 23 | 業務多忙及び私事（体調不良：喘息悪化）にて身動きがとれなかった。                                                                                              |
| 24 | 業務の関係で、職場を離れることができなかった。その代わり、部下の中で被災地支援に行っている。                                                                                |
| 25 | 業務の都合で現場が離れられなかったため。                                                                                                          |
| 26 | 具体的な行動を施設で取り組まなかった。福祉施設本部は支援を実施した。                                                                                            |
| 27 | 現在（2011年4月～）仕事を休職しています。（退職をして次の仕事を探しています）。ボランティアに応募しましたが、希望者が多く、未だ実現していません。金銭（募金）や物資の支援程度しか行っておりません。                          |
| 28 | 現在、退職している為、支援を行わなかった。前職場は水戸市であったが、私の住む所は、ひたちなか市の為、在職していたとしても自らが被災者となっていた為、支援できたか考えてしまう。                                       |
| 29 | 現在施設で働いており、職員数が少なく行えませんでした。募金活動には参加しました。                                                                                      |
| 30 | 現職が児童分野であり多忙のため、公私共に行える体制、状況ではありませんでした。                                                                                       |
| 31 | 県地域機関で、命令がなかった。物資支援は行っている。                                                                                                    |
| 32 | 県のボランティア依頼について申し込んだが、返事がなく実質上行けなかった。懐中電灯、電池などの必要物品を送ったのみとなった。                                                                 |
| 33 | 現場の人員減による施設ケア低下をよしとしなかった。許可が出なかった。                                                                                            |
| 34 | 現場への支援が遠路なため、できなかった。                                                                                                          |
| 35 | 個人及び職場で義援金を送付しました。これ以上の事は難しかったです。                                                                                             |
| 36 | 個人で営業している事業所の為（スタッフ10人以下）業務に余裕がなく、市内の困難事例の認知症対応で支援できる状況ではありません。                                                               |
| 37 | 個人的な支援は行えなかった。年齢、遠く離れた地にある、健康状態など。                                                                                            |
| 38 | 個人的に足がわるく、しゃがみこんだり和式のトイレが使えないなどして迷惑がかかってしまうので。                                                                                |
| 39 | 個人的には物資の支援を行ったが、支援が広がり物資が足りてきた際に、施設等に対しての物資は必要がないと感じられた。金銭的支援を行うにあたり、施設内での募金活動があったため、自分から行動をおこして支援することはなかった。                  |
| 40 | 子供が幼稚園で、その間のケアマネのパートしか身動きができず、被災地へ行けない。                                                                                       |
| 41 | 今回、育児休暇中で、福島（被災地）での実践的な活動は行えませんでした。（熊本に帰省）子供の病気と重なり、支援物資の提供と町からの依頼で、支援物資の提供先の連絡等のみでした。本来なら即支援活動を行わなければならない立場にありながらもどかしい状況でした。 |
| 42 | 支援活動を現地にて出来なかったのが心苦しく、残念でなりませんでした。                                                                                            |

|    |                                                                                       |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 43 | 支援に行きたかったのですが、4/1、新規事業開発だった為、やむを得ず支援できず心苦しい限りです。                                      |
| 44 | 支援を行いたい気持ちはありましたが、当施設も被害にあい、ライフラインなどが止まり、おむつ、食材の調達、入所者の精神不安定（認知症の方）等で気持ちに余裕がありませんでした。 |
| 45 | 支援を行う心づもりはあったが、タイミングが合わなかった。                                                          |
| 46 | 時間がつくれなかった。                                                                           |
| 47 | 時間が取れなかった。                                                                            |
| 48 | 事業所立ち上げに伴い支援できる状況ではなかった。                                                              |
| 49 | 事業所を離れることはできなかった。                                                                     |
| 50 | 仕事多忙にて                                                                                |
| 51 | 自事業所                                                                                  |
| 52 | 自施設（法人）より応援体制作りをする立場である為、支援準備をしていた。                                                   |
| 53 | 自施設が被災し対応していた。屋外退避し、4 階病棟より平屋、関連施設へ避難生活 13 日、その後も新築中への取り組み等あり実施していない。                 |
| 54 | 自施設が被災していた為                                                                           |
| 55 | 自施設で支援しようと人材派遣を検討はしたが、窓口になった道や社協との調整がつかず、実際行けなかった為何もおこなっていない。                         |
| 56 | 自施設での人材不足を補う事で、手一杯でございました。                                                            |
| 57 | 自施設での対応が必要だったため。また、自分自身の人事異動時期と重なり、行くことができなかった。                                       |
| 58 | 自施設での対応に追われていた。                                                                       |
| 59 | 自施設の通常の勤務があった。被災地支援には他職員が派遣された。                                                       |
| 60 | 自施設も被災した為、フタッフの家族にも被災者があり、スタッフコントロールなどで人員不足となりできなかった。                                 |
| 61 | 施設では代表 1 名が 1 週間、釜石の施設に応援に行きました。業務的に 1 名の配置なので、休日を連続し取るのが困難であった。                      |
| 62 | 施設の要として、施設をあける訳にはいかなかった。また、震災後の物流の混乱、余震による停電等、本震で大きな被害はなかったものの、気が抜けない状態が続いていたため。      |
| 63 | 施設の許可がおりなかった。                                                                         |
| 64 | 自分自身、事業所にとって責任者の立場で職場を離れられない。                                                         |
| 65 | 自分自身の環境が今、外に出かけられる状況ではないため（介護者がいるため）                                                  |
| 66 | 自分自身の仕事及び生活でいっぱいであった。又、具体的にどう支援して良いのかがわからなかった。                                        |
| 67 | 自分自身の施設が被災していた為、ここでの生活再建を行っていた為。                                                      |
| 68 | 自分にガンと言う病気があるため、当施設で介護させて頂けるなら、ぜひ来て頂けたらと思ってお                                          |

|    |                                                                                                                                                                      |
|----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | ります。                                                                                                                                                                 |
| 69 | 正直なところ怖いと感じてしまいました。                                                                                                                                                  |
| 70 | 職員が少ない為                                                                                                                                                              |
| 71 | 職員体制が自事業所でいっぱいの状況、東北まで行ってしまうことは出来ませんでした。まず考えたのは、目の前の利用者の暮らしの継続を優先しました。                                                                                               |
| 72 | 職場が変わったばかりで動きがとれませんでした。自法人からは数名若い人が派遣されています。                                                                                                                         |
| 73 | 職場での人員確保が困難                                                                                                                                                          |
| 74 | 職場を自由に離れることが難しかった（まとめたの休み）                                                                                                                                           |
| 75 | 職場を離れられない為                                                                                                                                                           |
| 76 | 職務を離れるわけにはいかなかったから。他の勤務者に負担をかけてしまう。                                                                                                                                  |
| 77 | 所属事業所自体が被災した為。                                                                                                                                                       |
| 78 | 所属法人内の他施設への職員の支援があり（1ヶ月程度）、現場での職員不足に対応した為。                                                                                                                           |
| 79 | 新事業建設等があったため。間接的に被災者を支える家族の支援（職員、関係者）を物的、経済的（仕事の斡旋）、精神的な支えを行う。法人内でボランティア活動を奨励し職員現地活動参加。                                                                              |
| 80 | 精神一般の方の支援依頼がいった為。                                                                                                                                                    |
| 81 | 組織経営団体である病院からはチームを作り、県から派遣として福島県に行き、1週間リハビリ訪問看護等の現地での活動を6回行ったが、老健からはリハビリスタッフが同行し活動を行った。老健の看護・介護職員もボランティア要請があれば、支援活動に参加する意思はある。しかし、現職場も職員の欠員があり、自施設での仕事が優先であるのが現状である。 |
| 82 | 只今無職です。義援金としてはさせて頂きました。実際の行動はありません。                                                                                                                                  |
| 83 | 直接愛媛県からの要請に対して1ヶ月間は行けると回答しましたが、結局要請はなく、個人的に行こうと思った矢先に病気になり断念しました。別の形で会社で募金をあつめ送ったりしました。                                                                              |
| 84 | どう動いてよいのか分からなかったし、福島県か岩手県なのか、特養なのか老健なのか情報が乏しかったと感じます。ニュース・情報については聞いていたつもりです。でもさらに深く調べようとは思わなかったナーと思っています。                                                            |
| 85 | 当事業所自体が昨年4月に開所したものであり、受け入れ体制等が全く整っていなかった。また、ボランティア活動においても、未経験（←介護）のスタッフがほとんどで、行ったところで邪魔になってしまうと判断したため。                                                               |
| 86 | 当福祉事業団からは1名現地へ出向いたが労働組合委員として参加であった。県本部からの依頼を向けて参加となった。                                                                                                               |
| 87 | 当法人の理事長、医師は現地に行ったのですが、現地の体制が整っておらず、充分支援出来なかったと聞いています。院内にて義援金を募った。                                                                                                    |
| 88 | 登録はしたが（受入れ）希望なし                                                                                                                                                      |
| 89 | 遠い距離、勤務シフト上の問題。                                                                                                                                                      |
| 90 | 遠い事や人手不足の為、配属させる余裕がない。介護人材の不足は深刻である。                                                                                                                                 |



|     |                                                                                                                                                    |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 91  | 特に理由はありませんが、きっかけがなかったので、業務に追われていた為                                                                                                                 |
| 92  | どのようにして支援を行っていいのかわからずに現在に至っている。                                                                                                                    |
| 93  | どのようにすれば良かったかわからなかった。                                                                                                                              |
| 94  | 何ができるかわからず、直接動くことができなかった。自身が心身的に支援できるとは思えなかった。                                                                                                     |
| 95  | 新潟県で支援を行うかどうかの調査が来て、桜の園としての支援できる体制を返事したが、その後まったく依頼がなく現在に至っている。                                                                                     |
| 96  | 認知症介護指導者自身は認知症デイの日常の運営（人員配置など）の理由で、支援活動に従事させることはできませんでしたが、法人としては岩手県遠野市に拠点を置いた大槌町への要介護者に対する支援、宮城県仙台市に拠点を置いた石巻や福島への支援に対し、職員を交代で派遣する活動を昨年5月から継続しています。 |
| 97  | 認知症対応型の通所介護と居宅のみの、単独小規模法人であるため、受け入れも人員の派遣を行うことも現実的に困難であったことが理由です。心苦しく思いましたが何もできませんでした。ただただ、申し訳なく思うばかりです。                                           |
| 98  | 被災者受け入れや施設開放は、都や区等には連絡していたが、実際にはいなかった。                                                                                                             |
| 99  | 被災地へ行く時間的な余裕がなかったこと。被災者の受け入れについては、入居者が満床状態であり、スペース、生活空間がなかったため。                                                                                    |
| 100 | 必要な情報が得られなかった。                                                                                                                                     |
| 101 | 日々の業務があり、募金のみで終わっている。                                                                                                                              |
| 102 | 法人として、また施設として何名の派遣可能人数を県へ報告、個々では色々な問題も発生するため県からの依頼を待つ状態となっていた。施設内での募金活動、義援金だけに終わってしまった。                                                            |
| 103 | 法人内新規事業開設に伴い、部署を離れることができなかった。法人内スタッフにはボランティア希望者をつのり、手配をすすめましたが、タイミングが合わず派遣には結びつかなかった。                                                              |
| 104 | 法人内で他の職員がボランティアへ行っただけのため。                                                                                                                          |
| 105 | 募金活動ぐらいしか出来なかったの、少し後悔している。でも？現実はい...                                                                                                               |
| 106 | 募金はしたものの、他にどのように支援を行えば良いのかわからなかった。こちらでの仕事もあり、なかなか時間が作れなかった。                                                                                        |
| 107 | 募金は数回おこなったが活動はしなかった。日常の業務をしていた。又、活動の機会がなかった。                                                                                                       |
| 108 | ボランティアの登録をしていたが要請がなかった。個人的に友達に生活用品を送った。                                                                                                            |
| 109 | 本部で支援をしていた事、自施設を休む余裕がない...と判断。                                                                                                                     |
| 110 | 毎月、職員の避難訓練の時間はとって、ビデオを見て避難訓練の心得等や器具等の使用等の再確認を行っている。又、春・秋の年2回は総合避難訓練として地区の方や消防団の方の協力をもらいながら、実際利用者の避難もいれて行っている。今回の震災に対して特別にという事はない。                  |
| 111 | 休みが取れず、体力的にも自信がなかった。                                                                                                                               |
| 112 | 休みが取れなかった。職場で行くのは、保健師のみの為。                                                                                                                         |

|     |                                                                                                                                                                                                            |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 113 | 山口県在住です。支援の要請ありませんし、方法も具体的に何をすれば良いのか判断つき兼ねます。支援の必要があれば協力はおしめません。                                                                                                                                           |
| 114 | 老健協会を通じて行く日程まで決まっていたが中止となったため。                                                                                                                                                                             |
| 115 | 老施協の方には派遣可能と伝えたが、連絡が来ずそのままになってしまった。募金は施設内で行い協力している。                                                                                                                                                        |
| 116 | 私事で行けなかったのだ。                                                                                                                                                                                               |
| 117 | 私自身①高齢であること。②現在所属する職場を持っていないこと。③被災地より遠方であること。①、②、③により単独での支援活動は不可能であると思った。                                                                                                                                  |
| 118 | 各団体等が行っている募金活動に募金は行ったが直接的な支援は行っていない。被災地に行き何かできるボランティアを行いたいと考えたが、実際には何もできていない。                                                                                                                              |
| 119 | 施設内の入所者の対応や、相談業務があり、また建物の損害がひどく、非日常の業務体制の整備に尽力したため。                                                                                                                                                        |
| 120 | 職能団体として、会員の方（介護福祉士）の派遣はありましたので、その出発手続き等を行いました。が、個人としてはかかわれていません。                                                                                                                                           |
| 121 | 地域型地域包括支援センターに勤務しているが、被災地ではなく地元地域の通常業務があること、また被災地からの避難者についても直接関わるような指示等もなかった。                                                                                                                              |
| 122 | 入居受け入れは可能な体制としたが、当社にはこなかった。現地への派遣にかんしては、協力しなかったが人材を出すゆとりが無かった。                                                                                                                                             |
| 123 | 被災地でのボランティアについて個人的には参加したかったのですが県や市、社協や地域のボランティアセンターからの情報があまりなく、情報を得ても認知症研修等で調整ができなかったことが残念でした。                                                                                                             |
| 124 | 各地で出会った募金には参加させてもらった。個人的には平成 7 年の阪神大震災の際、神戸市長田区の特養で夜勤をしていたので震災経験者であるが、直後しばらくは認知症うんぬんは関係ないと思う。避難がいったん落ち着いた頃に認知症…としての特化した活動はあるのかもしれないが…。色々関係なく個人、人として、そのようなものかと考えます。私個人的には動ける状況でなかったのだ、というのは自分への言い訳かもしれませんが。 |
| 125 | 行けるものなら行きたい、と言ったが、上司にダメと言われた。                                                                                                                                                                              |
| 126 | 子供が小さい為、被災地に行くことは困難（産休中）                                                                                                                                                                                   |

５）震災をきっかけにおこなった自施設の防災対策（回答者 404 名）

| No. |                                                                                    |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------|
| 1   | ・医療依存度の高い利用者への医療器機の整備。・職員、シフト体制の検証。・停電時の対応、節電対応（コージェネ設置等）                          |
| 2   | ・外部交流を図るための計画を進めています。・防災グッズの取り入れと防災訓練の工夫、避難場所の確認を行いました。                            |
| 3   | ・家族との連絡手段のさらなる構築・非常食、水の備蓄を増やす・情報交換の場を増やす（他事業所と、地域と、異業種と）                           |
| 4   | ・緊急時の連絡体制の見直しや招集について。・緊急時の利用者の帰宅、家族への連絡について状況によって宿泊ができるような準備、職員への協力。               |
| 5   | ・緊急連絡網の再検討・自家発電購入・備蓄品の整備                                                           |
| 6   | ・訓練の強化・エレベーター内に災害 BOX 設置・家族会での防災説明                                                 |
| 7   | ・研修会・食品備蓄方法の改善                                                                     |
| 8   | ・研修会等への参加。・対策の確認                                                                   |
| 9   | ・県内数ヶ所、県外 15 ヶ所との法人と、災害時における支援体制のネットワークを結んだ。・水、食料（保存）、バッテリー（含電池）、衣類、毛布等の準備を行う。     |
| 10  | ・個人の災害用フェースシート（1 枚ものの作成）・マニュアルの見直し、緊急用メールでの連絡体制                                    |
| 11  | ・自家発電機の購入（県補助金有）・ランタン（電気）の購入・扇風機（充電式）の購入                                           |
| 12  | ・自家発電の量を増やした・設備を再確認し不足を充足した・避難訓練、教育を充実した・震災がおこった場合を想定したチーム、連絡網等を整備した               |
| 13  | ・地震に対しての訓練を行った。・緊急連絡方法を見直し、強化した。・備蓄品の確認、補充を行った。                                    |
| 14  | ・地震発生時の行動マニュアルの整備。・法人内相互協力体制の確認（情報共有方法の確認）                                         |
| 15  | ・施設内の備品使用方法についてマニュアル化した。・緊急連絡体制を見直した。・停電に備え発電機を購入した。                               |
| 16  | ・施設内の見直し・備蓄の確認、量の再検討・懐中電灯や電池などの確認・職員の連絡方法・家族への連絡方法                                 |
| 17  | ・施設に非常食を常備した。・防災の事例発表、研修会を職員と共に参加、受講し、防災意識を高め環境を見直した。・消防署の職員に防災についての対応を学んだ。        |
| 18  | ・職員会議にて意見交換を行いました。・備品の追加と新たな備品の購入                                                  |
| 19  | ・職員との連絡の仕方（緊急連絡時災害の電話番号使用）。・連絡網見直し、備蓄（食べ物、水等）の確保、施設の位置の確認で町の避難所になっている為、どう受け入れるか検討。 |
| 20  | ・職員連絡網の整備・地震を想定した避難訓練を行う                                                           |
| 21  | ・食事の備蓄を導入・防災訓練                                                                     |

|    |                                                                              |
|----|------------------------------------------------------------------------------|
| 22 | ・食料品の保存（災害時用保管場所を厨房食材保管場所に設けた）・建物の強度を専門家に調査して頂いた。                            |
| 23 | ・震災時のマニュアルの整備や物資の備蓄量の見直し・情報伝達のネットワーク作りの強化（インターネットサービスの活用）                    |
| 24 | ・水害に備えた防災訓練実施へ・食料と水の備蓄量の拡大                                                   |
| 25 | ・節電、節水、緊急時の対応を再確認・今後の事として、地域の避難場所に指定される。                                     |
| 26 | ・耐震設備・避難訓練と緊急連絡・備蓄品の補強                                                       |
| 27 | ・建物構造の点検（強度）・震災時の避難経路等の再確認・震災時の物品対策等の検討                                      |
| 28 | ・建物の耐震性を専門家に調査依頼・連絡手段がない時の職員間の行動方法の確認・地域住民との入居者の保護を含めた、援助体制の基盤整備づくりに向けた方針の検討 |
| 29 | ・地下水（井戸）の使用方法についての確認（止め方、出し方）・発電機の用意                                         |
| 30 | ・津波を想定した避難場所の再検討・防災訓練の見直し。                                                   |
| 31 | ・停電時についての自家発電機の購入・備蓄の強化                                                      |
| 32 | ・停電対策・緊急連絡方法の再構築                                                             |
| 33 | ・ハード面・誘導方法・備蓄について                                                            |
| 34 | ・発電機、照明器具、電池などの災害時必要物品の確保・職員の設備に対する知識を深め、災害時有効活用できるよう伝達、仕組みをつくった・水、食糧の備蓄。    |
| 35 | ・非常時を想定した物品の確保・避難ルート、避難場所の再確認                                                |
| 36 | ・備蓄の確認・転倒防止対策                                                                |
| 37 | ・備蓄品（災害）を用意した・地震、津波を想定した訓練を検討していく。                                           |
| 38 | ・備蓄品関係の整備・地域としての防災ネットワークの確立への提言                                              |
| 39 | ・備蓄品の確認と強化・地震に特化した防災対策の再検討                                                   |
| 40 | ・備蓄品の整備・マニュアルの見直し。                                                           |
| 41 | ・備蓄品の見直し・災害時対応の研修参加                                                          |
| 42 | ・備蓄品の見直し・避難訓練の見直し                                                            |
| 43 | ・備蓄品の量を3日から5日に増やした。特にお米は確保した・ガソリンは半分になった時点で満タンにしている。                         |
| 44 | ・必要物品の整備・職員体制の見直しと整備                                                         |
| 45 | ・避難訓練の強化・連絡体制（家族報告）の見直し、備品の把握と準備                                             |
| 46 | ・物品のストック・マニュアル作成                                                             |
| 47 | ・防災グッズの整備充実・ご家族と地域と防災に関して話し合った（協力体制）・災害時の避難先の再検討（具体的にどの施設などへ避難するか？など）        |
| 48 | ・防災対策委員会を何度も設け、見直しを行った・防災ヘルメットを購入し、部署内に設置するようにした。                            |
| 49 | ・防災対策セミナーへの積極的参加と自施設への導入・給食会社との緊急災害発生時対応につい                                  |

|    |                                                                                                 |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | て検討、方向性決定。                                                                                      |
| 50 | ・防災についての研修会・防災ビデオ鑑賞・防災備品の確保（食糧、介護用品、医療機器等）                                                      |
| 51 | ・防災マニュアルの見直し・地域との防災協定の検討（検討中）・備蓄品の整備・サンダーバード支部（法人）                                              |
| 52 | ・防災マニュアルの見直し・備品の補充・地域のハザードマップをもとに事業所独自のマップを作り職員への意識付けをしている                                      |
| 53 | ・防災用品の点検と補充・地域全体での話し合い、体制作り                                                                     |
| 54 | ・防災用品の見直し・連絡方法の見直し                                                                              |
| 55 | ・法人での防災委員会の設置・備品の確認                                                                             |
| 56 | ・法人として連絡網の再確認、再点検・震災後の対応・自施設（事務所）の地震対策                                                          |
| 57 | ・募金活動（募金箱設置）・バザーの実施（収益と寄付）                                                                      |
| 58 | ・毎月災害対策委員会を開催、議事録・炊き出し訓練・備蓄の点検                                                                  |
| 59 | ・毎月災害対策委員会を開催、議事録をメールにて回覧、全職員への周知・炊き出し訓練・備蓄の点検                                                  |
| 60 | ・マニュアルの整備・訓練の実施                                                                                 |
| 61 | ・マニュアルの見直し・貯蓄備品の法人の中で確認、整備・研修会                                                                  |
| 62 | ・マニュアルの見直し・防災士の資格取得                                                                             |
| 63 | ・マニュアルの見直し・防災士の資格取得をさせた・非常用ガソリンスタンドの設立・非常物品の拡充                                                  |
| 64 | ・水や食料を増やした（非常用）・メールで情報が取れるよう、管理者とリーダーのアドレスを職員に伝えた・自家発電機を購入した・非常時の照明を設置した                        |
| 65 | ・連絡網の見直し・設備の点検・備蓄の確認・防災マニュアルの見直し                                                                |
| 66 | ・施設の放送設備に、緊急地震速報のシステムを導入した。・職員間の連絡網に、携帯電話のメールアドレス欄を追加した。・震災後の計画停電で色々困ったことがあったので、キャンプ用の発電機を購入した。 |
| 67 | ・備蓄品の購入・防災マップの確認・周知・地震に対する避難訓練                                                                  |
| 68 | 1. 備蓄品の再点検 2. 地域との連携 3. 防災訓練参加                                                                  |
| 69 | ①各ホームに災害備蓄品の見直しを行い、物品の追加を行った。②地域の連携を密にし、災害時の一時避難場所としてホームを使用してもらえる様にした。                          |
| 70 | ①自家発電機（非常用）の購入②防災グッズの追加購入③反射式灯油ストーブ等の購入④非常時連絡網の方法の変更（電話→携帯のメールへ）                                |
| 71 | ①町会との連携強化②職員全員に「災害時緊急カード」を作成し配布③「防災安全指針」を消防署の意見を聞いてホームで作成                                       |
| 72 | ①必要物品の備蓄を 1 週間以上するようにした。（電池、水、米、オムツ等）②ガソリン不足で大変だったので、ガソリン使用の少ない、バイク、物品導入の小トラック、リヤカー電灯（懐中）③      |

|    |                                                                                                                                                               |
|----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | 消防訓練だけであったが、防災訓練もするようにした。                                                                                                                                     |
| 73 | ①災害マニュアル（地震時）の見直し ②地震時の避難訓練の開催 ③職員の災害伝言板の訓練を3回行った。④災害時における物資の調達等に関する協定を15の業者と結ぶ ⑤ 職員が災害時どのくらいの時間で施設までくることが出来るかの調査⑥外出企画書の見直し（外出時地震が発生した場合の避難場所などを確認記載するなど）、など。 |
| 74 | 6月に内部研修のトピックス版として、被災地域に支援に行かれた消防署員の方から、現地の様子をパワーポイントで話を聞き、実際の防災訓練の大切さを学んだ。                                                                                    |
| 75 | BCPの充実、3日間停電、断水等に備えての準備をしている。組織全体での支援体制をつくっている。利用者のトリアージカードの作成について検討している。                                                                                     |
| 76 | BCPを導入した                                                                                                                                                      |
| 77 | 圧力釜、卓上コンロ、ボンベ、携帯ラジオ、ランプを追加購入した。                                                                                                                               |
| 78 | 改めて、防災の点検を行った。しかし、その後9月の台風では非常食を倉庫（別棟にあった（保管））までとりに行くことが困難だったなどの問題も発生し、防災対策の重要性を痛感した。                                                                         |
| 79 | 改めて避難場所の確認や、停電が起きた時にエレベーターを使用せずに車いす、寝たきり者の避難訓練を行った。                                                                                                           |
| 80 | 改めて防災グッズや備蓄品の点検を行った                                                                                                                                           |
| 81 | いざという時に動ける様シミュレーションを重ねています。                                                                                                                                   |
| 82 | 意識はしているが特別な措置はしていない                                                                                                                                           |
| 83 | 以前にもまして、二次避難所としての受け入れがスムーズに出来るよう、又、支援体制がスムーズに行えるように全スタッフへ拡大して、いつでも誰もが動けるような準備を行った。                                                                            |
| 84 | 以前よりも、水や紙おむつ等を施設で補充している（備品管理）                                                                                                                                 |
| 85 | 一般電話の復旧より携帯電話復旧のほうが早いと、緊急用携帯電話を購入。また、複数名が被災地への派遣されたことも踏まえて、防火管理者を中心に防災計画等を見直しを進めている。                                                                          |
| 86 | 今一度、避難の仕方や問題点をスタッフで確認した。                                                                                                                                      |
| 87 | 今迄以上に備蓄や節電等に力を入れる様に努めた。                                                                                                                                       |
| 88 | 今まで通り防災訓練を年2回行っている。                                                                                                                                           |
| 89 | 今までの防災対策を再確認し、防災対策の意識を強めた生活用品、非常食等の備蓄品の充実。                                                                                                                    |
| 90 | 飲料水、食料の備蓄、燃料の確保。                                                                                                                                              |
| 91 | 海に近いので津波が来たことを想定し、避難訓練を行いました。                                                                                                                                 |
| 92 | 運営推進会議で津波について話し合い、避難の仕方、場所を考えた。                                                                                                                               |
| 93 | 遠方ということもあり、どこか他人事。何も変わっていない。むしろ、新燃岳の噴火への関心や対策の方が強い。                                                                                                           |
| 94 | 大津波を想定した避難訓練、簡易トイレ、小型発電機、紙おむつの備蓄。関連施設との通信用無線機                                                                                                                 |
| 95 | オール電化の為、震災～翌早朝まで停電だった為、電源を用いない製品（ストーブ、カセットコン                                                                                                                  |

|     |                                                                                         |
|-----|-----------------------------------------------------------------------------------------|
|     | ロ)、懐中電灯、ラジオ、熱を加えなくても大丈夫な食材を備蓄することを徹底しました。                                               |
| 96  | オブジェを撤去（落下の危険があるため）。通所者の送迎の見直しを検討中                                                      |
| 97  | 開設して1年目であったので、備蓄品が十分でなかった。またこのような災害は「起こらないだろう」との危機管理体制も甘かったので、この2点を改善する策をとったし、現在も続けている。 |
| 98  | 懐中電灯、ヘルメット、ラジオ、水、食料品などの備蓄品について検討し、一部購入した。                                               |
| 99  | 各支援する方々の防災対策を見直しするきっかけとなった（特に発電の必要な方、薬の備品、連絡先を明確にするなど）                                  |
| 100 | 家族で集合場所の確認                                                                              |
| 101 | 壁棚の落下しそうな物、自家発電機、備蓄食品、備蓄介護用品の点検等を行った。                                                   |
| 102 | 危機管理について改めて考え、マニュアルの見直しに取りかかった。                                                         |
| 103 | 行政側と要援護者支援プロジェクトを立ち上げました。                                                               |
| 104 | 緊急時、災害時用の物品や食料、水の備蓄の再確認。                                                                |
| 105 | 緊急時のエリアマップを作成しました。                                                                      |
| 106 | 緊急時の連絡体制や方法等の見直しをしました。                                                                  |
| 107 | 緊急避難先の明確化                                                                               |
| 108 | 緊急連絡、対応マニュアルの具体化（活用しやすいように）。備蓄食や他の施設間、地域間との連携体制について話し合い、具体的内容を決めて検討。                    |
| 109 | 緊急連絡先の再確認                                                                               |
| 110 | 緊急連絡体制（一斉メール配信）とマニュアルを再度周知して励行した。                                                       |
| 111 | 緊急連絡網の整備や備蓄品倉庫の見直し等。                                                                    |
| 112 | 近隣にどのような施設があるか再確認。市町村と相談、協力体制、施設内設備の再点検。                                                |
| 113 | 具体的にはなっていないが、会議で検討した。                                                                   |
| 114 | 車椅子移動の訓練。震災・高波等地域の危険マップの確認                                                              |
| 115 | 訓練、認知症の対応、備蓄など職員研修を行った。又、他施設と合同の研修会も行った。                                                |
| 116 | 訓練と、防災用品の備えを行う。                                                                         |
| 117 | 訓練の実施                                                                                   |
| 118 | 訓練を行った。                                                                                 |
| 119 | 訓練をした。飛散防止フィルムをつけた。                                                                     |
| 120 | 現在、学生の為、勤務先なし。                                                                          |
| 121 | 減災対策の見直しと強化対策。震災を想定した避難訓練の実施、避難ルートの確認。                                                  |
| 122 | 現在法人内部と検討中です。                                                                           |
| 123 | 現在も引きつづき防災について話し合いをしている。自分の対策ではなく地域ぐるみで考えていきたいと行政に話をしている。                               |
| 124 | 研修会を開催し、防災対策に努めた。職員全体や地域の方（運営推進会議等）でも改めて日常でのホームで出来る事の確認を行った。ひとりひとりの防災に対する意識を考えた。        |

|     |                                                                                                                     |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 125 | 現住所が所属する県・市の防災マニュアルに、強く興味を持ち始めた。又、隣組の支えあいのあり方についても具体的な話題が出始めている。                                                    |
| 126 | 研修と連絡方法の再点検                                                                                                         |
| 127 | 原子力災害時の屋内待避訓練                                                                                                       |
| 128 | 県全体で考えられている。                                                                                                        |
| 129 | これまでの備えを再確認した。                                                                                                      |
| 130 | これまでの被災・支援の経験から、対策を見直していたので、今回特段見直した点はありません。                                                                        |
| 131 | 今回の震災で当施設はほとんど被害がなかった。当 GH では防災に備えて食品、その他は常に 2～3 日の用意はしてあるので、今後も継続的に実施していくことを再確認する。                                 |
| 132 | 災害時における備品、備蓄、対応策の見直しをはかった。                                                                                          |
| 133 | 災害時の対応等の勉強会を実施                                                                                                      |
| 134 | 災害時の対応についての勉強会をした。                                                                                                  |
| 135 | 災害時の電源確保、食料保存の見直し、火災以外の災害想定による訓練企画。                                                                                 |
| 136 | 災害時の備品等の整備をした。                                                                                                      |
| 137 | 災害時のマニュアルの見直しや自家発電設備の整備、連絡網の見直しと整備。                                                                                 |
| 138 | 災害時のマニュアルを見直した。                                                                                                     |
| 139 | 災害時マニュアルの見直し。                                                                                                       |
| 140 | 災害時用等の備蓄の確認。緊急時マニュアルの再考。備品の整備。                                                                                      |
| 141 | 災害対策（対応）マニュアル修正→（自然災害想定）                                                                                            |
| 142 | 災害について話し合った（自施設では火災・風水害など災害の種類に限られるが）備蓄品の見直しを行う。県の防災マニュアル作成に参加した。                                                   |
| 143 | 災害の少ない地域性から、火災、台風系の防災対策はあったが、地震等についての意識は低かったように思う。いつどんなことが起こるかわからない、を前提に地震、土砂災害等の防災についても深く考え、今までの防災対策の見直しをすることとなった。 |
| 144 | 災害マニュアルの見直し、検討。                                                                                                     |
| 145 | 災害マニュアルの見直しについて検討した。                                                                                                |
| 146 | 最上階へ非常用物資を移動した。                                                                                                     |
| 147 | 再点検した（地震時、ガラス・転倒・落下の安全性）                                                                                            |
| 148 | 支援マニュアルを作成している。                                                                                                     |
| 149 | 市及び消防など積極的に意見交換し指導を受ける体制とした。また、毎月の避難訓練を継続し、消防立ち会いも継続。耐震に対して不安があり、グループホームフルーツの家は建て替え予定とした（3 年後迄に実施予定）                |
| 150 | 自家発電の拡大、災害時マニュアルの見直し。                                                                                               |
| 151 | 事業所を変ったばかりで特にしていません                                                                                                 |
| 152 | 事業団全体の防災訓練を行った際、地元の消防隊員の現地での活動をビデオと共に話を聞かせても                                                                        |



|     |                                                                                                          |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | らった。他防災訓練年4回実施。                                                                                          |
| 153 | 自施設及び地域の防災マニュアル等の見直しを行っている。                                                                              |
| 154 | 自施設で災害があれば、どうすれば良いか考えることができた。また施設の設備など、どこに何があるか把握できる機会になった。                                              |
| 155 | 自施設は一昨年水害の被害に遭い、その後防災に対する意識が高まり、防災組織や環境の整備など、できることから取り組んでいます。今回の震災を受け、避難方法について、現実的に対策をとらねばと危機感が高まり検討中です。 |
| 156 | 自施設は、災害は停電だけだったので、保存食や電池などの補充、利用者の方から防災頭巾を作ってもらった程度。避難訓練の具体的な対応を確認した。                                    |
| 157 | 自施設も含め、近畿圏で事業所間で相互支援のための「おたすけネット」を立ち上げようと準備中。自施設においても非常食、水、ガス、発電機など備蓄。                                   |
| 158 | 地震、防災（火災、土砂災害、大雨洪水対策）には、努力している。                                                                          |
| 159 | 地震→ガラスの飛散、タンス等の倒壊防止、非常食、訓練（避難）                                                                           |
| 160 | 地震があった時のことを考えて訓練をした。                                                                                     |
| 161 | 地震対策、施設の家具等の固定。                                                                                          |
| 162 | 地震対策の避難訓練をする予定。                                                                                          |
| 163 | 地震についての対応策の見直しや、発電機や防災グッズ等を追加購入した。                                                                       |
| 164 | 地震の対応マニュアルを見直し周知しました。                                                                                    |
| 165 | 地震防災教育実施。備蓄品数量の検討                                                                                        |
| 166 | 地震や火災時の防災対策の見直しや連絡体制、ご家族やスタッフの家族などへの震災時の対応の周知                                                            |
| 167 | 地震を想定した防災訓練を、地域と合同で行った。                                                                                  |
| 168 | 施設の利用者、家族のみではなく、その家族、周りの地域へも支援出来るだけの食料、薬等の確保を法人全体でした。日々の事として、目の前にいる認知症の人への支援を一生懸命しなければというチーム力が向上した。      |
| 169 | 事前体制を見直し、具体的対策案の検討。                                                                                      |
| 170 | 市町村との防災協定を結んだ。                                                                                           |
| 171 | 自ホームの地域のハザードマップ確認と、実際に動ける消防計画の作成にとりかかった。                                                                 |
| 172 | 従来、火災に対しての訓練は年2回してきた。それは緊急時にも応用できるものとして意識して訓練する。地位のインフラとして自覚を高める。                                        |
| 173 | 従来通りの対策で変更点なし。                                                                                           |
| 174 | 情報管理と発信                                                                                                  |
| 175 | 消防署職員による震災についての研修。持ち出し物等の確認とマニュアルの見直し。                                                                   |
| 176 | 職員間での話し合い。運営推進会議での話し合い。防災グッズ、食料の購入                                                                       |
| 177 | 職員教育（防災意識の向上のため）                                                                                         |

|     |                                                                                     |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 178 | 食材の確保、防災用品のチェック                                                                     |
| 179 | 職能団体として、災害時ボランティア派遣マニュアルがあり、その範囲内での事務手続き等の支援でしたので、特にはありませんが、事務方としての連絡体制の見直しをしました。   |
| 180 | 職場のスタッフや利用者様と話しましたが、具体的に実施はしていない。                                                   |
| 181 | 食品か水等の備蓄が必要と考え実施した。                                                                 |
| 182 | 食品等の備蓄を検討した。                                                                        |
| 183 | 食料のストックの確認や全スタッフへの伝達。社会福祉法人としての使命について話し合いました。                                       |
| 184 | 食料の備蓄の検討を始めた。                                                                       |
| 185 | 食糧の備蓄を行うようになった。                                                                     |
| 186 | 食料備蓄 3 日間確保                                                                         |
| 187 | 食糧品のストック等、見直しを行った。                                                                  |
| 188 | 所属の防災マニュアルの再検討                                                                      |
| 189 | 震災時における誘導（施設内）や、災害時の消火活動などの訓練を、職場内研修の位置づけで、地域の消防署に依頼し 5 月と 7 月の 2 回実施した。            |
| 190 | 震災時には支援の拠点となることを考えると、医薬・衛生品や備蓄食糧の十分な確保が大切だと考えています。                                  |
| 191 | 震災時の避難方法の見直し、節電対策を検討した。                                                             |
| 192 | 震災時のマニュアル作成                                                                         |
| 193 | 震災の防災訓練を実施予定（地震）                                                                    |
| 194 | 震災のマニュアルの見直しと、訓練の回数を増やした                                                            |
| 195 | 震災をきっかけにした新しい対策はしていない。                                                              |
| 196 | 震度 5 以上で全職員、職場へ駆けつけよ。発電機の購入。                                                        |
| 197 | 震度 5 強の地震があった場合に、連絡が無くとも可能な限り全員、苑に集合する。                                             |
| 198 | 新燃岳の噴火の為、被害があったので避難訓練を行った。噴火に耐えられる（石が飛んできた時）場所の確保の点検を行った。                           |
| 199 | 水害に対し、防災訓練を行い、実際に台風で近隣の GH で浸水があり、避難所としての受け入れをした。                                   |
| 200 | すべてのエリアで再検討した。①自家発電機②備蓄品目③緊急連絡網④緊急時の持ち出しの点検と品目の確認等。                                 |
| 201 | 送迎の際に地震が起きたら…といった内容を送迎勉強会の内容として皆で確認した。                                              |
| 202 | 耐震診断                                                                                |
| 203 | 高い所のものを移動、避難経路の確保、避難訓練の充実                                                           |
| 204 | 高台へログハウスを建設しました。利用者さんやその家族、また地域の方々への「地域サロン」としてということもありますが、避難所としてもある程度の人数が寝泊まり出来るので。 |

|     |                                                                                                          |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 205 | 棚等に、つかえ棒を設置した。                                                                                           |
| 206 | 地域住民安心マップの作成をして、高齢者の方の現状の把握をし、居宅と共同で各住居を回った。                                                             |
| 207 | 地域での災害対策の見直しを行った。                                                                                        |
| 208 | 地域の受け入れ先になることを確認した。                                                                                      |
| 209 | 地域の方々との連携                                                                                                |
| 210 | 地域の方達との連携の強化                                                                                             |
| 211 | 地域のグループホーム 17 社に声をかけ何度も研修したり、それぞれが備蓄できる物を決めて、いざという時に助け合えるネットワークを作りました。又、地域住民をも受け入れるよう法人内での備蓄も増やしています。    |
| 212 | 地域の災害マップの見直し。                                                                                            |
| 213 | 地域の自治団体（近隣）に協力依頼した。                                                                                      |
| 214 | 地域の福祉避難所としての機能の充実（紙オムツ、水、保存食の備蓄）                                                                         |
| 215 | 地域避難所としての体制作りを検討中。                                                                                       |
| 216 | 地域も想定し、備えを再検討。                                                                                           |
| 217 | 長時間の停電で、吸引できる程度の発電機しかなく、ナースコール、センサーマットが使用できず、容量の大きい自家発電機を準備した。電気の必要ないストーブの購入・防災マニュアルの見直し、食料やオムツの備蓄を増やした。 |
| 218 | 津波対策を考え、津波想定の方針訓練や非常食を建物の上のフロアにあげたりした。また、H24 年度以降、大型自家発電装置の設置等、設備・備品の購入を検討している。                          |
| 219 | 津波などの震災の可能性を再検討した。                                                                                       |
| 220 | 津波の想定訓練を行っている。                                                                                           |
| 221 | 津波への対策を考える機会を作った                                                                                         |
| 222 | 津波を想定した防災訓練にも取り組むようになった。施設等の建て替えに関して、立地の場所、設計に関して津波を意識するようになった。                                          |
| 223 | 提案はしましたが、採用には至っておりません。                                                                                   |
| 224 | 停電時の対応として、発電機を 2 台購入した。                                                                                  |
| 225 | 停電対応のために薪ストーブも併用して使用している。入浴と食事が最低限行えるシステムを訓練している。                                                        |
| 226 | 停電対策、おむつなどの備品の使い方を考えた（入荷しないため）。寒さ対策。                                                                     |
| 227 | 停電対策として、懐中電灯を増やしたり、夏の省エネの為、緑のカーテン作成、冬はマットを一枚多く、又、すぐ避難できる体制作り。                                            |
| 228 | 電気、ガス、水道等が使用できない場合の代替策の検討。                                                                               |
| 229 | 電力不足における無停電装置の購入。他施設との災害時協力協定の検討中。                                                                       |
| 230 | 当事業所の所在地域での介護・看護職の研修会があり、防災をテーマにとりあげた。近隣施設の参加職員および自被災の職員で防災対策の現状を伝え合い参考となる対策を共有しあうことができ                  |

|     |                                                                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | た。地域のレスキューの NP0 職員にも参加してもらった。                                                                                                    |
| 231 | 当施設は港が近く、今回の震災で入居者家族や職員は不安である。研修などは行なったがまだまだ検討中です。                                                                               |
| 232 | 東南海地震等、大きな地震時の過去の震度等の調査。過去の震災時のホームの立地の被害状況の調査。自主防災班の方から、アドバイスを頂く。避難場所や連絡の方法他、再検討。食料、備蓄方法の検討。                                     |
| 233 | 特にありません                                                                                                                          |
| 234 | 特にありません。                                                                                                                         |
| 235 | 特にありません。                                                                                                                         |
| 236 | 特に行っていない。                                                                                                                        |
| 237 | 特に自施設では行っていないが、地域生活支援センターと協力して、地域づくりの中で、今後防災対策を取り入れた地域づくりのための研修会を3日間催した（現在も開催中）                                                  |
| 238 | 特にないが、震災に対する不安をかかえているか聞きとりをした。不安ありと答えた人には具体的手立てを考えていく予定。                                                                         |
| 239 | 特になく、通常どおりの防災訓練実施（5月～11月）9月は対策会議実施。                                                                                              |
| 240 | 特になし                                                                                                                             |
| 241 | 特になし                                                                                                                             |
| 242 | 特になし                                                                                                                             |
| 243 | 特になし                                                                                                                             |
| 244 | 特になし                                                                                                                             |
| 245 | 特になし                                                                                                                             |
| 246 | 特になし。                                                                                                                            |
| 247 | 特になし。現行のマニュアルで今回は対応可だった。ただ、今回運営推進会議で相談すると。地域の安否確認などで、一杯一杯で他の所まで手が回らない…。互いの協力というのは、聞こえは良いが、自分の町内を回るのに精一杯だったと町内会長さんが言っていたのが印象的だった。 |
| 248 | 特に何も行っていない。                                                                                                                      |
| 249 | 特にはない                                                                                                                            |
| 250 | 長岡市は中越地震、中越沖地震、水害等を経験した。法人内に対策本部を設置し、今までの経験を活かした連携が行われた。                                                                         |
| 251 | 永田久美子さんの資料を加筆し、マニュアルにした。タンス等すべて固定した。夜勤帯の訓練教化、及び地域住民への連携強化。                                                                       |
| 252 | なし                                                                                                                               |
| 253 | なし                                                                                                                               |
| 254 | なし                                                                                                                               |
| 255 | なし                                                                                                                               |

|     |                                                                                                  |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 256 | 新潟県中越地震など大きな地震を2度経験しており、今回の震災ではその時に得た経験と対策が活かされており、特に特別新たな防災対策等は行っていない。今までに防災マニュアルの見直しなど行っていました。 |
| 257 | 抜き打ちによる事業所全体の緊急用意と対応について対策を実施中。                                                                  |
| 258 | 飲水、食料品の確保                                                                                        |
| 259 | ハザードマップの見直し。防災機具の見直しの購入                                                                          |
| 260 | はずかしながら検討中                                                                                       |
| 261 | 発電機の購入・ポンプの整備・食糧備蓄の見直し・施設全体での防災訓練・防災対策（マニュアル）の見直しと整備                                             |
| 262 | 発電機を準備し、井戸と温泉をくみあげられる体制をとった。                                                                     |
| 263 | 発電機を利用した照明を各所に設置した。又、非常用コンセントも各部所に1ヶ所ずつ用意し、電子レンジや吸引機等の使用を可能にした。                                  |
| 264 | 発電設備、整備（1000万円規模）                                                                                |
| 265 | 話し合いやマニュアルの確認（見直しも含め）をおこなっている。                                                                   |
| 266 | 反射式のストーブの購入とランタン、乾電池の備蓄、車両燃料不足時のスタッフの送迎支援。                                                       |
| 267 | 反射式のストーブの保有や、避難訓練の強化など。                                                                          |
| 268 | 日頃より地域と共に歩む施設・地域作りを実施している。                                                                       |
| 269 | 被災高齢者の受け入れは、早い段階で被災支援の「対策本部」を法人内に設置して、中越地震、中越沖地震、東日本大震災と続いていることなので、今回に限って特段見直したことはなかったかと思います。    |
| 270 | 被災時の動きを再検討すると共に、家族とも緊急時の対応法（延命等）を再検討した。                                                          |
| 271 | 被災者受け入れは、早い段階で被災支援の「対策本部」を法人内に設置して、中越地震、中越沖地震、東日本大震災と続いていることなので、今回に限って特段見直したことはなかったかと思います。       |
| 272 | 非常食の充実、家具の転倒防止対策。                                                                                |
| 273 | 非常食の備蓄を増やす、カセットコンロの購入。避難経路の確認など。                                                                 |
| 274 | 非常食を置くようにしました。又その食事を模擬的に摂る事もしております。                                                              |
| 275 | 非常用食糧、水のストック量                                                                                    |
| 276 | 非常用の必要物品の備蓄、避難場所と経路の確認、近隣住民参加の避難訓練の実施（助けてもらえそうな方々の把握）                                            |
| 277 | 備蓄、地震の避難訓練                                                                                       |
| 278 | 備蓄してある食料品の内容の見直し。飲料水の増量。備蓄庫の増設。毛布やスウェットなど衣類の備蓄。発電機の購入。職員のメールアドレス把握。                              |
| 279 | 備蓄食の再確認と量の検討程度。オムツ、おしり拭き等の備蓄。                                                                    |
| 280 | 備蓄などの災害時の対策の検討の指示があり、各部署で再検討を行っている。                                                              |
| 281 | 備蓄の整備                                                                                            |

|     |                                                                                                                   |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 282 | 備蓄品の強化                                                                                                            |
| 283 | 備蓄品のチェック。津波想定防災訓練                                                                                                 |
| 284 | 備蓄品の必要性を感じているが、オーナーが積極的でないため困っている。                                                                                |
| 285 | 備蓄品の見直し、訓練の見直しをした                                                                                                 |
| 286 | 備蓄用品を増やすこと。                                                                                                       |
| 287 | 備蓄を増やした。                                                                                                          |
| 288 | 必要物品の確認、補充。                                                                                                       |
| 289 | 避難訓練の回数が年2回→毎月に増えた。                                                                                               |
| 290 | 避難訓練や避難場所の確認                                                                                                      |
| 291 | 避難訓練や避難場所の確認、学生の誘導マニュアルの検討                                                                                        |
| 292 | 避難訓練を1ヶ月に1回、防災訓練を2ヶ月に1回、近隣住民と共に実施致しました。利用者家族、住民とそれぞれの対応マニュアルを作り、常々意識づくりの強化と実践に努めています。                             |
| 293 | 避難訓練を行う必要を感じた。                                                                                                    |
| 294 | 避難経路（高台まで）の確認、入浴時の避難のためのポンチョ作り等、緊急連絡先の再確認と拡大の小さいことのみにとどまっています。受け入れができる場所ではないので、避難所で認知症でお困りの方の対応をさせていただこうと考えています。  |
| 295 | 避難経路確認等                                                                                                           |
| 296 | 避難経路の周知徹底及び緊急連絡網の整備                                                                                               |
| 297 | 避難経路の見直し。                                                                                                         |
| 298 | 避難所、経路含め、大規模避難訓練                                                                                                  |
| 299 | 避難場所の確保                                                                                                           |
| 300 | 避難方法の見直しを行った。緊急時対応の見直し（地震、津波の際も増やした）。備蓄を増やした。                                                                     |
| 301 | 備品、生活必需品の備蓄量の見直し。物品の追加。発電機等の設置。                                                                                   |
| 302 | 備品の確認、連絡体制、防災時の役割の確認                                                                                              |
| 303 | 備品のチェックと避難訓練                                                                                                      |
| 304 | 福岡の西方沖地震をきっかけに、震災マニュアル及び避難誘導訓練の強化を図っていました。                                                                        |
| 305 | 物品の確保、緊急時の対応方法見直しなど。                                                                                              |
| 306 | 物品のストックを多めに持っておく（冷凍食品やトイレトペーパー他）                                                                                  |
| 307 | 勉強会（避難施設の指定を受けたことにより再度、西方沖地震のときの救護体制や福岡西区の避難場所の送迎車で巡回し、入浴施設の提供や日赤のときの救護体験にもとづき避難所の人々へのメンタル面の話しかけや、体操等、改めて勉強会を行った。 |
| 308 | 防災（計画）対策の見直し、備蓄品、地域での役割、災害本部の設置等々を話し合い、マニュアルをハンディタイプとし、職員が常に持ち歩ける様にした。（どこで災害にあっても行動できる様）                          |
| 309 | 防災（消防）設備の点検。備蓄食料の体制見直し。                                                                                           |
| 310 | 防災委員会が中心となり、緊急対応時のマニュアル作成、危険箇所の再点検を行った。                                                                           |

|     |                                                                                                                         |
|-----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 311 | 防災グッズ一式や緊急連絡体制の見直し。カンパン等の食料や水の確保等                                                                                       |
| 312 | 防災クズの点検、職員を対象に防災時の勉強会。防災時、市と協力体制をする。                                                                                    |
| 313 | 防災グッズを見直し整備した。事業所内や運営推進会議などで、いざという時の対処、対応策について何度も話し合った。                                                                 |
| 314 | 防災訓練・教育など事業者計画に組み込まれているが、月／1 回のペースで行うようになる。全職員が「危機管理」に留意して行動する。                                                         |
| 315 | 防災訓練時に、地域の消防団の方に施設に入って頂き、内部を知って頂いた。                                                                                     |
| 316 | 防災訓練と常備食の再検討                                                                                                            |
| 317 | 防災時のマニュアルを見直し、より具体的なものを作成                                                                                               |
| 318 | 防災食の発注と補充、防災機器の購入。マニュアルの見直しと周知。                                                                                         |
| 319 | 防災対策ではないと思いますが、今回 DC ネットに掲載されていた“避難所でがんばっている認証の人、家族等への支援ガイド”を使った勉強会を行いました。                                              |
| 320 | 防災対策等のマニュアルを見直した。                                                                                                       |
| 321 | 防災対策についての見直しを行った。                                                                                                       |
| 322 | 防災に関する研修や講演会に施設長はじめ、リスクマネージャー、管理職等も進んで参加し、施設内を見直す検討材料の収集に努めた。現在マニュアルの見直しに入っている。消防訓練時に防災訓練実施の検討を計った。地域との連携については頭を悩ませている。 |
| 323 | 防災に対して再度学習をした                                                                                                           |
| 324 | 防災に対する意識は高まり、色々な想定での避難訓練を今後予定している。                                                                                      |
| 325 | 防災に対する研修会を実施し、職員の災害時の動きなど再確認を行った。                                                                                       |
| 326 | 防災についての施設内研修。避難場所の再確認。防災映画の上映。                                                                                          |
| 327 | 防災の備品を見直しした。食料品の備蓄に関しては検討中。マニュアル作成追加した。                                                                                 |
| 328 | 防災の見直しと確保を行った。                                                                                                          |
| 329 | 防災への備蓄食料、水などの見直し。避難体制についての見直し。                                                                                          |
| 330 | 防災マップ作り、再々々防災訓練、家族支援の方法と、行政をまじえ何度も話し合いや支援をお願いしますと伝えました。                                                                 |
| 331 | 防災マニュアル、非常食等の見直し検討を行った。                                                                                                 |
| 332 | 防災マニュアルの再確認及び在宅独居者への連絡、安否確認のマニュアル作成                                                                                     |
| 333 | 防災マニュアルの再検討                                                                                                             |
| 334 | 防災マニュアルの作り直し。東北からの受け入れ 1 名 OK で伝えた。運営推進会議を利用して地域の協力や協力してもらう事など伝える。家族、職員間、法人間の連絡方法など検討。                                  |
| 335 | 防災マニュアルの見直し                                                                                                             |
| 336 | 防災マニュアルの見直し                                                                                                             |
| 337 | 防災マニュアルの見直し、整備                                                                                                          |
| 338 | 防災マニュアルの見直し。地域の方の中の要支援者を把握し、法人として救護、避難の受け入れ協                                                                            |

|     |                                                                                                         |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|     | 力ができる様な計画を作成中。                                                                                          |
| 339 | 防災マニュアルの見直しを行った。避難訓練の内容を検討し、回数を増やして行った。キャリダン（利用者様を階段から降ろす機材）の購入を行った。                                    |
| 340 | 防災用品のチェックと購入。発電機の購入。                                                                                    |
| 341 | 防災用品の保存                                                                                                 |
| 342 | 法人全体で防災教育とマニュアルの見直しを行った。                                                                                |
| 343 | 法人での管理職向けの研修。防災マニュアルの作成（中）                                                                              |
| 344 | 法人の全体研修と介護教室で、家庭で準備しておく防災グッズについて勉強会を行った。法人では入院、入所、デイケア利用者の食事（備蓄）の点検不足品の追加購入を行った。                        |
| 345 | 法人の寮一室を防災に必要な物、石油ストーブ、ランタン、おむつ、水、食材（乾物）等を備蓄しております。又、自家発電機も購入しました。又今まで火災訓練のみでしたが、津波、地震訓練も入れて行うことに計画しました。 |
| 346 | 防水訓練をはじめて実施した。                                                                                          |
| 347 | 他の機関からのアンケートに答えながら、あらためてもう一度見直しをするべきだと反省をしました。                                                          |
| 348 | 保存食在庫確認と職員で試食等行い、配膳等について考察した。連絡方法の確認。                                                                   |
| 349 | 保存食を備蓄することとなった。                                                                                         |
| 350 | 毎月１回「自主防災訓練」を実施していますが、地震を想定した訓練等も何回か取り入れ、消防署を講師に法人内研修も行いました。                                            |
| 351 | 毎月１日を防災の日と施設で決めています。                                                                                    |
| 352 | 毎年、様々な場面を想定した訓練を行っているので今回改めて、ということはありませんでした。                                                            |
| 353 | 毎年１月１７日に防災訓練（年１回）や非常食を用いた昼食を行っている。                                                                      |
| 354 | マニュアル、備品の整備。人工呼吸器（在宅）の対策。                                                                               |
| 355 | マニュアル・備蓄品・防災グッズ・地域交流等の見直し及び整備の実施、セミナーの参加。                                                               |
| 356 | マニュアルの再確認                                                                                               |
| 357 | マニュアルの作成、区と市との話し合いを進め、施設のホールを緊急避難場所とした。                                                                 |
| 358 | マニュアルの整備中～訓練予定。市や地域総合病院と連携した防災対策作成中。ライフライン（発電機、井戸水、機能拡大）、食品、衛生材料等、備蓄量増加。                                |
| 359 | マニュアルの見直し                                                                                               |
| 360 | マニュアルの見直し、施設設備の再点検                                                                                      |
| 361 | マニュアル見直し                                                                                                |
| 362 | マニュアルを見直しました。                                                                                           |
| 363 | 水、食糧の備蓄                                                                                                 |
| 364 | 水、燃料、食料、その他の備蓄、防災訓練                                                                                     |
| 365 | 水の備蓄を始めた。                                                                                               |



|     |                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 366 | 水や防災用品の確保、又、家具等の転倒防止用品取り付けを行った。又、今までの防災訓練を以前より行っている方法にプラスして、少しでも現実に近いものにして行った。                                                                                                                                                                                                           |
| 367 | 物が落ちてこない様に高い所の物をのけたりしました。                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 368 | 養護老人ホームは夜間が宿直体制で、1人の夜勤者が50名を支援しています。非常時の防災対策を再確認し、皆（会議）で検討する。                                                                                                                                                                                                                            |
| 369 | 来年度は、ガラス飛散防止、家具の固定、など重点的に行うべく予算を立てる予定。                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 370 | 隣接する有料老人ホームと初めて合同避難訓練を行った。防災会議も合同で行った。非常食の見直しとストック分の増量、炊き出し用具を揃えた。                                                                                                                                                                                                                       |
| 371 | 連携連絡網の作成                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 372 | 私自身、防災士という資格を取得し、災害についての基本的知識を学んだ。また災害時の備蓄品や量などの見直しを行った。                                                                                                                                                                                                                                 |
| 373 | 私達の運営している事業所も警戒区域内にあり、行政と相談しながら安全の確保につとめている。防災マニュアル、食料備品用意。                                                                                                                                                                                                                              |
| 374 | 家具等の地震対策の強化、個人情報保護のため書棚のカギを2つにした（震災後の盗難予防）                                                                                                                                                                                                                                               |
| 375 | 火災を想定した避難訓練は実施したが、津波を想定した訓練は未実施。                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 376 | 懐中電灯を再度確認し、不備な所はそろえた。ポリへの水の確保（再点検）                                                                                                                                                                                                                                                       |
| 377 | 緊急連絡網（災害時用）を作成                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 378 | 現在、東海、東南海、南海地震、3連動地震を想定しての災害対策を検討しています。現時点では津波に対しての避難マニュアルが作成できました。今後、それ以外の事態に対しての対応を検討する予定です。また、従来我々の地域では避難訓練は年に1～2回しか実施していなかったもので、今後は2か月に1回程度は実施する予定です。また、実際には1次避難（まず生命を守る）2次避難（1次避難より数日の間・利用者と職員の安全と食事、排泄、睡眠等を確保する）3次避難（安定した生活が継続できる体制を作る）というように行政に頼らなくても最低限のことは自分たちで確保できる体制を検討しています。 |
| 379 | 今回、近所の避難地区にも認定されましたので、食料物資の確保、人員の確保、緊急時の対応のマニュアル見直しを検討し直しました。                                                                                                                                                                                                                            |
| 380 | 災害時のマニュアルの見直し・緊急連絡網の確認・避難場所の確認・連携災害時の非難訓練・各自の意識確認・食材料の確保と確認をした                                                                                                                                                                                                                           |
| 381 | 在宅生活をしている高齢者世帯、一人暮らし、認知症の人への防災時の対策検討。ガソリンがない、デイが休みとなる、安心電話が不通、食料がない、水が出ないなど、居宅のケアマネージャーとして、震災時に担当している危険なリスクの高い方への支援のあり方について検討した。今後も継続検討が必要です。（グループホームや施設の勤務とは又、ちがう対応がありました。）認知症の一人暮らしの方の所が一番心配でした。                                                                                       |
| 382 | 自施設の防災訓練時に火災だけでなく地震や津波などを想定しての訓練を行いました。                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 383 | 食糧等の備蓄の日数の見直し。通常の避難訓練において火災だけでなく地震も想定。施設外の避難場所についても高台の場所についても検討。                                                                                                                                                                                                                         |

|     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 384 | 地域で開催された防災の研修に参加し、震災時の事業所や利用者宅からの避難場所の確認を行った。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 385 | 地域との連携の再確認及び合同防災訓練                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 386 | 地元の消防団と共に避難訓練を実施した。停電時に自動通報装置等、火災設備が役に立たないので、停電の時にどうしたら良いか方法を確認した。居室の家具や家電等の転倒防止策を家族に相談しながら実施した。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 387 | 特にありません。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 388 | 特になし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 389 | 入居者のテレビ等、倒れそうなものはベルトで固定する。非常食の確保。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 390 | 避難用のレスキューマットを導入。（エレベーター停止の際の階段移送用）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 391 | 備蓄品に付いて検討した。（食糧、水、暖房方法、燃料）等。避難訓練。ご家族への確実な連絡方法                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 392 | 備蓄品の量を3日から5日に増やした。特に米。施設の車のガソリンが半分になった時点で満タンにしている。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 393 | 防災委員長をしています。震災以前から火災訓練を月に2回行い火災受信機発報から実際の消火器を持ち出火場所に集合、出火方向と反対側に利用者の避難誘導まで行っています。今回の震災後は火災、地震両方に対応できるように職員用ヘルメット、難燃素材でできている防災頭巾を入所者全員分、デイケア利用者全員分を購入しました。また、緊急時の発電機、懐中電灯多数、水を入れるためのタンク、利用者全員と出勤している職員が3日食べられるだけのサバイバルフーズを購入しました。震災直後の対応については作成し回覧してもらいました。震災時に備え揺れたことでスプリングラシー事故の対応や電気水道が止まってしまった場合の貯水タンクからの水を持ち出す方法を職員に周知してもらうため、施設防災設備の講習会を開きました。現在企画段階は震災車を区から借り、体験してもらった後どのように一人一人が動くことが良い事かディスカッションしてもらうという方向で話し合いを進めています。 |
| 394 | <p>防災訓練の在り方の見直し…想定外と片付けるのではなく、想定できることは最大限想定しながら、リアリティを持った訓練の在り方へと見直しを行った。</p> <p>マニュアルの見直し…現行のマニュアルを再点検し、より実効性のあるマニュアルへの修正を進めている。</p> <p>基本を大切に…「普段出来ていないことは、非常時にも出来ない」と多く聞かれた。普段の在り方、特別なことではなく基本的なことを着実に担っていけるようにお互いに確認し合っている。</p>                                                                                                                                                                                             |
| 395 | 防災対策ではないですが被災地に行かれた方を招き被災地そして被災者の目の当たりにした事を、法人職員全体に伝えていただき今私たちが出来ることは何かを考えました。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 396 | ・職員同士の話し合い　・備蓄や備品準備等の話し合いと訓練                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 397 | 地域との防災協定を締結し、信頼関係を深めることで予測困難なリスクに対応していけるよう考えています。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 398 | 全国各地の仲間達と災害支援ネットワークを作った。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |

|     |                                                                                                                          |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 399 | 法人の防災対策マニュアルを策定中です。年単位で備蓄品の準備、地域住民受入体制などについても整えていく予定。札幌市における地域防災対策として、関係機関、自治体とのネットワーク構築を検討していく。                         |
| 400 | 現在の特養で避難訓練が初めて行われた。目標時間を設定して全員参加。どのくらいかかったか計測。今後、回を重ねていき時間を早められるようにする。私は在宅（居宅）なので事業所の担当する利用者の住所、状況等の名簿ファイリングと避難場所マップの確保。 |
| 401 | ・避難場所、広域避難場所の確認。・防災機器の場所、使用及び停止方法の再確認。・研修会の実施。                                                                           |
| 402 | 食料品の備蓄方法の変更、非常灯、防災マニュアルの見直し検討                                                                                            |
| 403 | 物資の保管状態を確認した。                                                                                                            |
| 404 | 1. 5月に大規模災害と想定してグループホーム2ヶ所にかける訓練を、全職員（法人全体）を対象に行った。2. 11月に電話連絡網の訓練を行った。                                                  |

執筆者

渡邊浩文 認知症介護研究・研修東京センター 研究主幹

報告書名

平成 23 年度 認知症介護研究・研修東京センター研究事業

東日本大震災時の認知症高齢者の行動と  
介護スタッフの対応に関する実態調査研究  
報告書

発行元

社会福祉法人浴風会  
認知症介護研究・研修東京センター  
〒168-0071

東京都杉並区高井戸西 1-12-1

TEL: 03-3334-2173 FAX: 03-3334-2156

発行年月

平成 24 年 3 月